ピウニー卿の冒険！

オオカミ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ピウニー卿の冒険！

【Ｎコード】
Ｎ９５８４Ｗ

【作者名】
オオカミ

【あらすじ】
オリアーブ国の騎士ピウニー卿は、人々を苦しめていたグラネク山の魔竜を倒す。だが、魔竜が最後の力を振り絞って吐き出した呪いを受け止めて、彼は果てた。竜殺しの騎士ピウニー卿の死が惜しまれて１年後、ある酒場から物語は始まる。
１人の騎士と１人の魔法使いが織り成す愛とネズミ（キンクマハムスター）と猫と、その他いろいろの物語。

※11月5日に本編完結。すこしだけ番外編を追加する予定です。

００１．旅は道連れ、世は情け（前書き）

以前こちらで短編の同名小説として掲載していたものを序章とし、長編にしたものです。以前の短編は「ピウニー卿の冒険！（序章あるいは別の物語）」（ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ７１９９ｖ／）というタイトルで、現在は検索から外しております。００１～００４までは、こちらの作品を改稿・設定変更したものとなっております。

００１．旅は道連れ、世は情け

魔法と剣の国、オリアーブ。
この国は多くの立派な騎士と、賢い魔法使いで支えられた平和で豊かな国だ。
今でこそ平和を謳歌しているオリアーブだが、１年ほど前、この国は危機に陥った。

グラネク山の山頂に住まう魔竜。この魔竜が、ふもとの村々に姿を現しては、炎を吐き、人々の生活を苦しめていたのだ。オリアーブ国王は信頼のおける１人の騎士に、この竜の退治を命じる。騎士は仲間たちと共に果敢に戦い、この竜を倒した。…だが、魔竜は最後の力を振り絞って、呪いの息を吐いたのだ。１人その気配に気付いた騎士は、魔竜の吐く呪いが麓に届くことを怖れ、その全てを受け止めた。その呪いを受けた騎士は、彼の相棒だった魔法剣と共に、塵となって消えたという。

命燃やした騎士は竜殺しの騎士と讃えられ、その命が惜しまれた。

＊＊＊＊

その日、ピウニー卿は拠点にしている小さな村の小さな酒場で、チーズと果実酒を嗜んでいた。
小さな酒盃に入れた紫色の液体はふくよかな香りで、ピウニー卿は満足気だ。
また、少し青いカビの生えたチーズは、癖があるが果実酒と共に口に含めば、さらに芳醇な味わいだった。
ピウニー卿は最後の一口を煽る。うむ。実に美味い。

「おおおおおう！　ちょっと、誰だ、このボトル開けたヤツ！これは、竜殺しの騎士様がキープしてた自慢の果実酒で…って、うおあああああ！　極上のアオカビチーズまで千切って、ちくしょう！誰だ、泥棒か！意地汚い食べ方しやがって！」

なにやら、酒場の奥から店主の騒がしい声が聞こえてきた。まったく、興のない事だ。ピウニー卿は、やれやれと立ち上がる。不意に、ピウニー卿の身体が翳った。

「おい。お前、その入れ物なんだ。」

店主の声が、えらく近くに聞こえた。どうやらピウニー卿に向かって怒っているようだ。

「まさか、お前が開けたんじゃないだろうな…。」

人聞きの悪い。
そもそも自分がキープしていた酒を開けて何が悪いというのだ。ピウニー卿が、ふんと鼻を鳴らすのと、店主が怒鳴るのは同時だった。

「このネズミ野郎がーーーーーーーーーーーーーーーー！！おいっ、タマ！こいつを食っちまえ！」

「にゃーん。」

ほほう、猫の分際で私を食らうと？　出来るならば、やってみよ！
とう！
ピウニー卿は、隣の戸棚へと飛び移った。

店主の目には、ふもふもした薄い黄色がかった丸いネズミが戸棚に

飛んだように見えた。

＊＊＊＊

「にゃにゃにゃにゃにゃにゃにゃーーーーーー！」

猫がピウニー卿を追って戸棚から戸棚へとジャンプする。置いてある酒やら、スパイス瓶やら、漬け物瓶やらが落ちないかと、店主はハラハラものだ。

「お、おい、タマ、待てそっちは危ない、ちょ、わーーーーーーーー！！」

「にゃーーーーーー！！」

ネズミ、じゃない、ピウニー卿はとーんとーんと、器用にきゅうりの酢漬けの入った瓶から、食用酒の入った瓶に飛び移った。それを追いかける猫が1本目の瓶をするりとかわし、2本目の瓶の脇を通る。その瞬間、瓶の陰に隠れていたピウニー卿が、パプリカの暖簾をかきわけて猫の眼前に現れた。猫がぎょっとした顔で、ブレーキをかける。

スキあり！

「ふにゃーーー！」

ピウニー卿が、（針のような）剣を抜いた。間一髪で顔を背けた猫！　だが、ピッ…と、セピア色の自慢の毛を掠めて、驚いた猫は足を踏み外しかける。

「にゃっ！」

しかし、かろうじて踏ん張った！

「ふしゃーーーーー！！」

そして猫も負けてはいない。シャキーンと爪を出して、ピウニー卿の身体を払う。おおっと！　ピウニー卿は間一髪のところを一歩下がって直撃は免れたが、剣を下げていたベルトが運悪く猫の爪に引っかかってしまった。

「なぬっ！？」

「にゃにっ！？　うにゃうにゃうにゃーーーーー！？」

前足に何か気味悪いものがひっかかった感覚に、猫はパニックに陥り、きゅうりの酢漬けと食用酒、それにパプリカ、吊るしているたまねぎ、各種調味料、食器、諸々巻き込んで戸棚から足を踏み外した。

「うおおおおおお！！　やめてえええええ、タマーーーーーーー！！」

店主の悲痛な声と、ガシャーーーンガラガラ、という（お約束の）食器やら、ガラスやらが粉砕される音が響く。

ゴン。カランカラン。

最後に金属で出来たボウルが落ちてきて、酒場は静寂を迎えた。

床には、酒と酢と調味料を頭から被って悲惨な状況になった猫と、その猫の前足に引っかかっているネズミが居た。

＊＊＊＊

「まったく、役に立たない猫め！…せっかく綺麗な毛並みだから置いてやっていたものを、ネズミ一匹捕まえられないなんて…。もう二度とうちの敷居を跨ぐなよ！」

店の裏口から放り出された猫とネズミは、ころころと裏路地を転がってぐったりした。

店主の言った通り、元は綺麗だったのだろう、猫のセピア色の毛並みはどろどろで、しょんぼり耳が下がって無残なものだった。猫は、面白く無さそうに前足に引っかかったネズミを払うと、妙に人間くさい、長いため息をついた。

「もう、なんなのよ…。レディにネズミを捕まえようとさせるほうが間違ってるんだわ…。ああ。ほんっとに、どろっどろじゃない。」

「いたた…。おい、猫、投げるな、粗雑に扱うな、もっと丁寧に…ん？」

「え？」

猫の綺麗なグリーンの瞳が、ピウニー卿をしげしげと眺めた。ピウニー卿の艶々したこげ茶色の瞳も、同じように猫をしげしげと眺めている。

そして、同時にこう言った。

「ネ、ネズミがしゃべってるーーーーーーーーーーーーーー！？」

「猫がしゃべっておるだとーーーーーーーーーーーーーーーーーー！？」

「うるさい、近所迷惑だーーーーーー！！」

酒場から、店主のイライラした怒鳴り声が聞こえた。

＊＊＊＊

街道をセピア色の毛並みの猫が歩いていた。その背の上では、薄い金色の毛並みのネズミが髭をゆらゆらと揺らしている。

「いい天気だな。サティ。」

「そうね、ほんっとーにいい天気ね。」

「機嫌が悪いな。人参を食べたくらいで怒らなくてもよかろう。」

「別に怒ってないわよ。」

「いや、怒っておる。」

「怒ってない。」

「最後まで人参を残しておるから嫌いだと思ったのだ。」

「もう、ピウニーうるさい。怒ってないってば！　それより、騎士のくせにレディの背中に乗って移動するのは何事なのよ！」

「歩くのが遅いから乗れと言ったのは、サティだろう。」

ピウニー卿はすとんと降りて、サティの横を歩き始めた。背中から重みが無くなったサティは、ピウニー卿の歩幅に合わせるようにゆっくりと歩く。

サティの機嫌が悪い原因は、昨日まで滞在していた村の宿屋の娘さんが出してくれた食事のことだ。人の気配のあるところに立ち寄った時は、サティがかわいい猫のおねだりポーズを使って、人間の食べ物をもらっている。それをピウニーと半分こして食べるのが常だ。

（騎士であるピウニー卿は、このような形で女性に借りを作りたくはなく、大いに不本意だったのだが、今は非常時であり仕方がない…ということで、サティと協力して、このような体制になっているのである。）

昨日の食事には人参のグラッセが1つだけ入っていた。いつもなら、ピウニー卿に頼んで剣で割って食べるところだったが、「いらないのなら私が食べるぞ。」と言って、ピウニー卿がひょいぱくと1人で食べてしまったのである。人参のグラッセ、甘くて好きなのに！

騎士のくせに！

ピウニー卿いわく、「騎士たるもの、出された食事は全て食べなければならぬ。」というのが信条だそうだ。

それを聞いたサティは、好きなものを最後に残しておくたちだと、大層憤慨した。

酒場を追い出されてから1ヶ月。ネズミのピウニー卿と猫のサティは、こうして2匹で旅をしていた。あの日酒場の路地裏で、お互い人語を解し、話すことのできる猫、そしてネズミとして認識しあった2匹は、互いの身の上を打ち明けたのである。

この2匹には、とある共通の事情があったのだ。

それはこういう話である。

あるところに魔法剣を使いこなす1人の騎士が居た。その騎士は、人々を苦しめているというグラネク山の魔竜を倒したという。そして魔竜が死の間際に、最後の力を振り絞って吐き出した呪いをその身に全て受け止めて、騎士は塵となって消え果てた。

「その話知ってる。竜殺しの騎士って人でしょう。」

「ああ。だがな。」

その物語には続きがあった。

実は、魔竜が最後に吐き出した呪いによって、誰にも気付かれることなく騎士はちいさなネズミへと姿を変えてしまったのである。ちなみに、騎士が手にしていた剣は、律儀にも、主と同じネズミサイズになったという。

「へー。で、それが貴方だと。」

「へーって。おい、サティ。感想はそれだけか。」

「うーん。あのね…。」

そして、もう1つはこうだ。

あるところに古代魔法にも造詣の深い女魔法使いが居た。世俗とあまり関わりたがらない師匠に代わって、オリアーブの魔法師団や魔法研究所からの依頼を引き受けていたという。

あるとき、研究に身を捧げる余り暴走した魔法使いが、死霊術に手

を出した。突如暴れ狂ったその死霊使いを、女魔法使いは力の限りの魔法で応戦した。だが、死霊使いが最後に放った呪いを全てその身に受け止めて、女魔法使いは塵となって消え果てた。

「ほほう…。王都には確かに魔法師団と魔法の研究所があるが、そのような出来事があったとは。」

「魔法研究所は有名だけど、事件があったのは奥の方だし、あまり騒ぎにならなかったのかもね…。…それで。」

その物語には続きがあった。

実は、死霊使いの呪いによって、誰にも気付かれることなく女魔法使いは小さな猫へと姿を変えてしまったのである。
ちなみに、戦いの最中で杖は失くし、杖無しの猫の魔力ではあまり強い魔法は使えない。

「あー。それがお前さん、と。」

「あー、って。ピウニー。感想はそれだけ?」

「うむ。…なんというか、その、似たような話だな。」

「んー…まあ…、そうね。」

そういうわけなので、2匹は同じ境遇として意気投合し、この魔法を解くことの出来そうな人物、サティの師匠であるという理(ことわり)の賢者の元へと共に旅をすることになったのである。
旅は道連れ、世は情け。

００１．旅は道連れ、世は情け（後書き）

ピウニー卿はキンクマハムスター、サティはシンガプーラをモデルにしております。

００２．尻尾の動きがゆっくりになる

「サティ、機嫌は直ったか。」

「だから、怒ってないってば。」

「うむ。」

「何よ。」

「サティは機嫌が直ると、尻尾の動きがゆっくりになるな。」

「もうほんとに、ピウうるさい。」

「名前を略すな。」

「騎士様なら、もうちょっと厳粛に出来ないの？」

「別に誰も聞いてないのに、構わんじゃないか。」

「分かった分かった、ちょっと髭！髭揺らさないで、むずがゆい。」

「む。勝手に揺れるんだ、仕方なかろう。」

夜。街道から少しはなれた森の、木の下で２匹は休んでいた。周囲の様子が分かるほど、月の大きな晩だ。サティは丸くなって、その喉の毛皮にピウニー卿が埋まっている。大体、こういう感じで２匹、ではない、２人身を寄せ合って眠るのが常だった。

サティの毛皮は艶やかで絹のような触り心地だ。いつも河原を見ては水浴びをしているし、猫になっても使うことが出来たという、浄化の魔法で汚れひとつ無い綺麗な毛皮を保っている。ピウニー卿の毛皮もふわふわと柔らかで温かい。サティと比べると身体が小さいから、相手の毛皮を思い切り堪能出来るのは大体ピウニー卿で、それがサティには不満だった。

「おい、サティ、締めすぎだ。ちょっと緩め…。」

「んー、いいじゃないちょっとくらいふかふかしても…」

「…しっ…サティ、静かに…。」

常とは違うトーンになったピウニー卿の声に、サティも声を抑える。前足を少し緩めて、ピウニー卿を解放した。ピウニー卿は腰の剣を抜くと、前方に睨みをきかせる。とても凛々しい姿だが、ネズミである。サティは身体を起こして、自分の身の魔力を集中させた。杖が無ければ使うことの出来る魔法は限られるうえに、猫のサティの魔力はとても低く、初歩の初歩程度の魔法しか使うことは出来ない。だが、無いよりはマシだろう。

グルルル…。

茂みの向こうから聞こえる唸り声。

恐らく、野生の狼か。

「下がっていろ。」

「え。」

「安心しろ。」

ピウニー卿がサティを庇うように一歩前に出て振り向いた。ゆっくりと、頷く。

「サティは、私が守る。」

ピウニー卿のＹの字の口元がちまちま動き、その可愛らしい動きに反して重々しい口調で言った。…それは、眼前の敵から必ず守るという、騎士の固い決意だった。小さな丸い耳がぴこぴこと忙しなく動いている。サティのグリーンの瞳が驚愕に広がって、何かを言いかけたその瞬間、茂みの奥から狼が飛び出した。

「ピウニー…！」

とう！

ピウニー卿が大きく跳躍した…！

キャイン…！

狼の吼え声が響く。ピウニー卿の剣が、狼の前足を薙いだのだ。体格差もあってピウニー卿の身体は狼の下を潜り抜ける。…だが、

低！

攻撃の位置低！

とう！…ってかっこよく跳躍したのに、最下段攻撃！

狼の横を前転してしゅたっと剣を構えたピウニー卿の身体を、サテ

ィは咥えて横に飛んだ。もちろん、剣が刺さらないように気を使うのも忘れない。サティは駆けた勢いを殺してターンすると、すぐに止まって眼前の狼を睨みつける。

ぽとりとピウニー卿の身体を落とすと、尻尾を大きく膨らませた。

「…くっ、不覚…っ！」

「ピウ、私も一応魔法使いの端くれなんだから、バカにしないで。」

「バカになどしておらん。」

「だったら1人で突っ込まずに、多少は頼りなさいよ。」

「……。」

前足を傷つけられて、気が昂ぶったのだろう。狼は鼻に皺を寄せ、さらに大きな唸り声でこちらを睨みつけている。ピウニー卿は、むうと唸って髭を撫でた。サティが猫でありながら魔法を使うことができるのはもちろん知っている。軽んじたわけではない。だが、ピウニー卿は騎士なのだ。自分以外の者を守る、それがピウニー卿の騎士としての矜持だった。サティにそんな風に言われるとは、思ってもみなかったのだ。

「…ああ、すまなかった。」

「分かればいいのよ。」

「サティ、魔法で気を引けるか。」

「乗って。」

サティが頭を下ろすと、心得たピウニー卿がそこに登る。

「限界まで近くに行って、魔法で私が気を引く。」

「その隙に私が狼の身体に飛び移って、魔剣の魔力を狼に送り込む。気絶くらいはさせられるはずだ。」

「了解。しっかり掴まってて。」

サティが、たっ…と地面を蹴ったのと、狼が再び跳躍したのは同時だ。

＜ニータ・ヴィ・ラニマーク！＞

（雷撃の鞭！）

狼の牙がサティに届く前に、サティはもっとも小さな雷撃の呪文を唱えた。バチィ…！と小さな雷の音が狼の足元で響き、その衝撃に、狼がキャイン！と鳴いて、後ろに飛んで頭を低くする。さらにそれを追撃するようにサティが距離を詰めると、狼が顔を上げる瞬間にピウニー卿がその頭上に飛び移った。

喰らえ！

ピウニー卿が思い切り狼の眉間に剣を刺し、カッ…！とそこが光る。その瞬間、魔力が膨らむのを感じた。…これが、ピウニーの魔法剣…！？と、サティがハッとした瞬間。

キャウウウウン…！

狼が思いっきり頭を振って、ピウニー卿を放り投げた。綺麗な放物線を描いて、ピウニー卿は木に激突し、ずるずると地面に落ちる。その末路を狼は確認しないまま、キャインキャイン…！と鳴きながら、いや、泣きながら、森の奥へと帰っていってしまった。

去った狼にほっとしたサティは、すぐにピウニー卿へと意識を戻す。

「ピウニー…！」

激しく木に叩きつけられたピウニー卿は、地面の上でぐったりとしていた。目を閉じ、かくりと落とされた前足は、剣を握ってはいなかった。サティの小さな胸に嫌な予感がよぎる。

「え…やだ…ピウ…ピウニー…！死んじゃったの？…お願い、目を開けて。」

悲痛なサティの声にも、ピウニー卿は答えなかった。

００３．しょっぱい

サティの前に、小さな金色の毛皮のネズミが倒れている。
あんなに元気に動いていた耳も今は萎れ、髭も揺れていない。

ピウニー…！

綺麗な薄い金色の毛並み、黒に近い濃い茶色の瞳、まるくて小さな耳、ぴくぴくといつも楽しげに揺れている髭、Ｙの字の口元、小さな前足、短い後ろ足、ほとんど無い尻尾、ぴくぴくといつも揺れている髭（２回目）、Ｙの字の口元（２回目）。…もう動かないの？

サティの耳がしょんぼりと寝てしまった。大きなグリーンの瞳からポロリと涙が零れ落ちる。

「ピウニー…ピウニー…、ごめんね。人参取られたくらいで拗ねたりしないから。小さいってバカにしたりしないから。ほほ袋に食べ物入れてみせてよーってからかわないから。足短いって笑ったりしないから。お腹が太ましいとか、洋ナシ体型とか、言わないから。…だから…。」

すんすんと、サティが鼻を鳴らして、ピウニー卿の小さな身体にそっと顔を寄せた。

「だからお願い。…もう一度私のことをサティって呼んで。」

ピウニー卿の口元にサティの口元が触れ、ぺろりと舐めた。

「腹が太ましいとはどういうことだ、サティ。」

＊＊＊＊

「え、ピウニー…？…生きてるの！？」

「私がアレくらいで死ぬものか。」

「…ああ！…ピウ、よかった…！貴方が死んだら、私どうしようかと…！」

サティは、両手でピウニー卿の首に抱きついた。大きく息を付いて、ペロンとその首筋を舐める。

しょっぱ。

ん？

両手で？
首筋を？
舐める？
しょっぱい？

妙な違和感に、サティが眉を潜める。…眉を、潜めるって。猫に眉あったっけ？

「お、おい…サティ、待て、離れろ…サ。」

「え？」

気がつくと、サティの下には鍛え抜かれた男の身体があった。全裸

で。
抱きついているのは、男のものとしか言いようのないしっかりとした作りの首で、確かさっき、サティがそこを舐めたはずだ。いや、はずだ、ではなくて確実に舐めた。だってしょっぱかったし。そして眼前には薄い金色の髪と、それより少し濃い色合の無精髭を生やした精悍な男の顔。凛々しいこげ茶色の瞳は、今は落ち着かなさげに泳いでいる。

「え、待って、ちょっと、なにこの、」

「サティ、頼むから、動くな。」

ピウニー卿は、一言一言区切るように、ゆっくりと言った。

ピウニー卿の上には、華奢だが細すぎるというわけでもない、まろやかな女の身体があった。全裸で。
抱きついているのは、女のものとしか言いようのないあまり筋肉のついていない腕で、自分の鍛えた胸の上には当然のように柔らかな双丘が当たっている。視線を落せば見えるはずだ。いや、はずだ、ではなくて、今ちらっと見えた。見てはない。見えた。
そして顔を少しずらすと、こちらを見ている大きなグリーンの瞳と目が合った。さらさらと自分の身体の上に零れ落ちるセピア色の髪が、肌を撫ぜてくすぐったい。

「ちょっと、今何見」

「いやいやいやいや、サティ、…だから、今、身体を離すな、見える！」

「見えるって、見ないでよ変態！」

「見えただけだ、不可抗力だろう。人聞きの悪いことを言うな、密着するな！」

「離れるのかくっつくのかどっちよ！」

「いやすまん、ちょっといろいろ事情があって、くっついても離れても男の事情がだな。…とにかく、今は、離れるな。」

「…あ、やだ、ちょ、と、腕、回さないで。」

「支えないと落ちるだろう！」

「誰がよ！」

「サティが、だ！　落ちたら地面だぞ、お前の身体が泥で汚れる。」

「なっ…」

2人の間に沈黙が下りた。思いがけないピウニー卿の言葉に、サティの顔が熱くなる。

「地面には石も転がっているし何があるか分からん。お前の肌が傷つく。だから…」

「ピウニー…。」

「だから、少し落ち着け…サティ。」

そう言いながら、ピウニー卿の逞しい腕にさらに力が籠もった。腕

に絡みつくように落ちるセピア色の長い髪は絹のような手触りで、猫の時のサティの毛並みを思い出させた。男の腕が女の背を撫で、長い髪をゆっくりと梳いていく。それはサティの心を落ち着かせていくようで、落ち着かせて…

「って、この状況で落ち着くかっ！」

「ここは落ち着くところだろう！」

「大体、なんで裸にベルトなのよ！」

ピウニー卿は全裸に帯剣用のベルトのみ着用という姿だった。ベルトも剣に合わせてきちんと大きさが変わっているのがいじらしい。まあ、逞しい身体のいい歳の男が全裸にベルトに帯剣しているのだから、なんとも言いようのない空気であることは否めない。ネズミのときも言ってみれば全裸でベルトしていたから、当然といえば当然だが。

「知らん！…私が聞きた…」

「だって、だ…、」

2人の言い合いが同時に止んだ。

サティの形のよい眉が歪む。それに気付いたピウニー卿は何故か目を逸らした。

「ピウニー。」

「気にするな。」

「気になる。変なとこに何か触ってる。」

「分かっている。とりあえず下手に動くな。生理現象だから気にするな。」

生理現象、という言葉に、サティはなぜかカチンと来た。

「ふーん。生理現象なんだ。」

「なぜそこで機嫌が悪くなる。」

「別に。」

「おい、サティ。何に怒ってる。」

ピウニー卿の腕から逃れようと、サティがガサゴソと動き始めた。

「お。おい、動くな。」

「離してよ。」

「待て。話を聞け。足を動かすな…っ、ど、どこに触っ…」

「どこにも触ってないわよ。なにこれもういやちょっとまたナニかしっかりしてきたし…。もううううう、ピウニーちょっと落ち着きなさいよ！」

「ぐっ、私は何もしていない、サティが動くからであろう！…そもそも、魔法使いなら、服とか出せんのか！」

「召喚魔法は杖が無いと無理…。」

サティの動きがぴたりと止まった。待てよ。杖無しで出来る、召喚魔法が１つあったはずだ。

「ああ！」

今、気付いた…という風に、サティがばっと身体を起こした。起こした途端、髪と身体がふるんと揺れる。ああ…、実にいい眺めだ、大きすぎず小さすぎず適度な大きさで形が。って、おい！

「サティ、身体を起こ」

「うわあああああああ、見るなあああああああ。」

「見せるな！」

「見せてない！」

「見えるんだ！」

「もう分かったからちょっと黙ってよ、目ぇ閉じてよ！！」

「ああ、そうか！」

その手があったか。

「杖の召喚は杖無しで出来るから、杖さえあればどうとでもできるはずよ！」

サティは、身体を起こしたままぐっと拳を作った。ピウニー卿の目には滑らかな曲線美が写る。長い髪の毛がいい具合に胸の膨らみを隠しており、段差の部分だけがちらりと見える。そんなチラ見えもまた一興。よしきた。

「よしきた、サティ、それでいこう。」

「だから、ピウニー目ぇ閉じてってば！」

「あ、ああ、すまん。」

チラ見えから我に返ったピウニー卿が目を閉じたのを確認すると、サティは呪文を唱えた。

＜イノトゥーモ・サティ・オ・イエート！＞
（サティの杖よ来い！）

…沈黙。

「ピウニー。」

「どうだ。」

「残念なお知らせがあります。」

「…。」

杖召喚の魔法は、残念ながら反応しなかった。召喚用の魔法は作動したが、なぜか自分の元に対象物がやってこない。他の呪文も唱えてみるが、結果は同じだ。

「よく試したのか。」

「試したわよ。杖以外にも、念のため服も本も道具もいろいろ！　全部！　でもダメだった。…ねえ、私達このまま歩く羞恥プレイのまま過ごさないといけないの！？　せっかく戻れたのに全裸だなんて…同じ全裸ならまだ猫とネズミの方がマシよ…。」

「おいサティ…おい、泣くな。」

元来、男というの生き物は女に泣かれるのが苦手だ。ピウニー卿も例外ではない。いつも元気に尻尾をゆらゆらさせているサティが、今、自分の身体の上で泣いている。困り果てたピウニー卿は、がばーっと自分の胸板に突っ伏したサティの髪を恐る恐る撫で、その柔らかな身体が落ちないように気を使いながら自分の半身を起こした。裸の身体を抱き寄せながら、出来る限り優しく囁く。

「お師匠の賢者殿に連絡は出来ないのか。」

「ああ！」

ふたたび、サティががばっと顔を上げた。ゴンッ！

「いだっ！　急に顔を上げるんじゃない！」

抱き寄せられていたため、顔を上げた途端ピウニー卿の顎にサティの額がクリーンヒットした。サティもそこそこダメージを食らう。顔がどんな位置にあったら、額と顎がぶつかるんだ。サティが額をさすりながら顔を上げると、そこには顎をしょりしょりとさすっているピウニー卿の精悍な顔があった。ちっか！　ものすごく近！

しかも、しょりしょりって何！　あんなにかわいかったぴくぴく動く髭が、今はむさくるしい無精髭になっているなんて……あー、うん？　割と嫌いじゃない。いや違う、そうじゃない。

しかも今気付いたのだが、何気にお膝の上にお姫様抱っこ状態になっている。全裸で。

「もう…なんで…なんでこんな状況なのよ！」

「それは…って、動くな。まて、」

「だって、見えるし見ないで！」

「見てないというのに！」

露になったあらゆるところをせめて隠そうと、サティは思わずピウニー卿の方に身体を反転させた。落ちないように慌ててピウニー卿はその身体を支えて、視線をサティから思いっきり逸らす。

改めて考えると、何なんなのこの状況。助けて師匠！
それにまた、何か変な物体があたってる！

「もう、ピウニーまた目ぇ開けてるし！話進まないし！あたってるし！…師匠！ししょーーーー！！」

『はいはい。久しぶりじゃのう、サティや。死霊使いとの戦いぶりじゃないかのう。』

サティの声に応じたのか、２人の眼前に、デザートを食べている白い長い髭をたたえた優しげな瞳の老人の姿が、ぼんやりと浮かび上

がった。

『かわいい弟子の呼び出しに応じるのはやぶさかではないんじゃが、食後のデザートの時間は避けて欲しかったのう。それに、時と場所を考えねばならんぞ、サティや。わしじゃからまだしも、杖の賢者や剣の賢者あたりが呼び出されたら、大騒ぎじゃろうて。ふぉふぉふぉ…。』

第三者から見れば、２人は、全裸の男の上に全裸の女がお姫様抱っこ状態にしか見えない。

師匠である理の賢者から微妙な指摘をされたサティは、身体が見えないようにピウニー卿に抱きついた。

「この格好には突っ込まないでください。」

『サティよ、まずその格好に突っ込まずして、何に突っ込むのじゃ。』

「おい、ちょっとサティ、それ以上くっつくな！」

「だって、こうしないと見えるし！ピウが変な格好させるからでしょう！」

「馬乗りの方が問題あるだろうが。…くっ、だから動くな、それ以上…っ」

「やだー、ナニかあたってるってばーーーー！」

『ふぉふぉふぉ…馬乗りとはまた盛んじゃのう。わしもあと２００年ばかり若かったら…』

「いやいや、これは、違います賢者殿！」

『かまわんかまわん。多少おなごが積極的なほうが。』

「だから違うんだって、師匠聞いて！」

夜もすっかり更けていた。

００４．世界の願望と夢と希望

サティとピウニー卿は、理の賢者が手配してくれた服を身に着けて、やっと落ち着くことができた。サティの呼びかけがあった箇所に座標を設定し、理の賢者が２人分の服を転送してくれたのである。改めて、自分達のこれまでの状況を説明し終わってみると、人間に戻ってから随分と時間が経っていた。

『ほう。貴殿があの竜殺しの騎士ピウニー卿とはなあ。で、どうやらサティが口元を舐めたら元の姿に戻った…と。』

「はあ。恐れ入ります。」

「それで…ひとまず杖を召喚しようと思ったんですけど、魔法が効かなくて。」

『そりゃあそうじゃろうなあ。』

お髭の賢者は、ふむふむと髭を撫でた。説明のためにしゃべり続けた２人の喉はからからだ。それを気遣ってか、賢者が送ってくれた冷たい水で喉を潤すと、２人は首を捻る。

「どういうことですか？」

『だって、サティの杖折れとるもん。』

「え。」

『先の、死霊使いとの戦いで折れたじゃろ。』

「あ、忘れてた。」

サティがぽんと手を打った。確かに、そういう覚えがあった。死霊使いの魔法を全て封じ込めたほどの魔法は、サティの限界以上の魔力を使った。杖はサティの魔力に耐え切れずに折れたのだ。その後、サティは杖無しで死霊使いの反撃を受けたため、呪いに抵抗出来なかった。

「忘れるな！」

「だって。」

簡単な魔法ならば杖が無くても使うことができるが、魔法陣を伴う魔法や、自分で組んだある種の魔法は、杖で魔力のバランスを安全に取らなければ発動しない。持ち物召喚や転移の魔法は、かなり上級な魔法にあたる。あらかじめ杖に封じた魔方陣や術式が無ければ、簡単には作動させることが出来ないのだ。

「どうすれば…。」

『ふむ。…サティや、とりあえずわしのところに一度帰りなさい。その呪い、詳しく見てみなければ分からんからのう。杖も作り直さんとな。』

「…待ってください賢者殿。…サティと私の呪いは、解けたわけではないのですか？」

『ピウニー卿は分からんが、サティは完全には解けてはおらんみたいじゃよ？　サティの魔力は、いままでの…そうじゃの、３分の１

ほどしか戻っておらぬ。残りは別の魔力に封じられておるようじゃ。まあ、状況からいうてピウニー殿の呪いも解けてはおらんじゃろう。』

サティの呼びかけに呼応出来たのは、3分の1とはいえ、なんとかサティの魔力が残っていたからじゃ、と賢者は付け加えた。座標を設定した際に改めてサティの身体に干渉してみると、その魔力はいつものサティの3分の1。残りは別の魔力によって押さえ込まれているという。

ピウニー卿が顎に手を充てて、眉をひそめた。
自分自身も、先ほど狼に魔法剣の魔力を放ったときは、ほとんど力が発揮できなかったのだ。かつては魔竜の鱗を傷つけたほどの魔法剣の技だが、いくら自分の身体がネズミだとしても、狼を倒すどころか、泣いて退かせる程度にしかならなかった。

「そういえば、私の魔法剣もほとんど役に立ちませんでした。その影響でしょうか。」

『竜の呪いとやらがどういうものかは調べてみなければ分からんが、恐らく、そうじゃろうのう。』

「猫の姿だったときは、浄化の魔法や雷撃の魔法は使えましたけれど、…魔力が封じ込められているのに、どうして使えたのでしょうか。」

『わしらの場合は、魔力超過したときは体力を使うからのう。自分が組んだ呪文も魔力の消費が少ないものであれば、多少の無理は効くじゃろうて。』

「ああ。確かに若干…。」

疲れたかもな…と、サティが考え込んでいると、猛烈な怒りのオーラを隣から感じた。

…ピウニー卿が、猫一匹程度なら視線で殺しそうなほど、睨んでいる。サティが思わずたじろいだ。どうやらその怒りのオーラは、自分に向けられているらしい。

「サティ…。」

「な、なに、なに怒ってんのピウニー。」

「魔力超過したときは体力使うというのはどういうことだ。」

「…どういうことだも何も、その通りで…。」

「サティ！　魔力が無いなら魔法を使うな！」

「なんで、そんなに怒ってるのよ。」

「怒ってはいない！」

「いや、明らかにおこ」

「サティ！」

ピウニー卿はきわめて不機嫌だ。旅をしていたときは、サティはしょっちゅう浄化の魔法を使って自分たちの毛皮を綺麗に保っていたが、それだけのためにサティの体力を消費していたかもしれないと考えると、ピウニー卿はなぜか苛々した。

さらに何か言い募ろうとしたピウニー卿を遮って、サティは理の賢者へと視線を移す。

「師匠。それならば、私達はなぜ元の姿に戻ったのでしょうか。」

『恐らく、3分の1は魔力が戻ったからじゃの。』

「残り3分の2は？」

『戻っておらんのう。』

まだ何か言いたげだったピウニー卿も、2人の会話をおとなしく聞いている。

「師匠。…それならば、呪いの魔力の3分の1が取り払われたのは何故でしょうか。」

弟子の質問を受けて、理の賢者は再びふむりと髭を撫でる。

『古来より、真に元に戻って欲しいという願いと愛と真心のこもった恋人のチッスはありとあらゆる呪いを解くものじゃろうて。』

「はい？」

「……。」

真に元に戻って欲しいという願いと愛と真心のこもった恋人のチッス（注：キス）？　それを聞いた、サティとピウニー卿の表情が微妙なものになった。ピウニー卿が、若干気まずげに咳払いをする。

「えー。理の賢者殿、それは。」

「つまり…。」

『元に戻るにはちょっと中途半端なチッスじゃったということじゃの。』

「中途半端…。」

ピウニー卿がなぜか反芻し、サティはなぜかいたたまれない気分になった。えー…っと、呪いが完全に解けなかったのは自分のせいだろうか。でも急にそんな愛とか真心とか言われても…。

「ちょっと待ってください師匠。」

『なんじゃの。』

「その場合、どちらがどちらに…？」

サティの質問を受けて、理の賢者は、長い髭を撫で下ろして楽しげにふぉふぉふぉと笑った。

『そりゃあ、お互いの呪いが解けたということは、どっちからもアレじゃろうアレ。若いもんはええのう！』

「どちらも…ですか？」

ピウニー卿がハッとした顔になった。真面目な表情を浮かべ、顎に手を宛てて何かを考え込んでいる。

一方、サティはブツブツと何事かを呟いている。
そもそも、逆説的に言えば、あのときの2人のあの口元ぺろり。…キスというよりも、舐めたという表現の方が当てはまる気がするが…。そのときの自分の気持ちに、真に元に戻って欲しいという願いと、愛と、真心と、恋人、この中の、何らかの要素があった…ということになる…のだろうか。え？　いやいや。何それ。どうやら中途半端なキスをしてしまったらしい当のサティは、どういう反応をすればいいのかまったくもって分からない。

「それはつまり…。もう一度真に元に戻って欲しいという願いと愛と真心の籠もった恋人同士のキスをすれば呪いが解けるということでしょうか。」

ピウニー卿がやや真剣な顔つきで、賢者に問うた。

その間も、やはりサティは悶々と考え込んでいた。いやいや、でもちょっと待て。確かにあの時は自分の方から積極的に口元ぺろりだった。それは認めよう。主体と対象を見据えれば、サティからピウニー卿への愛だか真心だかのどれかのベクトルがアレしていると判断できるが、サティの呪いも中途半端に解けている事態から見れば、ピウニー卿からサティへの愛だかなんだかのどれかのベクトルが、あれー？

っていうか、ピウニー卿。なにどさくさにまぎれて、その質問。どういう意味？　ワンモアチャンス的な？…現実に戻ってきたサティがうさんくさそうな表情でピウニー卿を見たが、あっさりと、賢者は首を振った。

『いやいや、もう無理じゃ。変化のきっかけにはなるがのう。』

「え。」

「え。」

『え。知らんの？』

3人が3人それぞれ、きょとんとした表情になった。賢者がごく当然のことのようにきっぱりと言う。

『だって、チッスによる呪い解除のお約束は1回じゃもん。』

「なぜですか！」

『当たり前じゃよ。あれは世界の願望と夢と希望で出来た例外処理じゃし。そんな例外が何回もまかりとうとったら、わしらみたいな魔法使いいらんじゃろ。それに呪い解くのに何回もちゅっちゅちゅっちゅしてるところを見たことあるかの？…普通はそんなに何回もかからんじゃろう。1回じゃ1回。それに愛は育むもので、チャンスは1回と相場が決められておるのじゃ！』

「相場だと…。1回きりだと…。貴重なチャンスを…。くう…っ、それが世界の答えか！」

何故か、ピウニー卿が頭を抱えた。

『まあ、一度わしのところに来るがよい。詳しく見てみんことには、分からんからのう…。』

がっくりと2人は気落ちする。って、がっくりじゃないし！　サティは我に返った。元々そのつもりだったし、愛と真心と恋人がどう

のこうのという例外処理がもう通用しないからって、そこにがっくりしてどーする！

『まあ、新婚旅行じゃと思て、ゆっくりわしのところに来るとよかろ。サティや。』

「はい？　って新婚旅行！？」

『自力でおいで。』

「へ？…じりきで？」

『お前さんの座標分かるから迎えに行けるんじゃけど、ついでに杖の賢者のとこで修理中のわしの杖回収して、お前さんの杖作ってもらってからおいで。』

「えええええ！？」

『愛に障害はつきものじゃからのう！ふぉふぉふぉふぉふぉふぉ！』

「ちょ、師匠！ししょーーー！愛って、愛ってなんですか！」

『愛。愛とは試練じゃよ。修行じゃよ。ふぉーふぉふぉふぉふぉふぉ。』

それ以上の説明が面倒になったのか、賢者は消えた。
呆然とそれを見送るサティ。
何事かを真剣に考えているピウニー卿。

やがて、ピウニー卿がぽつりと言った。

「愛、か…。」

「何よピウニー。」

「サティ。」

隣に座っていたピウニー卿の低い渋みのある声が、すぐ耳元で聞こえた。ピウニー卿は若干引き気味のサティの腕をむんずと掴むと、ずいぶん熱の籠もった瞳で見つめてくる。もう片方の手で腰を抱き寄せ距離を詰めた。腕をつかんでいた手を離して背に這わせ、サティのセピア色の髪を梳くように頭を抱きかかえる。

「あのときのサティの口付けは…、元に戻って欲しいという願いと、愛と、真心と、恋人と、どれにあたるんだ…？」

「…は？　ちょっとピウニーさん？　急にどうしました？」

「サティ、私は…。」

ピウニー卿の甘い吐息がサティに降りてきた。色めいたそれはサティにも抗い難く、２人の顔が自然と近づく。

「サティ…。」

「ピウニー…。」

どちらからともなく互いの名前を囁くように呼んで、２人の唇が触れ合

「うきゃ！」

「おうふ！」

2人の唇が触れ合う瞬間。
ピウニー卿の身体は絹のようなさらさらのさわり心地の毛皮に沈み込み、サティの身体に小さなネズミの重みがかかった。今まで着ていた服が、中身を失ってしょんぼりと地面に崩れ落ちていく。

「え。」

「え。」

『あ、言い忘れたんじゃけどもね。』

再び賢者が現れた。

『その洋服とシーツもろもろ、そこに落ちとるネックレスに入れて持っとけるようにしといたからの。』

2人は。…いや、2匹は顔を見合わせた。

「って、師匠。ししょーーーーーーーーーーー！！」

『ふぉふぉふぉふぉ…。愛じゃのう、青春じゃのう。』

「いや、青春っていう年齢じゃないですよこの人どう見てもーーー！」

「おい、サティ、それはどういう意味だ。私とてまだまだ、」

猫とネズミを残して、今度こそ賢者は消えた。

００５．起き抜けなんだから仕方が無い

「う、ん…。ピウ…ひーげ、ひげくすぐったい。」

「サティ、身体を、腕を離せ…。」

「だって、ピウの毛皮がもふもふでー……。」

いや、違う。

全然もふもふしていない。

サティのグリーンの瞳が眠たげに開く。眼前にあるのは少し硬めの色の薄い金髪で、鎖骨辺りに触れているのはしょりしょりした肌触り。そしてサティはふかふかの繊細な毛皮ではなく、妙にがっしりした硬い肩を抱え込んでいた。ちょっと待て。なんで私はこんなものを腕に抱え込んでいるんだっけ。そもそも何このしょりしょり。

我に返った。

「ピウニー！…な、なんで、にんげ、にに、人間に」

「いい加減、落ち着けサティ、ちょっと離れ…」

言われてサティは身体を離す。離れるとサティの身体の曲線がピウニー卿の視界に入った。視界に入れたのではない。入ったのである。

「いや違う、今は離すな、見える。」

「見ないでってば！」

「見てはいない！」

「もう、ちょっと朝っぱらから何か、あた、あたってるから！　ピウの変態ーーー！！」

「おいちょっと待て、そんな格好で人を抱き寄せておいて変態は無…」

「別に抱き寄せてないし！」

「いや完全に抱き寄せていただろう。それに今は朝で、男なんだから仕方が…」

「そっちの言い訳はいいからまず最初に目ぇ閉じてーーーーー！」

「あああああ、そうだったすまん。」

騎士の名に誓って見たのではない。あくまでも、見えたのだ。そもそも人の気配に目が覚めたら、こういう状態だった。それにアレとかソレとかは不可抗力。起き抜けなんだから仕方が無い。これ以上のいわれのない疑惑を防ぐために、ピウニー卿はおとなしく目を閉じた。

＊＊＊＊

「いい天気だな、サティ。」

「そうね、ほんっとーにいい天気ね。」

街道をセピア色の毛並みの猫が歩いていた。首には綺麗なグリーンの石が付いた首輪をしている。その背の上には、薄い金色の毛並みのネズミが乗っていて、小さなベルトに剣を挿していた。ピウニー卿の口元が、不満げにぴくぴくと動く。

「まだ機嫌が悪いな…。寝てる途中で元に戻ったくらいでそんなに怒らなくてもよかろう。」

「怒るわよ。1回呪いが解けたらしばらく戻れないし、戻ってもすぐには人間になれないんだから。もっと計画的に利用しないと困るでしょ！　それに、起きたらはだ…はだ…。」

「はだ…、なんだ。」

「なんでもない！ピウニー、それ以上言うと落すわよ。」

「落すわよ」というサティの声に、ピウニー卿が先制を切ってすとんと降りた。髭をゆらゆらと揺らしながらサティの横を歩き始める。背中から重みが無くなったサティは、ピウニー卿の歩幅に合わせるようにゆっくりと歩いた。怒っているならさっさと先に行けばいいのに、ピウニー卿が降りて歩いているときは、必ずサティは歩幅を合わせてゆっくり歩くのだ。その様子を見ると、ピウニー卿はとてもご機嫌な気持ちになるのだが、言葉にするとサティが怒るので、ただ髭を揺らすだけに留める。

2人が賢者と別れて1週間。こんなやり取りも、もう3回目だ。早い話が、2日に1度、こんなことをやっている。せっかく呪いが解けたと思ったとたん、再び猫とネズミに戻ってしまった2人は、こうして変身を繰り返す度に徐々にその法則性が分かってきた。

1．人間に戻るのは、2人の口元ペロリ…もとい、キスがきっかけ。
2．一度戻ると、1日のうち3分の1（8時間）だけ人間で居ることができる。
3．8時間経過で突然猫とネズミに戻る。
4．猫とネズミに戻ったあと、1日のうち3分の2（16時間）は人間に戻れない。
補足．1日の3分の1しか人間でいられないのは、自分達の体内に魔力が3分の1しか残っていないからだと推測。

自分達の状況を確認していたサティはしょんぼりと耳を寝かせた。調子に乗って人間になれば8時間経過で、どんな状況かなど関係なく猫とネズミに戻ってしまうし、16時間経ってうっかり口元ペロリしてしまうと人間に戻ってしまう。当然のことながら、全裸で、だ。

「大体、あれは私のせいではないだろう。朝、寝ぼけてサティが私の顔を舐めたから…」

「ああもう、ピウニーしつこい。」

「本当のことではないか。」

「そっちだってこの間私の口元に頭突きしてきたじゃない。」

「あ…あれは、寝返りをうっただけだ。それに頭突いてはないから頭突きではない。」

「頭突きじゃなかったら何なのよ。」

「たまたま口元が当たっただけだ。」

ピウニー卿の髭がぴーんと張って、そのあと上下にさわさわ動く。サティはふーんと半眼になった。ピウニー卿は勝手に動いてしまう髭を前足で撫でる。本当は、サティからだけではなく、自分から口元ペロリとしてみても人間に戻れるのかどうかを試したのだが、そんなことサティに言えるわけがない。ちなみに、結果は正、だった。

「む。なんだ。」

「別に。」

サティは前足で自分の顔を洗った。

2人ともこうして出会うまで、たった1人の放浪の旅だった。ピウニー卿は身体が小さいためにそれほどの距離を稼ぐことができず、グラネク山を降りるのすら、かなりの時間が掛かった。サティは王都の地下水路に逃げ込み、激しく道に迷った挙句に王都外れの森に出て街道を歩いているところを人間に拾われた。だが、話すことができる…というのがバレて、海の向こうの商人に売られそうになって逃げ出して以来、ずっと普通の猫のフリをしてきたのである。様々な人に拾われては逃げ出し、逃げ出しては拾われて、を繰り返していた。

つまりお互いこの姿になってから2人旅というのは初めてなのだ。理の賢者に会う…という、はっきりとした目標と、互いの身の上を理解し合う道連れが出来たのはありがたかった。眠るときだって、相手の毛皮があるから寒くない。起き抜けに全裸になるのは困ったものだが。

あれから、2人はひとまず王都を目指して歩いていた。理の賢者の住まいへ向かうのが最終目標だ。だが、途中、杖の賢者の住まいにも寄らなければならず、そもそも猫とネズミのまま歩いていてはいつまで経っても着きそうにない。そこで、馬か何かの手配をするために王都へ入り、事情を話せそうな人物に会うことになった。

だが、ピウニー卿は既に故人になってしまっているし、姿を現せたとしても1日8時間まで。あまり軽々しく生きている…と知られるわけにもいかない。さて…一体誰に相談するか。そこは、ピウニー卿に心当たりがあった。さすがオリアーブ国で王の信頼も厚い騎士をやっていただけある。

それはピウニー卿の弟妹だ。ピウニー卿…本名はピウニーア・アルザス…という。由緒正しい武家、アルザス家の長子だった彼は魔竜退治に出かける前に、覚悟の意味で相続権を放棄した。それに合わせて両親は隠遁し、ピウニー卿の弟、パヴェニーア・アルザスが家督を継いでいる。さらに、ペルセニーアという末の妹も居る。彼女もまた、王宮に勤める騎士だ。アルザス家に戻って彼らに接触すれば、話を聞いてくれるだろうということだった。

「弟さんと妹さんか。どんな人なの？」

「弟は恐れ多くも白翼の騎士団長を務めていて、既に結婚している。私が家を出たとき、妹はまだ結婚しておらんかったな。」

「えっ、騎士団長っ！？　すごくない？」

「恐れ多くも…と言っただろう。…そうはいっても、弟は兄の私から見ても、実力は確かだ。それに白翼は若い人間が集まっているからな。騎士団長も若い人間が選ばれたのだ。」

「そんなに若いの？」

「私より2つほど下だ。」

「…そんなに若いの？」

2回聞いた。

「どういう意味だ。」

別にどういう意味でもないです。

それにしても…とサティは視線を逸らす。視線を逸らすと同時に、耳も逸れた。ネズミと猫の気安さですっかり忘れていたが、ピウニー卿はサティですらその物語を知っている程の偉い騎士様だ。その弟が白翼の騎士団長をやっていても、別におかしくはない。よく考えるとサティにはなじみの無い人種である。こういうことでもなければ関わることもなかった人なのか…などと思うと、なんとなく面白くなかった。普段は憎まれ口を叩いているが、そういう態度を取ったら本当は失礼にあたる人なのかもしれない。でも今更態度を改めるのも違う気がして、サティは「ふーん。」とだけ言っておいた。

ピウニー卿はサティのそんな思いには特に気付かず、全く別のことを口にした。

「そうだ、サティ。弟のパヴェニーアには、気をつけろ。」

「気をつけるって何に。」

「今では落ち着いているとは思うが…。」

「だから、何が？」

「むう…まあ、会えば分かる。」

ピウニー卿が珍しく言葉を濁し、髭がなんとなく警戒するようにゆらゆら跳ねていた。

００６．機嫌よく喉を鳴らすな

とある宿場町。その町一番の高級宿の下っ端料理人は、裏口を出て賄いを食べているときに、セピア色の綺麗な小柄な猫を見つけた。短い毛並みは艶やかで、大きな瞳は宝石のようなグリーンだ。首には、瞳と同じグリーンの石が付いた細い鎖の首輪を付けている。

「にゃーう。」

「どうしたの。迷子かい？」

「にゃうう…。」

料理人の問いに、猫は耳をしょぼんと落とした。

「そうか…僕は住み込みだから、飼うことは出来ないんだけど…。あ！　そうだ、お腹空いてない？」

「にゃう！」

猫はまるで人間の言葉を解したように、尻尾と耳をぴんと立てた。動物好きの人間というのは、大概動物に話しかける。そして、自分の話している言葉が動物達に通じている様子を見ると嬉しく思うものだ。料理人は顔を綻ばせ、「よかったら、これをお食べ。」と言って、自分の食べていた賄の皿の上から、パンに肉の切れ端を挟んだ残りをくれた。

「にゃーん…。」

猫は、料理人の足元にすり…と顔を摺り寄せた。愛らしい顔で料理人を見上げると、「にゃう?」と小さく鳴いて、首を傾げてみせる。
「もらってもいいの?」と言わんばかりの猫の表情を見て、料理人は思わずにへら…と微笑み、「よしよし」…と言いながら、大きな手で頭を一撫でして、首をこちょこちょしてやった。

「うなーん。」

猫は瞳を細目てグルグルと喉を鳴らすと、もらったパンをかぷりと咥えて路地裏へと消えていった。

「子供でもいるのかなー。可愛い猫だったな。でも、首輪をつけていたから…だれか飼い主が探しているかもしれないな。」

猫が去っていった方を見ながら、料理人は伸びをした。これから夕食時だ。もう一仕事、残っている。

＊＊＊＊

「せめてご飯食べるときくらいは人間でいたいわよね…。」

「むう…。確かに。だが、先立つものが無くてはな。」

「ああ…そこが問題だわ。」

サティとピウニー卿は、サンドイッチの端っこを囲んでため息をついた。猫とネズミの身体であれば、確かに食べ物は少なくて済んでいる。優しそうな人を見つけてサティがおねだりすれば、大抵の人は人間が食べるものと同じものをくれるし、それをピウニー卿と分けて食べても充分な程度に食いつなげているのだ。だが、やはり元

は人間。特にピウニー卿は騎士なのだ。きちんとした食事をきちんとした代価で食べたかった。

だが、今の2人には金がない。たかだか8時間ほど人間に戻ったところで、それは同じだ。今でこそ、服とシーツをしまっておける旅人必携の4次元ネックレス（理の賢者作成）があるが、それを売り払うわけには当然いかず、そもそも猫とネズミでは稼ぐ手立てが無い。王都に出向けばピウニー卿自身の財産があるから、早いところ旅路を進まなければならんなあと、ピウニー卿はパンと肉を小さくちぎってもぐもぐと頬張った。

「ところで、サティ。」

「ん？」

「さっき、あの男に喉を撫でられて妙に機嫌よく鳴いていたな。」

「え？」

ふん…とピウニー卿は不機嫌そうに、ほほ袋を押さえた。食べ物を租借していると、どうしてもそこに溜めてしまうらしい。

「なによそれ…。だって、噛み付くわけにはいかないでしょう。」

「噛み付けとは言ってない。あまり機嫌よく喉を鳴らすな、と言っている。」

「別に機嫌よく鳴らしてなんかないわよ。」

む…とした口調でサティが耳をぴろんと揺らす。

猫のサティが女性に懐いているのを見ると微笑ましく思うのに、それが男になるとピウニー卿は何故だかイラっとするのだ。しかも機嫌よく喉を鳴らすなど、なんともけしからん。それが猫の処世術だとは分かっていても、ピウニー卿はなんとなく気に食わない。

「とにかくだな…淑女たろうもの…」

「ピーウ！…もう、馬車とか商隊とかの話はどうなったの？　何か分かった？」

「む、サティ、聞いてるのか？」

「聞いてません。」

「聞け。」

「ピウニー…。」

サティは毛を膨らませると、声を低くして顔をピウニー卿に近づけた。一瞬たじろいだピウニー卿は、こほんと咳払いして前足を組む。サティが食料を（もらえそうな人を）物色している間、ピウニー卿は高級宿の厩や食堂などに入り込み、聞き耳を立てて情報収集をしていたのだ。

「明朝、王都を目指す商隊があるそうだ。１隊はヴィルレー公爵領から出ている。それに乗れば安心だろう。」

「公爵家？　そんなえらい人の商隊に乗っていいの？」

「よくはないが、仕方あるまい。荷も大きいだろうから、我ら２人

程度、奥深くに潜れば分かるまいよ。」

それに公爵家直属ともなれば、それなりにしっかりとした警備体制のはずだ。食べ物だけはこっそりと盗まなければならないのが気が引けるが、ここから王都まで馬車で行けば3日もあれば着く。その間、猫とネズミの分の食べ物くらい、拝借しても罰は当たらない…と思いたい。

「公爵様って、ピウも知っている人？」

「いや。知り合いというわけではない。見かけたことがあるくらいだな。私は王宮にはほとんど居なかったし…。野心の無い穏やかな人物だとは聞いている。まだ若いが、宮廷の政（まつりごと）からは一歩退いて、今は王太子の教育係だとか、そういった職についていたはずだ。」

サティ自身はオリアーブの魔法研究所によく出向いていたので、王都に行ったことがないわけではない。もっとも、魔法師団に所属しているのではなく、あくまでも理の賢者の使いとして協力していただけだ。世間話や噂程度なら知っているが、宮廷や騎士団に関わったことがあるはずがなく、ありていに言えば興味が無かったため、さほど宮廷事情に詳しいわけではなかった。

公爵の名前は、ヴィルレー公爵という。サティも、名前程度なら聞いたことがあった。

オリアーブ国は現在、国王のジェレシス・オリアーブによって統治されている。白翼・黒翼という2翼からなる屈強な騎士団と魔法師団で構成された平和な国だ。三方が山、一方が海という立地に恵まれ、他国から侵略の危機に晒されることもあまり無い。もっとも、近年増加した凶悪な魔物の存在によって戦争どころではない…とい

う一面もある。国同士の小競り合いは無いが、騎士団は魔物の討伐に派遣され、魔法師団は有効な魔法剣や術式を開発するために忙しかった。

国内で魔物が出現してもよく統治された騎士団がすぐに駆けつけ、魔法師団の協力によって効果的に魔物を討伐している。先王から仕えている宰相の手腕により、それまで付かず離れずだった騎士団と魔法師団の協力体制が敷かれ、互いに交流しその技術を役立てるようになった。

それに1年前、ピウニー卿の退治した魔竜がグラネク山の麓の村や町を襲った記憶はまだ新しい。あの事件により一層騎士団と魔法師団の結束は固くなり、各地の守りは強固なものになっている。

そのオリアーブ国の現国王の従兄弟に当たるのが、ヴィルレー公爵だ。彼は非常に穏健な人物で国王からの信頼も厚い。歳の頃は４０にも満たず、宮廷に入ってもこれからという若さだったが、妻を亡くしてからというもの、政は宰相に任せて、再婚もせずに静かな生活を送っていた。それでも、国王に請われて領地には戻らず王都に邸宅を構え、国王の息子…ジョシュ・オリアーブの教育指南役という地位に着き、王子付きの教師団を取り仕切っている。王族といえど学校に通い、同じ年頃の子らと共に勉学に勤しむのが本来なのだが、現在国王の息子は病がちで王宮に臥せっているという。このため、ヴィルレー公爵が各方面の信頼の置ける教師を手配し、王子の教育を行っているのだ。

「その馬車に乗っていけば、恐らく王都の公爵宅まで行けるはずだ。王宮にも近いだろう。」

「王宮に近くていいの？　ピウの家は？」

「私の家も遠くはない。武家といえど、一応伯爵の地位をいただいているからな。」

「え。」

「なんだ。」

「世が世なら、ピウニー卿は伯爵様だったの…？」

サティの頭の毛が逆立ち、耳が警戒するように後ろを向いた。

「それがなんだ。」

確かに、竜の討伐がなければ、ピウニー卿が家督を継ぎ、アルザス伯爵となっていたに違いない。だが、ピウニー卿は竜の討伐が決まってから、弟に家督の相続権を譲っているし、自分が伯爵の地位に就いたことはない。身分的には一介の騎士に過ぎない。今更サティに貴族様扱いされて、２人の距離が開くのも気に食わない。ピウニー卿の耳も後ろにぺたりと寝てしまった。だが、サティは何故かフ…と鼻で笑ってぼそりと呟いた。

「裸で抱きついてくるくせに貴族様とか…。」

ぴこーんと２人の耳が同時に前を向いた。

「…だーかーらっ、それは今は関係なかろう！…ともかく、家督はパヴェニーアが継いでいて、私は伯爵なんぞではないのだ。」

ピウニー卿はサティの眼前で短い前足を組んだ。

「そもそも人間になったときに裸なのはお互い様だろう。第一いつも抱きついてきておるのは、サティではないか。」

その言葉に、サティはつーんと顔を逸らす。長い尻尾がきょろきょろと動いて地面を叩いた。

「別に抱きついてないもん。」

「抱きついておる。」

「抱きついてません。」

「ほほう。まあいい。じゃあ、そういうことにしておいてやろう。」

「なによそれ。」

「別になんでもないが？」

何故かご満悦のピウニー卿に、サティはなんだか敗北したような気分を味わった。誤魔化すように頭をふるふると振り、座っていた身体を起こして伸びをする。

「もう、こんなこと言ってる場合じゃないでしょ。早く馬車のところに行くわよ。その馬車どこ？」

ピウニー卿はサティとの変わらぬやり取りに、満足げに髭を揺らしていたが、さっさと歩き始めたサティを追いかけるとその歩幅が緩まった。相変わらず、自分の歩幅に合わせて歩くサティを見るのは、何故か心が浮き足立つピウニー卿だった。

007．出たとか出ないとか

「おい…。また変な声が聞こえなかったか？」

「気のせいだろう。これは由緒正しいヴィルレー公爵の商隊だぞ？幽霊なんぞ憑いているわけが…。」

野営をしていたヴィルレー公爵付きの商隊の見張りの兵士は、この2日ほど、夜中になると商隊の荷から女の声が聞こえてくるという噂にびくびくしていた。この兵士は、お化けとか幽霊とかそういった話が苦手なのである。今日は最後の夜。幸いなことにいまだに噂の女の声は聞いていない。それなのに、さっきから相方の兵士が聞こえただのなんだのと、恐怖心を煽るようなことばっかり言っているのだ。あーあーあーあーあ。あれは、ただの噂。きっと気のせい。前立ち寄った町までは、そんな噂は出てこなかったし。

だが。

「ほら、また…おい、ヤバいんじゃねーのか…。」

相方の兵士が、隣で緊張する気配が分かる。

「だから、気のせいだって、俺には聞こえな…」

『…うぅ、ん…。』

兵士の耳にも今度は確かに聞こえた。微かだが、若い女のため息のような切なげな声だ。相方が、びくっと肩を震わせ後ずさりする。

「お、…おい、お前ちょっと見てこいよ。」

「…は？　なんで俺が？」

「いいから見て来いって…！」

「嫌だよ！　お前行けよ。」

「…くっそ、じゃあ一緒に…。」

相方は嫌がる兵士を引っ張って、高級な荷物が置いてある幌の帳をそっと開く。

『…ピウー…』

何、今の！

ピウーってどういう意味！？　擬音？　鳴き声？

果たして言葉なんだかよく分からない声が聞こえ、２人は顔を見合わせた。

『…わたしはへんたいではない…。』

今度ははっきりとした言葉だ。だが、先ほどの女の声とは違い、低く渋い声だった。重低音の響きは只者の声とは到底思えない。

兵士は思わず「はいぃ！　変態ではありません！　変態ではないですから許してください！」…と平伏しそうになるのを堪え、２人抱き合ってがたがた震えていると、

コン。

小さな小さな音が響いた。その後、パタンパタンと何かが倒れる音が近づいてくる。公爵の荷馬車といってもそれほど大きいものではない。その音はすぐに2人の側まで来た。その眼前に、どさりと小さな塊が倒れこむ。

「デターーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！」

「ギャーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！」

2人の目の前にかくんと現れたのは、どうやら綺麗な人形だった。平常時なら愛くるしいその姿。だが今はスカートが荷に引っかかって逆さ吊りで、寝かせれば眼が閉じるという（余計な）仕掛けが施されているせいか、逆さまの状態では何故か白目を剥いていた。

＊＊＊＊

3日ほど馬車に揺られると、ピウニー卿とサティは無事に王都に到着した。

その間、2人は実におとなしくしていた。隊員の食料を置いている幌に潜めば食べ物にも事欠かず、寝るときは運んでいる荷物の中でも一番高級な荷に移ると、ほとんど手も出されない。身分の高い家の商隊だけあって、安全な場所も通り護衛もばっちり。休憩も十分に取り、強行軍ということもなかった。寝ぼけて口元ペロリが無いように、お互い離れて眠っていたことも功を奏して、思いがけない場所で人間に戻ってしまう…ということもなかった。途中、見張りが何か恐ろしいものを見たらしく、出たとか出ないとかいう叫び声で眼が覚めたことがあったが、見張りの人の見間違いということで処理されたようだ。

「何か怖いものでも見たのかしら…」とサティが首を捻ってると、「ううむ。私はそういうものは見ない性質だから分からんな…」とピウニー卿は髭を撫でた。

＊＊＊＊

「荷物が届いたのね！…人形も届けたって。どんな人形かしら。」

「こら、悪戯をしてはいけないよ、セラフィーナ。」

「もちろん分かっているわ、お父様！」

ヴィルレー公爵の邸宅に商隊の馬車が着いたのはその日の午後だ。領地からの交易用の荷はそれなりの場所に送られたが、1台だけ公爵の個人的な荷などが載せられた馬車があり、それは直接公爵の王都邸宅の敷地に乗り入れられた。ピウニー卿とサティは、その馬車に乗っていたのだ。一番高価な荷物が入っているから、恐らくこれで間違いないだろうというピウニー卿の判断による。

息を潜めて外をうかがっていると、小さな女の子の声と爽やかな男性の声が聞こえた。恐らくヴィルレー公爵とその令嬢だろう。幌の布に頭を突っ込み、隙間からそっと外を覗いてみると、そこには薄い赤金色の髪にグレーの瞳を輝かせた少女と、端正な顔に優しい微笑を浮かべた男が荷物を迎えていた。男の方がヴィルレー公爵だろう。彼は、女の子…セラフィーナと呼ばれていた…に目を配りつつ、商隊長からの簡単な報告を受けている。

「幽霊…？」

「ええ。昨日の晩になりますが、女の声と男の声が聞こえたとかで…。」

「この荷から？」

「はい。」

ヴィルレー公爵は、怪訝そうに馬車の幌に目を向けた。ピウニー卿達の視界からセラフィーナが消える。

「こら、フィーナ！　幌に入ってはダメだ、何があるか分からないから…！」

ピウニー卿とサティは思わず顔を見合わせた。それとほぼ同時に、不規則な小さな足音が聞こえてくる。

「まずい、サティ…隠れ」

ピウニー卿は、身体の大きさを上手く生かして荷物の隙間に忍び込んだ。サティも荷物の影に隠れようと頭を下げる。そのときだ。「きゃあ！」という可愛らしい声が聞こえて、サティの身体がふわりと浮いた。

「フィーナ！」

すぐさま、大きな足音が続く。サティを抱き上げたのは公爵令嬢だったらしい。セラフィーナの横に身を低くしたヴィルレー公爵がやってきて、少女の肩を抱き寄せた。サティは、荷物の隙間からこちらを伺うピウニー卿にふるふると首を振る。こんな小さな女の子に、爪だの牙だの立てられるはずがない。

「サティ、私がそちらに行く。」

「にゃう。にゃーーーう。」

ピウニー卿の声が周囲に聞こえないように、サティは鳴き声を上げた。それを聞いてピウニー卿は頷き返し、荷の隙間に戻っていく。

一方、ヴィルレー公爵は腕の中の娘を確認した。自分の方を振り向いた娘の顔は期待に満ちて輝いている。その小さな腕の中では、セピア色の綺麗な小柄な猫が毛を逆立てて、緊張したように四肢を突っ張っていた。

＊＊＊＊

「ねえ、お父様！　この子、飼ってもいいでしょう？」

「いや…こんな綺麗な猫…？しかも、首輪をしているし…。」

セラフィーナとヴィルレー公爵は既に幌から降りている。セラフィーナの腕の中で、猫は相変わらず四肢をピンと伸ばしたままだ。大きなグリーンの瞳はまん丸で、瞳孔は開きっぱなし。相当緊張しているのだろう。だが、暴れてはいない。ヴィルレー公爵は恐る恐る手を伸ばしてみる。「旦那様！」執事が咎める声が聞こえたが、猫一匹のことだ、大人1人が引っ掻かれたとてそれほどのものではないだろう。ヴィルレー公爵が手に取ったのは、猫の首にかかった金色の鎖だ。首輪のようにかかっているそれには、見たことも無い綺麗な、…猫の瞳によく似たグリーンの石がぶらさがっていた。毛並みも美しいし、到底野良猫ではないだろう。だが、野良猫ではないとしたら、誰かの飼い猫ということになる。しかも、一般庶民では

ない、恐らく富裕層が飼っている猫なのではないかと思われた。

「猫？…どこから入り込んだんでしょうか。」

いつのまにか商隊長が近くまで来て、首をかしげている。ヴィルレー公爵、執事、商隊長。大人3人が猫を見て頭を悩ませている様子に、セラフィーナは猫の脇腹を持って手を伸ばした。

「とってもいい子よ、この子！　大人しいもの。」

確かに猫は大人しかった。それでも、いつ爪や牙が娘に引っ掛かるかもしれない。ヴィルレー公爵は猫を捕らえようと手を伸ばした。途端に猫の毛がぶわわと逆立ち、それを見たセラフィーナが、ぷいと他所を向く。

「ダメ！この子、お父様のこと怖がってるわ。」

「フィーナ、待ちなさい。その子は他所の家の猫かもしれない。きっと飼い主が探している。」

ヴィルレー公爵が言った途端、セラフィーナが迷ったように父親を見上げた。

「その子も飼い主のことを探しているかもしれないだろう。返さないと。」

「だったら…だったら、見つかるまでフィーナがこの子のママになってあげるわ！」

「ママになる」という言葉に、ヴィルレー公爵の手が躊躇った。そ

の隙に、セラフィーナがたたたと駆けていく。ヴィルレー公爵は執事へと頷く。執事も心得たように頷いて、セラフィーナの後を追った。

「かまいませんので？」

「あれほどの猫だ。…別の飼い主が探しているというのは間違いないだろう。」

「そのことですが…。」

商隊長が少し考え込んだように言葉を続ける。荷の確認は常に行っているが、荷を全て一度降ろした確認は3日前に立ち寄った大きな宿場町でのことだ。そのときには、猫の姿はどこにもなかった。あのような猫が街道の途中で迷い込むということはないだろうし、恐らくその宿場町で迷い込んだのではないだろうか、と。

話を聞いたヴィルレー公爵は、ふむ…と考え込んだ。

「なるほどな…。仕方が無い。その宿場町に連絡をして、こういった猫を探している飼い主はいないかと聞いてみてくれないか？　もし飼い主が見つかれば、今度の商隊が出かけるときに連れて行ってくれ。もしいなければ、…セラフィーナが気に入っているようだし、うちで世話をしても構わないだろう。」

「…わかりました。」

指示を出したヴィルレー公爵は苦笑して、セラフィーナが走っていった方に目を向けた。

「それにしても、…ママになる…か。」

ヴィルレー公爵が妻を亡くして6年になる。セラフィーナはほとんど母親の姿を覚えていない。公爵家という恵まれた環境で、良き家人に囲まれてもいる。我侭に育ってもおかしくはなかったが、ああ見えて聡い。何故自分に母はいないのかという子供ながらの素朴な疑問も、空気を読んで言わないようになってしまった。その娘が「ママになる」と言った言葉は、何故かヴィルレー公爵の胸に深く残った。

こうして、ヴィルレー公爵家に商隊の馬車が到着したのだが、小さな金色の毛並みのネズミがセラフィーナを追って家の中に入ったのを、見咎めるものは誰も居なかった。

＊＊＊＊

「ねえ、君はなんていう名前なの？」

「にゃ…にゃーん…。」

サティはセラフィーナという公爵令嬢の部屋で、毛並みを撫でられていた。爪を立てればあの場は逃れられたのだろうが、この小さな少女にそんな粗相はできなかった。思わず大人しく連れてこられてしまったが、…ピウニー卿は大丈夫だろうか。隙を見て探しに行かなければ。そう思うのだが、セラフィーナはぎゅっと自分を抱きしめたまま、なかなか離してくれない。

毛皮を撫でられていたサティは、セラフィーナに顔をむに…と両手で挟まれた。セラフィーナはサティのグリーンの綺麗な瞳を覗き込み、うっとりと微笑む。

「綺麗なグリーンの瞳！　貴方のことはグレンって呼ぶわ。」

「にゃ…にゃー…。」

「グレン？　喉が渇いた？　お腹すいた？…何か持ってきてあげるわ、いい子で待っていて！」

セラフィーナはサティをソファに置くと立ち上がり、執事の名前を呼びながら部屋を出て行った。サティはほっと一息つく。だが、すぐさまソファから立ち上がり、床に降り立った。そっと扉に駆け寄り、ぐいと扉を押してみる。幸いなことに、きちんと閉ざされていなかった扉は開いた。柔らかな肢体を隙間にくぐらせ、サティはゆっくりと廊下を見回した。

さすがに公爵家の邸宅となれば広い。ピウニー卿は、「私がそちらに行く」と言っていた。サティは頭をきょろきょろとさせた後、身を低くした。ピウニー卿の姿を探す。いつもは憎まれ口を叩いているが、旅路の間ずっと一緒に居た。その小さな身体が見えなくなるのは、妙に不安だった。

「…サティ…こっちだ。」

サティの耳が声の方向に揺れた。

廊下には誰も居なかったが、掠れたような男の声が聞こえる。サティは廊下の片方に視線を向けた。そこには布を張ったベンチが置かれていて、その足元にちらりと薄い金色の毛並みが見える。サティは迷わず駆け寄った。

腰に佩いた剣が間違いない、ピウニー卿だ。

ピウニー卿は、サティがセラフィーナに連れて行かれたと同時に幌を出て、茂みから茂み、物陰から物陰へと伝い渡り、セラフィーナの後を追いかけたのだ。扉を閉められたのには焦ったが、窓の隙間から身体を潜らせるとなんとか邸内へと忍び込むことができた。後は執事や侍女達の動きを追って、セラフィーナが入っていった部屋を突き止めたのである。皆、セラフィーナとサティに気を取られ、ネズミ一匹の侵入には気付いていないようだった。

「…ピウニー…！」

サティは思わず顔を寄せた。ピウニー卿もその鼻に駆け寄ろうとして、ハッと気がつき思わず避ける。

「ま、待て、ここで変身するのは不味い。」

その声にサティの動きも止まり、仕方なく頭を低くしてごつんと頭突きをした。ピウニー卿のふくよかな体がごろんと後ろに転がる。

「よかった。無事で。…ピウニー…。」

「ああ、サティ…。む、…待て。」

サティの声に思わずピウニー卿の声が熱くなる。だが、すぐさまトーンを落とした。廊下の角からヴィルレー公爵の手を引いたセラフィーナが現れたのだ。後ろには、両手に何かを持った執事がついて来ている。ベンチの足元に顔を突っ込んだサティを見つけたのだろう。セラフィーナが駆け寄ってきた。その距離が詰まる前に、ピウニー卿はサティの口元を前足で撫でて、行け、と押し出す。

「サティが出てきた部屋。あそこに居る。」

サティの瞳が何か言いたそうに揺れたが、小さく頷くと顔をベンチから離した。

「なあに、グレン、何か見つけたの？」

「にゃーん…。」

サティは、セラフィーナがベンチの側に来る前にその足元に駆け寄って、すり…と頭を摺り寄せた。初めて見せる猫の懐いた姿に、一気にセラフィーナの顔が綻ぶ。それ以上ベンチの下を覗き込むこともせず、セラフィーナはサティを抱き上げた。

「ふふ。お腹すいたでしょう。ご飯にしましょう。」

「にゃ…。」

セラフィーナの腕の中で、少しだけ切なげにサティは鳴いた。その仕草にくすくすと笑いながらセラフィーナは部屋に入り、娘の様子に瞳を細めたヴィルレー公爵と執事が後に続く。

既にベンチの足元に、ピウニー卿の姿は無かった。

００８．大人しくしておいてね

夜。どうしても一緒に寝たいというセラフィーナを侍女たちが嗜め、枕元に猫用ベッドをしつらえてくれた。ようやく大人しく眠ったセラフィーナを見て、サティはほっと一息つく。すとんと床に降り立ち周囲をきょろきょろ見渡すと、「…サティ…。」トーンの低い、落ち着いた男の声がベッド下から聞こえてきた。サティは振り向き、そちらへと頭を寄せる。

「ピウニー…！」

「ようやく落ち着いたようだな…。」

「うん。ごめん、なかなかあの子、離してくれなくて。」

「ああ。」

「お腹空いてない？　こっち来て。」

サティが頭を下げると、ピウニー卿がそれに乗った。ベッド脇に置かれたサティの餌箱のところに来て、ピウニー卿を下ろす。サティに与えられた餌は、人間の食べるものとほとんど変わりが無い。さすが公爵家といえるが、味付けは薄かった。サティは自分だけが食事をするのも気が引けて、食べ物をほとんど口にしていない。セラフィーナは心配していたが、猫はこういうものですよ…と執事のフォローで無理やり食べさせられるのだけは避けられた。ピウニー卿は両前足で野菜を持って、もぐもぐしゃくしゃくと食べている。サティはすぐに食べ終わると、ピウニー卿の側で身体を丸くした。食事を終えたピウニー卿は、いささか元気の無いサティの喉元の毛皮

に背中を預ける。その様子に尻尾を振りながら、サティはため息をついた。

「…明日にでも脱出できるかしら。」

「そうだな…。昼間は人の出入りが多いから、明日の晩まではここに居たほうがいいだろう。」

「経路は？」

「私の通れるところは確認できた。ここまで入ってきたところを辿ればサティでも戻れるだろう。」

「分かった。明日ね。」

「ああ。」

「ううん…。」

不意に、小さな子供がむずがるような声が聞こえた。セラフィーナが寝ぼけているのだろう。サティとピウニー卿の耳が、ぴくりと動いた。サティが顔を起こして、ベッドの方を見る。

「セラフィーナ、寂しがるかな。」

「……そうだな。」

セラフィーナはあれからずっとサティにかまいっぱなしだった。どう扱っていいのか分からないらしく、そっと撫でたり瞳を覗き込んだりするだけだったが、サティが思わず頬をすりと摺り寄せると、

それは嬉しそうに微笑む。それを見ている執事や侍女達の瞳も温かく、何よりそんなセラフィーナの頭を撫でるヴィルレー公爵の瞳はとても優しげだった。サティには、それが眩しい。

サティには血の繋がった家族というものが居ない。田舎の小さな教会で、孤児として育てられていた。一番古い記憶が、師匠である理の賢者が自分を迎えに来た時のことだ。あの頃から、理の賢者は優しい髭のおじいさんで、師匠の家には門外不出の不思議な奥方と、生まれたばかりの娘さんが居た。サティはそこで育ったのだ。サティにとって家族というのは、その3人だった。いわゆる絵に描いたような普通の家族がよかったなどと思ったことはないが、どういうものだろうという気持ちもなかったとは言えない。だが、そんな風に思うことは、幸福に育ててくれた師匠に失礼なような気がして、普段は決して表情に出すことは無かった。ヴィルレー公爵とセラフィーナを見ていると、そういう微妙な心の琴線に、触れる。

「サティ？」

しょんぼりと耳を寝かせてセラフィーナを見ていたサティに、ピウニー卿が声を掛けた。

「うん？」

「どうした。ぼーっとして。」

「ん、なんでもない。」

情でも移ったか、と言い掛けて、ピウニー卿は止めた。代わりに別の言葉を紡ぐ。

「完全に人間に戻れたら、」

「ん？」

「訪ねてみることくらいは許されるだろう。」

ピウニー卿の家も伯爵家だ。公爵家とは格も位も違うが、ご機嫌伺いくらいできるだろう。そしてそれくらいのささやかな、貴族の特権を行使する程度ならば、家名を継がないピウニー卿にも許されるはずだ。人間に戻った暁に、死んだはずのピウニー卿の立ち位置がどうなるのかは分からないが、一晩の宿と食事を貰った恩もある。弟のパヴェニーアもそれくらいの世渡りならばできるはずだ。

「早く、パヴェニーア達と合流しよう。」

「そうだね。」

ピウニー卿は、サティがセラフィーナを可愛く思っていることに気付き、どうやら気を回しているらしい。サティは小さく喉を鳴らして、頭をピウニー卿にそっと摺り寄せた。…人間の時には絶対にやらないくせに、サティは猫になったときだけ、このように妙に人懐っこい。

「サティ。私は、あの棚の下辺りに隠れておく。」

「うん。私もできるだけこの部屋から出ないようにするね。」

「無茶はするな。」

「分かってる、ピウも。」

サティはピウニー卿に頷くと身を翻す。とん…と床を駆けてセラフィーナの枕元に戻った。起きていないかな？とサティはセラフィーナの顔を覗き込む。

「…ん、…グレン…遊ぶ？」

セラフィーナはうふふ…と笑って、寝返りを打った。サティは肩まで落ちたシーツを咥えてセラフィーナの首元までそっと引き上げ、前足でてしてしと軽く叩いて調えた。それから用意された猫ベッドで丸くなると、すぐに眠りに落ちていった。

＊＊＊＊

「セラフィーナ、準備は出来たかい？」

「うん。この格好、おかしくない？」

「とってもかわいいよ。」

くるりと一回転してみせるセラフィーナは、小花柄の刺繍を施したアイボリーのジャンパースカートに、生成りのブラウスを合わせている。ブラウスの首周りには、ふんわりと大きなリボンタイが結ばれていて、リボンの端にはチュールレースがあしらわれていた。髪は半分だけ結い上げて、ブラウスのリボンタイと同じ造りのリボンを大きく飾っている。どこから誰が見ても愛らしい公爵令嬢だ。

翌日、朝からサティと遊んでいたセラフィーナだったが、昼が近くなってくると急に身辺があわただしくなり、着替えやらお風呂やらで侍女達に囲まれていた。どうやら、ヴィルレー公爵が王宮へ上が

るらしく、王太子のご機嫌伺いにセラフィーナを連れて行くらしい。
サティはヴィルレー公爵と共に、セラフィーナの様子を見ながら、尻尾をぱたんと揺らす。

セラフィーナはサティを連れて行きたがったが、それはさすがにヴィルレー公爵に窘められた。

「フィーナ、今日はジョシュ殿下のお見舞いなんだよ。」

「分かってるわ。ジョシュもきっとグレンを見たら元気になると思うの。」

「…フィーナ、確かにグレンは可愛いからジョシュ殿下もお喜びになるかもしれないね。でも、病気の方のところに動物を持っていくのはよくないな。」

「グレンはとても綺麗なのに？」

「うん。お城にはたくさんの人がいるだろう？　猫が嫌いな人もいるかもしれない。そういう人にグレンが捕まってしまったらかわいそうだ。」

「そうね…。」

セラフィーナはしょんぼりと肩を落とし、ソファでくつろぐサティを振り向いた。その額をくすぐり、寂しげな顔をしている。

「グレン、お留守番しておいて？」

「にゃ。」

サティは返事をしてみせた。その声に、パッとセラフィーナの顔が明るくなる。

「お父様！　グレンは私の言うことが分かっているのかしら。返事をしたわ！」

「そうだね。とても賢い猫かもしれない。」

返事をした…というのは、もちろんヴィルレー公爵には信じられなかったが、それでも愛娘の嬉しそうな顔に思わずつられて微笑んだ。ヴィルレー公爵は、サティの頭を撫でる。

「グレン、大人しくしておくんだよ。」

「にゃーん。」

ヴィルレー公爵の手にサティは再び答えて見せた。その様子を見たヴィルレー公爵は首を傾げている。なるほど、確かに返事をしたように聞こえた。昨日、少し遊んだだけだったが、グレンはセラフィーナにどんなに触られても爪も牙も出さなかったし、本当に賢い猫なのかもしれない。ヴィルレー公爵は立ち上がり、セラフィーナに鞄を渡した。とても大きな鞄で、昨日届いた歴史の本を入れている。王太子に見せると約束をしているそうだ。セラフィーナはいつもこの鞄を誰にも持たせず自分で持っていた。

「さあ、行こう。」

「はい。グレン、また後でね。」

「にゃん。」

サティはほっとした。ソファに立ち上がって、再び尻尾を振る。ヴィルレー公爵に手を引かれたセラフィーナ、そして侍女達も外に出たのを見計らって、サティはすとんと床に下りた。

＊＊＊＊

「ピウニー。」

「サティ、大丈夫か。」

「ピウニーこそ。」

「私は、じっと待機しているだけだからな。」

「私も別段フィーナに構われているだけだから。」

…とはいえ、ずっと猫のフリをしていてサティは若干ぐったりしていた。酒場でネズミ捕りの番をしているときは、特に酒場の主にかまわれるということもなかったので、ここで始終セラフィーナの相手をしているのとは格段に違う。ピウニー卿が潜んでいる棚の足の側で身体を丸めると、尻尾をぱたりと動かした。ピウニー卿もそれに答えるように、サティの丸まった喉元に身体を埋め、そこを撫でてやる。

商隊にくっついて移動しているときと昨晩と離れて眠っていたので、久々に感じるサティの毛皮と喉元の温かさが心地よい。サティもピウニー卿の毛皮のふわふわに思わず瞳を閉じる。だが、次の瞬間２人の身体がぴくりと動き、立ち上がった。

「グレン！」

セラフィーナが戻ってきたのだ。

セラフィーナは棚の足元で丸まっているサティを見つけると駆け寄ってきた。しゃがみこむと、鞄を開け唇に人差し指をあてる。

「静かに。グレン、入って！」

サティの毛皮がぶわわと逆立った。鞄に入るように促され、足を突っ張って踏ん張る。だが、セラフィーナはサティの身体を抱き寄せるように鞄へと招き入れた。セラフィーナが外を窺っている隙を狙って、とっさにピウニー卿が鞄の中に入る。前足を上げて、躊躇うサティへ合図を送った。「ピウ！　本気！？」かろうじて声には出さなかったが、グリーンの瞳で怪訝そうにピウニー卿を見る。ピウニー卿はその瞳を見て、しっかりと頷いた。サティは観念したように鞄に顔を突っ込む。

「フィーナ、忘れ物はあったのかい？」

「はーい、今行きます！　…グレン、大人しくしておいてね？」

恐らく、ひっくり返らないように大事そうに抱えているのだろう。それほど無茶な体勢にならなかったのが幸いした。ピウニー卿とサティを入れた鞄を持って、セラフィーナはヴィルレー公爵の元へ急いだ。

009．クマみたいな人が追いかけてきてる

オリアーブ王宮の王子の宮で、ジョシュはソファでセラフィーナと並んで座っていた。ヴィルレー公爵は国王と会見するために席を外している。今は侍女も下がらせていた。

「よく来たね、セラフィーナ。」

「ジョシュ、お加減はどう？」

「うん。今日はだいぶ調子がいいんだよ。フィーナ、今日は…」

「あのね、ジョシュ。ジョシュに見せたい子がいるの。」

「見せたい子？」

ジョシュは、自分の学術指南役であるヴィルレー公爵の一人娘、セラフィーナのことをとても可愛がっている。

ジョシュは12歳。オリアーブの王太子である。そういった身分でありながら、ジョシュは身体が弱い。少し無理をするとすぐ熱を出してしまうし、激しい運動をすると眩暈を覚えた。特に、怒りや不安といった情緒が体調に影響を与えるため、常に気持ちを静めて生活しなければならない。周囲は何も言わないが、恐らく将来は危ぶまれているだろう。…にも関わらず、オリアーブ国王にはジョシュ以外の子が居らず、世継ぎとしての責任は今のところ彼1人にかかっている。

ジョシュは利発で才気溢れる王太子ではあったが、机上の勉学以外

で、剣術や馬術、魔法など、王として必要な訓練を受けることがほとんど出来ていない。まだ子供であると甘えられる年齢もギリギリで、そろそろ王太子として国王の執務を手伝い、周囲に認められなければならない時期だ。だからこそ、周囲の人間は必要以上に厳しかったり、必要以上に腫れ物に触るかのような扱いをしてくる。国王ですら、ジョシュのことをどう扱っていいのか図りかねているようだった。

加えて、現在国王の妃は…ジョシュを生んで以来待望といってもいいだろう…懐妊していた。王妃に男子が生まれ、そして自分の身体が強くならなければ、恐らく自分は王太子ではなくなる。ジョシュは、もし弟ができれば王太子の身分は譲って自分は補佐として立ってもいいと思っているが、周囲はどう思っていることか。身体の弱い自分を傀儡にしたがる貴族は多いだろうし、王太子としては役に立たぬと排斥したがる貴族もまた、いるはずだ。王太子としては繊細すぎ、普通の子供としては高貴すぎるのだ。

気の休まらない毎日の中で、ヴィルレー公爵と過ごす勉強の時間と、時々自分を見舞いに来てくれるセラフィーナとの時間が、ジョシュはとても好きだった。

「グレン、出ておいで。」

セラフィーナがいつもの大きな鞄を開けると、そこから辺りを伺うように、セピア色の小柄な猫が顔を出した。予想外の小さな客人に、ジョシュは思わずセラフィーナと猫の顔を交互に見る。

「猫？」

「グレンというの。」

「フィーナ、ヴィルレー公爵のお許しは貰ったのかい？」

セラフィーナはジョシュの言葉に少しだけ気まずそうに、ふるふると頭を振った。その様子を見て、ジョシュは驚く。

セラフィーナは7歳で天真爛漫にも見えるが実はしっかりした性格だ。自分が教える勉強のこともよく覚えているし、順序よく物事を考えて答えを出すことも知っている。だから、まさかヴィルレー公爵に黙って、自分のところに猫を連れてくるという無茶をするとは思わなかった。

「ジョシュ、ずっと前に小さな動物を飼ってみたいって言ってたでしょう？」

「覚えていたの？」

セラフィーナは頷いた。確かにジョシュは、乗馬などの訓練があまりできず動物に触れる機会がない。雑談交じりに、小さな動物だったら自分にも飼えるだろうかとちらりと言ったことがあるのだ。本当にちらりと言っただけなのに、セラフィーナは覚えていたようだ。ジョシュは苦笑して、猫に手を伸ばした。そっと触れてみると、猫の毛皮は思ったよりもすべらかで心地よい。耳の後ろを撫でてやると、ごろごろと喉を鳴らした。それにしても…、勝手に動物を王子の自室に持ち込むとは、全く褒められたことではない。

しかも今日は…。

「グレン…、しばらくこの部屋で大人しくできるかい？」

「ジョシュ？」

「フィーナ、忘れたの？…今日僕の調子がよかったら、」

コンコン。

ノックの音が、聞こえた。ジョシュは、思わず猫を鞄ごと自分の背に隠す。セラフィーナの体がびくりと緊張したのが分かった。　今日は、ジョシュの調子がよかったら、白翼騎士団の鍛錬場を見に行こうという約束をしていたのだ。女の子のセラフィーナでも楽しめるように、剣と剣の打ち合わせではなく、型通りに剣を振る鍛錬をみせてくれるはずだった。その迎えが来たらしい。

「ジョシュ殿下。鍛錬場の準備が整いましたが。」

「ペルセ、ちょっと待って。フィーナ…？」

「私、忘れてた。…どうしよう、ジョシュ…。」

扉の向こうから聞こえてきた女性の声は、ジョシュの護衛騎士の声だ。ジョシュは、少し考えて…セラフィーナの頭を撫でた。けほんと咳払いをひとつする。

「ペルセ、ごめん。少し休んでから行っても大丈夫かな。」

「ジョシュ殿下？またお加減が！？…失礼します。」

扉の向こうから慌てた声が聞こえ、すぐさまバタンと扉が開いて慌てたように女性の騎士が駆け込んできた。ジョシュはこの騎士が過保護なのを忘れていた。すぐに自分の作戦が失敗したことに気付く。

「ペルセニーアちょっと待って、大丈夫だから…。」

「しかし、殿下…っ…！」

ジョシュが慌てて席を立つ。その途端、くらりと眩暈がして額を押さえた。

「殿下！」

「ペルセ、静かに。」

「ジョシュ…！」

ジョシュの体を女性騎士が支え、心配そうにセラフィーナがジョシュの手を押さえる。

「兄上！」

ペルセニーアと呼ばれた女性騎士が、扉の向こうに声を掛ける。

「ペルセニーア！　ジョシュ殿下は大丈夫か。…失礼いたします。」

茶色が交じった濃い金髪、武張った顔に大柄な身体つきをした、気が立ったクマのような風貌の男が扉で一礼をした。その姿を見て、ジョシュが一喝する。

「ペルセ！　僕は大丈夫だ。パヴェニーア団長、扉を閉め…」

そのときだ。

鞄から、猫がトーンと飛び出して、扉目指して駆け出した。

「…グレン！」

「…猫！？」

「む！？」

セラフィーナとペルセニーアと、…そして、クマのような男、パヴェニーアが声を上げたのは同時だ。

「猫、一体どこから？」

「つ、捕まえて！」

ジョシュの声にパヴェニーアが反応する。だが、猫は既にパヴェニーアの足元をするりと抜けていた。

「兄上！」

「任せろ。」

パヴェニーアが猫を追いかけて、大きな体躯を翻した。

「殿下、どういうことですか？…セラフィーナ嬢…？」

「ペルセ。」

ジョシュはセラフィーナを背に庇った。眩暈はもう治まっている。

何か言いかけたセラフィーナより先に、ジョシュは真っ直ぐにペル

セニーアを見上げて言った。

「あれは僕の猫だ。傷つけないように。」

「殿下。」

「我侭を言ってすまないが、保護して欲しい。」

ペルセニーアはジョシュとセラフィーナを交互に眺めて、観念したように、敬礼を施す。

それにしても、気のせいだろうか。

猫の上に、金色の固まりが乗っていたような気がした。

＊＊＊＊

「サティ…、声を出さないように聞いてくれ。」

ノックの音が聞こえ、慌てたようなやり取りが聞こえる中、再び鞄の中に閉じ込められたサティの耳元でピウニー卿が囁いた。鞄の中で様子は分からなかったが、ペルセニーアという名前が出てきた瞬間、ピウニー卿の髭が緊張したようにピンと張ったのだ。ペルセニーア・アルザス。間違いない。ピウニー卿の妹だ。王太子に近しい騎士として活躍していたとは思わなかった。

「合図をしたら、私を乗せて飛び出してくれ。外を飛び出したら女の騎士が居るはずだ。気を引いて、追いかけさせる。あれは私の妹だ。」

サティはこくりと頷いた。ピウニー卿はサティの背によじ登りしが

みつく。

「しっかり掴まってて」

「ああ。」

ピウニー卿に囁くと、サティは身をゆっくりとよじって頭を鞄の蓋の方に向けた。蓋が閉められていない鞄は、一気に飛び出せば簡単に外に出られるはずだ。そのとき、パヴェニーア団長と呼ばれた男が入り口に控えた声が聞こえた。

「サティ、行け！」

サティは、トン！…と鞄を飛び出した。

＊＊＊＊

「ちょっとーー！、なんかクマみたいな人が追いかけてきてるんですけど！？」

「計画に、変更無し、だ。あれは、私の、弟だ。」

駆けているサティの頭の上で、ピウニー卿の声がかくんかくんと揺れる。

「全然似てない！　クマみたい！」

「そうか？…じゃあ、私は、何に似て」

「え、何その質問。ネズミじゃなくて？」

「おい、追いつか、れるぞ！」

サティは、わざとスピードを緩めると、数本立っている柱をくるりと回ってみせた。追いかけてくるクマのような男はその動きに翻弄され、「うおう」とか何とか言いながらバランスを崩す。だが、そこはさすがに騎士なのだろう、体勢を整えつつサティを捕らえんと手を伸ばしてきた。サティはパヴェニーアの手を誘うように、すぐ側の、えらく高そうな壺の置かれた机に飛び乗って、その後ろを通り抜ける。これにはさすがにクマの身体が躊躇い、動きが止まった。その隙を見計らって再び廊下へ降り立ち駆けていく。

「妹さん、ちらっと見えたけど、すっごい美人だったーー！」

「…そうか？…私は、その、サティの、方が、美…」

「あの角曲がるから掴まってて！」

「…待て、そっちは…！」

サティは下働きの人の多い一角に入りこんだ。今は昼過ぎの中途半端な時間ということもあり、人はまばらだ。…だが、不味いことに廊下は行き止まりだった。

「行き止まりっ！？…ピウニー…。」

「…大丈夫だ、サティ。」

サティが、きゅっ…と身体を反転させて振り向くと、角を曲がるクマの身体が見えた。

「あの部屋へ！」

サティは返事をする前に、すぐ近くの開いていた扉にするりと身体を滑り込ませた。

＊＊＊＊

2人が飛び込んだのはどうやら物置の類のようだ。磨かれる前の鎧や盾などが置かれてあり、猫の姿のままそこに飛び乗るのは、不安定そうで気が引けた。安定しそうなところを探し、サティはとんとんと、上手く部屋の棚の一番上に登る。一番上に到着したとき、扉が勢いよく開いてパヴェニーアが入ってきた。

「確かここに…。猫、おい猫！」

顔も厳ついが、声も厳つい。そういえば、ピウニー卿の声も低くて渋みがあってよく通る。アルザス家の殿方は皆声がいいのだろうか。棚の上で身を低くして構えていると、サティの耳元で、聞き慣れた低い声が響く。これはピウニー卿の声だ。

「『おい猫』とはまた、随分偉くなったものだな、パヴェニーア。」

パヴェニーアの動きが止まった。狭い物置にはもちろん誰も居ない。パヴェニーア1人だ。それなのに、パヴェニーアの周辺が緊張したような雰囲気になるのがサティにも分かった。

「…その声、あ……」

「私が分からんのか、パヴェニーア。」

「…あ、あに…。」

「こっちだというのに、パヴェニーア・アルザス！」

「はっ！　兄上！」

ざざっと、パヴェニーアが直立不動の姿勢を取った。

「こっちだ。上だ。」

「…は？」

パヴェニーアは、鎧下などが置かれた棚の、さらに上を見上げた。
パヴェニーア自身背が高いほうだが、物置の棚はそれよりもさらに背が高い。見上げたそこには、棚の端から顔を覗かせて自分を見下ろすセピア色の小柄な猫がいる。その猫の足元から、金色の毛皮のネズミがゆっくりと姿を現した。

010．いい。実にいい。

猫の前足の間からゆっくりと登場した金色のネズミ。その姿に、パヴェニーアは目を奪われた。しばしの間、言葉を失う。状況から言うと、この猫かネズミが兄の声で自分を呼んだとしか思えない。

「猫…と、ネズミ？　面妖な…。」

「兄に向かって面妖とは失礼だな。」

…ネズミの口元が、ふくふくと小刻みに動いている。…ということは、今声を出しているのはネズミということになるだろう。そんな愛くるしい口元から出てきているとは思えない渋い声だった。聞き覚えのあるその声に、パヴェニーアは驚愕の表情を浮かべたまま、恐る恐る問いかける。

「…兄上…？」

「そうだ。とりあえず扉を閉めろ。」

パヴェニーアが扉を閉めたのを確認すると、ピウニー卿は再びもぞもぞとサティの頭の上に乗った。サティはネズミを落さないように、さらに、鎧や兜に触れないように気をつけながら、そろそろと近くの小さなテーブルまで降りる。テーブルにトン…と着地すると、ピウニー卿がサティの頭から降りて、その傍らでふんぞり返った。パヴェニーアの瞳には、どう見ても綺麗なネズミにしか見えない。薄い色合いの金色の毛皮、濃いこげ茶色の愛くるしい瞳。Ｙの字の口元、自慢げに揺れる髭、丸い耳、太ましいお腹、短い手足。腰にはベルトらしきものを身に着けているようだ。

「こ…ここ、こんな可愛らしいネズミが?…そんなまさかっ。」

「え。」

サティがよく見るとパヴェニーアの瞳が妙に熱っぽかった。息が上がり、頬が赤い。餌の足りないクマのような怖い顔から飛び出した「可愛らしい」という言葉に、ピウニー卿の髭が不機嫌そうにピクリと揺れた。

そんなピウニー卿の髭の揺れには全く気が付かず、パヴェニーアはさらに小柄な猫に視線を移す。さわり心地のよさそうな綺麗なセピア色の毛皮、グリーンの瞳、たおやかな尻尾、しなやかな四肢。

「しかも、こ、こんなに可愛らしい猫を従えて…?…ああ!」

パヴェニーアがサティの脇腹をむんずと掴んで持ち上げた。

「うきゃあああああ!!」

「なんて可愛らしい!」

「…なっ、パヴェニーア!」

サティの毛が逆立ち、尻尾の先まで膨らんだ。

しかし、サティの切なる悲鳴も、ピウニー卿の制止も耳に入っていないようで、パヴェニーアは抱き上げた腕を引き寄せて、そのセピア色の毛皮に思わず頬を摺り寄…

てし。

近づいてきたパヴェニーアの顔を拒否するように、サティの四肢が突っ張った。
両の前足がパヴェニーアの頬を押さえつけている。サティはそのままジタバタと暴れた。

てしてしてしてしてし。

だが、このささやかなサティの抵抗がパヴェニーアの心に火を付けた。
パヴェニーアの頬にヒットするのは、ぷにぷにとした感触。猫が軽く暴れた程度、白翼騎士団の団長たるパヴェニーアには何のダメージも無い。いや、むしろ回復する。癒される。ああ…。

「ああっ、この感触はっ…！」

ピウニー卿が両前足を万歳の格好にして伸び上がっている。片方の前足には抜き身の剣を持ち、必死にそれを振っていた。

「パヴェニーア！　止めろ、止めんか！」

「しかし、肉球が！　…あああっ！」

「にっ、にくきゅ…っ、なっ…、なんだとう！…私ですら触れたことがないというのに、…くそうっ、許せん！」

チクンっ！

「いだだっ」

ピウニー卿はテーブルの端に寄って、ちょうど眼前にあったパヴェニーアの腿を剣で刺した。さらにサティが追撃する。

ガリッ！

「あいだっ！」

サティのご自慢の肉球から爪が出て、パヴェニーアの小さな悲鳴が響く。

ガリガリッ

猫パンチ。

猫パンチ。

猫パンチ。
猫パンチ。
猫パンチ。
猫パンチ。
猫パンチ。

「す、すみません、すみませ、ちょ、いだっ、すみ、す、ま、」

パヴェニーアは腕を伸ばしてサティを自分の顔から引き離した。頬には鮮やかに数本の筋が描かれている。

「パヴェニーア！　気をつけっ！」

パヴェニーアがサティを持ったまま、ざざっ…と姿勢を正す。その号令に我に返って兄の声に視線を落とすと、金色の毛皮のふわふわしたネズミのピウニー卿が、剣をパヴェニーアに向けている。

「パヴェニーア！　注目！」

言われなくてもパヴェニーアは、サティを持ったまま真剣な様子でピウニー卿を見下ろしていた。…こんなに小さいのに帯剣している…ということか…！？　しかもあんなまん丸の可愛らしい瞳を凛々しく釣り上げて、どうやら自分を睨んでいる。なんという…なんというすさまじい愛くるしさ！　これが、あの竜殺しの騎士ピウニーア・アルザス兄上なのか、こんな可愛い兄上が存在してもいいのか？　いいのかーーー！？

いや…、いい。実にいい。

目の前のネズミが本物の兄なのかどうなのか、どう判別すればよいのか分からない。いや、もう兄でかまわない。むしろ兄であってください。

「いい加減サティを下ろせっ、それから気安くサティに触れるな！…聞いておるのかパヴェニーア！」

「はっ、はい、申し訳ありません兄上！」

ピウニー卿の一喝に、つい「兄上」と返事をして、慌ててサティをテーブルに下ろす。サティはずささっ…とピウニー卿の背後に回り、小さな背中の毛皮に自分の顔を押し付けた。ネズミの背に猫なので、サティの身体はまったく隠れていない。

「…あ、兄上、まことに貴方は兄上なのですか…？」

「信じられないのは無理も無いが、私はまさしくピウニーア・アルザスだ。そしてこっちが、魔法使いのサティ。」

「しかし…。」

剣を鞘に収めながら言ったピウニー卿の言葉に、パヴェニーアの視線が改めてサティに移る。紹介されたらしい猫は、いまだに警戒しているようだ。頭を低くして、頭の毛を逆立てている。ピウニー卿の背中から、ちらっちらっ…と顔を覗かせつつ、渋々応答した。

「…サ、サティ、です…。」

猫から紡がれた綺麗な声に、再びパヴェニーアの瞳が見開かれる。

「しゃべっている…！ということは…意思疎通が？…このような愛くるしい猫と意思疎通が！？」

パヴェニーアの瞳が熱っぽく潤み、大きな手が再びサティに伸ばされた。

「おいこら！　サティに触れるな！」

「しかし兄上！…今度は乱暴はいたしません！…ちょっと撫でさせていただくだけで…」

既に、ネズミのことは「兄上」確定のようだ。それは武家に育てられたパヴェニーアに刷り込まれた「兄」という存在に対する条件反

射なのか、はたまた、こんな可愛いネズミが「兄」だったらそりゃあもう楽しいだろうなあという願望なのか。

「撫でる!?　サティを撫でるだと!?　パヴェニーア、それは聞き捨てならん。どういう意味だ!」

「じゃあせめて肉球だけでも!」

「もっとダメだ!」

「じゃあ撫で」

「だからダメだというのに!」

2人とも毛を膨らませて威嚇している。ピウニー卿などは再び剣に前足を掛けていた。しかし、ああっ…!　なんということだ、それすらも愛くるしい…。パヴェニーアは久々に興奮を覚える。そもそも小さな金色の太ましいふわふわしたネズミが、針のような剣を今にも抜かんとする構えを施し、美しい小柄な猫を守る姿など、愛くるしくないわけがないではないか!　ふわふわした愛らしさを目の前にそれを堪能できないなど、なんという拷問か!

…パヴェニーア・アルザスは厳つい外見に似合わず、愛らしいものが大好きな男であった。

ピウニー卿が「気をつけろ」…と言っていたことを、サティは今更ながら思い出した。

＊＊＊＊

「ともかくパヴェニーア、少し落ち着け。」

「しかし、兄上、これが落ち着いていられますか！？」

「何がだ？」

「兄上がこんなに愛くるしい猫を連れ、こんなに愛くるしい姿をしているというのにっ！」

再び身の危険を感じたサティはそっと退いて、パヴェニーアから少し離れたところへ移動した。ピウニー卿がそんなサティを庇うように右前足を出す。もう、どんな動作をしても可愛く見えるパヴェニーアは、再び頬が染まる。そんな弟を見ながらピウニー卿はため息をついた。

「相変わらずだな、パヴェニーア…。」

「何が、ですか？」

ふん…と髭を撫でると、ピウニー卿は口元をぴくぴくと動かした。

「パヴェニーアが小さい頃、ペルセニーアの持っているぬいぐるみがあまりにも可愛くて自分も欲しいとごね…」

「兄上！」

サティがクフッと噴出した。厳つい顔のパヴェニーアが顔を真っ赤にして拳を握りしめている。

「そもそも小さい頃はぬいぐるみがないと寝れな」

「あああああ兄上！！」

いよいよパヴェニーアの拳がふるふると震えている。やはりこのネズミは兄なのだ。ああ…ならば、ささやかなこの弟の願いを聞き届けてほしい。

「兄上！…しかし、しかしですね、それならばせめて、兄上の腹の毛皮だけでも撫でさせては…」

「…ダメだ！　何が悲しくて弟に腹を撫でられなければならんのだ。」

もっともだ。

「しかしっ」

諦めきれないのか、熱い視線でパヴェニーアが2人の乗っているテーブルへと一歩近づく。気圧されるようにサティが一歩退くと、後ろ足が空を切った。

「おっ…」

ずるん…とサティの身体が傾き、机から落ちる。振り向いたピウニー卿がぎょっとして、思わず助けようと飛び降りる。それが間違いだった。

「サティ…！」

ピウニー卿の小さな身体がサティの顔の上に落ち、2人の口元が触

れ合った。

＊＊＊＊

「うおっ！」

「きゃ、…嘘っ！」

「……！」

パヴェニーアの視界で突如、ふわりと空気が揺らいだ瞬間、

「パヴェニーア！、回れ右っ！」

「はっ！」

これまでにない条件反射でピウニー卿の声がパヴェニーアに回れ右を指示し、脊髄反射でパヴェニーアはその指示に従った。パヴェニーアが変身の瞬間および変身直後の2人を見なかったのは、アルザス家秘伝の修行の成果といえるだろう。

パヴェニーアの背後から何かを打ち付ける音がして、続けざまに男と女の声が聞こえた。やがて、ガタンとかバタンとかいろいろな音が聞こえてくる。

「なんで、何でこんなところで変身…」

「お、落ち着けサティ、とにかく今は服を…」

「分かってる、服着るから、ちょっとどいて…あ、ダメ…どいたら

全身見え…って、前くらい隠してよピウニー！」

「見るな！」

「見せないで！」

「見せてはいない！」

＜エディオディド・エテビューシュ・イハシュ・オ・ト・グレン＞
（全ての持ち物を緑石より出力せよ。）

サティの首輪が魔法の力を帯び、ふわりとシーツが2人に降りる。さらに2人分の下着、服などがばらばらと落ちてきた。突如聞こえてきた呪文に、パヴェニーアが振り向く。

「む、今の呪文は…うをおおおおっ！？」

振り向いたところに見えたのは、裸の女を裸の男が組み敷いている（ように見える）様子だった。シーツが2人の身体を隠してはいるが、男の逞しい肩と肩甲骨は隠しきれておらず、セピア色の綺麗な髪が、男の身体の下からさらさらと流れて広がっている。あたりには脱ぎ散らかされたような男女の下着や、服が散らばっていた。恐らく男は女に体重を掛けないように四つんばいになっているのだろう。

男と女の視線が、固まったパヴェニーアに向けられたのは同時だ。

「…！」

「パヴェニーア、回れ右と言っておる！」

「はっ、はいいいいい！」

パヴェニーアは再び回れ右をした。

011．猫アレルギー

パヴェニーアの背後で、男女の声が響いている。要約すると、「動くから少しずれろ」「早く動いてよ」「これ…か?」「ちょっと下着！　それ私の！」「た、たまたま手に触ったんだ！」「分かったから返して！」とかそういう類の言葉である。ダメだ。深く考えてはいけない。何が行われているか…など、深く考えてはいけないのだ。

…パヴェニーアは邪念を振り払うように、脳裏に焼きついた映像を反芻してみた。とても美しい…いや可愛い…いや愛くるしい…、猫とネズミと会話したのはつい先ほど。ネズミは信じられないことに兄だという。あんなに腹がふわふわした兄がいてもいいのだろうかと思ったが、居てもいいのだという結論に達した。ともかく、兄が居て…そして兄が必死で守る猫が居たのだ。

お分かりになるだろうか。可愛いものが好きな人間の目の前に、意思疎通のできる可愛いもふもふした生き物がいたとしよう。そのときの、その悦びたるや！　ああ、あんなに可愛くて小柄で綺麗な猫…そしてネズミ、思い出しただけで…。

邪念を振り払うためだったのに、さらに邪念が。

忘れそうになった。猫もネズミも、先ほどの一瞬で目の前から消えたのだ。そして、男と女が2人そこに居た。…男のほうは、確かに兄だった。1年前に魔竜と共に果てたという兄…その兄が戻ってきて、共に在る女性。パヴェニーアとて妻帯者である。ピウニー卿の口調や必死さで、あのサティという猫…女性、が兄にとってどのような存在なのかは分かるつもりだ。…わかる、つもり、えっと、兄

の、大切な、女性？　…大事なことを、ひとつ、忘れているような…。

「パヴェニーア。もう大丈夫だ。」

「はっ。」

パヴェニーアが忘れかけている大事なこと…それを思い出す前に、兄の声が自分を呼ぶ。

振り返り、2人を認識する…その瞬間、

コンコン

ノックの音が、響いた。

＊＊＊＊

「パヴェニーア殿はここへ？」

白翼騎士団所属の騎士、ヴェルレーン・サテュルニアは、さらりと前髪を払った。

彼はジョシュ王子を迎えに行ったまま戻ってこない団長を探していたのだ。団長の妹君、王太子の護衛騎士を勤めているペルセニーアに聞いてみると、なんでも王太子の飼っている猫…？が逃げ出したとかで、その保護に走ったとのことだ。訓練の見学は副団長が滞りなく続行しているから問題ないが、猫1匹を捕まえるのにこれほど時間がかかるのはおかしい。ヴェルレーン・サテュルニアという男は猫が苦手だったが、職務に忠実な男なのである。各地に残されたパヴェニーアと猫の足跡を人づてに辿りながら、最終的に王子宮か

ら少し離れた物置部屋に案内された。

「ありがとう。君はもう行ってかまいませんよ。」

ヴェルレーンは僅かに目じりの下がった甘い瞳に爽やかな笑みを湛えて、案内してくれた侍女の髪に遠慮がちに触れた。触れられた侍女は、頬を染めて俯く。「いえ、そんな」とかなんとか言いながら、首を振って一礼した。「あ、待ってください！」身を翻そうとした侍女の腕を、ヴェルレーンが取る。

「…ああ、僕としたことが。…貴女の名前を教えていただけますか…？」

侍女の顔がハッとした表情に変わる。恥ずかしげに瞳を伏せて…、侍女は名を名乗った。その様子に満足気にヴェルレーンは瞳を細め、頷く。

「ありがとうございます。これで今度から…貴女の名前を呼ぶことができます。…さあ、もう行ってください。仕事の邪魔をして、申し訳なかったですね。」

ヴェルレーンはぱたぱたと廊下の向こうに消えていく、侍女の可愛い後姿を見送った。その姿が完全に消えたのを確認すると、そこにある扉を振り向く。

コンコン…とノックをする。

「パヴェニーア団長、こちらですか？」

返事が聞こえる前にガターンと大きな音がした。怪訝に思ったヴェ

ルレーンはもう一度、今度はドンドンと大きくノックをする。

「団長？　開けますよ？」

「その声、ヴェルレーンか、いや、ちょっと待て。」

「パヴェニーア団長？　待てとはどういうことですか。」

「いや、のっぴきならない事情があってだな、とにかく、少し、」

「パヴェニーア団長、何事かあったのですね？…申し訳ありませんが開けさせていただきますよ、失礼しま…」

ヴェルレーンがガチャリと扉を開けると、そこには、いつもの厳つい顔を僅かに焦ったように歪ませたパヴェニーア。そしてその背に庇われるように、セピア色の髪にグリーンの瞳の女が居た。グリーンの瞳は不安げに、揺れているように見える。狭い部屋に男と女。焦った顔の男。これは…。

ふっ…とヴェルレーンが苦笑した。パヴェニーア団長は元来真面目な男だったと思うが、このような一面もあったとは。クマのような厳つい顔をし、それでいて美しい妻を持っているのに、…また別の華を隠していたとは…。

「そういうことですか…、パヴェニーア団長。分かりました。奥方には黙っておきますが、あまり羽目をお外しにならないように。」

ヴェルレーンの言葉を聞いて、驚いたのはパヴェニーアだ。目を丸くして、首を振る。

「な、何を言っているんだヴェルレーン、違うんだ、これは…。」

「いえいえ、いいんですいいんです。分かってます分かってます。ええ、普通こういうときに『ハイ正解！』とは言いませんよ。…パヴェニーア団長、気にしないでください。私の事にもいつも目を瞑っていただいているということで、今回は見逃しますよ。…ただ、」

ヴェルレーンは、パヴェニーアの肩越しにセピア色の髪の女を伺った。部屋に一歩入ると、女の方に近づく。

「…このような美しい女性がこの王宮に居たとは、私としたことが。…お名前をお伺いしてもよろしいですか…？」

「あ…あの、」

ヴェルレーンが囁く声が妙に色っぽい。パヴェニーアが押さえようとした手よりも先に、女の髪に触れる。女の戸惑うような声が耳に心地よく、ヴェルレーンは楽しげな表情を浮かべた。真っ直ぐなセピア色の髪を持ち上げると、そっとそれに口付けを…。

「ふぇっぶしょーーい！」

そのときヴェルレーンがくしゃみをした。それは、ヴェルレーンという線の細い洗練された立ち居振る舞いの男には不似合いな、年齢を重ねた中年親父のようなくしゃみだった。

「ちょ、何か飛んできた…。」

女がぼそりと呟く。だが、ヴェルレーンという男はその程度のことでもげる…ではなかった、めげるような精神力の男ではないのだ。

「失礼…」淑女の前の騎士らしい、一分の隙も無い笑顔に戻ると、今度は女の手を取った。女の手がびくりと震えたのが、ヴェルレーンの手に伝わり、それをなだめるようにもう片方の手をそっと重ねる。

「ヴェルレーン、よさないか。」

女が咄嗟に手を引いたのと、パヴェニーアが咎めるようにヴェルレーンと女の間に入ったのは同時だ。そして、もう1つ。

女の手を掴み、ヴェルレーンから引き剥がした手があった。ヴェルレーンとて、白翼騎士団に所属する騎士である。そのヴェルレーンに直前まで気配を気付かせることない男。そのような存在がもう1人ここに居たことに、ヴェルレーンは眉を潜める。その男に目を向けると、

そこにいたのは、良家の子息が着る様な上質な…だが、シンプルな平服に豪華な兜を被った男だった。

＊＊＊＊

ピウニーさん。

どう見てもそれは怪しいです。

パヴェニーアと話し合っているときに、何の不可抗力でか元に戻ったサティとピウニー卿はあたふたと着替え、やっとパヴェニーアに人としてまともに向かった。その直後だ。コンコンとノックの音が聞こえ、扉の向こうからヴェルレーンと名乗る男の声がしたのは。

ピウニー卿は死んだことになっている。王宮内でこういった形で顔が見られるのは不味いだろう。咄嗟にピウニー卿を奥の死角に押しやるが、サティは間に合わなかった。パヴェニーアに庇われるような位置で、扉が開いたのだ。

サティとパヴェニーアの関係を誤解したらしいヴェルレーンを見て、サティはなんとしてもこの誤解を解かねばならずと思案していたため、髪が触れられたときに反応が遅れた。その後、まさか至近距離でくしゃみをされるとは思わなかった。完全に言葉を失ったサティの、今度は手を、ヴェルレーンは掴む。咄嗟に身を引いた瞬間、サティの身体が別の男に引き寄せられた。後ろから抱え込むように手を引かれ、バランスを崩した背中を逞しい胸が受け止めた。

助けてくれた腕の安心感に見上げた男の顔は、きらっきらした兜を被っていて見えなかった。

……サティの口が開いた。

…が、かろうじて、「何やってんのピウニー」と発声しなかった自分を褒めたい。

確かに、正体がばれないように顔を隠したのは分かる。だが、鎧を着ていない、鎧下でも無い、シャツにズボンというシンプルな平服に兜というコーディネートは、いくらなんでも怪しい。どう考えてもおかしい。いや、おかしいよね。自分の美的センスがおかしいわけじゃないよね。しかもなんでその豪華な兜チョイス。いや、地味だったらいいかとかそういう問題でもないが、目立つ。印象抜群すぎて、逆に忘れられない。

「…君は、何なんだ…。」

普通はそう来る。誰なんだ、ではなくて、何なんだ。

ヴェルレーンは不愉快そうに眉を潜めてピウニー卿を見ている。パヴェニーアでさえ、どうフォローしていいのか分からない顔だ。そもそもピウニー卿はどう見ても素人臭さがない。姿勢も体躯も、鍛えられた男のものだ。発する気配も歴戦の戦士だということが、ヴェルレーンには伝わってきた。

そのとき、なんとか気持ちを持ち直したサティが口を開いた。

「えーと、あ…あの、私が…」

サティがピウニー卿を庇うように手を伸ばし、グリーンの瞳を潤ませた。ヴェルレーンの視線が、ピウニー卿からサティへ移る。

「私が、この方とここでお会いしていたのです。…そこをパヴェニーア様に見つかってしまって…。」

「いやいや、どう考えてもこの服にこの兜って怪しいじゃないですか。ここで、何を…。」

ほらやっぱり怪しいではないか！

サティはピウニー卿の身体を庇う。それを見たヴェルレーンの瞳が潜められ、サティを伺った。途端にサティの頬が染まり、羞恥に視線を逸らす。その視線を見れば、２人が一体ここで何をやっていたか…などはすぐに想像がついた。ヴェルレーンがその表情に気付き、こほんと咳払いする。

「なるほど…、ここで。」

「あの…それは…。」

言い淀んだサティが、身を翻して今度はヴェルレーンへと近づいた。ふわりとサティの髪が揺れ、ヴェルレーンの瞳を覗き込む。綺麗で大きなグリーンの瞳、さらさらとした髪の毛。それが視界に入り、ヴェルレーンは、

「ならばどの所属の、なんという人間…へ…くしょーーーーい！」

ヴェルレーンは再び親父のようなくしゃみをする。再びアタックを受けたサティは、一瞬嫌そうな顔を浮かべそうになったが、かろうじて堪えてもう一歩踏み込む。

「騎士様…どうか…。」

「わ、わかった、ちょっと待って、君、猫か何か…ふぇ…ふぇ…ふぇくしょん！はくしょん！」

眼前のくしゃみに怯むことなく攻め入るサティ。ヴェルレーンはじりじりと後退した。

「き、君猫か何か飼って…ぼ、僕は猫アレルギーで…、へぶしっ、ふぇくしっ！」

いよいよヴェルレーンのくしゃみが止まらなくなった。ヴェルレーンという男。実は猫アレルギーなのである。この大陸には、猫の毛を吸い込むとくしゃみが止まらなくなる…という症状があった。実に珍しいその症状は「猫アレルギー」と呼ばれている。防ぐには、

猫の毛を吸い込まないようにするほか、今のところは手立てが無い。
そんなヴェルレーンとサティの間に、パヴェニーアが割って入った。

「あー、ともかく、ヴェルレーン。ここは私がきちんと話を聞いて、始末しておく。お前は早く訓練の元に戻れ。」

「ヘクションっ、ふぇくしょっ…、団長、しっ、しかし猫は…」

「お前、猫アレルギーなのに私を探しに来たのか。無謀にもほどがあるぞ。猫を探す途中で2人を見つけたのだ、分かるだろう。その調子ではお前にここは無理だ。帰ったら報告してやる。行け、命令だ。」

「だ。だんちょ…。」

バタン。
ヴェルレーンのくしゃみを避けるように、扉は閉ざされた。

＊＊＊＊

なんとかヴェルレーンを部屋から追い出したパヴェニーアは、これからどうすべきか思案した。2人を匿うのに物置部屋では不便すぎる。顔を隠してなんとか移動してもらわなければ。そう思いながら2人を振り返ると、不愉快そうに顔を拭っているサティの様子が視界に入り、パヴェニーアはたと気が付く。

忘れかけていた大事なことを、今思い出した。

そういえば、サティのことをさっき自分は撫でたいとか、言っていなかったか。

パヴェニーアはピウニー卿をちらりと伺う。既に兜を脱いでいるピウニー卿は、サティのことを心配そうに見つめながら何事かを話しかけていた。袖の端でサティの頬を拭ってやろうとして、「…大丈夫か？」「大丈夫だってば」などという攻防を繰り返している。漂う雰囲気を見れば、サティという女性を、兄が大切にしていることが一目で分かった。その女性を、いくら猫の姿だったからといって「撫でたい」発言…したか？　気のせい？…いや、気のせいではない。そうだ、気のせいではなかった！　確かにあの猫、あのネズミ…ああ、あの毛皮！　お腹のふかふか！　…せめて兄のでいい、撫で…

ダメだ。嫌な予感しかしない。

だが今は、ヴェルレーンのどさくさに紛れて忘れているようだ。パヴェニーアは2人から視線を外し、小さく安堵の溜息をついた。ヴェルレーンはあのような男だが、今回は感謝せねばならない。いいところに来てくれた。おかげでなんとか誤魔化せそうだ。

「パヴェニーア。」

ピウニー卿の声が低く響く。びくうぅっ…と、パヴェニーアの身体が上に上がる。

「はっ。はいぃっ」

「先ほどまで、サティのことを撫でたい…などと言っていたな？」

誤魔化せてなかった。

恐る恐る振り向くと、今は可愛いネズミの姿ではない、1年ぶりに見る兄の堂々とした姿がそこにあった。改めてみるその兄は、真顔で自分のことを見つめている。1年ぶりに会った弟を見る兄の目とはとても思えない。しかも声が低い。兄の声が低くなったときは大概怖い。恐ろしい。絶対夢に出る。後ろに控えるサティが、「あの、ピウニー、それあんまり蒸し返さないで…」などと言いながらピウニー卿の袖を引っ張っていたが、彼はまったく聞いていなかった。

白翼騎士団団長パヴェニーア・アルザスは、久々に命の危険を感じた。

説教する姿もネズミの姿だったらよかったのに…と遠い目をしていたら、さらに説教時間が長くなったのは言うまでもない。「もう、ピウニーいいからそれ以上撫でるとか肉球触りたいとか言わないで！」…と、サティがピウニー卿の口を塞ぐまでそれは続いた。

012．呪いかこれが

「それで…、先ほどの猫がサティ殿で、ネズミが…ピウニー兄だ…と？」

物置部屋から程近い、今は使われていない侍女部屋にピウニー卿とサティは通された。誰にも見つからずに移動できる距離で、落ち着いて話が出来る場所がここだったのだ。2人を前にして腕を組んでいるのはペルセニーア。猫を探している途中、兄のパヴェニーアに呼び出された。そこでペルセニーアが見たのは、1年前に死んだと思っていた兄だ。薄い色合いの金髪に精悍な顔。濃いこげ茶の瞳はあの頃と変わらず頑固そうで、一見すると誰も寄せ付けない硬派な雰囲気も相変わらずだった。そして、その兄が庇うように身を置く1人の女性。サティと名乗るその人は、魔法使いだという。

パヴェニーアとペルセニーアは、ピウニー卿とサティの事情を聞かされた。なぜ、呪いが解けたのか…という点についてははっきりと教えてくれなかったが、ともかく2人が人間と獣の姿を行ったりきたりしていることは、本当のようだ。

ピウニー卿と魔竜の戦いはペルセニーアとパヴェニーアの記憶に新しい。何よりも2人がもっとも尊敬していた兄の、最期だったから。

共に竜を倒しに行き、生きて帰ってきた仲間から話は聞いた。ピウニー卿は竜の呪いを受け止めた後、剣以外の装備を残して消えたという。だが、死体の1つも無く塵になって消えた…などと言われ、誰がその死を信じることが出来るだろう。それでも葬儀を出し、「竜殺しの騎士」という2つ名を冠し、国王からもいくつかの勲章や名誉ある言葉を頂いて、やっと兄は帰ってこないのだという実感が

沸いた。死んだのではない、帰ってこないのだろうという奇妙な諦めだった。

それなのに、今、その兄が目の前に居る。しかも、しばらくするとネズミに戻ってしまうというのだ。…そんな話、今すぐに信じろというのが無理だった。兄が生きていることが…ではない、兄がネズミに戻ってしまうことが…だ。

それに気がかりなのはサティのことだった。話によれば、オリアーブの魔法研究所で、死霊使いがサティに対して戦いを挑んだという。だが、そのような事件は聞いたことが無い。魔法師団とペルセニーアの所属する黒翼騎士団は協力関係にある。魔法師団の後衛施設ともいえる魔法研究所でそれだけの事件があれば、騎士団に知られないなどということはまず無い。そもそも死霊魔法自体が禁じられた、魔法使いにとっても恥じるべき、そして忌むべき魔法なのだ。その死霊魔法が国内で研究されていた…となれば、それは由々しき事態だ。

サティは理の賢者の弟子だという。理の賢者は、オリアーブに3人いる賢者の1人。オリアーブ国王とも親密な関係だが、どれほど請われても国のために自らが働くということはなかった。ただ、魔法師団との関係は悪くなく、研究の要請などがあれば弟子が引き受ける場合もある。サティという名前の弟子が、魔法師団に協力したことがあっただろうか。調べてみる必要がある…と、ペルセニーアは思った。

いずれにしても…。

ペルセニーアは仲良くサンドイッチを食べているピウニー卿とサティを見た。

あと数時間もすれば2人は猫とネズミに変わる。時間的には、夜半過ぎだ。ギリギリ日が変わる頃だろう。人間のまま王宮内を歩くわけにもいかないので、ペルセニーアとパヴェニーアは残業と称して王宮に残り、日が変わる前に2人を連れて裏口から帰宅する算段だった。ただそうすれば、サティを…猫をジョシュに会わせることは出来ない。ジョシュにピウニー卿の事情を話すわけにはいかないが、猫が見つからなかったと報告するのは気が引けた。

「サティ殿…。あと少しすれば、貴方は猫に戻られるのですよね。」

「はい。」

「お願いしたいことが…あるのですが。」

「ジョシュ殿下の元に戻れ、というのですね。」

「…命令ではありません。お願いです。それに、戻るのではなく、少し姿を見せるだけでかまいません。」

サティの言葉にペルセニーアは申し訳無さそうに顔を上げた。

「今の話によればサティ殿は…、セラフィーナ嬢が連れてきたのでしょう。」

サティの表情が、何と言っていいのか分からないような表情になる。ペルセニーアは続けた。

「セラフィーナ嬢は責任を感じて、ひどく気落ちされて帰宅なさいました。ジョシュ殿下が必ず見つけるから…とお引き受けになって。

見つからなかったとしても咎めはしないでしょうが…。」

ペルセニーアはジョシュの護衛騎士だ。ジョシュが懇意にしているヴィルレー公爵令嬢、セラフィーナとも仲がよい。彼女にとって、セラフィーナは歳の離れた妹のような存在であり、ジョシュの大切な姫君であり、小さな友達でもあった。その小さな姫が悲しむのは忍びない。だが、この自分の願いが随分身勝手な我侭であることも分かってはいた。2人は動物になってしまえば非力な猫とネズミなのだ。誰の目にも触れないよう、ひっそりと王宮を出るのが一番安全に決まっている。

「わかりました。」

「おい、サティ…！」

断られても当たり前だと思っていたペルセニーアは、あっさりとしたサティの返答に驚いて視線を向けた。ピウニー卿がサティの隣で非難めいた声を上げている。

「本当に構わないのですか？」

「顔を見せるだけならば、大丈夫だと思います。」

「いや、待て、サティ。見つかったということになれば、ヴィルレー公爵のところにも言い訳をせねばなるまい。どうするのだ。」

「でも見つからなかったって言ったら、セラフィーナが心配すると思う。王子を通さずに公爵のところに直接話に行くのもおかしいでしょう。」

しょぼんとしたサティに、ピウニー卿が明らかに動揺する。

「いや、それは分かる、分かるが…、ヴィルレー公爵にはどう言うのだ。」

「…それならば私が、お三方に話します。実は元々アルザス家で保護していた猫だとでも言えば…。」

「我らは公爵家の馬車に乗ってきたところを見られている。…そんな言い訳が通用するだろうか。」

3人は考え込んだ。…サティがため息をつく。

「…とにかく、王子様に1回会うくらいなら問題ないでしょう、ピウニー。」

「だが…。」

ピウニー卿がサティに向かって、厳しく眉を潜めた。ペルセニーアの眼から見ると、サティとピウニー卿は旅の仲間という以上の、特別な関係に見える。

「…それならば私も…。」

「では兄上も一緒に来てくださってかまいません。ネズミ一匹くらいならば、隠すことは出来るでしょうから。その代わり姿を現さないようにしてくださいね。」

「う…うむ…。」

いずれにせよ、ジョシュは猫について何らかの報告があるまで起きている…と言ったのだ。いつもは聞き分けのよいジョシュがこのような我侭を言うのは珍しい。よほどセラフィーナの事が心配なのだろう。

「ピウ、大丈夫だって。」

サティが若干うんざりと言った。2人の様子を見て、ペルセニーアとパヴェニーアは眼を丸くする。ピウニーアをピウニー、ピウニー卿と呼ぶ人は多いが、ピウと略すのは初めて見た。少し可笑しい気持ちになる。アルザス家でもっとも強い男、父と唯一互角に剣を合わせる男。優しいけれど、武術に関しては常に厳しかった兄が、サティという女性にこのようにおろおろさせられているのを見るのは、不謹慎ながらも愉快だ。

「サティ殿。」

ペルセニーアはサティに向き直ると、その手を取って丁寧に騎士の礼を取った。その凛々しい様子に、サティは少し首を傾げる。気遣わしげにサティを見返す瞳は琥珀色でピウニー卿よりも少し色が薄かったが、意志の強そうなところは似ているような気がした。

「お心遣い感謝します。」

「いいえ、大丈夫です。」

受け負ったサティの言葉に、まだ申し訳なさそうな表情を浮かべたまま静かに頷いて、ペルセニーアはパヴェニーアを振り返った。

「兄上は執務室で待っていてください。お2人は私が。」

「ああ。」

本当はパヴェニーアが2人を連れて行きたかったが、絶対に全員に止められるだろう。パヴェニーアは涙を飲んでその役割を自重した。

「貴方方が猫かネズミの姿に戻るであろう時間に、私達は再び来ます。」

「あ、ああ。」

まだ全然納得していないピウニー卿は曖昧に頷いた。パヴェニーアもペルセニーアも騎士としてまだ仕事が残っている。残業するという旨を部下に伝えなければならないし、パヴェニーアはジョシュを伴うはずだった訓練に立ち会っていないのだ。報告も受けなければならない。

「サティ殿、施錠の魔法をお願いできますか？」

「分かりました。開くときは＜グレン＞で。」

「了解しました。」

「ではまた後で…。」とパヴェニーアとペルセニーアは侍女部屋を辞した。2人が部屋を出ると、ガチャリと音がして施錠されたのが分かった。

＊＊＊＊

「兄上、よかったのですか？…2人が戻るまで一緒に居なくても。」

「何がだ。」

ペルセニーアは少しだけ言葉を濁す。

「その…、私は2人が言葉を解する猫とネズミだった姿を見たわけではありません。」

「信じられない、と？」

「あれははっきりと、兄上だったではありませんか。」

「ネズミだった兄上を最初に見せられた、俺の方が信じられんかったよ。」

「それは…。」

確かにそうかもしれない。ペルセニーアは静かに瞳を伏せる。そんなペルセニーアから視線を外し、パヴェニーアも考え込んだ。

パヴェニーアにとってピウニーアは乗り越えられない強い兄だ。もちろん、パヴェニーアとてアルザス家の男。若くして白翼騎士団団長という身分を頂き、アルザス家の当主になっている。ピウニー卿という常に比較される「竜殺しの騎士」を兄に持ちながら、アルザス伯爵家という武門の名家を支えるのは相当なプレッシャーだ。

ピウニー卿は、魔竜を倒す旅に出る事が決まって、すぐに家督をパヴェニーアに譲る旨を父親に申し出た。それは魔竜という敵がいかに強大で、それに立ち向かう兄がどれほどの覚悟を決めていたのかが分かるものだった。その覚悟を受けてパヴェニーアは家督を継ぎ、

それに伴って父は夫婦で隠居している。もちろん、ひとりアルザス家を支えることになったパヴェニーアは戸惑った。だが、それでもパヴェニーアが当主として立ったのは、兄に認められたいがためだった。いや、違う。兄に認められた証だと考えたからだ。

その兄がネズミになって帰ってきた。戸惑わないわけがないのだ。ネズミ。そう…ネズミ。

…パヴェニーアは、再び恋する乙女のような顔になって、ほう…と溜息をついた。

「まあ、ネズミになった兄上を見れば分かる…。」

パヴェニーアがぽつりと言った。

「…何がです？」

胡散臭そうにペルセニーアがパヴェニーアを伺う。パヴェニーアは厳つい顔に全く似合わない、うっとりとした瞳で言った。

「あの愛くるしさに。」

ペルセニーアが若干冷たい目でパヴェニーアを見た。

＊＊＊＊

侍女部屋で特にすることなく、ピウニー卿とサティは寝台の端に２人並んで座っていた。いつも人間から猫やネズミに戻るのは唐突だ。今までの経験から、大人しくしておいたほうがいい…というのは分かっていた。

「サティ…本当に大丈夫か。すぐにアルザス家に戻れば、王子に会わなくても済む。」

「何をそんなに心配してるの。」

「ジョシュ殿下がサティのことを気に入って、ずっと側に置くと言ったらどうするのだ。」

「そんな我侭は言いそうに無いでしょう。」

「分からないだろう。猫になったサティは…！」

「何？」

突然言葉を止めたピウニー卿を、サティはちらりと伺う。さっきからピウニー卿はずっとこの調子なのだ。それにしても猫になったサティは、なんだというのだろう。

「猫になった私は、何？」

言葉に詰まったピウニー卿に、追い討ちをかけるようにサティは問いを重ねる。今は夜で、念のために明かりの魔法は控えている。明かりといえば、僅かに窓から零れる星明り程度だ。

「猫になったサティは…その、愛らしいだろう…。」

「……。」

その言葉を聞いて、サティはなぜか、はあ…とため息をついた。

「ネズミのピウニーだって似たようなもんでしょう。」

「そういう意味ではない！」

「じゃあ、どういう意味なの。」

「それは、サティが…。」

ピウニー卿は再び言葉に詰まった。サティはそれを聞きながら、全く別の話題を口にした。

「ねえ、ピウニー。」

「なんだ。」

「弟さんはまあ…なんかちょっとアレだけど、妹さんとか、いい人ね。」

サティはパヴェニーアとペルセニーアの2人を思い出しながら言った。髪の色合いも瞳の色合いも、少しずつ違うがよく似ている。何よりも3人に共通するのは、凛々しい、頑固そうな瞳だ。血縁者というものがいないサティには、それがとても新鮮に見える。

「ん？」

「しかも、ピウニー、『兄上』って呼ばれてた。」

ピウニー卿が「兄上」と呼ばれていたのを思い出すとおかしくなって小さく笑った。自分がいつも「ピウニー」と呼んでいる人が、「

兄上」と呼ばれているのを見ると、なんだか自分には馴染みの無い単語でくすぐったい気持ちがしたのだ。

「どうした？」

「なんでもない。兄弟ってちょっと羨ましいなって。」

サティは多分22、3歳くらいだ。教会で見つけられたときを1歳と数えて、そのくらい。特に子供という年齢ではない。それなのに、兄弟が羨ましいなどという、子供のような言葉を口にしてしまうのは、今が多分夜だからだ。少しだけ物憂い気分になってしまう。

「サティは、…兄弟などは居ないのか？」

「あー…、妹みたいなのは居たけど…。」

「妹みたい？」

「妹弟子？…家族とかそういうのは元々居なくて、…その、ずっと師匠と師匠の家族と一緒に過ごしてたから…。」

なんとなく言い難そうな口調で、サティが隣で身じろぎした気配をピウニー卿は感じる。

「サティ…。」

「あの、別にさびしいわけじゃなくて、どういうものかなって思っただけで…。」

「ああ。」

そういえば、ピウニー卿はサティの身の上話を聞いたことが無かった。理の賢者…という高名な賢者に弟子入りするほどの女性だ。まったく紆余曲折を経ていないわけではないだろう。深く聞くのは躊躇われたが、今はただ、隣で物思いにふけっているサティの横顔が、僅かに寂しそうで目が離せなかった。夜目にもそれと分かるほど、2人の距離は近い。ピウニー卿は、思わずサティの頬に触れた。触れた頬はピウニー卿の手にしっとりと優しく、いつまでも触れていたかった。そして、そう思ってしまう自分の気持ちを自覚しながら、ピウニー卿は身を寄せる。

「ピウ？」

「サティ…こっちを向いてくれ。」

「…え。」

急に吐息交じりの低い声が耳元で聞こえ、大きな手が頬に当てられて引き寄せられる。突然の艶めいた雰囲気に、サティの顔が上気したように赤くなる。夜だから赤くなったなどと分からないだろうが、熱は伝わるかもしれない。しかも、ピウニー卿の声で（人の姿で）囁かれると、魔力に絡められたようにサティは動けなくなった。裸で人間に戻ったときですらこんな風に動けなくなることは無いし、悪態だって付ける。それなのに、服を着ている今、動けなくなる自分の身体は一体どうしてしまったのだろう。

「ね、待って、ピウ…ちょっ、と、」

「…サティ、俺は…。」

何故かサティの心臓が跳ね上がり僅かな抵抗も出来なくなった。ピウニー卿がサティの直ぐ側にもう片方の手を付く。ギシ…と腰掛けている寝台がきしみ、熱い吐息が感じられるほど、ピウニー卿の顔が近付いた。頬を触れていた大きな手が、サティの首筋をなぞるようにうなじに回される。その感触に思わずサティから溜息が零れ、支えられた手の力で逃げることも敵わない。…今にも唇が触れてしまう。

だがしかし、唇が触れる代わりにピウニー卿の身体はサティの猫の体に沈み込み、サティは自分の身体に覚えのある重みがかかったのを感じた。2人の上に、着る者を失った洋服がはらりと掛かる。

「くそっ…またか、またこのパターンか！　全く同じではないか、呪いかこれが！　呪いでなければ納得できん！」

ピウニー卿が騎士らしからぬ独り言をぶつぶつ言いながら、サティの喉元で悔しげにもぞもぞ動いている。
サティは喉元で動くピウニー卿の体温を感じながら、ホッとしたような切ないような、なんともいえない気分になった。

０１３．えーっと…君だね？

ジョシュの元に猫が戻ってきたのは、日が変わる直前だった。侍女や護衛達に窘められたが、ジョシュは起きて待っていた。ペルセニーアは見つかっても見つからなくても必ず報告に来るはずだ。夜着に着替え、ソファで頬杖を突いて考えるのはセラフィーナのことだった。

まったく。どうしてあんな無茶をしたのだろう。いくらジョシュが小さい生き物が飼ってみたいと言っていたといっても、セラフィーナらしくない行動だった。

ジョシュの母は今、懐妊している。ジョシュが生まれてから１２年。待望の第２子だ。つまり、弟か妹が生まれるのだ。ジョシュとて１２歳で、もう王太子としての教育も始まっており、それがどういうことかは分かっていた。だが、不安も大きい。生まれる子が弟でも妹でも、可愛がりたい。守りたい。でも、１２歳で、病気がちで、魔法も剣もほとんど出来ない自分にできるだろうか。それが不安だった。今の自分が、王として立てるとはとても思えない。周囲の貴族達も、生まれる子がどちらかによって、対応を変えてくるだろう。ジョシュはまだ１２歳、だがもう１２歳なのだ。それらへの立ち回りも、うまくやらなければならないというのに。

ここのところ身体の調子が悪かったのは、不安が蓄積している結果だと自覚している。ジョシュの体調は、なぜか気持ちの昂ぶりや不安に左右される。ジョシュの調子が悪いときはジョシュの気持ちも沈んでいるのだ。セラフィーナはそれに気付いている。…だからかもしれない。彼女があんな無茶をして、小さな生き物を連れてきたのは。

…小さい生き物。グレンと名前をつけていたあの猫。ヴィルレー公爵の商隊に紛れ込んでいた、という。出来れば、セラフィーナに返してあげたい。そして、グレンの話をセラフィーナからたくさん聞きたい。ジョシュはそう思っていた。

コンコン…と、控えめなノックの音が聞こえて、侍女がペルセニーアの来訪を告げた。

＊＊＊＊

サティはペルセニーアの腕に抱かれ、ピウニー卿はベルトにつけたサイドバッグに入れられている。

あの後、2人が変身したであろう時間きっかりに侍女部屋に迎えに行ったペルセニーアの目に入ったのは、星明りにうなだれるネズミの姿とそれを見下ろす猫の姿だった。いや…正直ネズミに詳しいわけではないので、あのときのネズミの背中が果たしてどういう感情だったのかは知る由も無いが…あんなに小さな兄の背中を見たのは初めてだった。

ネズミが言葉を話すという事実、さらにその声が兄のものであることを認めれば…この小さなネズミが兄だと思わざるを得なかった。ネズミであっても、この雰囲気と声で「ペルセニーア！」と一喝されれば、「はい、兄上」と答えてしまう。

（なぜか）うなだれている兄をそっと手ですくって、ベルトに取り付けたサイドバッグに入ってもらった。手に触れた毛皮はふわふわと繊細で柔らかく、冷静なペルセニーアにも心地よさが理解できる。なるほど…これは、パヴェニーアが冷静でいられなくなるはずだ。

あの兄は、小さい頃から可愛らしいものが好きだった。アルザス家は、武術の強さと礼儀にだけは相当厳しかったが、それさえ守れば個人の趣味には決して煩くなく、自由に育てられた。ペルセニーアは女だからと多くのぬいぐるみや人形を持っていたが、それらのうち、可愛らしいぬいぐるみに関しては、パヴェニーアがいつも恐る恐る撫でていたのをよく覚えている。

ピウニー卿は宮廷における武官としての役割に興味は無く、多くの騎士達を育て王宮を守る仕事ではなく、国を飛び回る職務を選んだ。彼の職務は国王の親衛隊としてある程度の自由を与えられ、国中の魔物を調査する…という、最前線の中でも最も未知なる戦いに晒される危険なものだった。堅実と言われているアルザス家だが、個人の気質についてはそういった自由で奔放な人間が多い。

とはいえ、兄2人はどちらも真面目で堅物だ。ピウニー卿は国を飛び回り、パヴェニーアは男らしからぬ趣味を持っているが、それだけである。

そんな兄2人を見ながら育ったペルセニーアは、なぜか真面目だけが取柄の性格になってしまった。自分でもつまらぬ性格だな…と思う。こういった性格が災いしてか、縁談も…無くは無いものの特別感情を許したいと思う男もおらず、いい歳になった今でもなんとなく未婚のままだ。自分は騎士であるし、継ぐ家があるわけでもなし、未婚のままでも忠義を守り、国に仕えて生きるのも悪くない…と思っている。そう思うこと自体が、つまらぬ性格だと自嘲する。

ペルセニーアはサティを「失礼いたします」…と優しく断りを入れて、そっと抱き上げた。両手で抱えると猫だから当たり前だが、軽く温かい。

「疲れませんか？」

「大丈夫です。」

「疲れたら、言ってくださいね。」

腕の中のサティを見下ろして、気遣わしげに首を傾げた。サティが腕の中で自分を見上げ、「大丈夫です。」と答えれば…確かに頭を撫でたくなる。ペルセニーアは小さく笑った。そして思う。

ペルセニーアでさえ頭を撫でたくなる猫のサティ。だが、サティを守りたいと一番思っているであろう兄は、今は非力なネズミだ。正義感が強い騎士が、今は守るべきものを持っていたとして、だがその姿はネズミ。騎士としてその胸中は…。

ペルセニーアは2人に心から元に戻ってほしいと願わずにはいられなかった。

＊＊＊＊

「夜分までかかり申し訳ありません、ジョシュ殿下。」

「かまわない。我侭を言ってすまなかった。見つかったようだね。」

「はい。」

控えているペルセニーアをソファに座るよう促して、ジョシュも向かいに座った。ジョシュは真面目なこの護衛騎士が、誰よりも優しく、誰よりも周囲に細やかに気を配っていることを知っている。その優しさに甘えて、見つかるまで待機する…と言った自分が少し後

ろめたい。

「ジョシュ殿下、その猫のことですが…。」

「ペルセニーア…、この猫は…。」

「はい。セラフィーナ嬢が連れてきたのですね。」

「知っていたの。」

「なんとなく、ですが。」

「そうか…。セラフィーナが次に来るまで、僕が預かっていてもかまわないかな。」

ジョシュがそう言った瞬間、びくりとサティが震えた。手に伝わってきたその反応に、ジョシュは猫の顔を覗き込む。苦笑して、少し寂しげに指で喉に触れた。

「早く、セラフィーナのところに帰りたい…？」

「にうぅ…。」

ジョシュの指が触れたとき、サティが低く唸った。ペルセニーアはその声色の変化に気付き怪訝そうにサティを見下ろしたが、話しかけるわけにもいかず、ジョシュに視線を移す。

「ジョシュ殿下。…この猫ですが、他に飼い主がいるのではありませんか？」

「ペルセもそう思う？」

「ええ。…よければ、アルザス家で預かり飼い主を探したいのですが…。」

「それならば、ヴィルレー公爵もそのように手配していると言っていたよ。」

「ヴィルレー公爵にもお話されたのですか？」

「フィーナがね。」

ジョシュは、正直にヴィルレー公爵に猫を連れてきたことを打ち明けたときの、セラフィーナの様子を思い出しながら小さく笑った。

「ならば、ヴィルレー公爵にお伺いしてみます。」

「うん。そうしてくれるかい。…面倒なことになってしまってすまない。」

「とんでもございません。」

内心しまった…と思っているペルセニーアには気付かず、ジョシュはサティの頭を再び撫でた。

「でも、今日は一晩預かってもいいかな？」

「え？」

「え？」

「にゃー！」

男の声が聞こえた気がして、ジョシュは顔を上げてきょろきょろと周囲を見渡す。

「今、何か聞こえなかった？　…ちょっとグレンの鳴き声が邪魔で、よく聞こえなかったけど…。」

「い、いえ、聞こえませんでしたが、何か？」

「気のせいかな…。」

ジョシュは首を捻りながら、話を戻す。

「今日だけでいいんだ。セラフィーナが折角連れて来てくれた猫だし。…ダメだろうか。」

「それは…。」

「しかしだな！」

「うにゃあああああ！」

またも男の声が聞こえた。ジョシュは再び首をかしげる。

「…やっぱり何か聞こえなかった？」

「いえ、気のせいではありませんか？」

「そうかな。」

ジョシュが首を捻っている間に、サティがふんふんとペルセニーアの脇腹に顔を突っ込んだ。ピウニー卿を入れてある辺りだ。何事か…とペルセニーアが上着を開けようとしたが、はたと気が付き、上着に包むようにサティを隠した。ペルセニーアが珍しく声を高くする。

「えーーー、それはですね。ジョシュ殿下。侍女の方々がいい顔をなさらないでしょう。陛下の耳にも入るでしょうから後から知ればなんと言われるか分かりませんし…」

「それは大丈夫。父上には僕からきちんと話すよ。」

「それならば…。」

「にゃ。」

…相談が終わったのか、サティが上着の中から顔を出した。一体どのように話がまとまったのかペルセニーアにも聞き取れなかったが、何かしらの結論が出たようだ。問題はそれをペルセニーアにどう伝えてくれるか…だ。ペルセニーアが…そしてジョシュが、サティをじっと注目している。サティは「にゃあ」と一声鳴いて、とん…とジョシュの座っているソファの上に飛び乗り丸くなった。その様子にペルセニーアは一瞬だけ瞑目し、ジョシュに頷く。

「それならば、明朝兄と共に迎えに来ます。」

「パヴェニーア団長と?」

「ええ。実はあの兄が…、あんな厳つい顔をして大層猫好きでして。えー、その、猫を気に入りまして。」

「ああ、だから、アルザス家で面倒を見たいと…？」

くすくすとジョシュが笑った。ペルセニーアは澄ましている。「あんな厳つい顔」というが、ジョシュにとっては頼もしい実直な騎士団長だ。剣術を充分に習うことはできていないが、騎士の心得を教えてもらったことが幾度かあった。

「分かった。パヴェニーア団長が来たら、通すように手配しておくよ。」

「ありがとうございます。」

ペルセニーアがほっとしたようにジョシュに頷いた。…顔を引き締めて敬礼すると、ちらりとサティに眼を向けた。サティはグリーンの瞳でペルセニーアの琥珀色の瞳を見返した。小さく頷き、尻尾をぱたんと揺らす。

＊＊＊＊

一晩一緒に居たい…と言ったのは、やはり猫がとても可愛かったからだ。一度触れた温かい体温は手に心地よく、離れ難かった。毛が付いてしまうと侍女がいい顔をしないだろうから、ジョシュは室内にいくつか置いてある大き目のタオルを枕元に敷いて、そこに猫を置いた。頭をそっと撫でて、自分も寝台に潜り込む。じっと猫を見つめていると、ぱたんぱたんと尻尾が揺れた。ぽんぽんと自分を寝付かせようとしているかのように、長い尻尾ですぐ近くのシーツを叩いている。思わず笑って、背中を撫でると、猫は、くか…と欠伸

をした。今度は少し近づいたジョシュの肩を、尻尾で叩き始めた。その尻尾の揺れを見ていると、ジョシュもだんだんと眠くなってくる。そして、いつの間にか、眠ってしまったのだ。

ジョシュの目が覚めたのは、空が少し白み始めたときだった。

「…あー…、なんかやっかいごとに巻き込まれそうな気がする…。」

寝台の下からそんな女の声が聞こえてきたのだ。寝台でビクリと身体が震える。硬直していると、すとんと寝台が揺れた。ジョシュの開いた瞳と、猫の綺麗なグリーンの瞳が…パチリと合う。途端に猫の頭の毛がぶおおおおと逆立ち、瞳孔全開で、ジョシュを見つめていた。

「…今の、君かい…？」

ジョシュの驚いたような声に、猫の耳がぴっとひっくり返った。

「にゃ…にゃーん…。」

「えーっと…君だね？」

ばれた。

＊＊＊＊

サティがジョシュの下に残ったのは、気になることがあったからだ。

サティは、ペルセニーアのマントに隠れてピウニー卿に「ごめん、一晩だけ殿下のところに行く。」…と伝えたのだ。当然、ピウニー

卿は猛烈に反対した。だが、「ちょっと気になることがある。」と言って聞かなかった。さすがに今回はピウニー卿は一緒には無理だ。姿を現すなとペルセニーアから念を押されているし、上手く隠れることが出来たとしても、その後気付かれずに脱出できるかどうかは微妙なところだ。

サティは、無理を押しても少し調べてみたいことがあった。ジョシュが寂しげにサティの喉下に触れたときに、奇妙な魔力の流れを感じたのだ。なぜか、ジョシュから、魔力を無理矢理押し込めて歪めているような…そんな気配がした。もしかしたら、ジョシュの体調が不安定なのはこの力の流れのせいなのではないか…そんな気がしたのだ。

サティは魔法使いだ。こうした魔力の揺れや歪みにはやはり興味があった。それがジョシュの体調に影響しているとなれば、なおさらだ。だから、ピウニー卿に無理を言った。かならず明日には戻るから…と言って、半ば無理矢理残ったのだ。

通常、魔力というのはどの人間にも宿っている。だが、その量は人によって様々だ。もちろん、血統などによっても左右される。量が多ければ魔法使いに向く…と一般的には言われているが、基本的には素質は量だけとは限らない。魔法はさまざまな系統に分かれているが、魔力も系統ごとに得手・不得手がある。たとえば、ピウニー卿は剣を媒体とした破壊魔法は使えるが、他の魔法系統は全く使うことができない。サティは身に宿る魔力が人より多く、物理的に使いこなせる系統が多方面に向いている。ただし、本来はサティのように多くの系統に向いた魔力の方が、珍しい。

サティのように魔力を豊富に持つ人間は、バランスを崩しやすい。満ちたコップを揺らせばすぐに水が零れてしまうのと同じで、こう

した魔法使いは、魔力を体内から零さないようにバランスを取りながら生活する必要がある。もちろん小さい頃からそれを訓練し、サティも息を吐くように魔力の均衡を保っている。魔法使いが杖などの安定した魔力の媒体を持つのは、そういう意味でも必須なのだ。

幼い頃に魔力を上手く発動することが出来ず、身の内に無駄に魔力を溜め込んだり、不意に揺らされて壊れたり…ということは多い。もっとも、それほどの魔力の持ち主は滅多に生まれることは無い。それなりの魔法使いの系統に、たまに生まれるかな…という程度だ。だからこそ、ジョシュにサティが感じている魔力の歪な流れは、速く対処しなければならないとサティを焦らせるには充分だった。

ただ、ジョシュの魔力の流れは、どこかおかしい。別のところからコントロールされ、押さえつけられているような感覚だ。どこからか…。サティは、自分の身体に3分の1だけ戻ってきている魔力に集中した。ジョシュの魔力が歪められている圧力…寝台の下。そう感じたサティは、ジョシュを起こさないようにそっと床に下りた。猫の小さな身体で寝台の下に潜り込む。

一番弱い光の呪文を唱えて、寝台の下を覗く。

…サティがそこに見たのは、ジョシュの魔力が出来る限り発動しないように封じ込める複雑な術式だった。

０１４．理の賢者の弟子

「もしかして、寝台の下を見た？」

ジョシュが身体を起こし、サティに向かって首を傾げた。グリーンの瞳の瞳孔が開き、毛が逆立つ。尻尾が膨らみ、耳が裏返った。その様子を見て、くすくすとジョシュは笑う。ふ…と、ジョシュの瞳に１２歳らしからぬ、どこか達観した光が揺らめいた。

「…誰にも言わないで？…グレン。寝台の下を見たのでしょう。…魔力を封じる、魔法陣。」

「あ、あれは。」

サティが観念したように口を開いた。

「うん。」

その声を聞いて、ジョシュは満足気に頷く。

「君は、この魔法陣を書いた人？」

ジョシュの瞳が、…悲しそうに沈んだ。その瞳を見て、サティは慌てて頭を振る。

「違います、ジョシュ殿下。」

「本当？」

「本当です。…ジョシュ殿下、殿下はあれがどのようなものか…ご存知なのですか。」

「うん。…少しだけ、こっそり勉強したから。」

ジョシュは知っていた。幼い頃から、自分の身体を巡る特殊な力。自分の体内にある、不思議な力が「魔力」というものであること。その魔力が、魔法使いたちによってどのように使われているかということ。とても幼い頃だったが、理の賢者という人に1度だけ習ったことがあったからだ。理の賢者はすぐに王宮から居なくなってしまったため、その力の使い方まで学ぶことは出来なかった。…そして、学ぶことも許されなかった。魔力を扱うという力の流れを認識すると同時に、ジョシュは身体を壊したのだ。6歳の頃、ジョシュは初めて倒れた。その後は、魔力を自分でコントロールしようとすると無理矢理引き剥がされるような感覚に陥るようになった。そのせいで、眩暈を覚えたり熱を出したりしたのだ。

魔力を意識できるようになった人間は、自身の魔力の系統によっては魔力の流れを知ることができる。ジョシュは部屋の1点から自分を押さえる特殊な力の流れに気付き、寝台の下に潜ったのだ。そして気付いた。自分の魔力を抑える為に、記述された魔法陣の存在。最初はもちろんそれがどういったものかは分からなかった。だが、図書室などで独学で魔法語を勉強をするうちに、なんとなくだが、その内容がどういったものかが分かるようになった。あくまでも独学だ。詳細なところまでは分からない。ただ、自分の魔力を封じ込め、時折揺らしている。そういった内容だった。

最初は正体の分からない魔法陣が怖くて、その効果が分かったときにはそれが知れたときに宮廷に及ぶ効果を図りかねて、…ジョシュはずっと黙っていた。父にも、母にも、医者にも、誰にも言ったこ

とは無い。王宮の人達は、皆、自分が6歳の頃に体調を壊し、原因不明の熱や眩暈で体が弱いと思っているはずだ。

そんなジョシュの見解にサティは内心舌を巻いた。確かにジョシュの認識している通りだ。あの術式は恐らく術者のオリジナルで、ジョシュのために組んだものだ。サティも一見しただけだったが、ジョシュの魔力に合わせ、ジョシュ自身の魔力を押さえ、揺らすように組まれていることが分かった。範囲は王宮全体を薄く覆う広いもので、そして、恐らくその目的は。

「ジョシュ殿下。」

「うん。」

「あの術式の目的はお分かりですか?」

「…いや…何をしているかは分かったけれど、目的までは分からない。グレン、君には分かるの?」

サティには…分かった。あの術式の目的は、ジョシュの身体を壊さないようにしているのだ。ジョシュの魔力の発動を抑え、発動を抑えることよって偏ってしまう魔力を時折揺らして分散させる。その度に体調は悪くなるだろうが、ジョシュは魔力の暴発によって死ぬことは決してないだろう。…恐らくそういう目的だ。サティも幼い頃にそういう類の術を施されていた時期があった。だから分かる。

魔力が強くそれを正常に操ることができなければ、子供の頃は、魔力を暴発させたり、体力ごと一気に枯渇させたりして、命を落としてしまうことがある。だから、命の危険があるほどの魔力の大きな子供が生まれれば、必ず魔法使いの手に預けられ処置が施されるの

だ。小さい頃に一度魔力を抑え、徐々にそれを緩めていくのが定石だ。ジョシュは、魔力の暴発によって万が一が起こらないように、綿密な魔方陣が練られていた。だが、ずっとこのままでは、ジョシュは魔力の使い方を知ることの無いまま病床で過ごさなければならないだろう。…一体誰が何の目的で、このような術を施したのか。さまざまな可能性が考えられる。ジョシュに大きな魔力を持ってほしくない人、ずっと病気のままにしておきたい人、あるいは、

ジョシュに絶対に、万が一が起こってほしくない人。

サティは頭を振った。ジョシュはどこから見ても利発的な王子だ。ちゃんとした教育を施せば、このまま立派な王太子になれるだろう。だが、魔力を抑えられている。放っておいても彼は死ぬことは無い。だが、それは王太子として必要な力と身体を、持てないことを意味していた。

「ジョシュ殿下。」

「うん。」

「私の名前はサティといいます。」

「サティ。」

「はい。」

サティ。…ジョシュが、口の中で何度か反芻して、嬉しそうに微笑む。

「そうか、サティ。」

「私は、理の賢者の弟子の、サティです。」

ジョシュの瞳が大きく見開かれた。

＊＊＊＊

翌朝、ジョシュの部屋にペルセニーアとパヴェニーアがやってきた。サティとすっかり仲良くなったジョシュが、応対する。

「おはよう。ペルセニーアもパヴェニーア団長も、昨日はありがとう。」

ペルセニーアとパヴェニーアが敬礼を施す。その様子にジョシュが頷いて、椅子を勧めた。二人は腰を下ろす。ジョシュはサティの頭を撫でながら、切り出した。

「この猫のことなんだけど…。」

「ジョシュ殿下、あの。」

「うん。ペルセ、大丈夫。」

何か言いかけたアルザス家の2人を遮って、ジョシュは頷いた。

「この猫は、サティといって理の賢者のところの猫だそうだ。」

「…はっ…。は？」

思わずペルセニーアとパヴェニーアはサティを見た。サティはそ知

らぬ風を装って、尻尾をぱたぱたと揺らしている。

「理の賢者の使いで杖の賢者のところに出向くはずが、道に迷ってしまったらしい。」

「…は、あ。」

「僕が王宮の人間を動かすわけにはいかないから、アルザス家で杖の賢者のところまで送り届けてもらえないだろうか。」

「それは、かまいませんが。」

「それから、ペルセニーア、パヴェニーア団長。」

ジョシュが、低い声で2人の忠義な騎士の名前を呼んだ。その声は12歳の少年の声ではなく、威厳の込められた王太子のもので、思わず2人は背筋を伸ばす。

「猫が迷い込んだことは知れているけれど、理の賢者のことについては、君達2人と僕とサティしか知らない。セラフィーナのこともあるからヴィルレー公爵には話すけれど、…それ以外には他言無用だ。いいね。」

「はっ。」

座したままではあるが、騎士の一礼を施した2人に、王太子の態度を崩してジョシュは微笑んだ。

「ありがとう。ヴィルレー公爵には僕から伝えておく。それで…もしよかったら、送り出す前にセラフィーナのところに寄ってもらえ

ないかな。」

「恐れ入りますが…殿下、その、猫のことをどこで?」

ペルセニーアの疑問には、微笑んだままジョシュは片目を瞑った。

「それは秘密。」

「秘密…ですか?」

「うん。ね、サティ。」

サティが顔を挙げ、すり…と顔をジョシュに摺り寄せた。

「さあ、サティ。理の賢者によろしく伝えておくれ。」

「にゃーん。」

ジョシュがサティから手を離すと、サティは両手を広げたパヴェニーアを無視してペルセニーアの膝の上に乗った。パヴェニーアは行き場を失った両手を落とし、がっくりとうなだれる。

「ありがとうございます、ジョシュ殿下。今から少しお暇を頂いても?」

「今日は君達は非番と聞いている。アルザス家に戻ってもらって構わないよ。ヴィルレー公爵は今日も来る予定だから、サティのことはそのときに伝えておく。」

「分かりました。それでは。失礼いたします。」

アルザス兄妹が立ち上がり、ジョシュに再度敬礼を施した。ペルセニーアは片方の腕にサティを抱えている。2人の様子を見てジョシュも立ち上がって頷く。ジョシュは、ペルセニーアが抱き寄せるサティの右前足を取った。

「またね、サティ。」

そうして、ちゅ…と、サティの右前足にキスをした。サティは、ジョシュの腕にすり…と擦り寄る。

「サティ！」

「うおおおっふぉん！」

突然、低く響く声がサティを呼んだような気がしたが、パヴェニーアのやたら大きな咳払いが被る。

「…パヴェニーア団長？」

「いえっ、なんでも。」

微妙に怪訝そうなジョシュの表情に、ペルセニーアが助け舟を出した。

「兄は、サティのあまりの可愛らしさに平静を失っているようですね。」

「ああ、サティはとっても可愛いものね。」

「ペ、ペルセニーア！」

ジョシュはくすくす笑いながら頷いて、ペルセニーアとサティから一歩離れた。ダシにされたパヴェニーアは顔を真っ赤にしながら、ペルセニーアに抗議しようとするが、妹は何食わぬ顔をしていた。

それにしても。

ピウニー卿は12歳の子供が猫のサティ（の前足）にキスしたくらいで動揺するような男だっただろうか。まこと恋とは人を変えるものだな…と、ペルセニーアは思ったが、言葉にすることはせず、己の身の内に止めておいた。

もっともそれが恋なのか何なのかは、本人に聞いたわけではないから知る由も無いが。

＊＊＊＊

ピウニー卿はサティを連れて、アルザス家に戻ってきた。

無事連れて帰った後、パヴェニーアが何に触発されたか、「改めまして、アルザス伯爵パヴェニーアと申します。」…と、パヴェニーアがサティの右前足を取ろうとしてピウニー卿にみっちり怒られるという出来事があったが、概ね無事に移動することが出来た。

あらかじめ、執事と侍女頭、そしてパヴェニーアの妻であるセシルにのみ事情を説明しておき、2人は他の家人の目に触れないように、客人として離れで過ごしていた。1年ぶりのピウニー卿の帰郷はネズミの姿だったため容易には信じてもらえなかったが、人間に戻って見せればなんとか信じてもらうことが出来た。執事も侍女頭も泣

いて喜び、なぜかサティも「あのピウニーア様が女性と共に！」などというよく分からない歓迎を受けて、久々に人間の姿で一休みすることが出来たのは幸いだった。

サティはアルザス家ではもちろん、客人として扱われている。正直こういった場所でどのように過ごせばいいのか分からず戸惑っていたが、パヴェニーアの妻セシルやペルセニーアが何かと世話を焼いてくれるので、暇ということはあまり無かった。

最初にピウニー卿とサティ、そしてセシルが顔を合わせたとき、2人は猫とネズミの姿だった。セシルは目を丸くして、「まあ…」と感嘆の声を零す。

「あのピウニーア様がこのような可愛らしい姿でこのような可愛らしい女性を連れて帰ってくるなんて。」

そして恥らいながら、こう言った。

「あの…お2人にその、触れてもかまいませんこと？」

ピウニー卿の髭がピーンと張り、後ずさる。サティの毛皮がぶわわわと逆立った。セシルは期待に満ちた目でこちらを見ている。その表情を受けたピウニー卿が困ったように咳払いしていると、不意に頭上が陰った。

「あー…セシル殿？…むほっ！？」

…なんだ…とピウニー卿が見上げたと同時に、ばふ…と暖かな毛皮に包まれた。サティがピウニー卿の上に乗っかったのだ。お腹の毛がふかふかしていたため、つぶれたりすることは免れたが、微妙に

苦しい。そして暑い。

「ちょ、サティ、何だ。」

「…。」

ピウニー卿が毛皮を掻き分けて喉元から這い出てきた。すると、サティが前足を組んで顎を置く。完全に出さないようにしているらしい。どういうつもりかとピウニー卿がもぞもぞしていると、そんな2人を見てセシルが笑った。

「まあ…。」

セシルが頷き、サティの頭にそっと触れる。

「サティさん、わたくしとしたことが出すぎたことを申し上げてしまいましたわ。」

「あの…。」

そういって、そっと身体を低くするとサティに目線を合わせてくれた。

「もしよければ、ご一緒にお茶にしましょう。冷たいお茶をお淹れします。…お義兄様はパヴェニーアに任せて。」

「セシルさん…。」

「はい。」

「あの、失礼なことをして…すみません。」

「まあ。いいのですよ。こちらこそ、不躾なことを申し上げてしまいましたもの。本当に、ごめんなさいね。」

ちょっとだけ悪戯っぽく笑ったセシルの表情を見て、サティは前足を組んでピウニー卿を閉じ込めたまま、しょんぼりと耳を寝かせた。なんだかすごく子供っぽいことをしてしまった気がする。「いくら毛皮に触れたい」と言ったとしても、自分の実家に帰ってきたピウニー卿を、その家の人から隠してしまうなんて大人気ない。パヴェニーアの様子とは違ってセシルはとても控えめだ。動物に触りたい…と思う人間はサティだってこれまでたくさん見てきているし、それに擦り寄って餌を貰うという処世術だって使ってきた。セシルだって悪気が無かったわけじゃない、思わず言ってしまったのだろう。すぐに手を引っ込めてくれたし謝ってもくれた。でも。

でも、ピウニー卿の毛皮が他の女の人に撫でられるのは…何故か、なんとなく、嫌だったのだ。

そんなサティの気持ちを汲み取ったのか。それからセシルは何かとサティの世話を焼き、短い期間の内にすっかり仲良くなった。

ちなみにやっとこ這い出てきたピウニー卿が「サティ、どうかしたのか?」と聞いて「別になんでもない。」…と、つーんと顔を逸らされ、訳が分からずあたふたしている様子を見て、セシルの顔はさらに綻んだという。

＊＊＊＊

その夜。

サティがピウニー卿を誰の目にも触れさせないようにお腹に包みこんだあの様子について、「とても可愛かったわ…」と散々、夫パヴェニーアに自慢し、それを聞いたパヴェニーアが「…それはっ、それは可愛かっただろうな！　分かる！分かるぞセシルよ！」…と力強く同意し、「まあ、あなたならきっと分かってくれると思ってたの！　」…とセシルが夫の手を取り、うふふあはは と、それはご機嫌だったとか。

アルザス伯爵夫妻は、愛らしいものが好きな夫妻であった。

０１５．髭を剃れということとか

ピウニー卿は人の姿に戻ってから、パヴェニーアやペルセニーアに請われて地下の訓練場で剣の手合わせをし、馬の手配、荷造りなどの作業をしていて、サティとの時間はほとんど取れていなかった。一日のうちの3分の1しか人間に戻れない…というのは存外不便だ。人の姿で在るうちにやっておきたいことはたくさんあるが、それらを全てこなせば大体いい具合に8時間が過ぎてしまう。そんな風に2日程過ごして、そして今、やっと2人きりなれた。家人達は2人に変な気を回して、猫とネズミに戻るまでは離れに近づきませんから…とかなんとか言っている。

ピウニー卿はサティが座っている隣に座った。

少し伸びた薄い色合いの金髪に、時折剃ってはいるものの、再び伸び始めた無精髭はそのままだ。それでも騎士然としているのはさすがだろう。精悍で頑なそうな表情は変わらずである。

サティは人間に戻ってから、ずっとなにやら魔法陣や魔法語のようなものを書きとめていた。ジョシュの部屋で見た魔法陣を、頭の中で整理していたのである。大方の事情を聞いているピウニー卿はそれを覗き込んだ。

「理の賢者殿には連絡が取れそうか。」

「呼びかけてはいるよ。多分大丈夫だと思う。」

ピウニー卿は頷く。王太子の事情については、国王にも話さないで欲しいというのがジョシュの意向だった。とはいえ、ずっとこのま

まにしておくわけには当然行かない。サティは理の賢者に話を通すことを約束し、…同時に、ジョシュの身体が心配だったサティは、彼に近しいアルザス家の兄弟にのみ話を打ち明けた。

「解けそうか?…私には魔法は詳しくは分からんが…。」

「そうね。…時間をかければ大丈夫だと思う。問題は…」

問題は、解いた直後だ。何の手も施さずに解除すれば、急に解放された魔力を制御しきれない危険性がある。特に12歳…ということは、成長に伴い魔力が増加している途中の時期のはずだ。それを制御するのは、慣れるまでジョシュにとってかなりつらいものになるだろう。

「私も小さい頃に魔力抑制されてたから分かるんだけど…。」

「サティも?」

「うん。」

サティは思い出す。魔力を抑制されている状態で魔力を使う訓練。大きすぎる力に振り回されないように、自身の耐性を強くする訓練。手足を鍛える為に重りを付けて生活するようなものだ。小さい頃はそれがつらかった。

「つらかったけど、魔法使いになりたいと言ったのは自分の癖に、訓練がつらいと思う自分が一番情けなかったな…。」

そういって、サティは苦笑した。

それでもなんとか解いてあげたい。自分の力を持て余す不安さを、サティは痛いほどよく分かる。ジョシュは体調を犠牲にして、それを押さえ込んでいる。しかも、1人で事態を抱え込んで、不安でつらいに決まっているのだ。

ピウニー卿がそっとサティの横髪を梳いた。

少しだけ不安げなサティの横顔を見て、ピウニー卿は再び自分の心が疼くのを感じていた。人間に戻ることができるようになってからではない。サティと過ごすようになってから、ずっと心が落ち着かないのは、予想以上に自分でももてあまし気味の感情だった。だが、心地よい。悪くは無い。ピウニー卿はセピア色の髪に手を差し入れ、髪を掛けるように耳をなぞった。その感触にサティの肩が揺れ、驚いたような表情でこちらを見返した。

「ピウニー？」

「サティ、どうかしたのか？」

「なにが？」

「不安そうな顔をしておったぞ。」

ピウニー卿の言葉に、サティの瞳が大きくなった。元々大き目の綺麗なグリーンの瞳でピウニー卿を見つめ返し、突然ふい…と瞳を逸らす。頬が僅かに染まっているようだ。そんな風に視線を逸らされると追いかけて、触れたくなる。

「サティ。」

小さく名前を呼んで、伸ばした手で顔を強引に引き寄せる。「ピウニー…、どうし…。」

『ふぉーーーふぉふぉふぉ。おうおう、久々じゃのう、サティ！　呼びかけてくれとったのに、さっさと出てこれんと悪かった悪かった。…おっとっと、これはお邪魔じゃったかの？』

サティの戸惑うような言葉の途中で、理の賢者が長いお髭を撫でながら薄ぼんやりと現れた。今にもサティに顔を寄せんとしていたピウニー卿は、サティの顔を引き寄せた姿勢のまま理の賢者と瞳が合う。

「こっ、こここここっこ理の賢者殿っ」

『ほうほう。お久しぶりじゃのう、ピウニー卿。いやはや、もう少し待ったほうがよいかの。』

「そうですね、あともう少し待っていただければ…」

「いーーえっ、そんなことないです、今で大丈夫です。」

『これこれサティや。そんな心にも無いことを言うんじゃないぞ。』

「こっ、心にも無いってどういうことですかっ!?」

『あと5分待てと顔に書いて…』

「師匠！」

なぜか問答無用で迫ってくるピウニー卿を押しやりながら、サティ

は賢者に向き合った。

「師匠、何故いままで何回も呼び出したのに呼応してくださらなかったのですか!?」

『だって。』

理の賢者は相変わらず、ふぉふぉふぉと笑いながら髭を撫でている。

『古のことわざにあるじゃろう。人のなんとかの邪魔をするものは馬に蹴られると。』

「なんとか!?　なんとかってなんですか師匠っ!」

『なんとかはなんとかじゃよ。のう、ピウニー卿。』

サティに押しやられたピウニー卿は、「くっ…一体誰が私の味方なんだ…!」…などと呟いていた。

＊＊＊＊

『ふむ…ジョシュ殿下がのう。』

「はい。師匠はご存知でしたか?」

『わしがジョシュ殿下にお会いしたのは7年ほど前じゃ。そのときはまだ、魔力もそれほど成長しておらんかったのじゃろう。上質な魔力じゃとは思うとったが。』

理の賢者はふむ…と何事かを思案していたが、不意にピウニー卿に

目を向けた。

『アルザス伯爵はどのようにお考えなのかの？』

「理の賢者殿に相談し、一任する…とのこと。それ以上のことはせず、他言も致しません。」

理の賢者の言葉にピウニー卿が答えた。パヴェニーアは今この場に居ないが、伯爵家の意図としてはその通りで間違いない。

『ふぉふぉふぉ…肝心なところはワシ任せじゃのう。』

相変わらず飄々と笑っている理の賢者だったが、ふと真顔に戻って首を傾げた。

『…サティや。』

「はい。」

『件（くだん）の魔法陣をまとめたものは、用意できておるか。』

「こちらに。」

サティは、先ほどまで纏めていた魔法陣の術式と魔法語を記述した紙を自分の目の前に持ち上げた。それをまじまじと見つめながら、理の賢者は若干厳しめの瞳を見せた。

『ふむ…。よかろう。お主らがこちらに来るまでの間に、解析をしておこうぞ。』

「ありがとうございます。もうよろしいですか？」

『うむ。概要は覚えたぞ。…サティも覚えておるのじゃろう？』

「ええ。」

魔法陣や術式を記憶するのは、サティの得意とするところだ。魔法陣などに限ってだが、大体1度見て内容を掴めば、記憶することができる。これは理の賢者にも、もちろん言えることだ。

「師匠。」

『ふむ。』

「この魔力抑制は何のために行われているのでしょう。」

『ふうむ。殿下を魔法使いにしたくない、もしくは、殿下を危険な目に合わせたくないか…のどちらかじゃろうのう。』

ピウニー卿が怪訝そうな顔をする。

「しかし…後者であるならば、サティのように徐々に訓練をするなどの方法があったのでは？」

『それでも絶対に大丈夫じゃとは言い切れんのじゃよ。ピウニー卿。サティとて同じじゃった。』

「え？」

理の賢者がさらりと言った。思わずピウニー卿がサティの横顔を見

たが、サティは「そうなんですよね。」と言っただけで、特に何の感慨も浮かべていない。

『さて、ワシはそろそろ戻るとするかのう。』

「…賢者殿…」

ピウニー卿は思わず理の賢者を呼び止めたが、何を聞けばいいのかも分からず、口を閉ざした。サティが少し首を傾げてピウニー卿を見たが、その視線には気付かず、難しい顔をして黙ったままだ。理の賢者は2人を眩しげに見つめる。

『ピウニー卿、サティをよろしく頼みますぞ。』

「は?…はっ、必ず守ります。」

「はい?　何それ。」

『ふぉふぉふぉふぉふぉ、ではさらばじゃ。』

慌てて理の賢者の声に答えた騎士と、怪訝そうに首をかしげる弟子を残して、賢者は消えた。

＊＊＊＊

「一体どういう意味なのよ師匠。」

「サティ。」

ピウニー卿が少し強めの口調で呼んだ。

「何？」

「その…絶対に大丈夫とは言い切れない…というのはどういうことなのだ。」

「それは…そのままの意味だよ。」

本当に、そのままの意味だ。たとえ魔力を抑制していたとしても、それを徐々に弱める過程で絶対に綻びは生まれる。抑制を弱めた直後は特に顕著だ。急に重りを外せば手も足も勢いよく動き出す。それと同じで、急に緩くなった枷の反動に戸惑うことも多い。だからジョシュの魔力抑制も、解除していくときが一番難しいはずだ。絶対に大丈夫だと言い切れないからこそ、心配なのだ。

サティの肩が、突然抱き寄せられた。バランスを崩したサティの身体が、ピウニー卿の腕に包み込まれる。「絶対に大丈夫とは言い切れない」訓練を、小さい頃に施されたというサティの話と、それを淡々と話す表情が、思いのほかピウニー卿を切なくさせたのだ。一瞬、どうしても目を離したくない、どうしても離れたくない…という思いに囚われる。いつに無い強引な行動に、サティが僅かに焦ったような顔でピウニー卿を見上げた。

「…何、ピウニー？」

「サティ、お前が…。」

「ちょっと、ちょっと待っ…て、…ぅ…」

サティは、きゅ…とピウニー卿に抱き寄せられていた。熱い吐息が

髪の毛に掛かり、どうやら唇が髪の毛越しにサティのこめかみに押し付けられたようだ。サティを求めて徐々にそれが下がってくる気配と、ごつごつとした大きな男らしい指が髪を掻き分けてくる感触が熱い。触れ合っているのは小さくて柔らかなお腹とふわふわの毛皮ではなく、自分よりもはるかに逞しくて力強い男の身体だというのも落ち着かない。

胸が詰まるような心地をサティは覚えた。最近、人の姿で2人きりになると唐突に色めいた雰囲気になって、それが心地よいようなむずがゆいような気がするサティは、素直にそれに身を任せることができないのだ。だが、こんな風にピウニー卿に包み込まれていると、「やめてよ」…と退ける一言がどうしても言えない。

サティは逃げることにした。

「あの、ピウニー…」

「なんだ。」

「私、お風呂入りたい。」

「あ?…あ、ああ。」

抱き寄せてサティに触れていると、名前を呼ばれた。ピウニー卿はサティの身体を少し離し、そのグリーンの瞳を見下ろす。するとその口から発せられた、突然の風呂発言。何故かピウニー卿の顔が赤くなった。えー、あー、この状況で風呂…か…。人間に戻ったあと、すぐに風呂を使っていたと思うが…このタイミングでそれを言い出すということは、つまりどういう解釈が当てはまるのだろうか。ピウニー卿は腕を緩めて、「あちらだ」と、部屋の奥を指した。汗を

流す程度の簡単なものならば、部屋に付いている。

「ありがとう。」

ピウニー卿の腕を抜けると、サティはそそくさと立ち上がり部屋の奥へと駆けていった。ああ、そんなに慌てると転ぶぞ。セピア色の揺れる髪を瞳を細めて見送りながら、何故かピウニー卿も立ち上がる。今はサティとこの小さな離れに2人きり。ピウニー卿は無意味に部屋をうろうろした。

少しばかり待つと、本当に汗を流しただけなのだろう、サティが風呂から出てきた。セピア色の濡れ髪をタオルで拭きながら、先ほどまで着ていた服を着崩している（ように見える）。妙に色っぽいサティの腕を強引に引くと、湯で上気した肌がほんのり温かくピウニー卿の腕に伝わってきた。もう片方の腕を背に回し、腰まで這わせる。その感触がサティの身体をぞくりと揺らしたのが、ピウニー卿にも分かり、こうしていると自分の息が上がる。ピウニー卿はそっとサティの名前を呼んだ。

「サティ…？」

「あああ、あのっ…。」

サティが腕を突っ張って身体を離してきた。妙に緊張している様子が可愛らしく、ピウニー卿も思わず腕を緩める。

「…ピウニーも入っとく？」

「え？」

「ピウも、お風呂に入っとく？」

「ええ？」

「入らないの？」

「いや、あ、ああ…。」

一緒に？…いや、ない。既に入っている現状から分析してそれはない。…ということは、暗に風呂に入れといわれている…？　しかし自分はそんなに汗だくだっただろうか？　汗臭かっただろうか？　ピウニー卿はいささかショックを受けたが、腕の中で上目遣いに言われたら流石に嫌とは言えなかった。騎士たるもの、淑女をその腕に抱くのに、汗だくではいかんだろう。…いや、もう一度聞くがそんなに汗だくだっただろうか。待てよ、これか！髭か！髭を剃れということか！…旅立つ前に一度くらいは剃っておかないといくまいな。浮上してくる様々な思いを口にすることはなかったが、ピウニー卿は顎を撫で「じゃあ、入るか」などと言いつつ、風呂に向かった。

ピウニー卿が浴室に入った直後。

「ふおおおおおおおっ！」

男の悲痛な叫び声が聞こえる。

時間切れだった。

サティは扉を押して浴室に入り、水浸しの床に転がっているピウニー卿を口で咥えて救い上げてやった。ふかふかタオルを用意して、

その中にピウニー卿を落とすと、前足でちょいちょいと転がしながら拭いてやる。

「ごめん、あの…どうしてもお風呂入っておきたくて…ピウニー大丈夫？」

獣になる前に人の姿で風呂に入っておきたい…というのは、ささやかな女心だ。

「いや…この程度。」

わざとか？　わざとなのか!？　…ピウニー卿は動揺を悟られないように髭を撫でて平静を装った。

もちろん風呂だけではない。
女心というのはもっと複雑でもっと可愛らしいものだ。

ただ残念なことに、ピウニー卿は剣の筋は分かっても女心には疎かった。

サティはため息をついた。
自分がどうしても、こうした雰囲気を誤魔化したくなるのは…。

016. あのね、だから。

ヴィルレー公爵の屋敷で、ペルセニーアとヴィルレー公爵は向き合っていた。ヴィルレー公爵の隣にはセラフィーナが座り、その膝の上ではサティが喉をごろごろと鳴らしている。セラフィーナはどことなく、寂しそうだ。

ペルセニーアは理の賢者と猫の関係のみをヴィルレー公爵に打ち明け、ジョシュが魔力抑制を受けていることについては秘しておいた。信用が置けない…という問題ではなく、まずは理の賢者に相談したい…という、それはジョシュの意向だとサティから聞かされた。サティはあの夜、ジョシュに魔法の内容の概要を伝え「必ずなんとかする」と約束したそうだ。ジョシュ自身がどう考えているかは、ペルセニーアは伺い知ることは出来なかったが、サティの話が本当であれば、ジョシュは将来有望な魔法使いになる可能性がある。ジョシュに掛けられている魔力抑制が、それを阻止しているのか、それとも純粋にジョシュのために施されているのか、目的が異なれば、術を施した人間も異なるだろう。…可能性としては、ジョシュの身体を守るために、国王自身がそれを行っているかもしれないのだ。サティからその可能性を示唆されたときに、まさかとは思ったが、それほど、ジョシュの魔力というのは大きく不安定なのかもしれない。

そのような事情もあったし、何よりサティがアルザス家を信用してくれたからこそ、こうした秘密を共有しているのだ。その信用を裏切るわけにはいかない。ジョシュの魔力抑制については、いくらヴィルレー公爵であっても秘密を貫き、より一層、かの王子の身を守ろうとペルセニーアは誓っている。

「じゃあ、グレン…んーん…サティは、家では飼えないのね。」

セラフィーナの寂しげな声が聞こえた。その声を受けた、ヴィルレー公爵がゆっくりと娘の頭を撫でる。

「探している人がいるのならば仕方がない。きっとその人もサティに会いたがっているよ。」

「そうね…。」

ヴィルレー公爵は、ペルセニーアから事情を聞く前に、あらかじめジョシュから話を聞いていて大方の事情は知らされていた。ジョシュははっきりと「猫が話す」とは言わなかったが、理の賢者の話が出てきたということは、そういうこともあるのかもしれない。ジョシュはそのような嘘をつく人間ではない。いずれにせよ、人語を解する猫が王宮に紛れ込んだとなれば、どこぞの誰の間者かと騒ぎだてるものも居るだろうし、知っている人間がごく限られた…しかも、ヴィルレー公爵も信用できる人物であったことには安心していた。

アルザス伯爵家は、堅実な武門の名家として知られている。国王の覚えもめでたく、次男のパヴェニーアは若くして白翼騎士団の団長に、長女のペルセニーアはジョシュの護衛騎士となっている。長男ピウニーア…ピウニー卿はほとんど宮廷に関わっては居ないが、それというのも、国王の命によって、国の要所に出没する魔物を討伐・調査する任に着いていたからだ。籍は国王の親衛隊。国中を動いていたため意図して役職を与えられてはいなかったが、国王の信頼厚い騎士として宮廷では有名だった。そのピウニー卿も1年と少し前、魔竜の討伐に出向いて亡くなっている。

もともと文官の出だったヴィルレー公爵とアルザス家は交流がある

わけではなかったが、ペルセニーアがジョシュの護衛騎士になり、王宮でよく顔を合わせるようになると、言葉を交わすようになった。ジョシュやセラフィーナがよく懐いているペルセニーアも、その関連で顔を出すパヴェニーアも、人柄もよく野心も無く、武人らしい率直な態度をヴィルレー公爵は快く思っている。

「もとよりこちらで保護した猫です。…ヴィルレー家でも何かさせてもらえないでしょうか。」

「いえ…そこまでしていただくわけには。お気持ちだけで結構です。」

「しかし…。」

サティを撫でていたセラフィーナが顔を上げた。

「ねえ、お父様。私、いつかまたサティに会いたいわ。」

「ああ。…それならば…。」

ヴィルレー公爵は優しげな眼差しで、セラフィーナに抱かれているサティの頭を撫でた。セラフィーナに全ての事情は話していない。ただ「飼い主が見つかって、寂しがっている」と言っただけだ。

「サティ、いつか君の主と共に、セラフィーナに会いに来てくれるかい？」

人語を解するならば、自分達の会話も聞こえているのだろうか。

「にゃあ。」

サティの返事に、セラフィーナの顔が綻んだ。

＊＊＊＊

「猫が迷い込んだ？」

「はい。ヴィルレー公爵とそのご息女がご訪問されたときに、迷い込んだ…と。早々に捕獲し、ジョシュ殿下の下で一晩過ごした後にアルザス伯爵が引き取ったそうです。」

「ジョシュが、一晩預かった…と。」

「ええ。ヴィルレー公爵と殿下のお2人からお伺いしましたので、間違いありません。侍女や護衛の者達も、そのように申しております。」

「ジョシュに変わりは？」

「特に問題は無いようです。本日、お伺いしてみましたが、お顔の色も優れており、いつになくお声もしっかりとなさっておられました。」

「そうか。」

オリアーブ国王の執務室で、国王は宰相バジリウスから報告を聞いていた。

穏やかな、落ち着きのある声は、そのバジリウスのものだ。先王の下では魔法使いとして名を馳せていたが、その手腕は政治にも発揮され、現国王が即位したときから宰相を務めている有能な男である。

今では魔法使いとしては現役を退いている。しかし、その経験からか魔法師団と騎士団の協力の必要性を訴え、実証してきた。彼のおかげで、国内で勃発する魔物の討伐が迅速、かつ最小限の被害でとどまっているといってもいい。内政手腕においては国王の意図をよく汲み、騒がしい宮廷からも一目置かれている。

それにしても、猫…か。

国王の1人息子のジョシュは、12歳になるというのに勉学以外の…剣や魔法などについては、ほとんど基礎しか教えることが出来ていない。いずれ王太子として国王を補佐する身でありながら、そのような事態に陥っているのは、父王たる自分の責任でもあった。あれは聡明だ。今からでも強く鍛えることができれば、立派に王太子を勤めるだろう。だが、今のままでは到底、無理だった。

それに、長く次の子が出来なかった王妃が、やっと第2子を懐妊したことも、喜ばしいことではあるが、恐らく悩みの種なのだろう。聡いジョシュのことである、宮廷の力の均衡にまで気を配り、どういう立ち位置に立つべきかを思案しているに違いない。…そしてそれらは、アルザス伯爵やヴィルレー公爵には相談しても、恐らく、父王の自分には、一言も相談することは無いだろう。ふ…と、国王は苦笑した。

「ジョシュの件は承知した。不問とせよ。もう下がってよいぞ。」

「はっ。」

バジリウスは深く一礼して、執務室を辞した。入れ替わりに、1人の騎士が入ってくる。

その騎士の姿を認めた国王は、「ああ、ここにも懸念事項があったか」とため息をついた。

騎士から提出された報告書に一通り目を通し、国王は瞳を上げた。

「この報告書の内容はどれほど信用できる。」

「半々…と言ったところでしょうか。」

「お前自身が作ったものだろう。」

「私とて半信半疑です。…陛下、調査の続行を許可いただけるでしょうか。」

蜂蜜色の髪に目尻が下がり気味の、甘い面差しの騎士だ。彼は少しばかり口元を緩めた。騎士としての礼節は保っているが、漂う気配がどことなく軽薄になってしまうのは彼の性分なのだろう。そうした雰囲気を特に気に留めることなく、国王は頷いた。

「許す。」

「そう言っていただくと甲斐があります。」

「これは余の個人的で、面倒な仕事だろうに。それでも、続けたいか。」

「もちろん。…こんな面白いことはありません。」

「そうか。」

「もし王都を離れることになっても、パヴェニーア団長には、融通を?」

「お前が余の使いで出向する…という旨は通達しておこう。」

「お願い致します。」

騎士が一礼して立ち去ったのを見届けると、国王は執務机から立ち上がり、窓の外を見た。ジョシュの件にしろ、この件にしろ…自分という男は国王でありながら、頼りないことよと思わざるを得ない。

待つとか、見守るとか、…そういったことしかできぬ自分が恨めしかった。

＊＊＊

「ピウ、よかったの？」

「何がだ。」

「もう少し実家にいても、よかったんじゃない？」

「かまわんさ。またいつでも戻ればよい。」

顔を隠すほどマントを目深に被ったピウニー卿に、サティは話しかけた。２人が騎乗しているのは、青毛の馬シャドウメア。今はゆっくりと歩かせているため、かぽかぽと一定の足音を刻んでいる。

シャドウメアはピウニー卿の愛馬だ。魔竜討伐のときにも連れて行った彼は、ピウニー卿のことはもちろん覚えていたが、それ以上にサティに懐いた。驚いたことに、シャドウメアはネズミや猫になった２人の言うこともきちんと聞いた。

サティがヴィルレー公爵家から帰ると、2人はすぐに出発した。ジョシュの魔力抑制についてはひとまず理の賢者に任せ、当初の目的であった杖の賢者の下へと向かう。理の賢者の杖を引き取り、サティの杖を新しく作ってもらうためだ。

昼間は人間に戻りシャドウメアで駆け、必要があれば街で買い物をする。夜間は鞍に乗ったまま、街道から外れたところを歩いた。足が強く賢いシャドウメアだからこそ可能な旅路だ。魔物が出そうなとこは避けて通っており、今のところ特に問題は無い。

ピウニー卿は後ろからサティを抱き寄せるように、馬に乗っている。

「それに、とりあえず早く呪いを解きたいからな。」

「あのさ、ピウニー」

「サティは、そう思わないか?」

「うん、それは思うんだけど。」

「呪いを解いたら…。」

「あの、」

「サティ…。」

サティを抱き寄せる腕に力が込められ、不謹慎な色を帯びた声がサティの耳元で囁かれた。そのとき、シャドウメアがいなないた。かぽかぽと街道から離れていく。

「む？　シャドウメア？　どうしたのだ。」

「あのね、だから。」

たったった…と、シャドウメアが駆け足になった。

「ああ…。」

「ね。」

ピウニー卿は深く溜息をついた。いつもサティと話していると時間を忘れる…などというのは陳腐な言い訳であると分かっている。そうか。時間か…。早くサティをこの腕で思う存分…。ピウニー卿が騎士らしからぬ不埒なことを考えていると、シャドウメアの足が一層速くなり、森に飛び込んだ…と、同時。

シャドウメアの足が止まり、その背中から人が消え、ふわりと2人分の旅装が鞍の上に落ちた。

シャドウメアはとても賢い馬だった。

「いいかげん、覚えたほうがいいよね…。」

「そうだな…。」

鞍の上で、サティはピウニー卿のマントに頭を突っ込んだ。ぶるる…とシャドウメアが鼻を鳴らしている。マントの中でサティはピウニー卿を見つけて、その毛皮をぺろりと舐めた。

［小話］　戦え！ピウニー卿！（前書き）

※あまり詳細な描写はしていませんが、虫注意。
ダメな方は、「＊＊＊＊」まで飛ばしてお読みください。

ピウニー卿とサティが、最初の宿場町に着くまでのお話。

【小話】　戦え！ピウニー卿！

「いやあああああ、無理、もう無理ぃいいいいいいいいあああああ」

「サティ、私を降ろせ！」

「だってやだ止まるの無理いいいいいい」

「サティ、私が必ずお前を守るから！」

「…ピウニー、ほ、本当に？」

「大丈夫だ。必ず守る。」

「うう…。」

頭の上から聞こえるピウニー卿の声に恐る恐るサティは止まると、そっと頭を降ろした。背後から迫る足音に、震えながら振り向く。ピウニー卿はサティを小さな背に庇い、金属の擦れる音を響かせて剣を抜いた。

近づいてくる敵。

ありえぬほど成長したそれは、まさに悪魔。黒い悪魔のごとき姿。

眼前に現れたのは、人の世の台所でよく見かける黒い艶光する羽を

持つ、アレだった。

それはおよそ見たことの無い大きさだった。恐らく大将級であろう大きな悪魔と、両脇に従える少し茶色に近い脂ぎった小さな悪魔。おぞましい。こんなおぞましい姿、サティは見たことが無かった。否。

見たことはある。そして、その姿に対峙するのをいつも怖れていた。それが現れると、隠れ、震え、嵐が去るのを待っていたのだ。だが、今は、ピウニー卿がいる。頼もしいふわふわの毛皮の背中。彼は竜殺しの騎士なのだ。

ゆらり。

両脇の小さな茶色い悪魔が中に浮く。それを睨みつけながらじり…とピウニー卿が殺気を濃くする。背にひらめく薄い羽を動かし、こちらを伺ってはいるが、あれが恐ろしい機敏さで動くのをピウニー卿は知っている。しかもなぜかあの動きは…予測不能だ。いや、違う。予測不能ではない。あれは、人のおびえる心を…負の心を嗅ぎつけて、もっとも人の恐怖心を煽る行動に出るのだ。女子供を嘲笑うかのように…。それならば、次の動きは。

ぴ…っと茶色い悪魔が動いた。

「サティ、怖いなら目を閉じていろ。」

トン…とピウニー卿は後ろ足で床を蹴った。狙うのは…動かなかっ

たほうの悪魔だ。一歩詰めて一気に距離を縮め、剣を横に薙ぐ。剣が触れる瞬間、ぐ…と魔力を放出すると、ジュウッ…と焼け焦げるような音が聞こえ、眼前の悪魔は胴から2つに分かれた。

しぶとく断末魔の動きを見せる切って捨てたほうの悪魔は無視し、す…ともう一匹の茶色い悪魔に視線を移す。思った通り、もう一匹は壁際に貼り付き、サティの頭上を狙っていた。ピウニー卿の髭が戦いの緊張感でぴりぴりと張り、真っ直ぐになった。

「サティ、頭を借りるぞ！」

いまだ目を閉じて、ふるふるしているサティの頭に駆け寄ると、それを足場にジャンプする。壁に張り付く悪魔に剣を向けると、それはヴ…と羽を震わせて、一度ピウニー卿の身体の上へと逃れる。だが、その動きは予測していた通りだ。ピウニー卿は自分の頭上を通りすぎる瞬間、その腹に向かって剣を突き通す。獲物を剣に刺したまま、すとん…とサティの毛皮の上に降りると、ていっ…！と剣を振って悪魔の身体を投げ飛ばした。悪魔が剣を抜ける一瞬に魔力を込める。バシュウ！…と身体から煙を吹きながら、悪魔は地面に叩きつけられ、動かなくなった。

…最後は、大将級…一匹である。

ピウニー卿はサティの頭から降りると、ずっとおとなしくしていた…いや、こちらの動きを伺っていた黒い悪魔の前に立ちふさがった。

じっとりとした重い空気。張り詰めた緊張感が2者の間に落ちる。

均衡を破ったのは黒い悪魔だ。ピウニー卿の耳がぴくりと動き、悪魔の動きに合わせて身を翻す。

黒い塊がふっ…と宙を舞った瞬間、ピウニー卿の視界に茶色い悪魔の下半分がうごめいたのが見えた。そちらに一瞬だけ、本当に一瞬だけ、気を取られた。その隙に…！

「い。」

「しまっ…」

「いやあああああああああああああ！！！！！」

あろうことかサティの方向に、黒い悪魔が飛んできたのだ。サティの頭を黒い悪魔が掠める。目を閉じていても分かる、その風圧のなんというおぞましさ。サティの毛皮がこれまでにない勢いで膨らみ、四肢を突っ張り垂直に跳んだ。その動きにたじろいだのか、黒い悪魔はサティを避けるように地面に降り立ち、ピウニー卿の方にカサカサと近づいてくる。いまだ！…ピウニー卿が前足の剣を構え直し、敵へ跳躍した。

＜ニータ・ヴィ・ラニマーク！＞（雷撃の鞭！）

「えええ」

バチーン！

黒い悪魔とピウニー卿の間に、小さな雷撃が落ちた。

＜ニータ・ヴィ・オーン！＞（炎の鞭！）

「あの、サティ」

ジュウ！

黒い悪魔に赤い熱線が走り、ピウニー卿の足元が焦げた。慌ててピウニー卿はサティの足元に駆け寄る。

＜オーン・エ・カシュリク！＞（炎の刃！）

「サティ、ま」

＜オーン・エ・ラュカ・セオーム！＞（炎よ燃えさかれ！）

「お、サ、」

＜ラニマーク！ラニマーク！オーン！ラニマーク！＞
（雷とか雷とか炎とか雷とか！！）

「あぶな、」

雷撃やら炎やら、小さいながら、すごい数の魔法弾が打ち込まれて黒い悪魔は跡形も無く消え去った。ようやく静かになり、サティはぜえはあと息をつく。

「サ…サティ…？」

ピウニー卿の呼びかけに、ぎぎ…っ、と首を傾けたサティが、半眼でこちらを見ている。ピウニー卿の髭が再びピーンと緊張し、ふかふかの毛皮が倍くらいに膨れた。怒られる。一匹サティのところに逃した罪で確実に怒られる。ピウニー卿は覚悟を決めた。この女魔法使いに、逆らっては、いけない。

だが、サティの行動はピウニー卿の予測を超えた。

かぷっ。

サティはピウニー卿の身体を咥えると、一目散に走ったのだ。

「な、待て、サティ、サティーーーーーーーーー！！」

＊＊＊＊

バシャバシャバシャ…。

小さなセピア色の猫が、せせらぎに顔を突っ込んでいる。

「うっうっ…」

「あの…サティ、もう多分綺麗になったと…浄化の魔法も使ったんだろう？」

「そうだけど、そうだけど違うの！　そういう問題じゃないの！ピウ…頭もちょもちょして！」

「もちょもちょ？…あ、ああ。」

サティはずずいと濡らした頭をピウニー卿に差し出す。差し出されたピウニー卿は、人間の髪を洗うように、そのセピア色の毛を前足でもちょもちょと撫でてやった。ピウニー卿の身体は小さいので、前足が毛に埋まる。もちょもちょが終わると、サティは再び頭をざぶんとせせらぎに突っ込み、ぷるぷると振る。

「ピウ！」

「お、おう。」

再び、ピウニー卿はサティの頭をもちょもちょと撫でた。終わると、再び頭をざぶんとせせらぎに突っ込み、顔を上げるとぷるぷると頭を振って水を飛ばす。

「…もう、大丈夫か？」

恐る恐るピウニー卿がサティを覗き込むと、明らかに耳をしょぼんとさせて、せせらぎから少し離れたところに丸まった。

「あんな…あんな、もうお嫁にいけない…。」

「よ、嫁っ？」

すんすんと涙声のサティ。サティは虫が嫌いなのか…。まあ、あの悪魔は虫の中でも魔王もかくやと謳われた嫌われ者だから仕方がない。とはいえ、こんなに弱ったサティを見るのは初めてで、ピウニー卿はサティの頭に近寄ると、よしよしと頭を撫でてやった。ピウニー卿は前足を口元にあてて、コホンと咳払いをする。

「あー、サティ？　嫁なら私が…。」

がばっ！…とサティが起き上がる。

「ふ、ふおおお！？」

勢いあまってピウニー卿が後ろに転がった。

「古のことわざで、１匹見たら３０匹って言うのよ確か。」

「あ?…あ、ああ。だがアレだけ走れば大丈夫だろう。…それよりも嫁の話だが、」

サティは、ピウニー卿の言葉は聞かず、その小さな身体をパクリと咥えた。

「サ、サティ?　サティーーー!!　落ち着けーーー!!」

サティは猛烈なスピードで駆け出した。
ピウニー卿は風を切りながら決意する。

サティに虫ダメ、絶対。

【小話】　戦え！ピウニー卿！（後書き）

もちょもちょする。

…って、何…？

という質問は受け付けておりません！

017．逃げろ！

街道から大きく外れた荒野を一匹の猫が駆けていた。四肢を懸命に伸ばし、何かに追われるように走っている。頭の上には金色の毛並みのネズミが振り落とされないように捕まっていた。

「サティ、一瞬身を翻せるか？」

「どうする？」

「私があれの後ろに飛び移る。」

「…危ないよ！…私の魔法で何とか…。」

「サティの魔法の威力だけでは無理だろう！…サティ…！」

「…分かった。掴まって！」

サティは、ずさ…と身を翻してターンし、眼前の敵を睨んだ。迫り来る敵…、人間の膝くらいの高さがあるだろうか。巨大なネズミともモグラともいえぬ、醜悪な動物が不恰好にこちらに迫っていた。ぶよぶよとした皺のよった皮にはまばらに毛が生え、瞳は退化してしまっている。…魔物化した凶暴なモグラネズミ。普段は地下で大人しくしている彼らは、時に魔と化して、こうして地上に出て、見えない瞳で無差別に生き物に牙を向くことがある。

口からは大きな長い牙が2本飛び出していて、飛び掛られれば人であっても脅威だろうが、自分達が人の姿であれば、歴戦の騎士であるピウニー卿や、古魔法に精通しているサティならば、ものの数秒

で蹴散らすだろう。だが、なにせ今2人は小さな猫とネズミの力で、使うことの出来る能力にも限りがあった。…そして、シャドウメアとも、はぐれていた。

荒野は広く水も少ない。出来る限り川や森の側を歩いていたピウニー卿達は、その日河原で野宿をしていた。そして朝出発しようとしたときに、モグラネズミの集団に襲われたのだ。シャドウメアが一声甲高く嘶き、モグラネズミの集団の真ん中へと躍り出てそのまま走り始める。一瞬追いかけるべきかと思ったサティに、ピウニー卿は「逆に走れ！」と言ったのだ。サティはピウニー卿を乗せて、シャドウメアが走った方向とは逆に走り始めた。大半は大きな足音を立てるシャドウメアを追いかけたが、一匹だけ、2人を追いかけてきたモグラネズミが居た。

「サティ、今だ…！」

ピウニー卿の声に弾かれるようにサティの身体が跳躍した。モグラネズミは眼はほとんど見えず、気配と音だけでこちらを追いかけてくる。身を翻したサティの動きに咄嗟に反応できず一瞬出し遅れた牙が、交差するサティの身体を掠めた。ピウニー卿が、サティの頭の上からモグラネズミの上に飛び移る。

モグラネズミは背を這う奇妙な感覚に、ギャッギャッと小刻みな鳴き声を上げながらロデオのように体をくねらせ始めた。ピウニー卿は落ちないように、皺になった皮膚を掴み、モグラネズミの尻に剣をちくんと突き刺す。

ピギャーーーーーーー！

不愉快な声を上げてモグラネズミが走り始めた。ピウニー卿は身体

を反転させ、モグラネズミの寄った皺にしっかりと掴まる。今度は身体の少し左に剣をちくり。

ピィイイイイギャアアアア！！

モグラネズミのスピードが上がり、走る方向を少し右に修正する。その眼前には、白い岩がすぐ側に迫ってきていた。

ドゴン！

眼の見えないモグラネズミは、思い切りその岩にぶつかった。ぶつかった振動でピウニー卿は振り落とされそうになるが、なんとか剣を刺して支え、やり過ごす。…ドサリとモグラネズミの身体が地面に横たわり、あたりは静かになった。

ふ…と安堵のため息をつく。サティがこちらに向かってきているのを確認して、剣を抜こうと柄を握り直した。そのときだ。

ピイイイイイィィィィーーーー！！

動かなくなったと思ったモグラネズミが、突然声を上げた。ピウニー卿は剣を抜いて頭へと駆け上がる。両手で持ち直し、渾身の力を込めてモグラネズミの眉間に剣を突き刺した。思い切り魔力を込める。…ギャッ！…と短い断末魔の声を上げ、今度こそモグラネズミは動かなくなったようだ。…ピウニー卿は剣を抜くと腰に納め、サティを振り返った。

「サティ、足は大丈夫か？」

「ピウニー、大丈夫？　怪我は無い？」

2人が同時に聞いて、顔を見合わせた。どうやら大丈夫そうな互いの様子を見て、ほっとため息をつく。サティが地面に降りてきたピウニー卿に顔を寄せると、ピウニー卿はその頭をそっと撫でた。

「しばらくどこかに身を隠して、人間に戻ったらシャドウメアを呼ぼう。」

「分かった。…じゃあ、ピウニー、乗っ」

乗って…とサティが頭を低くした。そのときだ。

サティとピウニー卿の耳がぴくりと動いた。

ゴゴゴゴゴゴゴゴ。

…地鳴りのような音が聞こえる。地面も僅かに振動し、明らかに様子がおかしい。サティがピウニー卿を乗せて立ち上がり、頭を上げた。荒野の向こうに見えるのは…。

「なにあれ…。」

荒野の向こうが黒く染まっている。何か獣の集団が、こちらに迫ってきているようだ。…迫って、きている？　地面の高低差によって、その獣の集団に気付いたのは、かなり距離が迫ってからだった。

「…これ、不味くない？」

「不味い…な。」

「ピウニー、しっかり掴まっててて…。」

「うむ。サティ…」

「逃げろ！」…ピウニー卿の声が聞こえると同時にサティは走り出した。

＊＊＊＊

後ろから聞こえてくる地鳴りから逃れるようにサティは駆けた。轟音は少しずつ、近づいてくる。ピウニー卿はサティに掴まりながらそっと後ろを伺ってみた。そこには、先ほど自分達が対面していたモグラネズミが集団となって、こちら目掛けて突進してきている。朝、シャドウメアが蹴散らした数とは比べ物にならない。…そして、その集団の前に、２頭の馬が居た。

１頭はシャドウメア、もう１頭の馬上には何者かが乗っている。

「シャドウメアか。…もう１頭は、何者だ。」

サティも大分疲れてきたのだろう。段々、足が重くなってきた。ピウニー卿は、今ほど自分のネズミの姿が忌まわしいと思ったことは無かった。自分はこれほどにも小さく、移動も戦闘もサティがいなければ何も出来ないではないか…！　自身の無力さに歯噛みしながらも、ピウニー卿は剣を抜いて、それを掲げた。

＜イラキュヒ・エーク・オ・ピウニーア！＞

（ピウニーアの剣よ発光せよ！）

ひら…と小さな光がピウニー卿の剣に灯った。

「サティ、　少しスピードを落とせ。」

「でも、」

「シャドウメアが来る。大丈夫だ。」

ピウニー卿の落ち着いた声はサティを少し安心させた。それを聞いて、サティは少しずつスピードを落す。ピウニー卿が剣を掲げたまま後ろを振り向くと、大分距離を詰めてシャドウメアがピウニー卿の剣の光を目指して駆けてくるのが見えた。もう1騎も軌道をこちらに向けているようだ。

スピードを緩めた猫の足にシャドウメアが追いつくのはすぐだ。徐々に歩を緩めてくるシャドウメアが、サティの身体をつつくように鼻面を下げた。サティが思い切ってそこに身体を乗せると、シャドウメアは、ぐ…と頭を起こして2人の身体をたてがみに落とす。ずるずるとシャドウメアの首に沿ってサティ達の身体は落ちていくが、さほどスピードが出ていなかったので、上手く鞍にたどり着くことができた。

再び馬のスピードが上がった。だが、獣姿のピウニー卿とサティにシャドウメアの速さはかなり不安定だ。手綱は人間サイズのもので、サティは必死でそれを口に咥え、ピウニー卿も小さな前足でそれを抱えているが、今にも振り落とされそうだ。

「こちらへ。」

隣で走らせている1騎から男の声が聞こえた。ピウニー卿がそちらに視線を移すと、目の細い大柄な男がシャドウメアに並ぶように馬

を走らせている。大きな手がこちらに伸ばされた。何者か、ピウニー卿の全く見たことの無い顔だ。だが、迷っている暇は無い。

「シャドウメア、身体を寄せるんだ。」

ピウニー卿の声に呼応するように、シャドウメアが少しずつ隣の馬と距離を詰める。その間にも、後ろからモグラネズミの集団は迫ってきている。

「3つ数えたら飛べ、サティ！」

そんなこと出来るわけがない！…サティは一生懸命ぷるぷると頭を振る。しかし、

「…そのまま鞍を蹴って手綱を放せ。受け止める。」

もう1人の男の声だ。片腕で手綱を握り、シャドウメアに触れそうなほど、もう片方の腕を伸ばしている。
ピウニー卿がサティの首元にしっかりと掴まった。

「…サティ、何が起こっても私は一緒にいる…！」

小さな自分に出来ることはそれくらいだ。失敗しても成功しても私がいる。そう言ったピウニー卿の言葉に後押しされるように、サティは意を決した。

「3…2…1…！」

ピウニー卿の声に合わせて、サティが手綱から身体を外して鞍を蹴る。カクン…と、馬から身体が離れる感覚は一瞬だ。次の瞬間には、

何者かの手にピウニー卿ごとサティの身体がすくい上げられた。そのまま男の腹に抱えられ、マントがふわりとかけられる。

２頭の馬はスピードを上げ、荒野を斜めに走り抜けた。森に飛び込み荒野から逃れるとモグラネズミの集団の軌道からも外れ、やっと助かったと認識したときには、人も馬もネズミも猫も、疲労困憊だった。

＊＊＊＊

男はモグラネズミの集団が通り過ぎたのを確認すると、ピウニー卿とサティを抱えたまま馬からそっと降りた。手近な木の根元に胡坐を組んで座ると、マントを広げる。

自分を見下ろす細い目をピウニー卿は改めて見上げた。…そして、もぞりと腹を曲げた。首と胴の境目があまり無いので、お辞儀も分かりにくい。

「かたじけない。貴殿のおかげで助かった。感謝する。」

男はピウニー卿を見下ろすと、ゆっくりと頷いた。彼はピウニー卿が話すことを、別段不思議にも思っていないようだ。ピウニー卿も、話すことが出来る…という事実を、この男に隠すのは礼に反すると思ったのだ。だからこそ、自然と騎士の一礼を取った。

やがて男の視線がサティに移った。それにつられるように、ピウニー卿もサティに視線を傾ける。

サティのグリーンの瞳が今にも零れそうなほど、大きく見開かれていた。

「サティ?」

ピウニー卿が首を傾げた。…サティの尻尾の先がトントンと動く。

「…つ、杖の賢者?」

「え…?」

ピウニー卿は、サティと男の顔を見比べる。

「杖の賢者…?」

ピウニー卿が確認するように、こげ茶の瞳を向けた。それを見下ろしながら、細目の男は頷いた。

018．いや、なんでもない

「…ということで、師匠の杖を引き取りに来たのと、私の杖が壊れたので新しいのを作ってもらいたいのです。」

思いがけず、旅の道中で杖の賢者と出会った2人は早速事情を話した。呪いがどのように解けたか…という点については、うやむやに誤魔化しておく。杖の賢者と呼ばれている男は、杖の魔術を極めているという割りに戦士のような体格で、人間に戻ったピウニー卿よりも少し背が高いくらいだった。ひどく無口でほとんど話さないため、こちらの事情を信じているのかは分からなかったが、少なくとも、サティの正体については疑ってないようだ。

サティは杖の賢者に幾度か会った事がある。理の賢者の杖は、杖の賢者が作っていて、その関係で、よく理の賢者の元に来訪していたのだ。自分が魔法使いになったころにも、杖を作ってもらった。杖を作ってもらうのは初めてで、どういう注文をつければいいのか良く分からず、材質だけ伝えた覚えがある。どちらかというと内弁慶だったサティは、無口な杖の賢者は苦手だった。ちなみに、杖を作ってもらうとき以外で言葉を交わしたことはほとんど無い。

杖の賢者に出会った荒野から1日ほど進むと、杖の賢者の館にたどり着いた。

杖の賢者の館は2つほどの工房が連結したかなりの規模の館だったが、杖の賢者のほかに人はいないようだ。いくつかの部屋があり狭くはなく、その部屋のどこにも、１ｍ～１．５ｍほどの様々な木の棒、なぜか剣や槍などの多くの武器が置かれていた。

そして現在。ピウニー卿とサティは、猫とネズミの姿のまま杖の賢者に対峙している。テーブルの上に案内され、お行儀がいいとは言えないが、案内されるまま座った。

杖の賢者は、サティの話を聞くと大きく頷いて、席を立った。部屋の片隅に置いてある1．5mほどの木の棒を手に取り、2人が座っているテーブルの上に置く。サティはふんふんと鼻を寄せ、前足でちょいとつついた。

「ナナカマドに赤い絹の飾り紐。黒水晶の根付。…確かに師匠のものです。受け取りました。」

サティが何事か呪文を唱えると、理の賢者の杖が、ふ…と消えて、一瞬だけサティの首に下がっているグリーンの石が小さく光った。サティはその様子に一息つくと、再び杖の賢者を見上げる。

「…それで、私の杖なんですが。」

サティの言葉が言い終わる前に、杖の賢者は腕を組んで首を振った。それを見たサティの毛皮がぶわと逆立ち、一瞬で退く。その様子を見たピウニー卿が、抗議の表情をネズミの顔に浮かべ、サティを庇うように立つ。

「杖の賢者殿、サティの杖は…。」

ピウニー卿の眼前で、杖の賢者が指でトン…とテーブルを弾いて鳴らした。

「休め。」

杖の賢者の細い目は相変わらず無表情だったが、その声は落ち着いていて、穏やかだった。ピウニー卿は、「ああ…」とこげ茶色の瞳で杖の賢者を見上げた。その表情を束の間見据えて、溜息を吐くように髭を撫でる。ピウニー卿は頷いて、サティを振り向いた。

「…でも！」

「サティ、落ち着け。」

ピウニー卿は、思わず声をあげたサティの前足をそっとさすった。そうだった。サティはモグラネズミの集団から逃げた後、耳も尻尾もしょんぼりと萎れ、元気が無かった。毛皮だけは浄化の魔法で綺麗にしていても、疲労を拭いさることは出来ない。サティの疲れた身体を抱き上げて運ぶことの出来ない非力なネズミの心苦しさに、ピウニー卿の胸が痛んだ。

「ここは賢者殿の言う通りだ。…いずれにしても、杖はすぐに出来るものではないだろう。」

サティががっかりと頭を落とし髭が下を向いてしまったが、それ以上強情を張るつもりはないようだった。サティは起こした身体を、お座りの格好に戻して大人しくなった。

＊＊＊＊

サティとピウニー卿は、杖の賢者の家で2日ほど滞在して身体を休めていた。出来る限り人間の姿に戻り、戻ったときには賢者の家の用事を済ませる。サティは家事を、ピウニー卿は馬の世話や剣の手入れなどをしていた。杖の賢者自身は、作業場に潜って食事の時間しか出てこない。弟子もいないようだし、1人の時は一体どうして

いるんだろうと、ピウニー卿は首を捻った。

そんなピウニー卿の疑問に、サティがさらりと答える。

「杖の賢者、奥方がいるから。」

「ええっ」

あの無口な杖の賢者に奥方がいるというのは衝撃だった。だが、居るとしたら、一体どこにいるのだろう。再び首を捻る。ただ、サティは杖の賢者の奥方には会った事が無かった。その話は師匠である理の賢者から、イヤというほど聞かされていたが。

「知らない？　杖の賢者の奥方は…。」

サティのその言葉が言い終わる前に作業場の扉がバタンと開いた。細い目の男は、サティの方を向いて口を開く。

「材質を。」

今は猫のサティの尻尾がピン…と立った。耳が杖の賢者の方を向く。杖の賢者の言う一言は短く、しかも返答のチャンスを逃すと次の機会がいつ来るかは分からないというスリリングさがあった。サティは、即答する。

「トネリコで。」

それを聞いた杖の賢者の細目がクワッ…！と見開いた。サティとピウニー卿の毛が一気に逆立つ。部屋に一気に落ちた謎の緊張感に、歴戦の戦士であるピウニー卿もさすがに動揺した。杖の賢者と見え

たことがあるだろうサティも、毛皮が膨らんだままだ。サティは思わず尻尾でピウニー卿の身体に触れた。

「雷に打たれて折れたトネリコで。」

杖の賢者が目を見開いたまま、サティをじっと見つめている。…サティも毛を逆立てまま、杖の賢者に瞳を合わせる。別に取って食われるわけではないのだろうが、取って食われそうな雰囲気が部屋の中を支配している。重苦しい。杖の材質についてピウニー卿は詳しいわけではないが、ここまで緊張感を演出する必要があるのだろうか。得体の知れない敵と対峙しているような強張りは、杖の賢者の瞳が細目に戻ったところで解かれた。

「無い。」

「え。」

「森へ。」

「…取りに行けば作っていただけますか。」

杖の賢者はゆっくりと頷いた。

「サティ、トネリコでなければならないのか？」

「ピウニー！」

「え？」

ばっ…！とサティがピウニー卿を振り向いた。サティの瞳が輝き、

ピウニー卿に触れていた尻尾が、ぱたんと元気よく動く。

「うん！　以前はアオダモだったんだけど、折れた感触だと私の魔力の負荷に耐えられないみたいだった。トネリコはアオダモに近いし魔力の蓄蔵がより強いから、一度作ってみたかったんだよね。」

サティがうっとりと話し始める。杖の賢者がなぜか、ふむふむと頷いている。

「それにね、ピウニー、雷で分たれたトネリコの木は、それだけで高い魔力の媒体になると言われているの。私が作ったら芯になる魔法の属性は全種類網羅くらいはいっときたいし、１００種類くらいは古魔法の基礎入れたいでしょ？」

「あ、ああ。なるほど…？」

「分かる？　やっぱり？　…でね、あと、元々入れてたやつには自家製魔法陣がやっぱり１５０種類くらいは入ってたんだけど、今度はもうちょっと魔法陣を頼るんじゃなくて、イメージを元に魔法が形成されるような術を形成してみたいのよ！」

「あの、サティ」

サティの熱弁にピウニー卿は後ずさった。どこかいいところでとめないと、いつまでも続きそうだ。

「そうなると、魔力の負荷がかなり杖にかかってくるの！　だから、アオダモだと若干耐えられないかなって思うのよね…。それにやっぱり、しなり具合もトネリコの方が高いし、何より柔軟なのね。柔軟っていうことは、術者のイメージに対する対応力も高いってこと

で…。」

「サティ、分かった。分かったから。…そのトネリコの木材を取りに行くのだな、私も行こう。」

「本当に？　ピウニーも一緒に来てくれる？」

「当たり前だ。サティ１人で行かせるわけにも行かないだろう。」

「ありがとう、ピウ大好き！」

サティの言葉に、収まりかけていたピウニー卿の毛皮がぼふん…と膨れた。杖の賢者はそれに気付いたが、眉を少し動かしただけである。ごろごろと喉を鳴らしながら、サティはピウニー卿の丸い身体に顔を摺り寄せる。トネリコの木の話に夢中になったテンションそのままにさらりと言ったが、サティは自分の言葉がもたらす効果は全く考えていなかった。ただただ、なんてピウニー卿は優しいんだろう！…と、サティはご機嫌だ。　残念なことにピウニー卿が期待しているような意図はその声色には無く、それが一瞬で知れてピウニー卿は複雑な気分だった。

「よし、それなら行こう今すぐ行こう。黒の森に確かありましたよね？」

サティは瞳を輝かせながら、トン…とテーブルを降りた。タタタと床を駆けて、扉の前で振り向く。

「おい待て、サティ。」

準備があるだろ準備が…と言いかけて、止まる。大柄な杖の賢者が

黙ってサティの身体をすくい上げたのだ。杖の賢者は片方の手でやすやすとサティを持ち上げ、すとんとピウニー卿の隣に運んだ。それを見ていたピウニー卿の胸が再び騒ぐ。…自分の身体が呪いによってネズミになり、満足にサティを守ることが出来ていない現状は、常に棘のように心の奥に刺さっていた。小さなネズミの身体は、しなやかなサティの猫の身体に比べてとても小さく非力に思える。ああやってサティを止めたり守ったりする手が、なぜ自分ではないのだろう。

早く呪いを解いて元の姿に戻らなければ。…ピウニー卿は髭を落しかけたが、ふる…と頭を振って、己を叱咤した。

「杖の賢者殿。…準備が出来たら、サティと共に黒の森に行ってきます。…それから、サティの杖を作ってもらっても？」

ピウニー卿の問いに杖の賢者は再びゆっくりと頷いた。そして、黙って部屋を出ていった。

サティの耳が落ち込む。ピウニー卿はそんなサティの前足を撫でた。

「部屋に戻るか。準備は明日にしよう。」

「うん…。」

…ピウニー卿がそう言うとサティは渋々返事をして、頭を低くした。だが、ピウニー卿は一瞬そこに乗るのを躊躇った。

「ピウ？どうしたの？」

「いや…。」

こんなところでつまらない意地を張っても仕方が無いと分かってはいる。ピウニー卿はサティの頭の上に乗った。自分の思いがどうあれ、乗り馴れたサティの頭の上は温かく、毛皮はふわふわとしていて柔らかい。

サティはピウニー卿が乗ったのを確認すると、トントン…とテーブルを降りて、寝床をしつらえている部屋へと戻った。

＊＊＊＊

サティは籠にクッションを敷いている寝床に入ってからも、ずっと身体を起こして窓の外を見ている。よほど杖の材料を取りに行きたいのか…と、ピウニー卿は苦笑した。

「よほど、トネリコの素材がよいのだな、サティ。」

「トネリコじゃなきゃダメ…っていうわけじゃないんだけど、どうせ作るならいい材料で作ってみたいの。…我侭かな。」

「いや、我侭ではなかろう。私も剣を作るときには、随分と我侭を言った覚えがある。杖の賢者殿もかまわないと言っているのだ。どうせなら思うままの杖を作ったほうがよかろう?」

「うん。ありがと、ピウニー。」

礼を言われて、ピウニー卿はむずがゆい気持ちになった。人間であれば照れた表情がバレたかもしれない。ピウニー卿はサティの前足に触れたまま、身体を丸くする。

「サティに杖か…。」

「何？」

「いいや。一層、サティの魔法に磨きがかかりそうだと思っただけだ。」

「…な…、そりゃ、杖があったら元通りの魔法が使えるもの。今なんて、ちょっとしか魔法使えないし。」

「そうか？」

サティの声にピウニー卿が首をかしげる。

「ピウは、剣があるじゃない。人間になってもネズミになっても使えるなんて、正直すごいと思う。」

「そうなのか？」

「そりゃそうよ、質量を変えてるのよ？　どういう仕組みになってるのか、すごく気になる。」

言われてみればその通りだ。自分の大きさに形を変えるこの剣は、確かに特殊な出自の剣ではあったが、身体の大きさに合わせて質量を変える…などという効果があるとは聞いたことが無い。だが、ピウニー卿は魔法にはあまり詳しくは無い。何故なのか…などは、あまり気にしたことが無かった。

「お前もきちんと魔法を使えているだろう。」

「でも、致命傷を与えているのはピウの剣だよ。…私、虫見るとダメだし、大きな魔物になったら私の魔法じゃ、変に魔物を刺激するだけだわ。」

それは確かにそうだった。そう幾度も無い襲撃で、大体止めを刺すか、追い払う一撃になるのはピウニー卿の剣だった。やはり、剣を刺し込み魔力を通す効果が高いのだろう。また、ネズミのサイズであっても、急所に剣を刺せば敵を動けなくすることは出来る。一方、サティの魔法は見た目は派手だが、ほとんど敵に致命傷を与えることは無い。一度、虫相手に効果的面だったことはあるが、それが精一杯。このため、サティは自分の魔法が浄化の魔法くらいしか役に立っていないことに、いつも引け目を感じていたのだ。

ピウニー卿はサティの前足を撫でてやった。

「それを言うなら、私は身体も小さいし、いつもサティに乗せて運んでもらっているではないか。」

サティは寝床に丸くなると、自分の足元に来ているピウニー卿が首元の毛皮に埋まる。ピウニー卿を前足で囲い込むと、その毛皮のふわふわを堪能した。

「でも私がもう少し小さかったらピウの毛皮堪能できるのに…。」

「サティが小さかったら?」

「そうよ。ピウニー卿と同じくらいだったら。」

ぶつぶつとサティが何事かを言い始めた。…ピウニー卿が大きかったら、ではなく、同じくらいだったら。ピウニー卿はこそばゆい気

持ちになった。

「ピウ…ひげ、ひげ揺らさないでくすぐったい。」

「勝手に揺れるんだ、仕方が無いだろう。」

「いい歳なんだから落ち着きなさいよ。」

「落ち着いておる。」

「ふーん。」

「サティ。」

「ん…？」

「人間に戻ったら…、俺はサティと…。」

…言い掛けて、ピウニー卿は気付いた。

「サティ？」

「ん…。」

サティの声はとろとろとまどろんでいる。ピウニー卿が喉元にいる体温に安心しているのか、喉がごろごろと鳴っていた。

「いや、なんでもない。おやすみサティ。」

そう言って、ピウニー卿はサティの毛皮をふかふかと撫でた。

018．いや、なんでもない（後書き）

アオダモ、トネリコ。
…元ネタが分かる方はいるでしょうか。

019. 別の存在

「大丈夫か、サティ。」

「うん。」

杖の賢者の屋敷から、1時間ほど馬を走らせたところに目的地の黒の森は存在する。

だが、黒の森には多くは無いが人を襲う魔物が生育する森でも有名だ。

魔物は討伐の対象とされているが、全てが悪…というわけではない。動物と同じで、基本的に普段は人間に危害を加えることなく大人しくしている。だが、魔物は動物とは異なり、多くの魔力を有している。そのため魔力のバランスに影響を受けやすい。人の子が魔力のバランスを崩して身体を壊したり、魔力を暴発したりするのと同じように、魔物は魔力のバランスを崩すと凶暴化してしまうのだ。魔竜のように人間を越えるほどの知性を持つ者も確認されていて、そういった存在が魔物にさらに影響を与えて別の魔物を生み出す…という事もあった。

黒の森には、杖に素材に向く植物が通常の森よりも多く、それを求めて魔法使いが出入りするため魔力がより蓄積されている。杖の賢者が出入りするたびに、その魔力を沈静化するように術を施しているらしいが、それでもさまざまな系統の魔力を持った魔法使いや冒険者が立ち入れば、それだけ魔力のバランスは崩れる。この森で魔物が凶暴化するのは仕方がないことでもあった。

先ほどピウニー卿が切って捨てた魔物も、そういった類の者だろう。今は人間になっている2人の足元には、猿の体に鳥のくちばしのような口を持った魔物が息絶えている。襲撃はそれほど多くは無いが凶悪なものが多く、ネズミと猫では苦しい戦いになっただろう。今はシャドウメアも連れてきてはいない。

ピウニー卿が足場の悪いところを通すために、サティに手を伸ばした。こういう場所を行き来するのは慣れないサティは、その手に大人しく掴まる。足場が悪く、バランスを崩しかけたが、ピウニー卿はその身体を軽々と抱き止めた。

「あ、ありがとう。」

「ああ。」

サティは、すぐさまピウニー卿から離れた。猫の時にネズミのピウニー卿を抱えるのも擦り寄るのもなんとも思わないが、こうして人間に戻ったピウニー卿に抱えられるのはこそばゆく頬の温度が上がる。

最近、人間に戻ったピウニー卿を見ているとサティの心は落ち着かない。普段は歴戦の騎士らしく（サティの目には）落ち着いている（ように見える）ピウニー卿が、時々、自分を熱っぽく見つめてくる視線も、隙あらば距離を詰めてこようとする態度も流石に気付いている。…だが、その視線の意味を計りかねて、サティ自身にそれを受け止める素直な勇気は無かった。

サティは、人の姿に戻った瞬間ピウニー卿の厚い胸板に自分の身体が落ちるのも、その身体が落ちないように逞しい腕に身体を支えられるのにも、いまだに慣れない。ピウニー卿は、最近では落ち着い

たものだ。きちんと猫の身体をシーツでゆるく巻いて人の姿に戻し、ぐるぐる巻きの状態で人に戻ったサティを支えながら身体を起こして頭を撫で、もうひとつシーツを引き寄せて自分を隠し、最後によいしょと隣にサティを降ろす。最後のよいしょ…の時など、軽々と自分の身体を横抱きに抱えるのだ。そして、早く着替えろ…と後ろを向く。一連の動作には、当初はよく見られた慌てふためいた様子など微塵も無く、一部の隙も無い。…落ち着かないのはサティだけのようで、それが悔しくもあった。ああもう、ほんっと、自分だって猫の毛皮にネズミが落ちてくるのは全然気にならないのに！

「サティ、手を。」

「え？」

「足場が悪い。」

「大丈夫よ。」

「大丈夫ではない。早く貸すんだ。」

サティは少し躊躇してみた。だが、ピウニー卿は問答無用でサティの右手を取る。その強引さにサティが、思わず身を引いたときだ。

「サティ。」

ピウニー卿が再びサティを呼び、手を掴んだまま自分の背に隠した。すぐさまサティはピウニー卿から意識を離し、周囲へと気を向ける。ピウニー卿は既に周囲の気配に耳を澄ませていた。サティを庇ったまま、剣の柄に手を掛ける。

ガサガサ…！

遠くから素早く茂みを掻き分ける音が聞こえ、それが徐々に近づいてきた。魔法の気配を感じ取ったサティは、怪訝そうに眉を潜める。魔物にも魔力の気配は感じられるが、この気配は魔物ではない。カチャリ…と、ピウニー卿が剣の柄を持ち上げた。

気配がすぐ側に迫り、茂みの揺れが目に見えるほどになった。何者の影が見える…、そう認識した瞬間。

「悪く思うなーーー！！」

ドーン！

轟音と共に足元に転がってきたのは、先ほどピウニー卿が倒した魔物と同じ種類の魔物だった。その魔物を転がしたらしき人が、同じ方角に立っている。

なびく髪は亜麻色で、片方の手にはピウニー卿が持っているものよりも一回りは大きいだろう剣を持ち、背には数本の剣を背負っていた。攻撃直後のポーズだったのだろうか。膝を曲げたままの状態で片方の足を前に突き出し、足の裏を見せたまま、顔をこちらに向けた。

「ああん？」

声は、女性の声。

ピウニー卿は剣から手を離し、まじまじと女性を見ている。サティは事態がよく飲み込めず、首をかしげていた。恐る恐る…と言った風に、ピウニー卿を口を開く。

「…貴女は、…まさか、剣の賢者？」

剣の賢者…と呼ばれた女性は秀麗な眉を潜め、切れ長の瞳でピウニー卿に視線を向ける。たちまちその表情が、驚きの色に変わった。

「そういうあんたは…おいおい、もしかして…ピウニーアかい！？」

「え？」

今度はサティが驚いた。剣の賢者…？

剣の賢者って…。

サティには、彼女が剣ではなくてキックで魔物倒してたように見えたが、とりあえず突っ込まないでおいた。

＊＊＊＊

「いやー、まっさかあのピウニーが生きているとはね。死んだっつー話しか聞かなかったからさ。」

「はあ。」

「まあ、塵になって消えた？　とか言われても…信じられるわけないよ、あのピウニーが。」

「…あのピウニー？」

あっはっは…と豪快に笑っているのはピウニー卿が「剣の賢者」と

呼んだ女性だ。くるりと豪奢に巻いた亜麻色の髪に、切れ長の瞳。少し大きく魅力的な唇。引き締まった肢体の美しい女性だった。サティはとても小さい頃に先代の剣の賢者に会ったことはある。だが、今代の剣の賢者には会った事が無い。今代の剣の賢者が女性だということは知っていたが、まさかピウニー卿とも知り合いだったとは意外だった。

「そうさ。もうこっちが恥ずかしくなるくらい熱い坊主でね。…どうしても、あたしに剣を作ってほしいってごねてさ。」

「ご…ごねてなど…！」

「ごねてたさ。あたしは、そのときまだ剣の賢者を襲名してまだ2，3年で、変な矜持っていうかねえ…自分の作る剣は屈強な歴戦の戦士に…ほら、どうせならアルザスの先代当主とかさ、そういうのに持ってもらいたかったの。それなのに、王都の伯爵家の若いペーペーの長男様に譲れなんて、笑っちまうだろ。だから断ったんだよ。」

「若い？」

サティが興味津々な顔で瞳を輝かせた。

「ああ。もう15年くらい前になるかね、なあ、ピウニー？」

「剣の賢者殿…もう、そのへんで…。」

「だけどさ、『自分は絶対にアルザスの名に恥じない騎士になる男です。ですから、貴女の作った剣で魔法剣を極めたい』って、そういうから、根負けさね。」

あのピウニー卿にそんな熱血な時代があったのか。サティが楽しげに剣の賢者の話を聞いていると、その瞳を見て、ニッ…と笑った。

「そのピウニーが、ネズミ？しかも、愛玩系の？…やだーもー、すっごい見たいわー。」

「かわいいですよ。金色の毛がふわふわしてて。」

「おい、サティ！」

ピウニー卿の顔が若干赤くなっている。普段は落ち着き払っているピウニー卿の慌てた姿を見るのは、なんとなく面白い。そんなサティを見つめていた剣の賢者は、瞳を細める。

「あんたもね、サティ？…理の賢者んところの弟子だろう？…こーんなちっちゃかったのに、いつのまに大きくなったのやら。」

「え？」

「覚えていないかい？　あたしが、剣の賢者を襲名するときに、理のじーさんに連れてこられたことがあったろう。」

「ええ？」

あははははっ…と、剣の賢者は再び笑った。サティには全然記憶に無い。…多分、４，５歳の時だったのだろう。正直、その頃は完全に封じた魔力を少しずつ解放する訓練をしていて、身体も心もつらかった頃だ。つらい修行を強いられているように思えて、当時の自分は大層無口で無愛想だった記憶しか無い。今にして思えば、可愛くない子供だったに違いない。何か粗相でもしたのかと、心配になっ

た。そんなサティの表情を汲んだのか、剣の賢者は優しい微笑みになって、大きな手でサティの頭を撫でた。

「あんときもたいした子供だったけれど、立派になったじゃないか。理のじーさんもさぞ鼻が高いだろう。」

「そ、そんなことありません、私なんてまだまだで。」

「そんなことはない。」

ピウニー卿が被せるように即答した。

「サティは、古の魔法にも通じているし、魔法陣も術式も多く生み出せるのだろう。」

「でもっ」

「まあまあ、あまり見せ付けないでくれよ。」

なんですかそれどういう意味ですか!?…とサティが反論する前に、ニヤニヤ笑っていた剣の賢者は表情を引き締めた。

「…で、2人はトネリコの木を見つけたのかい?…確かにこの奥に、トネリコが余っていたと聞くが…」

「あ。」

「ああ。」

ピウニー卿とサティは顔を見合わせた。…2人には時間制限がある

のだった。急いで立ち上がる。

「こうしている時間は無いのでした。…剣の賢者殿、恐れ入りますが私達は…」

…ピウニー卿が一礼する。その慇懃な態度に、苦笑しながら剣の賢者は言った。

「いや、それは構わない。…あたしも一緒にいくよ。」

「え？」

「なんだい、文句あるのかい？」

「…い、いえ。」

文句などはあるはずが無い。心強い味方だった。…ただ、若干その迫力に押され気味のピウニー卿と、なぜか剣の賢者を憧れの瞳で見つめるサティとは、少しばかりテンションの温度差があったのは、否めない。

＊＊＊＊

「…ふむ…それで、ネズミになってしまった後も、剣が使えている…となあ。むう…。」

剣の賢者と共に森の中を進みながら、話はピウニー卿の剣が、体のサイズに合わせて伸び縮みする…という話題になった。やはり剣の賢者は自分の作った剣が気になるのだろう。だが、そういった事象は聞いたことが無い…と首を捻る。

「剣を構成する物質の網目の中に魔力が入り込んで、それらが作用しているのではないかと踏んでいるんですけど。」

サティの言葉に、うーん…と唸った。

「確かに、魔法剣の場合はそういうこともありうるがなあ…。だが、あれは私が最初に作った魔法剣用の剣だ。ネズミと人間くらいのサイズに伸縮するとなると、素材の比率を極限まで抑えた上で、残りは自身の魔力を最初に投入して…できるかどうか。…そもそもあの剣は、そんな風に作ってはいない。使いこなしている内にピウニーの魔力が素材に浸透した…としても、ピウニー自身の魔力はそれほど多いわけではないしな。…うーん」

「…ということは、別の魔力が介在している、ということですか？」

魔法剣というのは、その名の通り、剣に魔力を帯びさせる魔法だ。込める魔力によって、耐久力を高めたり、殺傷能力を上げたり、属性を付けたりする。ピウニー卿の場合は、呪文不要で魔力を剣に通し、殺傷能力を上げるという戦法を得意としていた。

魔法は、通常、金属との相性が悪い。魔法や魔力という柔軟な力に対応するには、頑なで頑固な素材だからだ。魔法使いが金属製の鎧を身に付けないのは、そういう理由もある。そういう相性の悪い金属を魔法の媒体にしよう、というのが、魔法剣という研究だ。魔力の鎖によって素材同士を結合させることによって、その網目にさらに魔力を注ぎ込むのが基本だ。金属を打つときに特殊な魔力を注ぎ込んだり、あるいは、比較的柔軟性の高い素材で作った剣に魔力を少しずつ込めたり、手っ取り早く魔力をチャージした魔法石を柄に埋め込んだり、様々な手法がある。注ぎ込む魔力は、金属を媒体としやすい属性が必要だから、個人の資質も重要だった。物質の隙間

に魔力が介在しているから、その比率によっては大きさが伸縮することも可能性としてはある。武器の形状を変える魔法も存在する。

ピウニー卿が手にしている剣は、剣を打つ段階で剣の賢者の魔力を注ぎ込んでいる。それをピウニー卿が使い込む内に、魔力が入れ替わっていく計算だ。だが、それと言っても、騎士剣から針までのサイズに変わる柔軟性を帯びるなど、聞いたことがない。剣の賢者は立ち止まり、一番後ろを歩くピウニー卿を振り返った。

「おい、ピウニー、ちょっと剣を見せてくれないか？」

「分かりますか？」

「さあなあ。…私としても、そういう話はあまり聞かない。…だが、手にとれば、作ったときと今の剣と、違いは分かるさ。」

ピウニー卿は頷いて、剣を抜いて柄を渡した。剣の賢者はそれを受け取り、まじまじと見つめる。

そして、見つめる表情が徐々に険しくなってきた。

「ああん…？」

物騒な声を上げる。

「どうしました？」

何かあったのかと、ピウニー卿が眉を潜めた。

「どうしたも、何もないよ、これ。…あんた、この剣で何をやった

んだい。」

「…どういう意味ですか。」

「この剣に込められた魔力は、ピウニーのもんじゃないね。そっくりそのまま、別の存在に入れ替わってるよ。」

「別の、存在？」

「別の魔力」…とは言わずに「別の存在」…と剣の賢者は言った。…全員の足が止まり、その言動に注視する。サワ…と風が吹いて、周囲の気配が変わったような気がした。その雰囲気にピウニー卿がぴくりと眉を動かすものの、魔物の気配は無い。それでも自然、サティの背中を包み込むような位置に立つ。

「そうだ。別の存在…心当たりがあるんじゃないか？…ピウニー。」

ピウニー卿の表情が硬くなった。サティにも分かる。ピウニー卿の剣がこういった状況になったきっかけ。いや、そもそもピウニー卿の身体をネズミに変える大きな呪いをかけた、あの存在。

「ウィロー・ナ・ムラン・イアディ＝マハ・マハジューレ…？」

…サティが思わずその名を口にした、瞬間。

グオオオオオオオオオン！！

「くっ…！」

剣の賢者が持つピウニー卿の剣が咆哮し、その手を離れた。咄嗟に

ピウニー卿がサティの身体を抱き寄せ、セピア色の髪を抱える。剣の賢者の手を離れた剣は、地面に勢いよく突き刺さり、その剣を中心に今まで感じたことの無い魔力が渦巻いた。

…いや、ただ1人、ピウニー卿は感じたことのある魔力だった。これは…。

「…魔、竜か…？」

『いかにも。』

グルル…と唸り声にも似た、重々しい声が響く。

『いかにも、我はグラネク山の魔の竜。ウィロー・ナ・ムラン・イアディ＝マハ・マハジューレ！』

バキバキと周囲の木をなぎ倒し、再び大きな咆哮が轟く。

3人の眼前に現れたのは、

狼くらいの大きさの竜？…だった。

０２０．魂が抜けかかった

『いかにも、我はグラネク山の魔の竜。ウィロー・ナ・ムラン・イアディ＝マハ・マハジューレ！』

現れたのは、狼ほどの大きさの竜？だった。その竜？の身体は、黒光りする鱗に覆われ翼は厚い。前足には鉤のように鋭く曲がった爪が五爪。足はどっしりと地面を踏みしめ、ふしゅう…と吐く息は焦げ臭く、魔力が満ちていた。だが、竜としては…なんというか、ピウニー卿の記憶にあるそれよりも遥かに小さい。全員がその存在を見下ろせる位に小さい。

竜？は、微妙な空気を読まず、むふうーと鼻から息を吐いた。魔力はとても濃く、油断なら無い脅威なのは分かる。だが恐ろしい雰囲気はなぜか感じられない。本当に、これがオリアーブ国の国王を立ち上がらせ、ピウニー卿の身体を呪った竜なのだろうか。

『ふっふっふっ…驚いて声も出せぬか。…さもありなん。ピウニーよ、そなたのことはずっと見ておったぞ。妙ちくりんな虫を斬ったあの剣筋は見事であったな。しかし、人参のグラッセは半分に分けるべきであった！』

「え…あの。」

もはや記憶の彼方にあった人参のグラッセのことを蒸し返され、ピウニー卿の表情がますます微妙なものになった。

『そしてサティよ！』

「あ、え、は、はい。」

『そなたは、よくぞ我の名を呼んだ。さすが古の魔法に精通しておる、食えぬ魔法使いよの。』

「はあ。まあ。」

…確かに、サティはオリアーブ王国に古くから住まう魔物の名や、固有名詞、伝説なども研究の一環に取り入れている。魔竜の名前もそういう伝承によって伝え聞いたものだ。

『そなたが魔力を込めて名を呼んでくれたおかげで、我は剣の形から自分を解放し、こうして元の姿に戻ることが出来たのじゃ。礼を言うぞ。』

「元の姿…？」

怪訝そうな声を上げたのは、剣の賢者だ。元の姿…というのはありえない。せめて、この５０倍くらいは大きくなければ、元の姿とはいえないことくらい誰にでも分かる。だが、そんなことはお構いなしに、竜？はふんぞり返った。

『そして、そなたは剣の賢者じゃな？　先ほどから聞いておったわ。そなたが作った剣は我の魔力にも耐えうるほど筋のよい剣であった。だからこそ、我は剣が吸った血と魔力に己を閉じ込め、こうして再び大地と森と空の下に、復活することができたのじゃ！！』

グオオオオン！！

竜？は雄たけびを上げた。天に向かって息を吐けば、それは青い炎

のブレスとなって辺りの温度を上昇させた。咄嗟にピウニー卿がサティを背に庇い、剣の賢者が身を低くして、背に負った武器に手を掛ける。その様子を見て、むふん…と竜?は笑った。

『心配せずともよい。…我は、そなたらに害を為そうとは思わぬ。』

サティは瞳を凝らした。…自らの内にある魔力に集中し、目の前の竜?の魔力を読んでみようと試みる。竜?の言うとおり、禍々しいものは感じられない。とても猛々しい濃い魔力だが、言い換えれば清浄で力強い。それに…。

「剣に己を閉じ込め…って、どういうこと?」

我に返ったサティの、至極まっとうな質問に、竜?はグオオオンと再び咆哮を上げた。
そして、呆気に取られている3人に、己の身の上を話し始めたのである。

＊＊＊＊

グラネク山に住まう魔竜はもともと、知性の高い存在だった。オリアーブ王国の建国と同じくらい、古くからグラネク山に住まい、大人しく、人に危害を加える事は無かった…という。そもそも魔物という生き物は、一部にはもともと凶暴なものもいるが、動物と同じで、魔力のバランスを崩しさえしなければ、他の生き物になりふり構わぬ害を加えるようなものではない。魔竜ももちろん例外ではない。そして、知性が高いゆえに、魔力のバランスを崩さぬように生きる術も心得ていた。グラネク山の山頂で、静かに鉱石を食べて生活していたのだ。

だが、ある日、そこに1人の魔法使いが訪ねてきた。

その魔法使いは魔竜が大人しいのをいいことに、この竜に呪いをかけようとした。もちろん魔竜も果敢に応戦し、呪いに抵抗した。だが、最終的には魔法使いが勝利したのだ。なぜならば…。

『彼奴は、我の愛しい眷属達を人質にしたのじゃ…。』

「眷属？」

『いかにも。グラネク山に住まうワイバーンや蛇たち。我が魔力を調え、人に害を為さぬよう、グラネク山の魔力の均衡を守るようにしてやったものどもよ。哀れなその子らは、あの魔法使いによって魔力を乱され人を襲うようになった。人であれ何であれ、襲われて戦うのは摂理じゃ。我も文句は言わぬ。だがな…、それがあの魔法使いによって歪められた摂理だと思うと口惜しゅうて…。』

サティがピウニー卿の服の裾をぎゅ…と掴む。複雑な思いを抱えたピウニー卿は、声を低くした。

「その、呪いとはどういうものなのだ。」

魔竜の話によるとその呪いは、魔力の流れを止めることにより、己の身の魔力の全てを魔竜の意識から切り離す呪いだった。このため、魔竜は自身の魔力を自身で操ることが出来なくなった。

魔竜は「魔」の「竜」だ。魔力と肉体のバランスによって知性を保つ。他の魔物が凶暴化する程度の魔力の乱れならばどうということもないが、魔力そのものの流れが止まれば流石の魔竜の理性も狂った。

魔力のバランスを失った魔物は人を襲う。竜とて、それは同じだ。理性という咎を奪われた魔竜はそれでも、人を襲わぬように己の内で荒れ狂う破壊衝動と戦った。その苦しみは、近隣の村を焼き、旅人を追い払った。最小限の被害に食い止められたのは、魔竜が最後の一線まで己の衝動と戦っていたからだろう。…だが、徐々に疲弊してきた。もう少しで自分の理性は完全に瓦解し、問答無用で国を焼き尽くす竜に成り果てる。そんなときに、ピウニー卿一行がやってきたのだ。

魔竜は歓喜した。

己の苦しみを断ち切る勇敢な人間達がやってきたのだ。これ以上の喜びはなかった。

だが、破壊衝動が収まったわけではない。魔竜とピウニー卿らとの戦いは熾烈を極め、人間の剣は魔竜の血を吸い、人間の身体は魔竜の吐く息で焦げて牙に傷ついた。それでも、最後の決着の付く時が来た。ピウニー卿の剣が魔竜の喉笛を捕らえ、切り裂いたのだ。これで終わる。それぞれの思惑が全く別のものだとしても、戦いに終止符が打たれる。魔竜は安堵して、地面に倒れる。

…しかし、それだけでは終わらなかった。

魔竜の断末魔の咆哮の凄まじさは、己を蝕む呪いを吐き出した。

死の瞬間、その咆哮によってその呪いの楔が吐き出され、周辺の生ける者全てに降りかからんとしたのだ。

いち早くその気配に気付いたのは、ピウニー卿だった。彼は、死の咆哮を上げる魔竜の眼前に剣を構え、竜にも負けぬ雄たけびを上げてその呪いを全て受け止めたのだ。魔竜は死に行く中で、ピウニー

卿の意志に気付いた。この男は、他の人間に…生き物に、自分の上げる咆哮が届かぬように受け止めている。ならば…と、魔竜は、自らの血を吸ったピウニー卿の剣へと己の魔力を全て注ぎ込んだ。己の肉体の一部と魔力さえあれば生き残ることができる。この勇敢な騎士を死なせるには忍びない。魔竜は最低限の力で生き残り、この哀れな騎士を助けようと心に決めた。

耐え切れぬかと思ったその剣は、魔竜の魔力に耐えた。こうして、魔竜はピウニー卿の剣が吸い込んだ血を自分の肉として、…つまり、ピウニー卿の剣を構成する魔力そのものとなって生き延びたのである。

たった一つだけ、予想外のことを残して。

呪いを全て受け止め死んでしまったかと思ったピウニー卿は生きていた。死なば、己と同じように剣に取り込み何らかの機会を与えてやろうと思ったのだが、予想外に、元気に生きていた。

…ネズミの姿で。

『そこで、我は己の姿をネズミの姿に合うように変化させて、この男の側におったのじゃ。』

「え。」

魔竜はピウニー卿の剣に浸み込んだ血に姿を変えた。そしてその血は剣を構成する素材そのものに溶け込んでいく。血を使って己の姿を戻すには、己の名を知っている人間に呼び戻される必要がある。魔竜の名前は古の魔法語だ。名前そのものが魔竜を留める力で、術式となる。

『剣が無いと困るだろうと思ってな。…サティよ、お主に出会い、その呪いが中途半端に解けたのには驚いたぞ?…おかげで、剣の大きさを調整するのが大変だったが、なかなかに上手くできておっただろう。』

「中途半端…?」…と剣の賢者が表情を動かした。サティは久々に呪いを解いたきっかけを思い出して、いたたまれない気分になる。

1人、心が落ち着かない人間が居た。

くかか…と笑う魔竜の言葉に、ピウニー卿は愕然としていた。側に居た…というのはどういうことなのか。この話が本当であれば、今までずっとサティと2人で会話してきた…というより、独り言とかも全部筒抜けだった…ということか。ああ、そういえば人参のグラッセのことを知っていたし、そうなれば、あんなことやこんなことまで知って…いるのか…!?

ピウニー卿の魂が抜けかかった。

『安心せい、ピウニー。そなたのプライベート的なところは、我は見ておらぬ。』

「プライベート的な?」

サティがすぐ隣のピウニー卿を見上げる。

ピウニー卿の魂は抜けていた。

『だから見ておらんというのに。』

＊＊＊＊

「それにしても…私は一体何ということを…。」

魔竜の性格はともかくとして、邪悪な存在ではない竜を討伐してしまった…というのは、ピウニー卿に衝撃を与えたようだった。確かに、国の凶悪化した魔物を討伐する任に着いてはいたが、元来正義感の強い男である。害為す魔物は倒してきたが、そうではない魔物には手を出さないように徹底していた。魔竜が呪いによって暴れていたとはいえ、邪悪な存在ではなかったことに強い罪悪感を覚える。魔竜はそんなピウニー卿に、グルル…と吐息を吐いた。

『気に病むな。ピウニー。そなたは我を救ってくれたのじゃ。そなたらが我を倒さなければ、我は人であろうと眷属であろうと、命果てるまで見境無く襲い、燃やし尽くしておったじゃろう。』

「しかし…私のせいで、そのような姿になってしまったのではないか？」

『身体が小さいことか？』

魔竜の金色の瞳が細まった。

『ピウニーに相見えたのが我の本性だが、我は魔力を取り戻しさえすれば大きさはいくらでも変えられるわ。幾ばくかの休息は必要だが、剣より復活した今ならばそれほど経たぬ内に戻れる。そなたとて、姿かたちが変わってしまっておるのじゃ。ピウニーよ、もし我に赦しを請いたいというのならば、我らをこのようにした魔法使いを探せ。恨みを晴らし、この炎で骨まで焼き尽くしてくれようぞ！』

魔竜はそういって、グオオオオオオオオ！…と一際大きな咆哮を上げた。

…魔竜に呪いをかけた魔法使い…。一体誰が何の目的でそのようなことを。それに魔竜の言うことが本当であれば、魔竜の魔力を断絶させた呪いが、ピウニー卿の姿を変えた…ということになる。魔物の理性を狂わせて、人間の姿形を獣に変える呪い。魔力というのは感情や自分の力に密接に関係していて、その関係性はいまだに完全に解けてはいない。…魔力の流れを止めるだけでなく、人としての意識下から切り離す…。人の姿を維持できなくなる…？　これは自分達の呪いを解く鍵になるかもしれない。悶々とサティが考え込んでいたが、それを払拭するように剣の賢者が口を挟んだ。

「ああん？…てぇことは、魔竜とピウニーは和解した、ってことになるのかい？」

『それもよかろう。人の子の友ができるというのも、悪くない。』

まんざらでもなさそうな魔竜はふしゅうと息を吐いた。やがて魔竜を囲む魔力が濃くなり始める。魔竜はバサリと翼を広げて宙に浮いた。巻き起こる風に、その場の3人が眩しげな表情になる。

『ではさらばじゃ、ピウニー卿、サティ、剣の賢者よ。我の炎が必要であれば、この名を唱えよ。』

『ウィロー・ナ・ムラン・イアディ　＝　フロット・フォン・ド・ラーゲ・ベネカ・イェズ・マーレ・マハ・マハジューレ』

『オウィクーブ・オーン・アナクーユ』

魔竜は自らの魔力を呼ぶ名と、その吐息を召喚するための魔法語を唱え、大空へと飛び去って行った。
天を仰いだ剣の賢者が言った。

「長っ」

０２１．プライベート的なって何？（前書き）

※戦闘シーンがあります。

021．プライベート的なって何？

ひとしきり語ったあと、天へと飛び去ってしまった魔竜を見送りながら、ピウニー卿はため息をついた。あのように言われても、やはり心の中では割り切れないのだろう。魔竜の飛び去った方向を見つめるピウニー卿の横顔を、サティはそっと伺った。ふわふわの小さなネズミの時とは違い全く可愛くないが、整った横顔は力強くて凛々しい。無造作な無精髭も、硬そうな首筋も、この人が自分とは全く異なる男という生き物なのだということを思い知らされる。

そんな横顔を見ながらサティは考える。…ピウニー卿と魔竜との戦いの様子を、初めて聞いた。魔竜の最後の咆哮を防ぐ為に、自分を犠牲にしようとした正義感の強い騎士。それがピウニー卿。よく考えてみれば、「竜殺しの騎士」という2つ名で国王の信頼も厚い、武家の名門の長子なのだ。…この旅が終われば、この人も再びそういった戦いに戻るのだろうか。そうなれば私も元通り理の賢者の元で弟子生活に戻るし…、そうか、離れることになるのか。一緒にいて当たり前みたいになってたから、そんな事態など考えたことも無かった。…それに、何よりも…。また、己の正義感に従ってこの人は戦いの最中に危険な真似をするのではないだろうか。自分のいないところで？…複雑に絡み合う思いがサティの胸に一気に降りてきて、思わずピウニー卿の腕を掴んだ。

「サティ？」

腕を掴まれたピウニー卿が、我に返ったようにサティを見下ろした。

「どうした？」と首を傾げる。どうした…と言われても、上手く言葉に出来るはずがない。困ったようにうつむいたサティは、誤魔化すように全く別のことを答えた。

「…ート、って。」

「ん？」

「プライベートって何？」

「え。」

「魔竜の言ってたプライベート的なって何？」

一瞬、魂がさようならしかけたが、そこはさすがに騎士たるピウニー卿。我に返って首を振る。

「何も無い。そこを蒸し返すな。」

「蒸し返してはいないよ。」

「気にするな。」

「気になる。」

ねえねえと腕を引いて首を傾げてみせる。精悍な顔が慌てふためき、上目遣いのサティに気圧されるように仰け反っている。そんな2人に、こほんと咳払いが聞こえた。

「なあ、あんたら、こんなことしている場合かい？　もうちょっと進めば森の端だ。崖がある。トネリコが生えてるのはその手前くらいだろう。気をつけて行くよ。」

剣の賢者の声に、ピウニー卿とサティは顔を見合わせた。

「そうだ！…早くトネリコの木を見つけるぞ、サティ！」

キイィイイキィィィ…。

話題が逸れたことに安心してピウニー卿がサティを振り返ったそのとき、奇妙な声が聞こえた。ザア…ッ…と再び森の木々が震え、魔竜の魔力とは別種の…今度こそ、明らかに攻撃の意志を持った特殊な魔力の気配がする。ピウニー卿はサティを背に庇い、剣の賢者は自分の愛剣の柄を掴む。

茶色の毛皮に虎のような太い足、顔は醜悪な猿で、揺れる尾は蛇…放つ力はどうみても魔物であろう生き物が、３人の眼前に姿を現した。

「…ヌエ、か。手強いな。」

放つ魔力は雷を呼ぶ…といわれている、珍しい魔物ヌエ。普段は滅多に人の前に姿を現すことの無いその魔物は、いざその魔力が攻撃に回れば脅威だ。そして、どう見ても、眼前の魔物が大人しいとは思えなかった。大きさは馬より一回り大きいほどはあろうか。

「来るぞ…。サティ下がれ。」

「でも、ピウニー…。」

「いいから！」

キイイイイイ！！

ピウニー卿がサティを一歩下がらせたと同時、鳴き声を上げてヌエが跳躍した。ピウニー卿は腰の剣の柄を握…。

剣が無い（まさかの）

「……くそっ、魔竜か！あの魔竜か！…私の剣がーーーー！！」

ピウニー卿の咆哮が森の中に響いた。魔竜が復活したことによって、ピウニー卿の剣は跡形も無く、消え失せたのだった。

＊＊＊＊

ピウニー卿はサティの腕を引っ張り身体を木に押し付けるように庇う体勢を深くすると、腰の後ろに装備していた短剣を抜いた。魔力を送れば折れてしまうだろうが、一撃分くらいは保つだろう。一気に引き抜き、眼前に構える。

大きいために動きの鈍いヌエの一発目は逸れる。だが、2発目を狙うヌエは真っ直ぐピウニー卿を見ていて、キキィ…と小さな鳴き声を上げている。ヌエの頭が下がり、蛇の尾がこちらを向く。

キキッ…キイイイイアアアアア！！

跳躍！

…ピウニー卿が一歩踏み出し、ほとんど体当たりの体勢でヌエの前に踊り出る。

「悪く思うなーーーーー！！」

ドーン！

ピウニー卿の短剣が届くよりも前に、ヌエの横腹が衝撃を受けて胴体が吹っ飛んだ。衝撃の源には、登場したときと同じ蹴りの構えを取った、剣の賢者。

「剣無しで何やろうってんだい。ピウニー、これを使いな！…魔法も使える。」

「かたじけない！…サティ、お前は向こうへ。」

剣の賢者は背負った剣の一本を鞘ごとピウニー卿に向かって投げた。それを受け取ると短剣を元に戻し、ピウニー卿はサティを剣の賢者の方へと押しやる。すぐさま鞘から剣を抜いた。

「ピウニ…！」

剣の賢者もピウニー卿の側に来て、サティを背に構える。杖の無い自分がもどかしく、サティは唇を噛んだ。…だが、サティは思い当たって顔を上げる。杖、あるわ。一本、世界で一番扱いにくいヤツが。…自分の魔力に適合させていない他人の杖を使うのは、基本的に過剰なバランスを生むか、まったく力が足りないかのどちらかだ。そもそも、杖に封じているオリジナルの魔法は呪文が分からなければ使えない。が、サティが思いついた杖には、サティも知っている呪文も込められているはずだった。魔力のバランスが心配だが、贅沢は言っていられない。

＜アーイェク・オ・イラウォート・オ・イェート＞

（理を司る賢者の杖よ）

その魔法語を理解した剣の賢者が、ハッと顔を上げてサティを振り返る。

「おいおい、サティ、それは…。」

「…サティ？」

怪訝そうなピウニー卿と、剣の賢者、2人の言葉を無視して、サティは呪文の続きを唱えた。

＜イハシュ・オ・ト・グレン！＞

（緑石より出力せよ！）

サティが首から掛けているグリーンの石が光り、その眼前に現れたのは、ナナカマドの木で出来た理の賢者の杖だ。サティが杖を掴むと、バチ…と小さな魔力が弾ける音がした。チクリと手のひらに痛みが走るが、掴めないほどではない。

「うっわ、師匠の杖、バランスわる。」

「サティ、下がっていろと…。」

「ピウ、私も一応魔法使いの端くれなんだから、バカにしないで。」

…どこかで聞いたことのあるような台詞に、ピウニー卿は眉を潜める。

「…バカになどしておらん。だが、」

「来るよ！…サティ、あんたその杖使う意味、分かってるんだろうね。」

「すみません、2撃目のチャンスを無駄にして。…援護に徹します。」

「聞いてるのかい！」

剣の賢者が構える。…ピウニー卿は、相変わらずサティの様子が気になるようだ。だが、腹を蹴られたヌエが起き上がり、頭を振ってこちらを睨むのを見て、意識をそちらに向ける。

「分かってます。」

剣の賢者の言葉に、サティは頷いた。師匠の杖のバランスが悪いのは…

キィイイイイイイ！！

起き上がったヌエが跳躍する…と思った瞬間、天に向かって吼えた。剣の賢者とピウニー卿が地面を蹴り、それに重なるようにサティが呪文を唱える。

＜オグウィーブ・ネツァナク・オ・アーラク・ウォハーマ！＞

（魔力が生み出す力より完全なる防御！）

バチバチ…と、指が焼け付く。唱えたのは魔力に対する完全防御だ。座標はピウニー卿と剣の賢者、そして自分。サティは自分の身体から魔力が吸い取られるように一気に無くなるのを感じる…不味いな、

と思った瞬間、ものすごい脱力感が身体を襲った。師匠の杖のバランスが悪いのは、サティの魔力を超える…国でも最も上質の魔力に適合した杖だからだ。下手に使ったら魔力が一気に放出されて、さらに体力が魔力に置換される。自分の魔力が完全に戻っているならまだしも、3分の1しか使えないサティにとって、この杖を使うということは確実に体力を削られることを意味する。だが、それを悟られないように、サティは杖で身体を支えた。

ヌエの咆哮は、魔力の雷を呼んだ。細かい雷の矢が無差別に降り注ぎ、周辺のいくつかの木が音を立てて割れる。だが、3人の身体は無傷だ。魔法の効果を受け、剣を構えた2人は雷を無視して一気にヌエに距離を詰めた。剣の賢者は前足の付け根を、ピウニー卿は身体を低くし喉下を狙う。ヌエは身体をよじり、ピウニー卿の斬撃をかわしたが、剣の賢者の一撃が腹を掠め、ピウニー卿は避けたヌエの動きに合わせてさらに斜めに踏み込んで身体ごと剣を押し付けた。

ギイイイイアアアアア！

耳を塞ぎたくなるような鳴き声。ヌエは自分の身体にピウニー卿の剣を刺したまま、頭を振り上げた。ピウニー卿は剣から手を離さない。振上げられるままに身体を翻し、ヌエの背に掴まると、刺さった剣に魔力を込める。剣の賢者はヌエの後ろ足を斬り付けると、再び剣を構え直した。

後ろ足と肩を傷めてガクンと揺れたヌエは、キキィィ…と涎を垂らしながら…、

…サティを、見た。

再び跳躍！

「サティ！」

「…きゃ…！」

急に大きく揺れたヌエの背で、突きたてたままの剣を握ってピウニー卿は身体を支える。思い切り剣を引いてダメージを与え、ヌエの突進のスピードが落ちたことが幸いした。バランスを崩して後ろに倒れたサティは、襲い掛かってくるヌエに向かって杖を横に倒して突き出し、防御の構えを取る。＜オグウィーブ！＞（防御を！）…必死に放った呪文は短いが、杖の方針によって、込められる魔力と威力は最大級だ。防御の魔力に弾かれて、ヌエが後ろに大きく弾き跳ばされる。

「ピウニー、耳の後ろが急所だ、そこを狙いな！」

剣の賢者は叫びながら倒れたサティの下に駆け寄り、その身体を庇った。剣に掴まり揺れを堪えたピウニー卿はもう片方の手で短剣を抜き、…ヌエの耳元に向かってそれを突き立て…短剣が崩れ去るほどの魔力をそこに込めた。

022．頬に触れた優しい温もり

キィィィキィッィィ！！

ヌエの放つ鳴き声の様相が変わった。恐らく最期の叫び声を上げながら、ヌエは走り始めた。

「やったか…ピウニー？…おい、ピウニー？　どこだ、…待て、そっちは…」

剣の賢者の表情が曇る。ヌエの背にさきほどまで見えていたピウニー卿が…居ない。それに気付いた瞬間、剣の賢者の脇を小さな生き物が飛び出した。

「ピウニー！」

「サティ、ダメだ、来るな！」

来るなって言われて誰が躊躇うか、バカピウニー！
サティは、トン…と杖を踏むと、呪文を唱えた。魔力の枯渇など、かまってはいられない。

＜エボートトゥ・イラウーフ・オ・アダァーラ・サティ！＞
（サティの身体よ、重力から離れ跳躍せよ！）

猫の小さな身体がさらに軽くなり、まっすぐに目的の方向へと跳躍する。目指す方向には、ヌエの身体から落下するピウニー卿だ。

ぱく！

跳躍したサティは、小さなネズミの身体を見事キャッチする。眼下には落下していくヌエの身体。重いヌエの身体は刺さった剣と共にすごいスピードで落下していき、あっというまに崖下へと見えなくなった。

…崖下。

崖下？

「サ…サティ…！」

「……～～～～！。」

落ちる…。完全に落ちる。いや、もう落ちてる。ゆっくり落ちてる。魔法の力で軽くなっているため、ゆっくり…だけど確実に落ちてる。…やばいやばいやばいやばいやばい、岸に！　岸に到達しなければ！…サティがピウニー卿を咥えたまま、じたばたと（猫だが）犬かきに挑戦した。だが、とても岸には到達できない程度に…落ちていく。ああ、これは…落ちる。全員が認識した、そのときだった。

グオオオオオオオオオオオン！！

巻き起こる突風、満ちた魔力。

比喩表現ではなく地形的な意味で、崖っぷちの剣の賢者の眼前を何かが横切った。この咆哮、この魔力は。

がしっ！

「…魔竜か？」

剣の賢者が眩しげに瞳を細めて、その魔力の源を見定める。剣の賢者の側に降り立ったそれは、前足で掴んだ何かを、よいしょ…と地面に置いてこう言い放った。

『いかにも、我はグラネク山の魔の竜。ウィロー・ナ・ムラン・イアディ＝マハ・マハジューレ！』

先ほど聞いたばかりのくだりが再び繰り返される中、足元では、金色のネズミとセピア色の猫が毛皮を膨らませてゼエハアと息をしていた。
それを見ながら剣の賢者が思わず言った。

「戻ってくるの早っ！」

…いや、ありがたいけど！

＊＊＊＊

「…魔、魔竜、助かった。礼を言う。」

魔竜はやはり狼程度の大きさだった。魔竜はふしゅうと鼻息を吐く。ニマリと瞳を細くした。

『礼には及ばぬ。山へ帰ろうかと思ったのじゃが、伝え忘れたことがあってな。サティは大丈夫か？』

「サティ！」

ふんぞり返った魔竜の言葉はほぼ聞かず、ピウニー卿はぐったりとしているサティの側に駆け寄った。その顔の毛皮にそっと手を埋めて撫でてやる。

「サティ、大丈夫か？」

「う、ん…大丈夫。」

「…理のじーさんの杖みたいな、変態杖使うからだよ、ったく…。それにしても、あー…本当に猫とネズミになるんだね。可愛いもんだ。」

弱々しく返事をしたサティの背を、剣の賢者が撫でる。こげ茶色の丸い瞳で剣の賢者を見上げるピウニー卿に、剣の賢者は頷いた。

「魔力使いすぎたんだよ。家で少し休んで行きな。ピウニー、あんたの剣もどうにかしないとね。」

「しかし、杖の賢者のところに行かねば。」

「ああ、それなら…。」

「ピウ…？」

剣の賢者が何かを言いかけたが、自分を呼ぶ弱々しい切なげな声にピウニー卿は顔を摺り寄せた。

「どうしたサティ。」

「…を。」

「なんだ？」

「ヌエが雷落としたときにトネリコ割れたからそれを…。」

「ああ、分かった…おい、サティ、大丈夫か？　サティ？」

グリーンの瞳を閉じて、耳がしょんぼりと寝てしまったサティをそっと揺する。気を失ってしまったようだ。ピウニー卿はサティの口元をぽんぽん…と小さく叩いて、剣の賢者を振り返った。

「剣の賢者殿…。」

「ああ、心得た。ちょっと待ってな。」

剣の賢者は立ち上がり、先ほどまで自分達が戦っていたところへと去っていった。それを見送りながら、ピウニー卿はサティの喉元のふわふわした毛皮を撫でている。

『ところで、我の話をしてもよいか？』

魔竜は竜ゆえに、空気が読めなかった。

＊＊＊＊

「あんた！…今帰ったよ！」

「…！」

サティの身体を抱え、ピウニー卿を肩に乗せた剣の賢者は真っ直ぐに杖の賢者の館に帰っていった。途中、シャドウメアを拾い、魔竜を連れての登場にも相変わらず杖の賢者は無表情だ。剣の賢者は魔竜の前足にサティを預け、肩のピウニー卿を摘んでその上に置くと、杖の賢者へと抱きついた。杖の賢者は剣の賢者を抱き寄せ、くるくる巻いた亜麻色の髪を愛しげに撫でている。

「…え？」

その様子にピウニー卿の髭がピーンと張った。確か、サティが「杖の賢者は奥方がいる」と言っていなかっただろうか。…ということは、

「もう知ってると思うけど、あたしの旦那の杖の賢者だよ。」

剣の賢者は、幸せそうに笑った。

＊＊＊＊

シーツを掛けられてすこやかに眠っている猫の口元に、ネズミが顔を寄せている。
次の瞬間、ピウニー卿の目の前に、人の姿に戻り、長い睫を伏せて眠るサティの顔があった。

あれからサティはずっと眠っている。体力が落ちているだけだ、少し眠ればすぐに回復する、心配ないと剣の賢者は言っていたが、それでもピウニー卿は心配で目が離せずにいた。どのみちネズミの姿で出来ることは少ない。人間に戻ることが出来るまで側に居ていいと言われたので、遠慮なくサティの側に居た。眠っているサティの

顔を見ているのは猫であっても飽きなかったし、柔らかな毛皮に触れていれば、生きていることを実感できて安心する。

そして、今、ピウニー卿は眠っているサティを人の姿に戻した。

人の姿に戻った瞬間は唇が触れ合うほど近い。今はピウニー卿も人の姿を為している。少し顔をずらせば、恐らくそのまま触れることが出来るだろう。今ならば、手を伸ばせば肩を包み込むこともできる。髪を梳くことも、その細い身体を自分の胸に抱き寄せることも。

ピウニー卿はとうの昔から、自分の気持ちを自覚していた。

彼とて年端もいかぬ若者…というわけではないのだ。何も身に着けていない女が現れても、激しく欲情することなどは無い。最初から自分の心がこうも浮つくのは、この小柄で、生意気で、そのくせ無防備な表情を見せる情の厚い可愛い猫が相手だからだ。サティと共に過ごすようになってから、その肌に口付けたいと思ったことは1度や2度では無い。幾度か抱き寄せたこともあるが、戸惑ったような付かず離れずの態度を取るサティがもどかしく、騎士としての矜持と男の理性がその先に進むことを戒めた。

だが、ピウニー卿とて男だ。愛しい女が裸で抱きついてくればどうなるか。他の男に触れられれば嫉妬もする。その頬を撫でたい、唇に触れたい、抱き寄せたい…と思うのは当たり前のことだった。だからこそ、ピウニー卿は人の姿に戻るときはいつもサティに、シーツで身体を巻いてからにするよう念を押していた。布越しに伝わる身体の曲線だけでも危ういのに、ああ何度も裸で抱きついてこられると、いつ自分の理性が飛ぶか分からない。

サティが過剰な魔力を使って無茶をしたのはピウニー卿のためだ。

ヌエから振り落とされた小さなネズミを助けるため。ピウニー卿は

心底、早く人間の姿に戻りたかった。戻ればサティを守ってやれる。サティを抱き寄せて、この腕で運ぶことができるのに。…もっとも、サティは守られるだけでよしとする女性ではないだろう。だが、そういうところもピウニー卿を惹きつけて止まない。サティを守りたいと思う反面、彼女の魔法を信頼して共に行動することに喜びを感じてもいた。

「サティ。」

小さく名前を呼んでみる。ピウニー卿はサティの傍らに肘を付き、セピア色の髪をそっと梳いた。しばらくそうしていたが、やがて軽く息を吐いて身体を起こした。サティの身体に体重を掛けないようにそっと近づき、遠慮がちに頬に口付けを落とす。口付けた箇所を指で撫ぜると肩まで落ちていたシーツを掛けてやり、寝台から降りた。杖の賢者に借り受けた服を着て身を調えると、静かに部屋を後にする。

……。

パタン…と閉じた扉の音を確認して、サティはそっと瞳を開いた。

自分はどうやら体力を使いすぎて、眠っていたようだ。…自分の魔力を大幅に超過して体力を使い、そのまま倒れてしまうことは、魔法を使い始めた頃によくあった。

気が付くと…自分は人間に戻っているようだった。意識はあるが身体の自由が利かないのは、恐らく体力がまだ完全に戻っていないからだろう。

先ほど、ピウニー卿の低い声が耳をくすぐったのを思い出した。名

前を呼ばれたときから、…サティは起きていたのだ。ピウニー卿の、小さいけれど熱い声になんとなく瞼を開くことができず、眠ったフリをしてしまった。

ピウニー卿の手が髪を一筋梳くたびに指が耳と首筋を心地よく滑っていく感触と、髪を梳く手が止まってサティの頬に無精髭と熱い唇が触れた温度。たったそれだけのことなのに胸が疼く。

サティは枕に顔を埋めた。

自分はきっと体力が落ちて弱気になっているのだ。

そうでなければ、頬に触れた優しい温もりが名残惜しくて切なくて、涙が出そうな理由が分からない。

＊＊＊＊

ピウニー卿が居間に戻ると、魔竜の身体を検分していた剣の賢者が振り向いた。

杖の賢者と剣の賢者が夫婦だったというのを知ったのは、こちらに戻ってきてからだ。理の賢者は当然知っているだろうから、サティも同様だろう。剣の賢者には確か弟子があったはずだ。弟子には、以前の剣の賢者の館を守らせ、自分は杖の賢者の館で暮らしているということだった。こちらの館にも自分専用の鍛冶場を作っている。

「やあピウニー、休めたかい？」

「何もせずに、申し訳ない。それに、借り受けた剣はヌエと共に崖に落ちてしまいました…。」

剣の賢者はピウニー卿の神妙な言葉を聞いて、大きく笑った。

「なに、あれはいいんだよ。そんなことよりも、あんたらが無事でよかった。ああ…それにしても、ネズミの姿も可愛かったのに残念さね。…サティは？」

「まだ眠っています。剣の賢者殿。頼みがあります。」

ピウニー卿は剣の賢者の側に来ると、深く、騎士の一礼を取る。剣の賢者は心得たように、頷いた。

「…剣を作って欲しい、ってんだろ？」

「ええ。」

「顔をあげな。心配しなくってもかまわない。…あたしが作る剣は、生涯保証付きなんだよ。あんたに頼まれなくても、ちゃんと作ってやるさ。」

「かたじけない…。」

「その代わりさ、今度はちーっと実験させてもらおうかと思っててね。」

「実験？」

『我の鱗で刀身を造り、我の炎で鍛えるのじゃ。』

ピウニー卿の一言には、魔竜が答えた。魔竜が戻ってきた用件…というのは、ピウニー卿の剣を紛失してしまったことだという。剣の

賢者に、自分の鱗を使ってピウニー卿の剣を作ってみよ…という提案をするために戻ってきたのだ。もちろん断る理由など無い剣の賢者はそれを受け、魔竜の鱗を調べていた。

「そ。…ついでに、魔竜の牙で柄を作り、その血を魔力として注ぐ。…マハ・マハジューレの剣が出来るってわけさ。」

竜の鱗で剣を作る…？そんなことが出来るのだろうか。その疑問をピウニー卿が口にすると、魔竜はふふん…と息を吐いた。

『我の鱗の一部はグラネク山の黒鋼石を取り込んで出来ておるのじゃ。だから黒光しておるだろう。合金を作るには申し分ない素材ぞ？』

「それはありがたい…が、牙は？　血は？…己を傷つけるような真似をするな。」

ピウニー卿のその言葉に、魔竜は再びふしゅふしゅ…と息を吐いた。どうやら笑ったようだ。

『問題ないぞ。…それにほれ、もう抜いてある。』

魔竜は何故か自慢げにテーブルの上を顎で指した。そこには竜の牙と瓶に入った数滴の血が置かれている。すぐ側には綺麗な黒い艶の丸い板のようなものがあり、これが竜の鱗であろうことはすぐ知れた。鱗はどうやって剥いだのだろうか。痛くは無かったのだろうか。ピウニー卿が魔竜にちらりと視線を向けると、その顔は竜であるために読めないが、得意げに鼻息を吐いた。

『抜いたのは親不知じゃから心配ないわ。…ま、さっき外に転がっ

ている石を喰らったときに折れただけじゃがな。』

ああ、竜にも親不知があるのか…。どこで役に立つか分からない豆知識をピウニー卿は得た。

＊＊＊＊

杖と剣の2人の賢者が住まう館を伺う、1人の騎士がいた。すこし垂れ目気味の甘い瞳。蜂蜜色の髪の毛。軽薄そうなその顔には、目的のものを見つけた喜びに小さく笑みを刷いていた。いままで不確定だったものが、確定に変わる喜び。自らの予測は外れていなかった。むしろ、正しかったのだろう。

「思ったとおりです。きっと本物でしょうね。」

騎士は1人、にっこりと笑った。

「竜殺しの騎士、ピウニーア・アルザス殿。」

【小話】　ヴィルレー公爵の場合

「やあ、ヴィルレー公爵。今日は授業が無かったはずだけれど？」

「ジョシュ殿下。お体の調子はよいのですか？」

「うん。今日は随分いいんだ。」

ヴィルレー公爵。アンヘル・ヴィルレーは、国王の用で王宮に出向いていた。王宮まで来たのなら、ついでに王子のところにも寄ってやってくれと国王に請われ、ジョシュの部屋へと向かう途中、中庭に面した渡り廊下で本人と鉢合わせたのだ。ジョシュの後ろには、ペルセニーアが控えている。

「陛下のところに寄っておりました。殿下にお会いできる許可を得まして、こうして。」

「許可？父上が？」

…ジョシュは苦笑して、困ったように頷いた。

国王はあまりジョシュに会おうとはしない。この身体の弱い王子をどう扱っていいのか、分からないのだろう。有能であるのに身体が弱いため重用することもできず、剣や魔法を持たせてやることもできない。国王という人間が王太子という人間に与えることの出来る何もかもを、ジョシュに与えることができない。それを国王は苦悩しているようだった。それならば、ただ親の愛情を与えればいいものを…。アンヘルは、国王がこの聡明な王太子を誰よりも大切に思っていることを知っているが、ジョシュは国王と会えないことを誤

解しているようだった。王族という家族に、愛情の行き違いやすれ違いが起こるのはよくある話だ。

ジョシュは苦笑を、穏やかな微笑みに変えてアンヘルを見上げた。

「よければお茶にしよう。セラフィーナは元気？」

「ええ。また連れてきましょう。」

「是非そうして。ペルセ、君も一緒に休憩しよう。」

主の邪魔をしないように静かに控えていたペルセニーアをジョシュは振り返り、一緒に来るように促した。ジョシュの笑顔を受けて、ペルセニーアは一礼した。

＊＊＊＊

「サティは元気だろうか。」

ジョシュの部屋で軽く話をしたあと、アンヘルは部屋を辞してペルセニーアと共に廊下を歩いていた。丁度、ペルセニーアの交代の時間に当たったので、アンヘルが誘って並んで王宮を歩いていたのだ。

「セラフィーナが寂しがっている。」

アンヘルは小さく笑って、ペルセニーアを伺った。アンヘルの笑顔に答えるように、ペルセニーアも頷いた。

「先日、杖の賢者殿から連絡が。」

「ほう、それは本当かい？」

「ええ。サティが到着した、と。」

「そうか。それはよかった。」

ペルセニーアの実家であるアルザス家に、先日手紙が届いたという。差し出し人は、剣の賢者と杖の賢者の連名。サティは賢者に無事に会うことが出来たようだった。

それを聞いたアンヘルは端整な顔を嬉しそうに崩し、何度か頷く。

ヴィルレー公爵家で一晩預かった猫のサティは、あれからアルザス家の保護の下、無事に旅に出たようだった。理の賢者の弟子であるという猫に、どのような旅路を用意したのか…とか、なぜ頑なにアルザス家がサティの世話をしようとしているか…など、聞いてみたいことは多くあったが、アンヘルはその事情をほとんど聞かなかった。ペルセニーアは何かを伏せているようであり、アンヘル自身もそれを察したが、それは恐らくペルセニーアの個人的なところにも抵触するだろうと思ったからだ。いつか話して欲しいと思いながらも、今はまだ、踏み込めるほどの仲ではない。

ただ、ペルセニーアはセラフィーナが寂しがっている…という話を聞いて、気を使ったようだ。確かに、サティは無事だと知れば、自分の娘は喜ぶに違いない。

「セラフィーナ嬢に、サティは無事です…と、お伝えください。」

「ああ。…きっと喜ぶだろう。…あ。」

アンヘルが突然何かを思い出したように、コホンと咳払いした。足を止める。すると、ペルセニーアもつられた様に足を止めた。

「もしよかったら、…その、貴女から話して聞かせてやってくれないだろうか。」

「え？」

思いがけない言葉を聞いたように、ペルセニーアが首をかしげた。

「…セラフィーナのことなんだが。」

「セラフィーナ嬢が何か？」

「もうすぐその…、あの子の誕生日でね。」

「まあ、おめでとうございます。」

「ああ、ありがとう。…それで、毎年家人だけで祝いをしていたのだが。」

「ええ。」

「その…。」

いつも落ち着いているアンヘルだったが、今は照れたような表情を浮かべてペルセニーアに向き合った。

「今年は…貴女にも来てもらいたいのだが。」

「私に…ですか？」

「ああ。ダメだろうか。」

ペルセニーアが、アンヘルのことを見つめている。濃紺の騎士服に、黒い飾り紐は黒翼騎士団の証だ。金茶色の髪は緩くまとめて前に垂らしていた。

少しの間、2人の視線が絡んだ。それほど間を置かず、ペルセニーアの顔が綻ぶ。普段は凛々しい振る舞いと表情で、女性ながら侍女達にもひそかな人気のペルセニーアだが、このように笑うと、女性らしいとても柔らかな雰囲気になる。凛々しい表情からこの笑顔に移り変わる瞬間を見るのが、アンヘルはとても好きだった。

妻に先立たれて6年になる。公爵家の長子として決められた婚約者、定められた相手ではあった。燃えるように求める感情は無かったが、妻として誠実に愛して子を生した人だ。その妻に死なれてからというもの、いまだ若く紳士的な容姿も手伝って、ヴィルレー公アンヘルの元にはひっきりなしに縁談の話が沸いている。だが、そのどれもがアンヘルにとってはわずらわしいだけだった。どの縁談も、アンヘルの公爵という地位だけを求めている人間達にほかならない。それは貴族の社会における振る舞いとして、間違っているわけではないだろう。…だが、公爵だというだけで、望まない婚姻を押し付けられるくらいならこのまま独身でいたほうが気が休まる。

誰か特別に思いを寄せた相手がいるかというと、それも無かった。互いに定められた相手を愛することしか許されなかった妻を差し置いて、妻が死んだからといって、自由に誰かを求めることが後ろめたいという気持ちもあったのだ。誰かを愛するなどという感情は諦めるべきなのだろう、そう思っていた。

だが。

「喜んで、お伺いします。」

ペルセニーアが、アンヘルに向けた柔らかな笑顔をいつもの慎ましい遠慮がちな表情に戻して、礼儀正しく頷いた。それがアンヘルには名残惜しい。

「ありがとう、フィーナも喜ぶ。」

彼女と親しく言葉を交わすようになってから、アンヘルの心に暖かく灯る小さな光。それはまだ、誰にも言えぬほどの小さなものだった。遠く若い時分に公爵家の長子として諦めていた感情、後ろめたさから仕舞い込んでいた気持ちの類だ。アンヘルには想像できる。そう遠くない未来、この暖かさはやがて大きく心を満たすようになるだろう。今はまだ、その笑顔が自分にではなくセラフィーナに向けられるものだとしても構わない。いつか、その笑顔が自分にも…、向けられるようになってくれるだろうか。そして、自分はそれを求めてもよいだろうか。

騎士団の詰め所に足を向けるペルセニーアと、王宮の正面へと向かうアンヘルはここでお別れだ。

「ペルセ、貴女が来てくれると、私も嬉しい。」

「え？」

「ではここで、ペルセニーア。」

アンヘルは見事な一礼を施した。慌てたようにペルセニーアも騎士の礼を取る。

王宮の門へと歩みを進めながら、さりげなく、ペルセニーアを愛称で呼ぶことに成功したアンヘルは自分の顔が緩むのを自覚した。ペルセニーアが来ると知れば娘は喜ぶだろう。だがそれ以上に、アンヘル自身も楽しみなのだ。

そんなアンヘルの後姿をしばらく見送っていたペルセニーアが、ほんの僅かに頬を染めてうつむいた。

【小話】　ヴィルレー公爵の場合（後書き）

次も小話になります。

【小話】　アルザス家の場合

その日、白翼騎士団団長アルザス伯爵パヴェニーアは久々の休日だった。妻のセシルに請われ、市街を買い物に付き合っている。従者などはつけず、2人きりだった。パヴェニーアの妻セシルは、緩やかにウェーブした綺麗な栗色の髪をした、細身の可愛らしい女性だ。厳ついクマのようなパヴェニーアと並ぶとまさに美女と野獣で、その組み合わせは目立っていた。目立っていたが、腕を組み、仲睦まじく歩いている様子は誰も口を挟めない。

「あなた？…行きたいお店があるの。」

「…む、珍しいなお前が。」

普段は決して我侭をいわないセシルは、贅沢もほとんどしない。伯爵夫人として必要な程度に身の回りを調えているが、よく聞くような、貴族の妻だからといって増長して贅沢三昧をするような女ではないのだ。パヴェニーアの腕に自分の腕を絡め、まるで若い恋人達の街歩きのような感覚が楽しいらしく、セシルは上機嫌だった。

「あのお店よ。」

「…あ、…あの店か…！」

パヴェニーアの顔が赤くなる。そんなパヴェニーアを見て、セシルは嬉しそうに夫の太い二の腕に体重を預けた。

「こっそりお願いしてたものがあって…。」

「お願いしてたもの？」

「そう。」

「なんだ？」

「秘密よ。」

うふふ…と笑う、愛らしい妻の笑顔にパヴェニーアの顔も笑顔になる。クマの顔が笑顔になると、楽しいから人一人狩ります…くらいな怖さだったが、セシルから見たら魅力的な夫の笑顔だ。２人がそんな風に笑いあいながら歩いていると、やがて目的の店にたどり着いた。

「いらっしゃいませ！…これは、アルザス伯爵、いつもありがとうございます。」

「うむ。気にするな…。」

幸いなことに店内にはパヴェニーア達以外はおらず、顔なじみらしい店主はカウンターから何かを取り出した。

「奥様、お伺いしていた品物…このようなものならありましたが…いかがでしょうか。」

「まあ！…ねえ、あなた、見て！」

「…おお！…これは…！」

店主が取り出したのは、綺麗な金色ネズミのふわふわしたぬいぐる

みだった。

＊＊＊＊

セシルはうっとりとしながら、そっとネズミのぬいぐるみを両手ですくった。実物大で、しかもふわっふわのさわり心地。きゅ…と両手のひらに包み込むと、柔らかくてセシルはうっとりする。

「きんくまはむすたーという愛玩用のネズミのぬいぐるみです。どうです、リアルなのにこの愛くるしさ。」

「…セ、セシル！」

金色の毛皮は、パヴェニーアにあの人を連想させた。

死んだと思っていた兄が帰ってきたのが、つい先日のような心地がする。ただし、その兄は金色の毛皮の愛くるしいネズミになり、セピア色の綺麗な毛皮の猫を連れていたのだった。…ああ、あのふわふわの細やかな毛皮…。兄を運ぶためにそっと手の上に乗せたときのあの感触は忘れられない。自分の上着のポケットに入れてそこから小さく顔を出したとき、両前足でポケットの端を掴み、Ｙの字の口元を忙しなく動かしながら顔をきょろきょろさせていた、あの愛くるしさといったら悶死するかと思った。しかし、残念なことに兄は何度頼み込んでも、腹のふかふかを触らせてはくれなかったのだ。

…そして今。

なんとその兄にそっくりのぬいぐるみが、妻の手で抱きしめられているではないか！　…なんということだ。正直に言おう。可愛いネズミを抱きしめている妻が可愛い。いつも可愛いがさらに５割増し

だ。パヴェニーアは可愛いもの、愛らしいものが好きな男なのだ。

「まあ、あなたったら、ぬいぐるみに嫉妬しているの？」

「ちがう。（ネズミを抱きしめている）お前が可愛い。」

「…やだ、貴方ったら。もう、しょうがないわね。」

セシルは頬を赤らめながら、はいどうぞ、と、ネズミのぬいぐるみをパヴェニーアの大きな手にちょこんと乗せた。

つぶらな瞳、Ｙの字の口元、ふわふわの毛皮、小さな前足、今にも動き出しそうな髭…くそっ、なんという愛くるしさ！　パヴェニーアは指でそっと、ぬいぐるみの頭を撫でてみた。撫でている夫の手をそっと包み込み、セシルが見上げる。

「あんまり撫でていると、お義兄様もサティさんも怒るかしら？」

サティはピウニー卿の毛皮をセシルから守るため、彼を自分の毛皮の中に隠したことがあったのだ。前足で小さなネズミを抱え込む猫の姿の可愛らしさは、かなりの破壊力だった。２人はしばしの間、その姿を妄想する。

「セシル！　…ああ、あの姿は俺も見たかった…。けれど、兄上がサティ殿を庇って剣を振るう姿もまた…」

「…私も、そんなお義兄様の勇姿を見たかったわ。」

「お前なら分かると思うぞ！」

「貴方！」

店の主人は夫婦の性格を心得ている。はむすたーのぬいぐるみを撫で撫でうっとりしている2人のやり取りに、穏やかに瞳を細めた。やがてカウンターの下からもう1つの品物を取り出す。それを見た夫婦は、驚嘆の声を上げた。

「…なっ…こ、これは！！」

「まあ…！」

店主が取り出したのは、セピア色の短い毛並みがシルクのような手触りで、大きな瞳はグリーンの、少し小柄な猫のぬいぐるみだった。くったり感がある作りで、抱き心地がなんとも絶妙で素晴らしい。

「どうです。しんがぷーらという種類の猫のぬいぐるみです。くったり感と手触りが堪らない逸品でしょう。」

パヴェニーアは猫のぬいぐるみをそっと撫でてみる。

「こら！撫でるな！」

妻の声真似に、びくー！と、パヴェニーアの手が止まったのは、ほとんど条件反射だ。夫が猫のサティに触れようとすると、ピウニー卿はいつもそんな風に怒っていた。その怒る様子がこれまた可愛らしいのだ。髭がピーンと緊張して、毛皮が膨らむあの表情！　若干瞳が細まって釣り上がったりなんかして。

セシルは、悪戯っぽくくすくすと笑うと、夫の横から猫のぬいぐるみをさらって抱きしめた。小さなネズミと違って大きさが丁度よく、極上の抱き心地だ。

「ねえ、あなた、いいでしょう？」

「く…俺にも、その…。」

あの（ネズミの）兄の毛皮をいともたやすく可愛らしく膨らませる、罪深い猫…綺麗な毛皮と、猫特有の油断ならない瞳が可愛らしいのだが…その猫そっくりのぬいぐるみが、妻の手で抱きしめられているではないか！　…なんということだ。正直に言おう。可愛い猫を抱きしめている妻を抱きしめたい。いつも抱きしめたいが、さらに５割り増しで抱きしめたい。

「まあ、あなたったら、猫はダメよ？　私がお義兄様に怒られてしまうわ。」

「ちがう。（猫のぬいぐるみを抱きしめている）お前を抱きしめたい。」

「…やだ、あなたったら！」

本来ならぎゅうっと抱きしめたいところだが、ここはさすがに公共の場だ。パヴェニーアは妻の肩を遠慮がちに抱くに留めて、ぐっと拳を握った。

「飾るときのレイアウトは…綿密に練らねば…！」

「家に帰ったら楽しみね！　あなた！」

夫婦は手を取り、うふふあはは…とご機嫌だった。

こうして、アルザス家のぬいぐるみコレクションに、猫とネズミのぬいぐるみが増えることになったのだが、その事実をピウニー卿が確認して驚愕するのは、もう少し先の話だ。

＊＊＊＊

「…くしゅん！」

「サティ、どうした、風邪か？」

杖の賢者の館のピウニー卿とサティに宛がわれた部屋で、サティはいいようの無い寒気を感じてくしゃみをした。

「ん…大丈夫。急に寒気が。」

「寒気…？…っ…はくしょん！」

歴戦の騎士であるはずのピウニー卿の背も、奇妙な寒気に襲われて震えた。

「なに、ピウも風邪なの？」

「いや…それとはまた、別種の寒気が…。」

2人はいぶかしげな顔を浮かべ、お互いの体温を毛皮越しに感じながら丸まったのだった。ふー、なんだろうこの寒気。

＊＊＊＊

ちなみに、アルザス伯爵家の男達は代々愛妻家が多いことでも有名

である。

【小話】　アルザス家の場合（後書き）

当初の予定以上にアレな夫婦に…。

次話からまた本編に戻ります。

０２３．うわあ、痛そう

「ああ…どこからどう見て、ほんっとうに素晴らしい杖。」

サティは、出来上がった杖を見つめてうっとりと溜息を零した。何回目になるのだろうか。サティは杖が完成してからというもの、その杖にひとまず必要最低限の魔法を詰め込みつつ、事ある毎にこうして溜息をついているのだ。雷で打たれたトネリコで作られた杖。飾り紐は緑。根付はつけず、その代わり杖の先端にグリーンの石が埋め込まれていた。

ヌエとの戦いで倒れたサティは、あれからすぐに目を覚ました。魔力も体力もすっかり回復したらしく、ピウニー卿と共に杖と剣の賢者の家で世話になりながら、それぞれの杖と剣が出来るのを待っていた。先に出来上がったのはサティの杖で、人間に戻って家事を済ませた後は、その杖に魔法を込める作業に没頭している。ピウニー卿の剣はまだ出来ておらず、魔法のことになるとサティには及ばないため相手にしてもらえない。だが、嬉しそうな顔をして杖を見つめて作業をしているサティを見るだけでも、ピウニー卿は心が和んだ。

だが今は猫の姿で、サティはただ杖を見つめている。やがて、ぺし…と前足で杖に触れる。尻尾が揺れて、瞳が細まった。ピウニー卿から見るとどう見ても杖を踏んでいるようにしか見えないが、サティからすれば猫の姿で杖を構えていることになる、らしい。触れていると魔力のバランスが心地よいようで、サティは再びうっとりと溜息をついた。

『よほど気に入っているようじゃ。』

「まあ、気に入るほうがよいだろう。私も剣の賢者殿が始めて作ってくれた剣を持ったときは、あんな風だった。気持ちは分かる。」

『そういうものか。』

サティを見ているのは、ピウニー卿と魔竜だ。魔竜はピウニー卿の剣を作るための素材を提供してくれたのだが、なぜかそのまま居座っている。狼くらいの大きさになっている魔竜は、ふしゅうと焦げ臭い息を吐いた。

コンコン。

ノックの音がした。

ピウニー卿がピクリと顔を起こし、ひくひくと髭を揺らしながらそちらを向く。サティも杖から手を離して顔を上げた。客人が来たようだ。ここは剣の賢者と杖の賢者の家だ。杖や剣を作ってもらいたいと思う者が、訪ねてくることもあるのだろう。ピウニー卿は魔竜に下がれ…と目配せをした。心得たように魔竜は奥の部屋へと退く。

「サティ…少し向こうへ行っておこう。」

サティはまだ杖を触りたがっているようだったが、やがて頭を下げてピウニー卿を乗せ、トン…とテーブルから降りる。魔竜について扉を押し、部屋を出た。

＊＊＊＊

「剣の賢者と杖の賢者の邸宅とお見受けいたします。」

「…。」

「少しお伺いしたいことがあるのですが。」

「…。」

魔竜の頭の上にサティ、サティの上にピウニー卿が乗っかり、扉に身体をくっつけて、2人と1匹…いや3匹?は、その会話を聞いている。

応対しているのは杖の賢者らしい。剣の賢者は作業中だから仕方ないだろう。それにしても杖の賢者のあの無口さで、客が来て対応できるのだろうか。弟子とか取らなくても大丈夫なのかと、サティはお節介なことを思った。

「ああ、失礼。私は白翼騎士団の、」

客人が名乗るようだ。騎士団の名前が出てきて、ピウニー卿は髭をぴくりと動かした。

「ヴェルレーン・サテュルニアと申します。」

その名乗りにピウニー卿が怪訝そうに呟いた。「ヴェルレーン・サテュルニア…?」　騎士の名らしい言葉を反芻したピウニー卿に、サティは尻尾をぱたんと揺らす。

「なに、ピウの知り合いの人?」

「…いや、知らんな。」

白翼騎士団ヴェルレーン・サテュルニア。
ピウニー卿とサティの記憶には残っていない男であった。

＊＊＊＊

先ほどから無表情のまま全く口を利いてくれない杖の賢者に、ヴェルレーン・サテュルニアはいささか困っていた。だが、このような事態に陥っても冷静なのが、ヴェルレーン・サテュルニアという男である。ヴェルレーンは、ふ…と笑って蜂蜜色の前髪をさらりとかき上げた。

「…杖の賢者殿、単刀直入にお伺いいたします。」

「…。」

「…私は王命により、ピウニーア・アルザス殿を探しているのです。」

「…。」

「こちらにいらっしゃいますね?…厩にピウニー卿の愛馬シャドウメアがつながれているのも分かっています。会わせていただけませんか?」

ヴェルレーンはできるだけ丁寧に言った。女性相手ならば誰もが自分の問いに答えるだろうという、まったくもって無駄な自信がある。だが、相手はオリアーブ国の賢者の1人「杖の賢者」であり、男だ。杖の賢者は黙ってヴェルレーンの話を聞いていたが、やがて扉を閉めた。

…無視…か。

ふ…とヴェルレーンは皮肉げに笑った。
まあ、いい。自分はこの程度でめげる男ではないのだ。

ヴェルレーンはコンコン…とノックをした。だが返答は無い。

「…いたし方が無い。杖の賢者殿、扉を開けさせてもらいます。」

強引にノブを回して扉を押す。ヴェルレーンはこれくらいの強引なこともできる騎士なのである。しかし。

「うわあああ」

扉を押したと同時に向こう側も扉を開いたらしく、ヴェルレーンはつんのめって前方にダイブした。ビターンと見事に床に伏す。

「うわ、痛そ…。」

女性の声が聞こえ、がばーーー！とヴェルレーンは起き上がった。髪を整え、バサリとマントを後ろに払う。その声には聞き覚えがあった。というか、その一言、一声だけで思い出したヴェルレーン・サテュルニアという男…さすがである。確か、王宮でパヴェニーアと一緒にいた女性だったはずだ。セピア色の髪にグリーンの瞳が美しい女性と記憶している。

「…これは失礼。私はヴェルレーン・サテュルニアとも…ふ…ふ…ふぇーーーっくしょい！」

「ちょ、なんか飛んでくるって」

「おい、サティ大丈夫か。」

「しつ、しつれい…ふぇくしょーーーーーい！」

「…いや、この人のほうが大丈夫じゃなくない？」

「サティ、危ないからあんまり近づくな。」

「な、危ないってどういうことで…ヘキショーーーーイ！！」

『危ないのか？　我の炎が必要なのか？』

「あー、いや、炎は止めて炎は。」

「うわあああああ、なんなんですかこの、え、何、このサイズ…猫？…竜？　えええ？」

「いや、私も居るが。」

「てめーらあああ！！　さっきからうるっさいわーーーーー！！」

ゴン！

バーン！と剣の賢者の仕事場の扉が開いて、ちょうど立ち上がったヴェルレーンに、開いた扉が後ろから直撃した。「うぐうっ…！」

ヴェルレーンは後頭部を押さえてしゃがみこむ。

面倒な展開だな…。

サティは前足で顔を洗いながら、そんな風に思った。

＊＊＊＊

猫アレルギーのヴェルレーンのために、杖と剣の賢者の家の窓という窓が全部開かれ、サティは布を被せられた。顔を少しだけ覗かせて、白い布をマントのように被せてもらう。その様相はかなりの可愛らしさだったがサティは不満げだった。さらし者にされている気分だ。

「…で、とっとと話してくださいよ。」

1人面白くなさそうにサティはヴェルレーンを促した。

「再び貴女に会えたと思ったら、まさか貴女は猫の姿をしていたとは…。運命の悪戯としか思えません。貴女に触れたい。だがそれは叶わな…、いだ！」

チクン！と手の甲に痛みを感じて、ヴェルレーンはソファから飛び上がった。テーブルの上のピウニー卿が、ヴェルレーンの手の甲を針で刺したのだ。どこから持ってきたんだ針…。だが小さなピウニー卿に本気で掴みかかるのは、騎士道に反する気がして堪えた。ヴェルレーンという男は紳士であり、騎士であり、弱きを助け、強きをくじく男なのだ。

再び、手の甲がチクン！とした。

「何するんですかさっきからチクチクチクチク！」

「貴公がさっきからよからぬことを考えているからだ。」

「考えてませんよ！」

「どうでもいいから、用件話しなさいってば。」

なぜかにらみ合うネズミと色男にサティはうんざりとマントの下で尻尾を振っている。ピウニー卿は仕方なく剣を引くと、ふん…髭を揺らした。

王命を受けてピウニー卿を探しているというヴェルレーンを迎え入れ、ピウニー卿らの（呪いを解いたキスの事以外の）事情をかいつまんで話したのは先ほどのことだ。ヴェルレーンはこの目で見るまでは信じられないようだったが、とにかく明日になったらサティもピウニー卿も人間に戻ることができる。それまで、ヴェルレーン側の事情を聞こうということになったのである。

「…それで、陛下はなんと。」

「そのことですが…。」

ヴェルレーンは、自分が受けた王命について詳しく話し始めた。

ヴェルレーンが受けた王命。それは、ピウニーア・アルザスの死に一体何があったのか、という再調査だった。塵となって消えうせたという情報だけで、死んだことにするというのは、国王としても腑に落ちなかったらしい。剣以外の装備を全て残したまま、身体だけが消えているというのも納得できないものがあった。共に竜を倒した仲間らの証言を信じないわけではなかったが、一体何が起こったのか…国王はヴェルレーンにひそかに詳しい情報を調査させていたのである。

ただ、最初の1年間はほとんど何の情報も得られなかった。

だが数ヶ月前、本当に些細な情報が入る。それは、普段ならば取りこぼしそうな些細な情報だった。

旅の多かったピウニー卿が、拠点のひとつとしていた小さな村の酒場。その酒場でピウニー卿のキープしていた果実酒が、何者かによって空けられていた…というのだ。酒場の店主は、「竜殺しのピウニー卿の幽霊が出たに違いない」という。その噂が呼んで、今その酒場は結構な評判らしい。サティとピウニー卿は顔を見合わせた。どこかで見たような話だ。

その村は王都から遠く離れたオリアーブ国の端、辺境といってもいいところにあった。その後、街道で「妙に体格のいい怪しい男の人影を見た。」という話をいくつか聞くようになった。特に意識したわけではないが、どんな些細な手がかりでも…と思い、ヴェルレーンはその噂を追ってみた。すると、そういった目撃情報は、ごく僅かだが徐々に王都に近づいていくようだった。

それにしても、見かける…といっても本当にささやかなものだ。街の近くの森に女と共に佇んでいたとか、人気の無いところを歩いていたとか、河原で洗濯していたとか…そういうものばかりで、街中で見かけた…などという噂は全く無かった。まるで人目を避けているように。

そこでヴェルレーンは王都に戻り、今度はパヴェニーアやペルセニーアの動向に気を配っていた。いずれにしても、ピウニー卿が生きていれば、接触するのは間違いなくこの2人の弟妹のはずだ。幸いヴェルレーンは白翼騎士団の所属で、パヴェニーアとは近しい立場にある。仕事をしていれば、自然と団長の動きは知れた。そして、

「…ジョシュ殿下の猫を探していたとき、サティさんとパヴェニーア団長と共に居たあの男性は、…ピウニー卿だったのでしょう。」

「知っていたのか。」

「確信はありませんでした。…今から考えれば、そうかなという程度です。ただ、」

…その後、アルザス家の邸宅をさりげなく観察していると、離れに客人を迎えていた様子が見て取れた。そして確信に変わったのは、

「シャドウメアを連れて、出られたでしょう。知らない人が見れば、質のいい青毛の馬にしか見えませんが、知っている人間が見れば分かります。」

「ふうむ…。シャドウメアも有名になってしまったものだな。」

「僕らくらいの騎士には、ピウニー卿と愛馬シャドウメアは随分有名な話です。実物を見たことがなくても、アルザス家から出てきた立派な青毛の馬が、シャドウメアだろうということくらいは分かります。…もっとも、僕は実物を見たことがありますが。」

そして、ヴェルレーンはかなりの距離を置いて、シャドウメアを追いかけたのだ。かなり遠くから足取りを追うだけだったが、相当立派な馬だ。その特徴ははっきりと知れた。ただ、1日の少しの間は馬上に影があるが、それ以外の時間は街道ではほとんどその姿を見かけなくなる。見失ったか…と思うと、再び1日経って街道に現れる…といった調子だった。幾度も見失ったり見つけたりしながら、やがて杖の賢者の館にたどり着いたのである。

「国王陛下はピウニー卿をお探しです。できることなら再び自分に仕えて欲しい、と。」

ピウニー卿は髭を撫でて、小さく首を振った。ネズミが首を振っても、毛づくろいしているようにしか見えないが、それでもそれが否定の意であることは見て取れた。

「そもそも、王宮まで戻っておいでにも関わらず、陛下にお会いしなかったのは何故ですか。」

「…このような姿で会うわけにはいかない。それに、私は国では死んだことになっているのだ。」

「それはそうですが…。」

「死んだと思われていた陛下の側近、それも恐れ多くも2つ名を賜った私がネズミの姿で生きて戻れば、怪しいことこの上ない。アルザス家に害を及ぼそうという輩もいるやもしれぬ。まず元に戻らなければ。」

それにヴェルレーンや賢者達には伝えていないが、自分達は国王すら知らないジョシュの事情も知っている。理の賢者に会って、自分たちの姿とジョシュの事情を解くまでは、公に姿を現すことは避けたい。

「それに今となっては、魔竜のこともある。」

オリアーブ国を動かした魔竜。魔竜の暴れる原因が呪いによって意図的に起こされたものだとしたら…一体誰が何の目的でこれを起こ

したのか。それは国と関わっているのか、そうではないのか。それははっきりさせておかなければならないだろう。

「そのことですが…、実は気になることがあります。」

ヴェルレーンは再び口を開いた。

噂を収集してそこから情報を解析してみたり、こっそりシャドウメアを追跡したり、こう見えてもヴェルレーン・サテュルニアは有能な男なのである。

０２４．死霊魔法

そもそもピウニー卿が魔竜の討伐に出かけたきっかけというのが、とある騎士の報告書だった。グラネク山の魔竜が暴れている…という、それはオリアーブ国のいまや誰もが知っているピウニー卿の物語の冒頭と変わらない内容だ。その報告書を提出した騎士が、「ラディゲ・ラファイエット」…という１人の騎士だったことがヴェルレーンには引っかかった。

「ラファイエット？」

「知っているの？」

「もちろんだ。グラネク山にも同行した騎士だからな。」

ラディゲ・ラファイエット。昔、ピウニー卿が若い頃、国王の親衛隊を選抜する際に御前試合で共に戦った相手だ。結局彼は親衛隊には選ばれず黒翼騎士団の所属のままだったが、魔竜を倒す旅にも共に発った仲間だった。魔竜の件を宰相や団長などを通さず国王に直接陳情し、それによって魔竜の討伐が決まったのだ。

「ただ、魔竜はグラネク山に住んでいることは知られていたけれど、人を襲うという話を聞いたのはこれが初めてだったのです。」

グルル…と話を聞いていた魔竜が低く唸った。ヴェルレーンは落ち着かなさげにちらりと魔竜を見て、ため息をつく。ピウニー卿から事情は聞いた。魔竜がピウニー卿の剣に宿って生きていたこと、そして、…そもそも誰かに呪いをかけられて暴れていた…ということも。

「そうだ。だから、討伐隊には騎士団ではなく親衛隊が選ばれた。」

ピウニー卿が答える。

単純に討伐するだけではなく、調査任務を遂行できる人員が組まれることになったのだ。もともと魔物の調査・討伐を任務にしていたピウニー卿がそれに選ばれた。ただラディゲの陳情により調査隊が組まれることになったため、黒翼騎士団からもラディゲ本人が参加することになった。

「そして魔竜を倒して王都に凱旋したわけですが、その後ラディゲ殿は荒れました。」

「荒れた？なぜ。」

「本来ならば彼は竜を倒し、生き残った人間として名誉を得られたはずです。ですが、人々が賞賛したのは死んでしまったピウニー卿だった。だからじゃないかと。」

ピウニー卿が黙ってしまった。サティが首を傾げる。

「他の人たちは？」

「他の人たちは、親衛隊…ピウニー卿の同僚だったでしょう。」

「そうだ。」

ヴェルレーンの言葉にピウニー卿が苦々しげに答えた。彼らは命を賭して自分たちを魔竜の断末魔から救ってくれた恩人として、自分達の名誉は省みずに賞賛したのだ。だからこそ、魔竜退治を進言し

たラディゲエは荒れた…という。

「…ラディゲは、元々私の同期なのだ。」

悪い人間ではない。それほど親しくないとはいえ、元々は黒翼騎士団で同じ隊だったこともある。ピウニー卿が親衛隊になって王都を空けるようになってからは、ほとんど言葉も交わさなくなった。久しぶりに言葉を交わしたのは魔竜討伐の時からだ。実力は充分で、話の分からぬ男ではない。ピウニー卿とラディゲの2人で隊をまとめていたといってもいい。

「…ラディゲ殿は、魔竜の討伐を進言した本人ですが…、どうやってグラネク山の魔竜が暴れていると知ったのか、それが気になったのです。」

『それは、我が暴れていたのを見た、噂を聞いた…そのようなことではないのか。』

ふしゅ…と魔竜の声が低くなった。慣れないその声にヴェルレーンは肩をびくびくさせながら、頭を振る。

「細かく調査してみたんですが、少し時期が…腑に落ちません。普通は、そのような噂が立ったり、被害が出てから調査します。ですが、ラディゲ殿の進言時期と魔竜の噂がたったのは同時期でした。当時は、気にも留められませんでしたが。」

「…ちょっと待って。それって…。」

「私も、少し引っかかる程度だったのですが、…今日、話を聞いて合点がいきました。」

サティの言葉にヴェルレーンは頷いた。魔竜の理性を狂わせた呪い…それには、ラディゲが絡んでいるのではないか…という疑惑だ。ラディゲは魔竜に呪いがかかることを知っていた…だから、国王に進言したのではないか。…しかし、何のために。

『そなたを、…ピウニーアを陥れるつもりだったということか？』

「それは無いだろう…。ラディゲは真に裏のない、戦いぶりだった。」

そもそも進言したとてピウニー卿が調査に行くとは限らず、陥れるつもりなら行くと決まってからも自分が共に行く必要は無い。そして、共に行き共に戦ったが、陥れる…という真似はされなかった。ラディゲは果敢に戦う騎士であったし、ピウニー卿は旅の仲間として背中を預けたのだから。

「ヴェルレーン。…ラディゲの話は間違いないのか。」

ピウニー卿は丸いこげ茶の瞳を伏せがちに聞いた。髭がしおらしく下を向いている。かつて信頼して共に戦った仲間に対する疑惑に、戸惑いを隠せないのだろう。戸惑い…というよりも、裏切られたかもしれない…という悲しみかもしれない。サティはそっと近づいて、頭を擦り寄せてすぐ側に体を丸めた。ピウニー卿はそんなサティの頭を撫でるが、心ここにあらず…といった風だ。

「報告書を出した時期と、ラディゲ殿が荒れたことは間違いありません。」

「そうか…。」

「ただ、何か企んでのことであれば相応の動きをするはずです。…ですが、今のところラディゲ殿にそのような様子はありません。それに、ラディゲ殿が当事者だとしても、魔竜に呪いをかけるほどの魔法を構築できたとは思えません。…別の共犯者がいるはずなのです。」

『魔法使いだな…。』

グウウ…と、再び魔竜が忌々しげに息を吐いた。

「マハ・マハジューレ。」

サティが魔竜を名で呼んで立ち上がり、そっと鼻面を寄せた。

「魔法使いがあなたに呪いをかけた時の呪文を覚えている?」

『残念ながら覚えておらぬ。…いや、待て。』

魔竜は瞳を細めて思案しているようだ。…あの時、あの呪いを掛けられたとき、理性が一瞬でひっくり返り、他の一切が目にも耳にも入らなくなった。…いや、知覚情報として認識できなくなった。それでも、記憶に残っている言葉は…。

『アラヌ・イアルト・アラニーサナク・アラニースルク…という冒頭だけ覚えておる…。』

サティの耳がふい…とひっくり返った。魔竜の喉がグルル…と鳴る。身体が震え、放出される魔力が悲しみとも憎しみとも知れぬ色を帯びた。頭を垂れてしまった魔竜の口元に、サティは顔を摺り寄せた。

「分かった。マハ、もういいよ。」

「どういう意味だサティ。」

サティは沈み込んだ。

＜アラヌ・イアルト・アラニーサナク・アラニースルク＞
（生きることの悲嘆、永らえることの苦慮、目覚めることの辛苦）

その魔法は。

「私にかけられた呪いと、前半は同じ。…多分、後半も同じだと、思う。」

「どういうことだ。」

「使っている魔法語が同じ…っていうことは、私に呪いをかけた魔法使いと同じ…だと思う。私も…自分の呪いを全部聞き取れたわけじゃないけれど、前半は間違いないよ。」

「死霊魔法か…。」

ピウニー卿の声が低くなった。

魔法語の中にある、憎しみや悲しみなどの感情を表現する言葉に、さらに恐怖を付与する枕詞。これだけでは単に呪いの枕詞…と言えるが、これに例えば、生命力を止める…とか、死を与える…とか、そういった語を使って呪文を完成させればそれは死霊魔法だ。

「正確に言うと、死霊魔法になる、直前…かな。」

サティの髭がしょんぼりと萎れた。

死霊魔法…そう言われてサティに思い浮かぶのは1人しか居ない。自分をこんな風な姿に変えた、あの魔法使いだ。…魔竜にかかっていた呪いも、ピウニー卿を襲った魔竜の最後の咆哮も、そして自分にかかってる呪いも、恐らく同種の魔法ということになる。

「その魔法使いの名前と所属は分かりますか？」

ヴェルレーンが遠慮がちに問いかけた。サティがそちらに顔を向ける。

「ヒューリオン。」

…ヒューリオン。忘れるはずの無い、魔法使いの名前。

「魔法師団の第5師団に所属する、魔法使い。…でも、多分もう居ない。」

『居ない…？』

「うん。私が、倒したからね。」

あの時。魔法の戦いがあったときに、ヒューリオンにはもう魔力も体力も残っていなかったはずだ。それでも、サティの杖を折り、サティを猫の姿に変えた魔法を使った。ヒューリオンは無事では済まされないだろう。魔竜はそれを聞いて、ただ、しゅう…と溜息を付いただけだった。

魔竜にとっては敵。
ピウニー卿とヴェルレーンにとっては国王や騎士達を謀ったかもしれない魔法使い。
サティにとっては…。

「サティ？」

ピウニー卿の声が思考に沈んだサティを浮上させた。まん丸の瞳がじっとこっちを見上げている。髭が小刻みに動いているのは、こちらを気遣っている証拠だ。

「もし同じ魔法使いだとしたら…その魔法使いはもう居ない。どんな魔法だったかは分からないと思う…。でも、」

「サティ、お前は…」

「大丈夫。師匠のところには資料が山ほどあるし、死霊魔法なら私も多少分かるから。」

サティの声は穏やかだったが、尻尾の先が落ち着かなさげにゆらゆらと動いていた。そういえば、ずっと魔竜に気を取られていたが、サティ自身も戦いの末に呪いをかけられたという経緯があるのだ。
ピウニー卿はその話を詳しく聞いたことは無かった。どういった出来事があって、どうして戦うことになったかの…。サティはあまり自分のことを話さない。自分はサティのことを何も知らないのだ…。
そのことが何故か今、ピウニー卿の心をちくりと刺した。

部屋にしばし、沈黙が落ちた。

それを破ったのは、剣の賢者が作業場の扉を開けた音だ。

「あんたなら大丈夫さね。理のじーさんもいるしね。」

「剣の賢者。」

サティがしおれていた頭を上げて、尻尾をぱたんと振った。その様子を見て、大きな手でマントごとサティの頭を撫でる。剣の賢者を改めて見たヴェルレーンは、ほんのり頬を染めながら駆け寄った。

「…貴女は…！剣の賢…」

ビターン！！

だが、残念ながらその手は剣の賢者に届かなかった。杖の賢者の足に引っ掛かって、すっ転げたのだ。杖の賢者がちらりとヴェルレーンを見た。その顔を見たヴェルレーンの顔がぎょっとする。

「…す、すみませんっ、あの、剣の賢者殿かな？　と確認しただけでして、美しいとか手を出したいとかそういう、…ふぇーーくしょい！」

鋭い杖の賢者の視線に刺された挙句、サティが身動ぎしたためにくしゃみが響いた。これ以上おかしなことを言い出す気は無いらしく、ヴェルレーンは大人しく正座して、再びくしゃみをした。この男、引き際はよく知っているのである。

剣の賢者はそんなヴェルレーンをちらりと一瞥しただけで、一振りの剣と短剣をピウニー卿の小さな身体の前に置く。

『おお、出来上がったのじゃな。』

「ああ。あんたのおかげでいいもんが出来たよ。ありがとうよ、マハ。」

気持ちを切り替えるように顔を上げた魔竜の横面をぽんぽんと叩いて、剣の賢者が笑った。腰に手をあてて小さなピウニー卿に顔を近づける。

「人間に戻ったら、あたしと手合わせして馴染ませるよ。しばらく振れば、おそらくあんたに馴染んでネズミに戻ったときにも同じ大きさになるだろう。」

「それはまことですか。」

「ああ。マハで作った合金はおっそろしく柔軟だね。素材自体に魔力がある上に、元が生物だからその魔力は意志に近い。あんたのことを認めれば、大きさはあんたに合わせてくれるだろう。」

「認めれば…ですか。」

ピウニー卿が小さな前足を口元にあてて、思案している風だった。その仕草に剣の賢者が、あっはっは、と豪快に笑う。

「そんな仕草もかわいいね、あんたは。大丈夫。元はマハのものだ。認めないなんてことはないだろうよ。」

『まこと、その通りじゃ。ピウニーアよ。』

「…かたじけない。人に戻ったら試してみましょう。」

ピウニー卿はくるりと魔竜に背を向けると、サティの前足の影で腕を組んだ。…照れているんだな、とサティに分かる。それにしても…。

魔竜とピウニー卿の呪い、そして自分の呪い。
唐突に繋がった2つの呪いが、同じ潮流のものだとすると…サティは呪いをかけた張本人を知っている。

どちらにしても旅の目的は変わらない。
サティとピウニー卿の目的は、自分達にかかった呪いを解いて人間に戻ることだ。
しかし、単純だと思っていたこの目的が、騎士とか魔法師団とか…そういったいろんなものを巻き込んでいることに、サティは今更気付いたのだった。

０２５．馬鹿ネズミ…とは

ヴェルレーン・サテュルニアからの情報を得て、１日ほど経た。人間に戻ったピウニー卿が剣を装備し、さらにネズミに戻ったときにその大きさがネズミのサイズに切り替わる仕様を確認した魔竜は、再び空へと舞い上がった。正常な魔力の自分が戻れば、グラネク山の眷属達も徐々におとなしくなるだろうということだ。

ちなみに魔竜の鱗は想像以上に柔軟で、短剣も長剣も安定してピウニー卿のサイズに合わせる。律儀にベルトまで。一体どのような仕組みになっているのか、サティは興味津々だったが、剣の賢者は教えてはくれなかった。

魔竜は去り際に、今は猫の姿を取っているサティに頭を摺り寄せた。随分と心を許したように見える。

『サティよ、もう一度我が名を呼んでくれまいか。』

魔竜と見詰め合うグリーンの瞳は大きく、横から見ると、猫のそれでも宝石のように綺麗だとピウニー卿は見惚れた。サティは耳をぴんと前に向け、背を伸ばして尻尾を揺らし、新しい杖を前足で踏むと、こう唱える。

＜ウィロー・ナ・ムラン・イアディ　＝　フロット・フォン・ド・ラーゲ・ベネカ・イェズ・マーレ・マハ・マハジューレ＞
（大いなる翼の竜。艶めく黒鱗の竜。偉大なる魔の竜。マハ・マハジューレ）

その全ては魔法語で構成されているのだ。改めて、偉大な存在の名

前なのだという真実がピウニー卿の胸に沁みる。そして、サティが…この魔法使いがその名を口にすると、清冽で力強い魔力が辺りに満ちるのが分かった。

狼程度の大きさといえど、魔竜が去ってしまうとなんだか部屋が広く感じる。

だが、そんな風に思える時間も一瞬だった。

魔竜が去った直度。

サティとピウニー卿が理の賢者の元へと旅立つ準備を行っていると、剣と杖の賢者の元に、もう1人の客人が訪ねてきたのだ。

＊＊＊＊

「…サティ。」

ピウニー卿の下には、裸の身体をシーツでくるんだだけのサティが居た。人間に戻るとき、いつもは体格差からいってピウニー卿が下でサティが上になるのだが、今日は無理矢理ピウニー卿がサティの顔を登って口元をぺろりと舐めたのだ。ピウニー卿はサティの身体には触れないように、両脇に腕を付いている。

サティの瞳は驚いたようにピウニー卿を見つめている。その頬をピウニー卿はそっと撫でた。

「ピウ?…あの、退いて?」

「…。」

自分の頬に触れるピウニー卿の手は広くてごつごつしている。剣を

握っているからだろう。いつもとは少し違うピウニー卿に、サティは動揺を悟られないように努めて冷静に首を傾げた。それでも、頬を撫でているピウニー卿の手が思いのほか心地よく、こげ茶色の瞳がうっとりと優しく、心地よいのに心は騒いで目を瞑ってしまいそうだ。

「あの…。」

ピウニー卿の足が、サティの足に絡まった。シーツ越しといえども、互いの身体のラインははっきりと分かる。ピウニー卿のむき出しの肩は硬く、サティの首筋は細く柔らかそうだ。

「サティ。」

自分を呼ぶその声には、はっきりと感情が込められている。サティには分かった。ピウニー卿の顔が降りてくる。

「…ピウニ…」

コンコン

バーン！

…まさかとは思ったが、ノックと同時に扉が開く。

「…ピウニー卿、大変です…外に…！…うわっ…なっ…を、…こ、こここここれは、し、失礼しました。」

バーン！

扉が閉まった。

「……。」

「……。」

ピウニー卿の唇がサティに触れるか触れないかのところで止まっている。少し腕を曲げれば触れられる…が、これ以上進むと収まりが付くか自信が無い。

「くそっ…ヴェルレーン…覚えていろ…。」

ヴェルレーン・サテュルニアは異常に間が悪い男であった。

＊＊＊＊

「ああん…、最近は客人が多いねえ…ったく。」

目の前に座っている客人に、剣の賢者は不機嫌そうに頬杖を付いた。杖の賢者は剣の賢者の隣に寄り添うように座り、相変わらず無言。そして、客人も無言だ。短い黒髪に瞳も黒。無駄の無い引き締まった身体には、簡易的な鎧を身に着け、マントを羽織った姿は旅装と一目で分かった。

3人がいる部屋の扉が開き、蜂蜜色の髪の騎士が溜息を付きながら入ってくる。その軽薄そうな雰囲気は悪気が無く、部屋に張り詰めた緊張感を少し緩める効果があった。ああ、こんな男でも役に立つんだねと剣の賢者は、割りとどうでもいい方向で見直した。

「ヴェルレーン、2人は？」

「ち、ちがうんですよ、猫とネズミかと思って不可抗力ですよ決して邪魔しようと思ったわけでは…！」

「何の話だい。」

「こほん。お2人は、その、…取り込み中です。」

「取り込み中？」

「ちょっといろいろ事情がありまして。…そうか、サティさんは…2人は…ああ…！」

ため息をついてヴェルレーンは蜂蜜色の頭を振る。脳裏に浮かぶのは寝台で絡み合っていた（ように見えた）サティとピウニー卿の姿。親しげに触れ合っていた（ように見えた）2人を見れば、その関係がただならぬものであるというのは一目で知れる。そうか…猫とネズミといえど、1日の3分の1は人間に戻るのだ。その間に愛を育んでいたとしてもおかしくはない。…だが、致し方ない。運命。これも運命か…。いずれにせよ、（猫アレルギーの）自分は（猫の）サティの身体に触れることは叶わない。お似合いです…お似合いです、お2人とも。祝福しましょう。友人として、2人のことを！

このとき、ヴェルレーンは完全に客人のことを忘れていた。

「ちょっとヴェルレーン！」

「あ、はい。」

「何、半笑いでボーっとしてるのさ。2人がどうしたって？」

「事情がありまして。」

「だから、事情って何さね。」

「ですから…。」

ゴン！

「あだっ…！」

そのとき、ヴェルレーンが入ってきた扉が再び開き、丁度前に控えていた蜂蜜色を直撃した。「うぐぅ…。」悲痛なうめき声と共に、ヴェルレーンは後頭部を押さえてしゃがみこんだ。

「…誰が何の事情だと…？」

扉から出てきたのは、これまでに無いほどの怒りのオーラを噴出しているピウニー卿だった。客人が顔を上げ、その姿を一瞥する。口元を歪め、どうやら笑ったようだ。

「…やはり生きていたのだな、ピウニーア・アルザス。」

「…貴公は…ラディゲ…？」

ラディゲ・ラファイエット。ピウニー卿は、久方ぶりに見る騎士…かつて共に戦った男の顔を見つめ返した。

「ピウニー…？」

客人というのは誰なのか…と、後ろから顔を出したサティをピウニ

ー卿は無意識に背に押しやる。一触即発の部屋の空気は重苦しく、訳も無く緊張感が漂っている。

ピウニー卿は今、

極めて不機嫌だった（八つ当たり的な）。

そして。

「…ちょっと、ピウニー卿、急に扉開くこと無いじゃないですか！…しかも、なんでそんなに怒って…ちょっと、サティさんも何か言ってください！」

しつこいようだが、ヴェルレーン・サテュルニアは間の悪い男だった。

だが、この間の悪さが、今は救いだ。それは無意味に緊張感の上がった室内を、程よく解す効果があった。剣の賢者は溜息をついてラディゲを一瞥する。

「ラディゲとやら？…人ん家で無闇に殺気放出してんじゃないよ、…とりあえず、あんたの事情から聞こうじゃないか。」

室内の全員が、客人…ラディゲに目を向けた。その視線を受けながら、ラディゲが見つめるのはただピウニー卿一点だ。口を開いた。

「…竜殺しの美談が笑わせる。…ピウニーア、生きているのであれば真っ先に陛下に状況を報告するのが筋だろうに、こんなところで女遊びか。」

「なんだと…？」

投げられた言葉に、ただでさえ底辺だったピウニー卿の気配が、さらに低くなる。片方の眉をぴくりと上げ、重く渋い声は一言だったが怒りを孕んでいた。ピウニー卿の片方の手はサティを庇ったままで、その背中はいつも通り大きかったが、こんなにも怒っているピウニー卿は初めて見る。ただ、「女遊び」という一言が引っかかり、声をかけることも腕を掴むことも、サティには出来なかった。

「竜殺しの騎士はお前だ、ピウニーア。本懐を果たして生きているのであれば、忠義を尽くすのが騎士の務めだろう。にも関わらず、なぜ姿を消した。」

「なぜそれをお前が問う。」

「なぜだと…？…我らは共に戦った。魔竜を倒し、勝利した。名誉なことではないのか！」

「…。」

ラディゲがいつの間にか立ち上がり、ピウニー卿の目の前に居た。今にも掴みかからんばかりだ。杖の賢者も立ち上がって、剣の賢者を後ろに庇っている。

「その名誉だけを得て、生き残った者に脇役を押し付け、お前は死んで英雄気取りか。」

ピウニー卿はそれには返事をしなかった。答えないピウニー卿に苛立ちを隠せないラディゲは、吐き棄てるように言った。

「言い訳も無いと見える。」

「ラディゲ。」

「…なんだ。」

イライラしているラディゲに対して、ピウニー卿は静かなものだった。怒りはすでに平坦に収まっているようで、まっすぐにラディゲに向かって問いかける。

「なぜ、私を追いかける。」

「…親衛隊や陛下が必要としているのはお前だからだ、ピウニーア！…生き残った俺ではなく、死んだお前が生きていればと、どれほど言われたかお前に分かるか！」

ピウニー卿の端正な横顔が、僅かに苦しげに潜められた。

「死んだ人間は超えられん。…竜に勝利したのはお前だけではないというのに、賛美されるのはピウニーア、お前だけだ。この違いはなんだ！…挙句の果てに、ピウニーアが庇っている間、お前たちは何もしなかったのかと責められ、計画書を提出したのは自分なのにのうのうと生き残ったのかと罵られ…！」

計画書を提出した…という言葉に、ずっと考え込んでいたヴェルレーンが顔を上げた。すると、ラディゲがピウニー卿に掴みかかったのが視界に入る。ヴェルレーンは咄嗟にラディゲを押さえるが、それを意に介さずに言葉を叩きつけた。

「…それなのに、本当はお前が生きているというではないか。生きているならばなぜ出てこない！…騎士として、なぜ忠義を示さない

のだ、出来ることをなぜしない！」

「…すまない。」

「なんだと?」

「今の私では忠義を示すことは出来ない。」

「なぜだ。」

「…。」

「答えろ、ピウニーア！」

ピウニー卿は答えるのを躊躇った。躊躇った、その一瞬をラディゲは見逃さない。押さえるヴェルレーンの手を振り切って、ピウニー卿の顔を殴ったのだ。殴られる一瞬に身を引いたのだろう。それほど大きく後退はしなかったが、唇が切れて血が出るには十分だった。

「…ピウニー！」

「下がっていろ、サティ。」

「でも。」

「サティには関係ない。」

「だけど…。」

「関係ないと言っているだろう！下がっていろ！」

「…。」

前に出ようとしたサティの腕を、思いのほか強い力でピウニー卿は引いた。初めて怒鳴られた。さらに「関係ない」という言葉で追い討ちをかけられ、それ以上の言葉を遮られる。ラディゲが冷たくサティを一瞥して、すぐにピウニー卿へと視線を戻した。

「女にうつつでも抜かしたか。」

「……――――――。」

ラディゲの言葉に、小さく笑ってピウニー卿が何かを言ったようだ。室内の全員が驚いたような雰囲気で、ピウニー卿を見ている。だが、サティには何と言っているのか聞こえなかった。全く別のことを考えていて。

「関係ない」…という、…その言葉は、思いのほか、サティにとって衝撃だった。

というか、カチンと来た。

ああ、関係ないのか。ピウニー卿にとって、自分は。

確かに関係ない。ラディゲという人をサティは知らないし、ピウニー卿が騎士として活躍していた話を知らないし、騎士団の事情も知らないし、そもそもピウニー卿の任務にも騎士の務めにも自分は、…無関係だ。

でも違う。

関係無いというのは、きっと違う。

…この、馬鹿ピウニー。

「……誰が関係ないって？　この馬鹿ネズミ。」

「え？」

「は…？」

自分の喉からよくもこんな声が出るなと思うほど、低い声がサティから出た。ただならぬ雰囲気に、ピウニー卿がサティを振り向く。ラディゲですら、驚いてサティを注視した。サティはピウニー卿の胸倉を、ラディゲから奪って両手で掴んだ。

「騎士団云々なんて関係ないわよ。」

「サ、サティ？」

ピウニー卿が怯んだように一歩下がる。

「私はピウが殴られたのが、気に食わないのよ。」

じろりとピウニー卿を見上げるグリーンの瞳は半眼で、その強い力に気圧される。同時に、言われた一言に年甲斐もなくドキリと心臓が跳ね上がった。

「それともピウは私が殴られても関係ないって言うの？」

「そんなわけが…」

「ならば言い訳はよろしい！」

ぴしゃりと言われて、サティの肩を抱こうとしていたピウニー卿の手が中途半端で止まる。

「そもそも、関係ないって言われて私が引き下がると思ってんの？」

「…サ」

「ねえ関係ないの？　そうなの、関係ないの。そうよね、ピウニー卿は伯爵家の長男だし、竜殺しの騎士様だし、王様の親衛隊だし、比べて私はなーんの身分も無いしがない頼りない魔法使いですし。」

「そうではない！」

「じゃあなんなのよ、関係なくて悪かったわね！」

…部屋の雰囲気が微妙なものになってくる。ラディゲは今までの怒気を完全に削がれているし、ヴェルレーンはラディゲを押さえたまま固まっている。剣の賢者は何故か1人ニヤニヤと笑って楽しそうな顔をしており、杖の賢者はいつもと変わらなかった。

「これは俺とラディゲの問題であって、」

「分かってるわよ。」

「ならば」

「でも、ピウだけの問題じゃないじゃない！」

ぎり…とさらに一歩近づく。

「呪いがかかってるのはピウニーだけじゃないでしょう！」

「そ、それは…」

「貴方が出て行けないのは呪いのせいでしょう！それで、その…その、呪いは…2人で解いたんだから…」

「サティ…」

サティの顔が赤くなった。言ってしまった後ですぐに後悔する。それでも、呪いが中途半端に解けたのは気持ちが中途半端だったからだ…とサティは思っている。当時の自分にそれができたかどうかは分からないが、もっともっと真剣に、ピウニー卿に元に戻って欲しいとか…そういう風に願っていれば、きちんと戻ったかもしれない。そうすれば、国王の下にすぐに馳せ参じることだって出来たはずだ。

その言葉を聞いて、ピウニー卿はサティの身体を抱き寄せた。

関係ないと言ったのは、名誉や忠義というものにしがみついてしまう青臭い男の争いを、サティに見られたくなかったからだった。呪いの話をラディゲにするのは、あまりにも言い訳じみていて躊躇ったのも事実である。それに、…ラディゲに関わらせたくないあまり、つい感情的になってしまった。

…それなのに何故こんな話になっているのだろう。サティは何故怒

っているのだろう。自分が殴られたからだろうか。呪いを解くことが出来なかった互いの、…当時の、２人の気持ちに、だろうか。そんなことを言われると、自分の気持ちなどとうに決まっているピウニー卿は、自惚れてしまう。無理矢理にでも、距離を詰めたくなってしまう。

……。

ところで、目の前で繰り広げられているピウニー卿と女のどう見ても甘い攻防に、ラディゲが若干青筋を立てながらヴェルレーンに聞いた。

「…おい、なんなんだこの夫婦漫才は。」

「知りませんよ、僕が聞きたいです。そもそも貴方のせいでしょう。」

「なぜ、俺のせいになる！」

「貴方が話を聞かないからですよ！」

「ピウニーアが話をしないからだろう。」

「言い訳をするような御仁ではないでしょう。」

「そもそも呪いとは何なのだ。俺は知らんぞ！」

そこまでヴェルレーンと会話したところで、２人は杖の賢者に首根っこを捕まれ後ろに下げられた。

一方、サティはピウニー卿に抱きしめられたままの状態で、何とか

引き剥がそうと奮闘している。

「ちょ、と、そういうので誤魔化さないでよ。」

「誤魔化してなどおらん。」

「じゃあ何なの離して。」

「すまない。」

「何がよ。」

「すまなかった。」

「だから、なーにーがー…」

「あー、ちょっといいかい。」

……。

……。

……。

……。

2人の夫婦漫才に入り難そうに、剣の賢者が咳払いした。

ピウニー卿とサティは我に返る。

「あのさ、お取り込み中すまないんだけど、ラディゲが何か言いたそうなんだよね。」

剣の賢者がラディゲを振り向く。…急に話を振られ、全員に注目さ

れたラディゲは不機嫌そうに眉を潜めた。

「馬鹿ネズミ…とは一体なんのことだ。」

そこかよ！

非常に明瞭、かつ的確な問いに、サティの頭が急速に冷えた。

カッとなってつい、いろんなことを言ってしまった。ピウニー卿を責めたって、仕方が無いことまで勢いで…。

サティの頭が冷えた代わりに、顔が熱くなった。

０２６．好きな女の濡れた唇

最早、何回目になるのか…という状況の説明を、ラディゲに行った。ピウニー卿とサティの呪い（しつこいようだが口元ペロリについては省略）。そして、話が魔竜の呪いの話に至ると、ラディゲの顔色が変わる。

「…善良な竜だっただと…！？」

「そうだ。…やはり、…知らなかったのか？」

「知っていたら、あんな調査書は出していなかった！　もっと調べて…っ！」

ピウニー卿の言葉に、ラディゲはハッと顔を上げた。

「…やはり、というのはどういうことだ。俺を疑っているのか。」

「待ってください。」

その言葉を遮ったのは、ヴェルレーンだった。

「ラディゲ殿、貴方を疑っているのは僕です。」

「ヴェルレーン…。」

「貴方は、僕がピウニー卿を追っているのを知って、後を付けて来たのですね。」

「そうだ。」

ささいなきっかけだった。

一度だけ、ラディゲは、国王に聞かれたことがある。「ピウニーア・アルザスは本当に死んだのか。」と。

責められている口調ではなかったが、国王は自分ではなくピウニー卿という騎士を必要としているというのが思い知らされ、ラディゲが荒れるきっかけとなった一言だ。その質問を、最近になってもう一度、問われたのだ。そのとき、ラディゲの心に何かが引っかかった。それで、滑稽なことだとは思いながらもアルザス家を窺ってみたのだ。…すると、ピウニー卿の愛馬、シャドウメアが出て行くのを見た。そして、時間差でその後を追うように街を出たもう一つの馬も。いてもたってもいられず、無謀なことよと思いながらもラディゲはそれを追いかけた。

「あの調査書は、どのような経緯で提出することになったのですか？」

ヴェルレーンの言葉にラディゲは腕を組む。そもそもあの調査書は、魔法師団経由でラディゲに回ってきたものだ。当時、各地の魔物の動向をまとめる職務に就いていたラディゲには、王国のどの辺りにどういった魔物が活動しているか…という情報が集められていた。各領地の領主からの報告であったり、あるいはピウニー卿のような旅の騎士からの報告であったり様々だったが、その中の情報に、魔竜の調査書があった。

御前試合でピウニー卿に負けた時から、同期であるのにも関わらず、彼は追い越せない壁だった。しかも、追い越したくとも、ピウニー卿は王の勅命を受けて国を飛び回る調査隊という旅の騎士で、他の

騎士達からの羨望と憧れの的であり、接触することも勝負することも叶わなかった。

これが、実力の無いものが家名だけでのしあがってきたのであれば、ラディゲにも勝つ自信がある。

だがピウニー卿のアルザス家は、次男パヴェニーアが白翼騎士団の団長、長女ペルセニーアがジョシュ王子の護衛騎士…と名が高く、それでいて野心に溺れるということもなかった。野心家からの挑発もどこ吹く風と、あまり宮廷にも関わらず、堅実に職務を全うするいかにも武人らしい家系だ。ピウニー卿自身も、帰還の度に功績を挙げていたし、裏表の無い率直な人物だということも知れていた。だからこそ、ラディゲは焦っていた。

そんな焦ったラディゲに思いがけず、団長へと報告する前に宰相に相談する機会があり、国王に直接提言する許可を得た。自身が名誉に逸っていた…という側面は否めない。だが、国王陛下に提言し、現に討伐隊は組まれたのだ。

「魔法師団経由…というのは、どこの師団からだ。」

「魔法師団の、第５師団から送られてきた。」

「第５師団…？」

サティとピウニー卿…そしてヴェルレーンの声が重なった。

師団長はまだ決められていない、最も新しく作られた魔法師団である。そして、サティを襲ったヒューリオン…という魔法使いが所属していた組織だったはずだ。

「ヒューリオン…。」

サティは額を押さえた。

部屋の人間がサティを見る。ヒューリオンの話を促されていることは分かったが、喉が詰まった。その様子を見て、ピウニー卿がサティの背中をそっと撫ぜる。その手に気付いてサティはピウニー卿をちらりと伺った。心配そうなこげ茶色の瞳が、自分を見ている。それに後押しされるように、サティは口を開いた。

魔法研究所の奥…正式には、魔法研究所特殊研究院と呼ばれている。より専門性の高い魔法を研究する部署だ。基本的に研究バカと呼ばれる変人が多い。サティはそこにも顔を出していた。ヒューリオンに呼び出されたのもそこでの出来事だ。

「死霊魔法っていうのは、死に関わる心魂魔法（人・動物などの魂や魔力に関わる魔法）のことで、厳密に『これが死霊魔法』と呼ばれる魔法語は存在しないわ。肉体に直接死を導いたり、生を止めたり、生死を操ることを目的とするのが死霊魔法。」

心魂魔法が得意な魔法使いが、生や死の境目を探り、それを操ることに魅了されて、死霊使いに堕ちるのだと言われている。ヒューリオンもそうだったのだろう。あの時、ヒューリオンから魔法陣の見直しを相談された。綺麗な植物育成の魔法陣だった。…だが、サティは、それが巧みに隠された死霊魔法だということに気付いた。

それを指摘し、「やめたほうがいい」…と気遣ったサティは、ヒューリオンの怒りを買ったらしい。背中に魔法弾を打ち込まれ、後は、…知ってのとおりだ。突然始まった戦闘にサティは勝利したが、代わりに杖が折れてしまい、打ち込まれた呪いを杖無しで受け止めた。気が付いたら猫の姿になっていて、咄嗟に逃げ込んだ小さな部屋か

ら迷いに迷って、魔法研究所の地下水路へ逃れてしまったのだ。

魔竜にかけられた呪いも同じ、ということは、ヒューリオンが関係しているのは間違いない。

「2つの呪いは同じ人間がやったと？…陥れられたのは、魔竜か。俺達は利用されたのか…？」

「だが、何のためにでしょう。わざわざ魔竜を暴れさせて、万が一にでも倒せなかったりしたら。」

呪いの目的にたどり着くには、もう少し…情報が必要なのだろう。

王都そのものから、得られる情報が。

思案に暮れている2人の騎士。ピウニー卿も腕を組み、無精髭の顎を乗せて何事かを考えている。沈黙が続き、話はそれで終わりとなった。

＊＊＊＊

激しく剣戟の音が響いている。

ピウニー卿とラディゲが、手合わせをしているのだ。だが、それは手合わせという生温いものではなく、真剣で本当に殺し合わんばかりの打ち合いのようにサティには見えた。何度も剣が交差し、2人の身体が近づいては離れる。隙を見て蹴りが出たと思えば、片方の剣を地面に打ち払い、もう一方がそれを跳ね上げる。

「そんなに心配しなくても、大丈夫さね。」

よほど悲痛な顔をしていたのか、サティの横に剣の賢者が並んでそ

の肩を叩いた。

「でも。」

「なあ、サティ。あんたピウニーのこと…。」

サティは頭を振った。否定の意味ではない、剣の賢者が聞こうとしていたことの、肯定の意味だ。

「分かってます。」

「自分の気持ちを?」

「…多分。」

「ねえ、あんたらが呪いを解いたのって、もしかして…『あの』例外処理かい?」

サティは剣の賢者を見ずに、今度は頷いた。それを見て、賢者は溜息を付く。

「ああ…で、中途半端、か。なるほどね。でもさ、それはあんただけのせいじゃあないだろ…。ピウニーだって、あんたのこと…。」

「でも!」

「でも?」

サティは剣の賢者の言葉を遮った。

猫の時はネズミのピウニー卿に触れたり転がしたり抱きしめたりするのは自分なのに、人間に戻ると途端にそれが逆転する。ピウニー卿の大きな手と身体が自分を包むと、自由が利かない。それが心地よい。ピウニー卿の余裕のある態度が、抗い難い。…だが、ピウニー卿は国王に仕える騎士。呪いが完全に解けたら…、その先はどうなるのだろう。離れてしまうのだろうか。猫とネズミのときに自分が抱きしめる距離があまりにも近くて安心するから、人間に戻ったときにピウニー卿に抱きしめられたその手が離れることを思うと、自分の不安の大きさに胸がつぶれそうだった。

それに。

「またあんな風に関係ないって言われたら。」

ピウニー卿が国王に仕える騎士である事実に、サティが関係ないのは本当だ。だから、もう一度「関係ない」と言われたら、次はきっとそれを受け入れるしかない。ピウニー卿は肝心なことを何1つ口に出して言ってくれないのだ。だから、素直に身を任せるのを躊躇ってしまう。

ああ…もう本当に、なんて子供っぽいくだらない言い訳なんだろう。自分だって何一つ言っていないのに、2人のことをピウニー卿だけのせいにするなんて、自分はとても我侭だ。そう思ったけれど、何も聞けなかった。他の憎まれ口なら、叩けるのに。

「ああ。」

難儀だねえ…あの馬鹿ネズミ…と、剣の賢者は頭を掻いた。

そうこうしているうちに剣戟の音が止む。

「…くそっ！」

互いに騎士の一礼を施すと、ラディゲが悔しそうに頭を振った。実力がピウニー卿にまだまだ及ばないことを悟ったのだろう。サティの目には、それほどラディゲが押された風でもなかったが、ピウニー卿の余裕の表情を見ていると、やはりそれほどの実力の差があったのか。サティは少しだけ安堵の吐息を吐いた。

「おい、あんたら、怪我してるだろ、こっち来な！」

母親が悪戯っ子を嗜めるような口調で、剣の賢者がラディゲとピウニー卿を呼んだ。試合の審判をしていたヴェルレーンも後ろからついてくる。

「サティ、ピウニーの方は頼んだよ、あんたらの部屋使っていいから。」

「え？」

何か言いたげだが言葉を紡がないピウニー卿を前に、怪我の具合を検分しようとしていたサティは、怪訝そうに剣の賢者を見た。ほれほれあっちへ行け、と言わんばかりに追いやられるうちに、ピウニー卿が急にサティの腕を掴んで、部屋へとサティを引っ張っていった。

今2人きりにするのは、待ってほしい。こっ恥ずかしい。だがまさかそんなことをサティは言えない。

＊＊＊＊

「ピウニー、腕？」

「ああ。」

「他には？」

「問題ない。」

「見せて…。」

ピウニー卿の腕を取って怪我を確認する。篭手も何も身に着けずに剣を合わせていたので、僅かに剣が掠めただけで服を裂いて怪我をしてしまったのだろう。いつも自分を軽々と抱き上げる筋の張った腕は太くて、自分とは全然違う。…妙に意識してしまう。サティは雑念を振り払うように自分の杖を引き寄せて、呪文を唱えた。

＜イェラース・ウィート・オ・ウォーイセル＞

（傷よ、治れ。）

腕から傷が消えたのを確認すると、サティはピウニー卿を見上げた。ラディゲに殴られて切った口の端が痛々しい。そっと触れてみる。先ほどからピウニー卿はあまり話してくれない。その沈黙がいたたまれなくて、サティは事務的に怪我を検分していたつもりだったが、ピウニー卿のこげ茶色の瞳が真剣に自分を見下ろしていて、その視線にぶつかると目が離せなくなった。

「ピウニー？」

だから、代わりに名前を呼んだ。

返事をする代わりにピウニー卿の手がサティの杖を奪った。ピウニー卿は杖を丁寧にサイドテーブルに立てかけ、サティの身体を引き寄せる。

「サティ…。」

今までサティが聞いたことも無いような、熱くて、そして切羽詰ったような低い声が耳元を擽った。近い近い。声が近い。反射的に身体を引こうとしたが、抱き寄せる腕は強くてサティの身体は離れなかった。それどころか、もっと強く抱き寄せられ、もう片方の腕が頭に回される。

「ピウ、怪我を。」

「かすり傷だ。」

「でも…」

「サティ、もう少しこのままで…。」

「ダメだって。」

ピウニー卿が少し腕を緩めて、サティを見下ろしてきた。こげ茶色の瞳は潤んだように熱くて、これ以上見ていたら、やっぱり目を閉じてしまいたくなる。サティはやはり誤魔化すように、もう一度ピウニー卿の怪我をした方の唇に指をあてた。触れる顎と唇の感触が恥かしくて、「＜イェーラス・ウィート＞（治癒せよ）…」…呪文を唱えて慌てて手を引っ込める。それをピウニー卿が掴んだ。掴んだ手に口付けを落として自分の身体に回させると、もう一度しっか

りと抱き直す。

「…あの、ピウニー？」

名前を呼んでみたけれど、返事が無く、ただ髪に熱い吐息がかかっただけだ。押し付けられた身体は、汗と土埃とピウニー卿の匂いがする。ネズミのピウニー卿を抱いているときのようにその温かさに安心する一方で、ピウニー卿の男としての雰囲気にその先を踏み越える不安が募る。

ピウニー卿は、サティの身体を抱き寄せたまま言葉を紡げずにいた。先ほどまで、激しくラディゲと剣を合わせていたからということもあった。魔竜の剣の手の馴染み具合も手伝って、気が昂ぶっているのが自分でも分かる。昂ぶったまま、今、サティと寝台のある部屋で2人きりなのだ。

うやむやになってしまっていたが、ピウニー卿が殴られたときにそれに怒りを露にしたサティや、呪いを完全に解くことができなかったと言ったときの泣きそうな顔、…そして、初めて聞いた、死霊使いとの戦いの様子。先ほど自分の唇に触れたサティの細い指。様々な感情が胸に落ちて思わず抱き寄せてしまったが、このままサティに触れていれば、全てを奪ってしまいそうだ。だが、どうしてもこの体温を、柔らかな身体を、離すことができない。

抱きしめている腕の中でサティの力が、ふ…と解けた。

「どうしたの、ピウ？」

サティがピウニー卿を見上げてきた。

ピウニー卿は自分を見上げるグリーンの瞳を受けて、思わずその唇に自分の唇で触れる。腕の中で一度サティが身を引きかけた…が、そっと目を閉じたのが分かった。ほんの少しだけ唇を緩めて、もう一度…今度は深く。幾度か角度を変えて、喘ぐように互いの唇を重ねる。拒まれるかと思ったが、サティがぎこちなく応えてきたことが、ピウニー卿の枷を静かに外した。

もっと奥深いところに触れたくてサティの舌を探し始める。ピウニー卿がサティの濡れた温もりに絡まるように触れた瞬間、腕の中の身体が戸惑うように反応したが逃げない。恐らく、慣れていないのだろう。こういう情を交わすのは初めてなのかもしれない。それでも、ピウニー卿に応えようとするサティの動きがいじらしい。

今度は、ネズミにも猫にもならず2人は触れ合っていた。今までずっと側にいたのにも関わらず、初めて味わうといってもいい好きな女の濡れた唇。その柔らかさと香り。細い首筋の吸い付くような肌触り。胸の詰まるような激情を感じて、ピウニー卿はサティの身体を抱き寄せたまま、寝台へと押し倒した。

027．トラウマになりますよ

ピウニー卿とサティが入ってしまった寝室の扉をちらちらと見ながら、うろうろと、なにやらヴェルレーンは落ち着かない。

「…なにさっきから、落ち着かないんだい、ヴェルレーン。」

剣の賢者が苦笑しながら、ヴェルレーンを見遣る。ラディゲまでもが眉を潜め、どことなくヴェルレーンを咎める表情だ。

「無粋なヤツだな。」

「違いますよ、ラディゲ殿。」

「俺は別に何も言っていない。何が違うんだ。」

ふん…と詰まらなさそうに鼻を鳴らすラディゲに、ヴェルレーンは「ああ…」と、なぜか哀れそうな溜息を付いた。

「…剣の賢者殿。」

「ああん…？」

「どう思われますか。」

ヴェルレーンの問いかけに剣の賢者は腕を組んだ。天井を仰いで、難しい顔をする。

「あー…、男としては、時間的にどうなんだい？」

「そりゃあ…残り時間を計算した場合、素早く行動に移せば間に合わないことはありませんよ。…ですが、素早く行動に移す…というか、お2人を見る限り、そういった…いわゆる、がっつくタイミングではないのでは？　もっとこう…情緒的に時間をかけて攻めるべきかと思うのですが。」

たまたま人間に戻った瞬間を見たヴェルレーンは、てっきり2人が既に深い仲なのかと思っていたが、あの夫婦喧嘩？を見るにどうやら違うらしい…という結論に至った。

「タイミング的にはそうだろうけどねえ…。」

「男としては、ここで中途半端な行動に移すことは避けるべきですよ。僕だったら、肩を抱き寄せて言葉をかける…までで止めますね。男には、理性が利かない時がありますから。」

「あんたさ、割とそういうところは融通が利くんだね…。…ま、ピウニーみたいなむっつりクッソ真面目な男は、爆発すると厄介そうだよ。変に言葉がかけられずもやもやと時間を無駄に過ごした挙句に、やっぱり止められませんでしたーとかさ。」

言いつつ、剣の賢者はラディゲ以外の全員が認識している心配事をずばり口にした。

「タガが外れたところで時間切れにならなきゃいいんだけど。ピウニー的に。」

「そう思うなら、寝室に2人きりにしなきゃいいじゃないですか。いい雰囲気になれと言ってるようなもんでしょう、あれじゃあ。」

「ああいう荒療治が必要なんだよ、あの2人には。」

「本懐遂げないと療治にならないでしょう。…楽しんでませんか？剣の賢者殿。」

「あ、分かる？」

にんまりとほくそ笑む剣の賢者を見て、…この人だけは絶対敵に回したくない…とヴェルレーンがつぶやく。

「おい、何の話だ。」

剣の賢者とヴェルレーンの意味深な会話に、ラディゲが難しい顔をする。

「もうすぐか。」

室内の人間がラディゲに答える前に、珍しく杖の賢者が言葉を発した。

そのとき。

寝室の扉の向こうから、悲痛な声が響き渡った。

「くっそ…！…真の敵は時間かおのれーーーーーーー！！」

その声を聞きながら、ああ…とヴェルレーンと杖の賢者は額を押さ

える。なんだ、今のはピウニー卿の声か?…と、1人事情の分からないラディゲが室内の全員を見渡している。

「…寝台に押し倒して、3拍目と見たね、私は。」

「それトラウマになりますよ、僕だったら。」

ヴェルレーンの言葉に、杖の賢者が大きく頷き同意を示した。

しばらく経ったあと、すごいスピードでサティがピウニー卿を咥えて部屋にやってきてヴェルレーンがくしゃみした。サティはピウニー卿を適当なところにペッ…と降ろすと、剣の賢者のところに飛んできて、背中に頭をぐいぐい押し付けてじたばたと悶絶している。どうやら隠れようとしているようだ。

「おいおい、サティ。こーら、隠れたいならちょっと待ちな。」

剣の賢者はサティを抱き上げて立ち上がると、部屋にかけてあったピウニー卿のマントにくるんでソファに置いてやった。サティはその中からじー…と警戒するように外を窺っている。布の隙間から僅かに覗くグリーンの瞳は瞳孔全開だ。ちなみにピウニー卿は床に落とされて、燃え尽きたようにうなだれていた。サティはあまりの恥ずかしさに部屋を飛び出してしまったのだ。ピウニー卿もついつい一緒に運んできてしまったのは、日常化してしまった癖のようなものだろう。

ああ、本当にネズミと猫に変化するのか…と、ラディゲは半信半疑だった話を信じたと同時に、皆が心配していたことが何のことなのかを悟った。確か、人間でいられるのは8時間と言っていたか。

「夢中になるのは分かるが、時間計算しろよ…。」

…確かにトラウマになるな…と、ラディゲは思った。

ピウニー卿の栄誉に嫉妬していた自分が、今となってはなんだか遠い。

＊＊＊＊

「グラネク山に登る。」

…そう言い出したのは、ラディゲだった。互いの身の上を話し、剣を合わせたことで納得したのか、ラディゲはそれ以上ピウニー卿を責めなかった。ただ、呪いが解けたら王宮には顔を出せ…と付け加えた。

「本当に魔竜がよき竜ならば、その周辺の魔を調査してみようと思う。それに自分の目で見なければ納得できない。」

「…そうか。私は予定通り理の賢者の元へ出向く。」

「…ピウニーア。」

「なんだ。」

一晩明けて、ラディゲは杖と剣の賢者の家を発つことになった。

今、ピウニー卿とサティはネズミと猫の姿で、２人並んで柵の上に立っている。仲直りしたのかうやむやにしたのか、２人はひとまず元の通りの仲に戻っていたようだった。ただ、それまでの間の…特にピウニー卿から噴出される何ともいえないオーラは、ラディゲで

すら、哀れに思った。あれが竜殺しのピウニー卿の後姿か…と。

それはさておき、ラディゲがネズミのピウニー卿に一歩近づき、鋭い瞳で顔を寄せた。

「もう分かっているとは思うが、第5師団と…宰相、バジリウスには気をつけろ。」

「…バジリウスか。」

ピウニー卿の口元がピクリと動く。

「魔法師団の第5師団は、宰相の口添えで出来た師団だ。宰相自身も研究に関わっているほどな。それに、あの調査書…確かに、ああいう情報が俺のところに来るのはおかしくは無いが…、団長のところに報告に行く前に宰相と…バジリウスと直接接触できたのは、タイミングがよすぎる。」

当時は自分の意見が採用されたことに有頂天になり、そのようなことは気付かなかった。バジリウスは確かに有能な騎士とはよく交流を持つ人物で、ラディゲも初めて話す…というわけではなかった。当時、自分のところに調査書が来て、その直後に、全く別の名目で呼び出されたのだ。…そこで魔竜の件を相談してみたところ、「陛下に直接進言してみてはどうか。」…と提案された。

「一連の流れを宰相は知っている…と？　もしそうだとしたら、何故バジリウスから直接国王に提言しなかったのだ。あるいは団長を通すこともできただろうに。」

「さあな、宮廷に遠い者を選んだのかもしれん。いずれにせよ、俺

も浅はかだった。…とにかく気をつけろ。目的が分からんだけに、厄介だ。」

「そうだな…。」

苦々しい顔のラディゲをピウニー卿は見上げながら、髭を撫でた。

「ラディゲ、国にはいずれ戻るのだろう。」

「当然だ。俺はオリアーブの騎士なのだから。」

「そうか。」

「じゃあな。またいずれ。」

「ああ。」

別れの言葉は簡潔に終わり、ラディゲは歩こうとして、足を止めた。不意に、ピウニー卿の隣に並んでいる猫に目を止める。首を傾げているその小柄な猫の脇を片手で掬った。

「ちょっと、何！」

「ピウニーア、サティ嬢を少し借りるぞ。」

「な…、おい、ラディゲ、待て！」

ラディゲはじたばたと暴れるサティの両脇を押さえたまま、ピウニー卿の声が届かないところまで歩く。

「ちょっと！離してよ！」

「おい引っ掻くな、噛むな！…おい、あれを見ろ、あのピウニーアの顔。」

「は？　何言ってるのよ。」

ピウニー卿がすごい勢いで登っていた塀を降りようとしているところを、「ちょっと！　危ないですよ、ピウニー卿！」などと言われながら、ヴェルレーンに鷲掴みにされている。それを見ながら、ラディゲは鼻で笑った。サティに視線を移す。

「…女にうつつを抜かして…などと言って、悪かったな。あんたを侮辱するつもりは無かった。」

「え？」

ラディゲは真摯な瞳でサティを見つめていた。あれについては、侮辱されたとは思わなかった。それよりも、ピウニー卿に関係ない呼ばわりされたことの方が腹が立っていたし、はっきり言ってほとんど聞いていなかったのだ。一体、なぜラディゲはこんなことを言い出すのだろう。

「他意は無い。騎士として、女子供は保護の対象になるだけだ。」

「別に侮辱されたとかは思ってない。」

「ならいい。…あの時、関係ないとピウニーアが言ったのは、男のみっともない争いを大切な女に見られたくなかったからだろうよ。」

「大切な、女…？」

「違うか？　名誉や矜持、忠義は俺達の大事なモンだがな、傍から見れば滑稽な争いだ。男には、女には分からないつまらない見栄やプライドがあるんだ。それを分かってやれ。」

「…なんでそんなこと私に言うのよ。」

「さすがにアレは同情の余地があるだろう…。」

ぼふ…とサティの毛皮が膨れる。アレ…というのは、アレのことだろう。何があったか…などという話、一言もしていないが、全員に何か生温かい視線で見られていることにサティは気付いていた。改めて同情とか言うな！　デリカシーの無い男だな！

そもそも、…あれは、本当に思い出しただけで顔から火が出そうだ。基本的に、ああいう状況下でのお作法なぞ、（何故か）師匠が取り揃えている恋愛小説の中でしか見たことが無い。とりあえず全く知識が無いわけでは無かったのは、師匠のおかげです！　ありがとう師匠！

…などという余裕があるはずもなく。あそこまで深いとか…。…そもそも、サティはピウニー卿の動きにどうやって応じればいいのか分からず、でも温かくて心地よくてしがみつきそうで、何かしら反応しないといけないと思って、いやむしろ何かしたいと思って、それで…その…ピウニー卿の舌にそっと触れてみたら何故か急に彼の雰囲気が変わって、あっというまにピウニー卿が上にいて、服着てるのにいつも裸で元に戻るときよりもずっと近くて、ピウニー卿の唇があんな風に触れてきて、何が一番恥ずかしいって、あんなところで終わっ…

うあ”あ”あ”あ”あ”あ”…
ダメだダメだダメだ。思い出したら毛皮が逆立つ…。

「いだっ！！…ちょ…本気で刺しましたね今！　ピウニー卿、ちょっと！」

ヴェルレーンの手を剣でちくりと刺してなんとか捕獲から逃れたピウニー卿は、四肢を懸命に動かしてこちらに駆けてくる。

倍くらいに毛皮を膨らませて、何故か（猫だが）犬掻きのような仕草で、パッタパッタともがいているサティをしばらく眺めていたラディゲは、ヴェルレーンの声が聞こえて、静かに下ろしてやった。
ピウニー卿がサティの傍らまでやってきて足に触れると、先ほどまでのあれやこれやを思い出して、サティの毛がまたもや、ぶおおおおと膨らむ。

「サティ！　どうかしたのか！？」

その様子を見て、慌てたのはピウニー卿だ。小さな頭でラディゲを見上げると、後ろ足でトン…と苛立たしげに地面を叩いた。

「…ラディゲ、どういうつもりだ！」

「別に、どうもしていない。」

ラディゲは肩を竦める。

「サティ、ラディゲに何か言われたのか？」

「べ、別に、何も言われてないわよ。」

「しかし…！」

「もう、ピウニー大丈夫だってば！」

おろおろしているピウニー卿と、いつになく緊張しているサティ。
2人の姿を確認すると、ラディゲは背を向けた。

「じゃあな、せいぜい仲良くやれ。」

そういって、ラディゲは自分の馬と共にグラネク山へと向かう。

＊＊＊＊

ピウニー卿を剣で負かせることは出来なかったが、あたふたさせることに成功したラディゲはどことなく満足気だった。それにしても、あのピウニーアが…な。あの男は、精悍な面差しと華やかな出自もあって、女が放っておかない男ではあった。

だが、本人に浮いた噂のひとつも無く、少なくとも女に関してはクソ真面目で堅物な男だったはずだ。付き合った女もいるにはいるのだろうが、結局は国王の命で旅に出ることが多く、それを理由に深い付き合いになった女は居ないというのがもっぱらの噂だ。噂ではあったが、ほぼ真実に近いのだろう。酒の席で女の話になっても当たり障りの無い相槌を打つ程度だ。

それなのに。…ラディゲは思い出して、可笑しさがこみ上げてくる。

あのとき、「女にうつつでも抜かしたか。」…と言った自分に、ピ

ウニーアは信じられない言葉を言ったのだ。

『……そうだな。』

…と。だが、こうも言った。

『その女を守りきるのが、俺の騎士としての矜持だ。』

…と。

開き直ったかとも思ったが、そうではあるまい。あれはいつか国王の下へ馳せ参じるに違いない。完全に呪いを解いてから国王に姿を現したいと願っているのは、宮廷への配慮もあるのだろうが、恐らく、元を正せば女のためだ。国に女を連れて帰ったとき、誰にも隠れることなく正々堂々と守るために。

「忌々しい男だ。」

言いながらもラディゲは笑った。

いつかそれは叶えられるとしても、今はせいぜい、男の熱情を持て余すといい。

028．マスクしろマスク

「…なぜ、貴公が付いてくるのだヴェルレーン…。」

「こうなったら陛下にお目通りしていただくまで、付きまといますよ！」

街道を月毛の品のよさそうな馬と、強面の青毛の馬が2頭並んで歩いている。月毛の方には、蜂蜜色の髪にすこし垂れ目の甘い顔の男が跨っている。青毛の方には、大きな荷物が詰まれており、一見何も乗っていないように見えた。だが、目を凝らせばその荷の上に小さなネズミが荷の紐を持って揺れているのが見えるだろう。とはいえ、少し離れたところから見ると、怪しい男が1人でぶつぶつ話しているように見えた。今は幸いなことに街道を通る旅人はこの男と馬2頭。そして、ネズミが一匹だけであったが。

「…元に戻ったら、馳せ参じると言っておるだろう。」

低い渋みのある声が、やれやれと言った風に答える。

「でーすーかーら、ピウニー卿がとっとと元に戻るために、協力しようと言っているんじゃないですか！」

「理の賢者殿のところに行くだけだろう。」

「僕がいれば、昼間も街道を歩けるでしょう。感謝していただきたいくら…ふぇーーーーっしょい！」

男が大きなくしゃみをして、鼻をすすった。同時に、ぶるる…と、

青毛の馬が機嫌よく鼻を鳴らし、その背の荷物がもぞもぞと動き、隙間からセピア色の小さな猫が顔を出す。猫は前足を伸ばして片方で顔を拭いた。くあぁ…と欠伸をして、袋の中で香箱を組んで座る。だが、いまだグリーンの瞳はしょぼしょぼとしていて眠そうだ。

「サティ、起きたか。」

「ん、ごめん。寝てた。」

「かまわん。こちらは特に問題ないからな。」

「サティさん！　大丈夫ですとも、僕がついて…くしょん、はくしょん…へーーーーーーーくしょん！！」

「おい、ヴェル、マスクしろマスク。」

青毛のシャドウメアに乗るのは、ネズミのピウニー卿と猫のサティ。月毛の馬に乗るのはヴェルレーンだった。グラネク山に向かうラディゲを見送り、ピウニー卿とサティも剣と杖の賢者の館を辞し、とうとう理の賢者の所に出向くことにしたのだ。剣の賢者は「ああ、寂しくなるね。またおいでよ。」と朗らかに笑い、杖の賢者は相変わらずの穏やかな無表情で見送ってくれた。…そして。

「マスクなんかしたら僕の顔が見えなく、ふぇくしょん、ふぁくしょん！！」

…なぜか、ヴェルレーンが一緒に来る、と言いだしたのだ。ピウニー卿に会ってその状況を知ったのに、このまま何の手土産もなく国王の下に戻ることは出来ない…と主張した。理の賢者に呪いを解いてもらい、絶対に王都に連れて行くと言う。どのみち、人間の姿の

仲間が出来るのはありがたい。街などでも動きやすいし、昼間でも堂々と街道を出歩けるでしょう、安全ですよ！…と言われれば、確かに一理ある。

自分が元通り人間であれば、ヴェルレーンなどに頼らず、不便など無くサティを守ることができるんだが…。

ピウニー卿は、深々と溜息をついた。

だが。

「んー…。」

ピウニー卿は、ふかふかのサティの喉もとの毛皮に背中を預けた。猫のサティに包まれているのも、…そう悪い気分ではない。

「ピウ…ひげ、髭くすぐったいってば。」

「勝手に揺れるんだ、仕方が」

「あーーーもーーーー、猫とネズミの癖にイチャつかないでくだ…っしょん、ハクショーーーン！！」

「だから、マスクをしろというのに。」

＊＊＊＊

2人＋1人が、理の賢者の館に到着するのも、もうすぐだ。

オリアーブの王宮。図書室の端にある、騎士団や魔法師団の公式記

録が保存されている書庫で、ペルセニーアは魔法師団に所属している魔法使いを調べていた。

兄ピウニーアが共に旅をしているサティという女性と、その女性が関わったという魔法使い同士の戦い。その話を聞いたときに、ペルセニーアは魔法研究所で起こったというその事件を知らなかった。彼女は黒翼騎士団の所属だ。そして、黒翼騎士団は魔法師団と関係が深く、魔法師団は魔法研究所の実戦部隊と言っていい。魔法研究所でそれほどの事件が起こったのであれば、黒翼騎士団にも多かれ少なかれ影響があったはずだ。

そこで、1年ほど前に、魔法研究所が理の賢者に依頼した案件を中心に調べてみたのだ。

それほど多くは無かった。大きな魔道器への魔法力充填、より魔力を制御しやすくするための魔法陣の見直しや研究、研究会への参加や講義の依頼だ。それらの依頼の内、受けているのは半数以下、さらに理の賢者本人が参加するものはほとんど無く、もっとも作業を行っているのがサティだ。それでも1ヶ月に1度、多くて2度程度。

＜アーイェク・オ・イラウォート・イ・シェード・サティ＞
（理の賢者の弟子、サティ）

そのように魔法語で記述されている案件がいくつかある。当然のことながら最近は見られない。サティの名前を最後に見た案件、それは理の賢者が共に来訪している珍しい件だった。変質魔法（有機物・無機物の耐性を強化させる等の魔法）についての講義だ。魔法師団のうち、第1師団の師団長からの依頼。その件から以後、記録にサティの名前は出ていない。

ペルセニーアは、第1師団の師団長にそのときの話を聞いてみた。
もちろん、事件があったかどうか…という話を聞いたわけでは無い。
講義はどんな様子だったのか、とか、そういう他愛も無いことだ。
1年前の記憶だったが、理の賢者自らが足を運んだ講義だけあって盛況だったそうだ。そういえば…と付け加えられたのは、講義後の話だった。理の賢者と弟子の2名は、ついでに…と第5師団に呼ばれたらしい。

第5師団に呼ばれた…と。私的に呼ばれたから、記録には残っていないのだろう。もし事故があったのなら、このときか。…記録に残っていない訪問であればたどり着くことは出来ない。

第5師団には師団長が居ない。親しい魔法使いも居なかった。…そこで、ペルセニーアは魔法師団に所属している魔法使いの記録を探ってみたのである。聞いた話によれば、サティだけではなく相手の魔法使いも滅んでいるはずだ。所属が外れた…もしくは死亡した魔法使いは、いないだろうか。

この1年、死亡した魔法使いは居なかった。だが、退役した魔法使いが数名居るようだ。そのうち、第5師団に所属しているものがあった。

＜イルスーク・イラ・エドゥ・ユーク・イ・シェード・ヒューリオン＞
（???の弟子、ヒューリオン）

そのように魔法語で記述されている。ペルセニーアには見慣れぬ魔法語で、意味は上手く読み取れない。この魔法使いの師匠は「イルスーク・イラ・エドゥ・ユーク」となる。これは人の名前とは限らない。魔法使いは、自身を示す魔法語の組み合わせを作り、それを

上級魔法に組み込んだり、魔法使いとして名乗る場合に使う。この弟子は師匠の名前をその魔法語で記録しているのだろう。家名を持たない魔法使いにはよく見られることだった。

誰の弟子なのか。もちろん、ペルセニーアは多く魔法使いが所属する魔法師団の全員の名前を、覚えているわけではない。ヒューリオンという名前も、ペルセニーアには馴染みの無い名前だった。サティなら誰か分かるだろうか。…ペルセニーアはその名前を記憶に留めると、記録書を閉じた。同時に、コンコン…と、ノックの音が聞こえる。

ペルセニーアは記録書を書架に戻してから返事をした。開いた扉から、長身で細身の男が顔を覗かせる。

「おや、これはペルセニーア殿。」

「宰相閣下。」

ペルセニーアは敬礼の形を取る。ペルセニーアの前に現れたのは、バジリウス宰相。オリアーブ国を支える重鎮の1人である。バジリウスは手にいくつかの本を持って部屋に入ってきた。

「何か調べ物ですかな?」

「過去の騎士団の編成について、少し。」

「気になることでも?」

「護衛周りの編成について報告資料を作るために、過去の編成やそのときの出来事が参考になるかと思いまして。」

嘘ではない。ペルセニーアは、ここに来た表向きの目的を言った。
バジリウスは「そうか」…と小さく頷く。

「お勤めご苦労ですな。」

「いえ、恐れ入ります。」

ペルセニーアは低い書架の上に置いていた騎士団の資料を手に取った。それを見たバジリウスは少し首を傾げる。

「お戻りですかな?」

「はい。今からジョシュ殿下の元へ参ります。」

「なるほど。今日は殿下に何かご予定はあっただろうか。」

「今日はもうご予定はございませんが。」

「ならば、少し顔を出そう。共に行っても?」

「はっ。」

バジリウスは手にしていた本を書架に戻し、ペルセニーアと共に部屋を出た。廊下を並んで歩きながら、バジリウスが問いかける。

「ピウニーア殿が竜の討伐に向かってから、1年が過ぎましたな。」

「はい。」

唐突に出てきた兄の名前に一瞬心臓が跳ね上がったが、さすがに動揺は表に出さない。

「私は、彼がいまだに居なくなったということが信じられないのだよ。あれほどの騎士が…。」

「そのように言っていただき、光栄です。」

その遠慮がちな物言いに、バジリウスは苦笑する。

「いや、不躾なことを言ってすまない。…あれから1年経ち、魔法師団と騎士団の協力体制も強化された。ピウニーア殿が魔竜を滅ぼしてくれたおかげだ。だが、もう1段階強化させたい。もし機会があれば、理の賢者殿にも教えを請いたいものだな。」

「理の賢者殿に？」

「ああ。1年前、理の賢者殿が変質魔法について講義を行ったことがあるのだが、大変素晴らしいものだった。何度か依頼をしたのだがね、断られてしまっているのだ。まあ、世俗に関わりたくは無いという、賢者殿の気持ちも分からないではないが…。」

1年前の講義…というのは、ペルセニーアが調べた例の講義のことだろう。随分有名な話らしい。理の賢者の話をするときは、バジリウスは本当に残念そうだった。自身も魔法に関わっているからか、その瞳には憧憬の気持ちがこもっている。

バジリウスは現在の騎士団と魔法師団の連携を作った人である。先代国王の時には騎士団ではなく魔法師団に所属していたはずだ。現国王より少し上の年齢だったか。信頼も厚く、文武の両道にすぐれ

たバランスの取れた内政は、野心家の多い宮廷にあっても一目置かれていた。王妃の懐妊によって揺れている現在の貴族達が、表立っては何の手出しもしてこないのは、この宰相の尽力によるものだろう。

「宰相閣下は、魔法研究所に出向いたりなさるのですか？」

「どうしてかね？」

「…理の賢者殿の講義が素晴らしい…と。」

「ああ。」

バジリウスは、瞳を細める。

「昔魔法師団にいた頃は、これでも魔法語の名前を持っていたのだよ。」

「先王陛下のときは、魔法使いとして名を馳せておられたとか。」

「はは。名を馳せたというほどでもないが。魔法語の名は師匠がくれた名でね。」

宰相閣下の師匠とは、どのような人なのだろうか。バジリウスはいつも冷静で何を考えているのか分からない表情の男だが、珍しく楽しげだ。

「バジリウス・イルスーク・イラ・エドゥ・ユーク。…古代魔法語で、『知によって苦悩も善行と為せ』…という意味なのだが…私が宰相として、自らの心に常に戒めている言葉でもあるのだよ。」

そういって、バジリウスはペルセニーアへ、ふ…と笑った。

＜イルスーク・イラ・エドゥ・ユーク＞

（知によって苦悩も善行と為せ）

思いがけず降って沸いた、ヒューリオンという魔法使いの師匠を表す魔法語だった。

唐突につながったキーワードに、ペルセニーアが表情を崩さなかったのは流石だ。バジリウスが魔法使いだったことはよく知られている。魔法語の名前も調べればすぐに分かることだ。そして、それに連なる弟子の存在も。それほど驚くべきことでは、ないはずだった。

そもそもヒューリオンという魔法使い自体、サティに関与しているのかどうかは不明だ。普通に考えたら考えすぎのような気もする。

…だが。

なぜ、これほどまでに、引っ掛かるのだろう。

それはほとんど、騎士の勘と言ってもいいほどの些細な引っ掛かりだ。

バジリウスもそれ以上は魔法使いの話はせず、話題はジョシュの近況に移っていく。ペルセニーアは自分の焦りがバジリウスに伝わっていないことを祈り、話題が変わったことに安堵した。

［小話］　ラディゲ・ラファイエットの場合

ラディゲは自分の馬を麓に預け、単身グラネク山へと向かっていた。

旅の気持ちはグラネク山へと向かう。あの時、自分の名誉のために手を出した魔竜。ピウニー卿らはその魔竜に会い、和解し、剣と魔法を授けられたという。気持ちの大半は、一体何のためにこの魔竜討伐になったのか、という疑問だったが、その「善良な竜」というのが一体どのようなものなのかをこの目で見たいという好奇心も無くは無かった。

山を登っていく道程は覚えのあるものだった。違うのは、あの時、仲間たちと登った山道は妙に重たい雰囲気が占めていて、今のように厳粛なものではなかった。攻撃してくる魔物も多く、魔竜に合間見える前に幾度も戦闘を重ね、疲労していた。だが今は、周辺に魔物の気配はするものの、敵意を向けられることは無い。ラディゲは魔法はほぼ使えず、魔力のバランスというものは分からない。ただ、歴戦の騎士である彼に、今の周辺の空気が安定していることは分かった。

「着いたか。」

グラネク山は、山頂が横に切られたようになっている。大きくは無いが、平たい台地である。低い緑の草が生え、ところどころむき出しの岩が覗く。その一際大きな岩。ぽっかりとそれのみが目立つ、あの袂に魔竜が居たはずである。あの時は、この山頂台地に立っただけでも、肌がびりびりと震えるプレッシャーだった。だが今はどうだ。空気は清らかで、周りには生き物の気配がするのに穏やかだ。

ラディゲは魔竜の居た岩へと足を向ける。

バサ…！

大きく鈍い羽音がいくつも響き、ラディゲは空を仰ぐ。数匹のワイバーンが遠くで飛び立った。空と自分との距離を測り、静かに剣の柄に手を掛ける。…だが、ワイバーンはそのままラディゲの上を飛び去り、台地の向こうへと降下していった。攻撃性が無い…というのは本当のようだ。ラディゲは止めていた足を再び動かす。

そう長くかからず、岩の袂までやってきた。

あの時倒したはずの魔竜は、骨の一本も残ってはいなかった。

ラディゲは魔竜が倒れた場所にそっと膝を付き、地面に触れてみる。魔力を感じることはできないはずだったが、そこには確かに心地よい緊張感のようなものを感じた。触れて感じる…というのもおかしな話かもしれないが、魔力に鈍い自分にこれほど感じさせるのだから、あの魔竜という存在はやはり大きなものなのだろう。改めて、よくあれを倒したものだと思える。

「マハ・マハジューレ…」

ラディゲが、サティから教わった竜の名をそっと呟いた。

グオオオオオオオオオン…！

突如頭上が翳り聞こえてきた咆哮に、ラディゲは弾かれたように立ち上がり、剣の柄に手を掛けた。

その姿をあざ笑うかのように、黒い艶やかな鱗に覆われた竜がラディゲの眼前に現れる。

「魔竜…マハ・マハジューレか…。」

『いかにも。我はグラネク山の魔の竜。ウィロー・ナ・ムラン・イアディ＝マハ・マハジューレ。人の子よ、かような場所に何をしにきた！』

覚えのある緊張感。己を試されるかのような威圧感。

異なるのは辺りに漂う清冽な空気。

正気を戻した魔竜の、正しい力の流れ。

そして。

狼程度の大きさの、魔竜だった。

＊＊＊＊

…。

予想外の大きさに、ラディゲは魔竜の威圧感も忘れて、地面に降り立ったその存在を見下ろした。もともと、彼は魔力を魔力として受け止めるわけではなく、雰囲気や戦いの勘で受け止める男だ。目の前の存在から受け止める魔力は、少しでも魔法を齧ったものならば大いなる魔力と受け止めただろうが、ラディゲにとっては清浄で美しく、心地よい緊張感だった。ラディゲは、他の誰もが言わなかった率直な感想を言った。

「また、随分可愛らしいな。」

『……か、わいい？』

「ああ…すまん。俺は、ラディゲ・ラファイエット…という。」

『ラディゲだと？』

グルル…と、魔竜は喉を鳴らした。ジロリと金色の瞳でラディゲを見遣る。その視線を受け止めながら、ラディゲはここに来た経緯を説明した。ピウニー卿らから話は聞いている。目の前の竜が善良なのかそうではないのかは、自身ではまだ判断付かないが、いきなり剣を抜いて倒すべき存在でも無いように思えた。何より、小さい。見下ろす程だ。このような存在に振るう騎士の剣を、ラディゲは持っていない。

「お前と、お前を取り巻く魔物を調べに来た。」

『調べる？』

「ああ。」

『どうやって。見れば、そなたはほとんど魔力を感じられぬ身体ではないか。』

言われてラディゲは腕を組み、「そうだな。」と頷く。

「魔力は知らんが、だが、本当にこの山の者達が善き者達なのか、この目で確かめねばやはり分からないだろう。俺はそういう性質なんだ。」

魔竜は瞳を細めてラディゲを見上げた。ラディゲは魔竜ではなく、広い台地を眺めている。

『ラディゲ…そなたは、かつて私を倒しに来た者じゃな。』

静かで厳かなその声に、ラディゲは視線を落として金色の瞳を見返した。

「そうだな。」

『そうか。』

魔竜はラディゲから視線を外すと、先ほどまで彼が見ていた台地に視線を向けた。魔竜の故郷。自らが生まれたところで、自らが暮らし、自らが守る場所。

魔竜は己がどうしてここに居るのか知らない。もっとも古い記憶はこの国が建造された頃だ。親や兄弟などは知らぬ。どうして生まれたのかも知らぬ。ただ、魔法や魔力の知識も、自らの名前も、知らぬうちに、知っていた。何故なのかと疑問に思ったことはない。そういう存在なのだ。

そして、魔竜が知るほかの生き物は、この山に住まう魔物たちと…そして、自分を時折訪ねてくる物好きの人間の友だけ。その人の子の友も来なくなって久しい。

こうして、人の子が自分を訪ねてくるなど、…ピウニー卿らが魔竜討伐に来た以外は、もう何百年も無いことだった。

「憎いか？」

『何がじゃ。』

「俺はお前を倒そうとした。止めを刺したのはピウニーアだが、俺の剣はお前を少なからず傷つけただろう。それに…」

しゅう…と魔竜は息を吐き出した。笑ったようだった。

「それに、ここにピウニーア達がやってきたのは、俺の出した調査書のせいだ。」

ラディゲの声が僅かに苦しげに歪んだ。自分の進言がこの魔竜の呪いにどれだけ関与しているかラディゲには分からないが、少なくとも気付かないうちにその企み事の歯車のひとつに組み込まれていたのだ。

『だが、我の爪と炎もそなたを傷つけた。』

「…。」

『…我は…、我は、怒りの矛先を間違えたりはせぬ。』

魔竜は目を閉ざした。

あの戦いは、苦しいものではなかった。むしろ、自分の苦しみを終わらせるための戦いだった。自分に向けられるすべての刃に感謝をし、自分が向けてしまうすべての牙を憎んだ。憎むべきはそれを導いた、忘れえぬあの魔法使いなのだ。ラディゲ達ではない。

『我はそなたら一行が来たとき歓喜した。我の苦しみがこれで終わ

る…と。我の爪で傷つけ、炎で焦がすことも無くなる…と。それが終わり、こうして人の子と再び静かに見えることができたのだから。』

「ピウニー卿のおかげだというわけか。」

『いや。』

思わず自嘲気味にピウニー卿の名前を出してしまい、出してしまった瞬間舌打ちしそうになった。だが、ぶつかったのは魔竜からの思いがけない視線だった。思わずラディゲは、魔竜を見下ろす。魔竜はその視線を外すと、金色の瞳で再び台地を見つめた。

『…この山で。我の生まれた美しいこの山で、最後に人の子と見えたのが、あの戦いではなかったことが我は嬉しい。』

「マハ…。」

魔竜がラディゲを振り返った。黒い鱗に金色の瞳が、まるで宝石のようにラディゲを射抜く。

『再び人の子が訪ねてくれて、争うことなく話ができたのじゃ。これほど嬉しいことは無い。』

「…そうか。」

ラディゲはあの戦い以来、初めて己を認められたような錯覚に陥った。ラディゲとて分かっていた。いつまでも他の騎士の名誉と己を比較して、卑屈になるのはあまりにも幼稚なことだ。…だが、それでも、こうして己の剣を誰かに認めてもらいたかった。そんな自分

の子供めいた気持ちに気付いて、竜の金色の視線と自分の視線を絡める。

その先にある、竜の表情など読めるはずも無いのに、自分を見て不意に笑ったようだった。なぜかラディゲの鼓動が跳ね上がり、意味不明に目を逸らす。その視線の動きに追い討ちをかけるように、魔竜の声が聞こえてきた。

『ところで、ラディゲ・ラファイエット。』

「なんだ?」

『知っておるか?』

「何をだ?」

『竜には、繁殖期というものがあるのじゃ。』

「……は?」

『我には今力が足りぬが、それもすぐに元に戻ろう。』

「…おい。」

ずずい…と、魔竜がラディゲとの距離を詰めた。岩を背にしているラディゲは追い詰められる。

「ま、待て!」

『ん? 我はまだ、何も言って無いぞ?』

「…む、い、いや、そうだが、その…。」

『ラディゲ、顔が赤いな。なぜじゃ？』

魔竜がバサリと羽根を広げる。金色の瞳に魅入られたように、ラディゲは動けない。いや、実際には動けるのだが…なぜか、その瞳から目を離すことが出来ないのだ。むしろ、その金色をじっと見つめていたい。そういう衝動に駆られて…

「違う、何をやってるんだ俺は！お前は竜だろう！」

「そうじゃの。じゃがな？」

マハはくす…と小さく笑った。声色が変化したようだ。

そして、ラディゲの頬に、細いたおやかな腕が伸びてくる。不意打ちだった。

「お、お前…マハ？」

「それ以外に何がいるのじゃ。ここには我とラディゲと2人だけ。」

頬を暖かい手が包み込む。それはまるで人の手のようだ。いや、人の手そのものだ。よく見ると肩や手首の一部に鱗に覆われた翼の一部が生えている。だが、大方の部分は白い肌だった。ラディゲが思わずその腕の持ち主…マハを見る。豊かな黒髪は地面まで届き、うねるように身体に巻きついていた。何も身に着けていない豊満な身体は髪の毛だけでは隠しきれず、ふくよかな胸の膨らみや細い腰から下にかけて、女そのものの曲線が露になっている。

そして。

ラディゲの顔に、魔竜の…いや、マハの顔が近づいた。金色の瞳は意外と大きく、黒い睫は驚くほど豊かだ。耳は人のものより長く尖っていて、さらにその耳の上からは腕や手首についているような翼の一部が生えている。唇は男を誘うように濡れていて、そのくせ、初心な乙女のように珊瑚色をしていた。その唇がそっとラディゲの唇に近づく。

「ま、待て、ちょっと。」

「なんじゃ？　我では不服か？」

「いや、そういう問題じゃないだろう！　マハ、お前、雌か！？」

「…雄に見えるのか？」

きょとんとした顔で、マハは首を傾げた。その表情は驚くほど人間くさく…可愛い。ラディゲは混乱の余り、とぼけたことを聞いてしまった。違う。あー、いや、そうではなくて…。

「言っておくが、誰でもいいというわけではないぞ？　たまたまそなたが登ってきたから…とか、そういうわけではない。」

問おうと思っていたことの答えを、先に言われてしまう。

「ならば、なぜ…。」

「伴侶を見つけた竜はそのときから繁殖期を迎えるのじゃ。そして。」

マハの柔らかい唇が、少し乾いた男のそれを濡らすように重なった。少し浮かして、小さく囁く。

「伴侶となるものが受け入れる意志が無ければ、伴侶と同じ姿にはなれぬ…。我がラディゲと似た姿になったのは…」

「似た姿」というのは、人に近い姿…ということだろう。

「な、お、俺が受け入れたと!?」

「違うのか…?ラディゲ。」

マハの両手が、ラディゲの胸板に添えられそのまま体重をかけてきた。声のトーンがしょんぼりと落ちていくのを聞いて、ラディゲは思わずマハの肩を掴む。

「い、いや、しかし。」

ラディゲにとって迫ってくる身体はそれほど重いわけでも大きいわけではないのに、その身は押されっぱなしで、岩を背にしたままだんだんと下降していく。ラディゲとて、女の身体をどう扱えばいいのか分からない、などという可愛らしい男ではない。…しかし、しかしである。魔竜の姿を確認しようと思って山に登り、竜に突然誘惑されてそれに迂闊に乗るなどと…騎士としてそれは…。

「人の子には、情を生むのに何か理由がいるのか?　いや、違うな…。うむ、人の子の風に言えば、『人を好くのに理由が必要なのか?』教えておくれ、ラディゲよ。」

「そ、それは。」

「ラディゲ…我は竜じゃ。だが、理由は分からなくとも我は…。」

ラディゲの腰は完全に地面に落ち、岩を背に座った格好になった。マハはそこに馬乗りになると、再び唇を重ねる。そのまま柔らかな湿った感触が頬を滑り、ラディゲの耳元で止まった。マハの声は、いつのまにか愛らしい女の声になっていて、それは切なげにこう言った。

「我は、今、ラディゲとこうしたいのじゃ…。」

「ああ…くそっ…！」

ちょっと待ってくれ。なんという、これは殺し文句か？悩んでいると、マハが柔らかな身体ごとラディゲに寄り添った。

竜と人の邂逅が、世界に何をもたらすのかは分からない。

だが、今は。

マハの金色の瞳いっぱいに映る世界は、己の鱗と同じ色の髪と瞳の色を持つ男だけだった。

【小話】　ラディゲ・ラファイエットの場合（後書き）

次話も小話となります。

【小話】　ジョシュ殿下の場合

ジョシュは自身に与えられた小さな庭のベンチで、１人悩んでいた。肘置きに凭れた憂い顔は、１２歳とはいえ、すでに整っている。父王とそっくりの青紫色の瞳は開いているが、どこか困ったようなぼんやりとした表情だった。

「ジョシュ殿下、どうされました？…お加減でも？」

声を掛けたのは護衛騎士のペルセニーアだ。ピウニー卿が魔竜を討伐しにグラネク山に向かった時期と同じくらいの時期に、ジョシュの護衛を勤めている。騎士でありながら、女性ならではの細やかな気遣いが評価され、ジョシュの周辺で働く女性達にも人気の凛とした女性だ。多少の融通が利く柔軟さも持ち合わせており、ジョシュも信頼している。ただ、少々過保護なところがあった。

「いや、大丈夫。…ちょっとね。」

ジョシュは空を仰いだ。
悩みはあるが、今日は気分がいい。

今日は…というよりも、最近は…と言ったほうがいいだろうか。

少し前、サティという猫をセラフィーナがこっそり連れてきたことがある。一度脱走してしまい、ペルセニーアとパヴェニーアの手を煩わせてしまったのだが、無事捕らえることが出来た。

＜ニシャーナ・ア・ナヌーウ＞
（柔らかなる、安らぎを）

＜ナイェヒ・ア・ナヌーウ＞
（柔らかなる、平穏を）

これはそのサティが教えてくれた不思議な言葉。魔法語についてはいくつか知っているジョシュも、聞いたことのない言葉だった。古代魔法語…らしい。「これを唱えると、気分がよくなるんです。でも秘密ですよ」…と言って、教えてくれた言葉だった。確かに、この呪文?…を唱えると、身体全体のバランスが不思議と落ち着くような心持になった。

サティ。不思議で綺麗な猫だった。

セピア色の毛皮は絹のようなさわり心地。声は、華やか過ぎず淑やか過ぎず、す…と染み渡るようだった。声…と言うと、おかしいかもしれないが、彼女は確かに人と同じように話をしていた。猫でありながら、オリアーブで一番偉大な魔法使いである理の賢者の弟子だというのだ。

そして、サティは、夜中にジョシュの寝台の下の魔法陣を見つけ、ジョシュの身体が弱い理由を見破ったのである。

ジョシュの身体が弱い理由は「魔力抑制」の魔法陣のためだとサティに指摘され、自分自身もそれに気付いていたジョシュは驚くことなく、どういった対策を取ればいいのかを相談した。王太子としては浅はかな行動だったかもしれない。王太子の身体に仕掛けられた「魔力抑制」の魔法…となれば、それは酷く大きな政治的要素を含む事柄だ。その秘密を知ったサティが、この情報を利用して、国王や自分を陥れるかもしれない。…そんな可能性も理解しながら、このとき、ジョシュはなぜかこの猫を信用した。

サティも一緒だ…と言ったのだ。

自分の中にある魔力。うねるようなこの力。誰もが持っているわけではないらしい。それを無理矢理抑制し、押さえ込んでいるだけでは偏ってしまう為に、時折揺らしてならす。それはまるで、空気の薄いところで生活させられているようなそんな息苦しさで、少しでも特別なことをすれば、体の力のすべてが奪い取られていくような感覚に陥った。サティという猫も同じように強い魔力を持ち、それを抑制して生活していたことがあるらしい。

『殿下はずっと我慢していらしたのですね。』

…と、サティは言った。

『動く手があるのに動かせない。歩く足があるのに歩けない。剣がこの手にあるのに、どう使えばいいのか分からない。…そういうもどかしさを、怖さを、ずっと我慢していらしたのですね。』

…と。

『殿下は立派な王子です。大丈夫。師匠に相談してみますから。…ですから。』

サティはそのとき、王子の頬に顔を摺り寄せた。暖かい、ふわふわした毛皮がくすぐったくて、思わず頬に手をあてる。

『ですから、…今は泣いてもいいんです。怖かったですね、殿下。』

ジョシュは泣いていたのだ。

「動く手があるのに動かせない。歩く足があるのに歩けない」もどかしい気持ち。「剣がこの手にあるのに、どう使えばいいのか分からない」恐怖。王太子であるがゆえに魔力を抑制され、王太子であるがゆえに誰にも相談できず、12歳という子供であるがゆえにずっと抱えていた気持ちを、サティはいともたやすく見破った。ジョシュは自分の気持ちが零れ落ちるようにしくしくと泣いて、サティは落ち着くまで尻尾でずっと手の甲に触れてくれていた。

やがて、ジョシュは泣き止んで「教えてくれないだろうか」…と言ったのだ。

「魔力抑制を行う理由」と、そして何よりも、「自分自身の魔力をどうすれば、父王の役に立てることができるのか」と。

＊＊＊＊

「ジョシュ殿下。…国王陛下がお見えになられました。」

「え？」

思いがけないペルセニーアの言葉に、ジョシュは慌てて身体を起こした。ペルセニーアも驚いているようだ。だが、国王陛下自身がやってきたとなれば、一介の護衛騎士にはどうすることもできない。ジョシュは頷いて、ゆっくりと立ち上がる。

「ジョシュ。」

ペルセニーアが深く一礼して、少し離れた既定の位置まで下がる。現れた国王が…父が、立とうとするジョシュを手で制した。

「立たずともよい。」

「父上、このようなところまでご足労を…」

「かまわん。座っても?」

「え?」

父王がジョシュの肩を支えて、思いがけず、並んでベンチに座ることになった。

実のところ、ジョシュは父である国王が苦手だった。恐らく父は、身体が弱く満足に王太子としての執務が出来ないだろう自分を厭うているだろう。その証拠に、時折顔を合わせたとしても素気なく、当たり障りのない言葉を交わすだけなのだ。小さな頃はそれでも無邪気に父王にぶつかっていたと思うが、身体に障るからと制され、当然のことながら王太子としての振る舞いを求められるうちに、それもすっかり無くなってしまった。なにより、自身の身体の弱い理由を、父王にすら相談していない…という負い目もあり、ジョシュ自身もどのように接していいのかが分からくなったのだ。

そんな父王が、今日はどうしたことなのだろう。

「父上、今日は?」

「いや…特に用事があったというわけではない。執務の時間が余ったからな。」

父王は曖昧に、何をすればいいのか困った風に中庭を見ていたが、

やがてジョシュを伺った。

「ジョシュ、お前の部屋に猫が迷い込んだそうだな。」

「は…。」

そうか、そのことか。用事が無いのに父王が自身を訪ねてくることなどないのだ。ジョシュは硬い笑顔を浮かべて、当たり障りなく頷いた。

「ええ。この庭に、小さな猫が迷い込んでしまいまして。一晩の世話を。」

「そのときに、ヴィルレー公爵令嬢が来ていたとか。」

「はい。それもあって、私が思わず構ってしまいました。」

セラフィーナのことをあまり表に出さないのはジョシュの気遣いだろう。国王にはもちろんそれが知れ、「そうか。」と頷いたのみだった。

「ヴィルレー公爵令嬢とは、仲良くしているか。」

「え?」

思いがけない言葉に、ジョシュは目を丸くした。だが、父王の瞳は真剣でいつになく…暖かい。

「どうかなさったのですか?」

「いや…。」

父王が困った顔をしていた。こほんと咳払いをして、溜息をついている。

「その、何か困ったことは無いか？」

「困ったこと？」

父王の方が困った顔をしている。

「父上の方が何か困った顔をされていますが…。」

「そうか…？」

「母上に何か言われたのですか？」

「いや！　そうではない。ここに来たのは余の意志だ。」

「はあ…。」

「だが、しかし、妃もお前のことを心配しておった。」

「何をですか？」

「お前と…ヴィルレー公爵令嬢の事をだな…。」

国王…ジェレシス・オリアーブは、ヴィルレー公爵と妃に「ジョシュの様子はどうなのか」と何度も問う余り、「そんなに心配ならご自身で確かめてくればいいではないですか、同じ王宮にいるのだか

ら。」…と、まるで同じことを言われ、国王自身も、1人息子との距離感がこのままではいけないと省みて、こうしてやってきたのである。話題に困り、思わず、ヴィルレー公爵令嬢のことを出してしまった。

だが、ジョシュはいよいよ目を丸くした。そういうことか。国王の意図とは反して、思わず警戒して口調が堅くなる。

「セラフィーナはまだ7歳ですよ。私もまだ12歳です。今からそのようなことを言うのは気が…」

「余もそう思うのだが、あれが『ちっとも早くありません！今からちゃんと女性に対する紳士の態度というのを学んでいかなければ、あのような可愛らしい子に逃げられたらどうするのですか！』…と…。」

「相変わらず…母上は本当にセラフィーナのことを気に入っておられるのですね。」

慌てて一息に話す父王の口ぶりに、困ったようにジョシュは笑った。幸いなことに、セラフィーナは城の誰からも好かれている。父の妃である母も、まるで娘のように可愛がっている。それにしても。

はあ…と溜息をつく父王。そんな父をジョシュは見たことが無かった。いや、正確には久しぶりに見た。とても小さい頃、父と母と3人で他愛も無い時間を過ごしていたときに、父と2人でやった悪戯だったか何かを母に窘められたことがあったが、そんなときの表情だった。

だから懐かしくて、なぜか嬉しくて、思わず警戒を解いた。ジョシ

ュは、ふふふっ…と悪戯っぽく笑う。

「ならば、父上。ご相談したいことがあるのですが。」

「なんだ?」

息子からの「相談」に、父は少しばかりウキウキと、ジョシュに向き合った。

＊＊＊＊

「かわいらしいもの?」

「うん。こういうのはペルセニーアみたいな女の人に聞くのがいいって、父上が。」

結局、父上は相談に乗ってくれなかったんだよ…と、ジョシュは大層嬉しそうに笑う。「セラフィーナに贈り物をしたいんですが、あのような女性には何を贈ったら喜ぶでしょうか。」と言ったときの、父のあたふたとした顔といったらなかった。いつもは厳粛な王である父にあんな顔をさせるのも、悪くはない気分だ。そう思うのは、不謹慎だろうか。

そう。ジョシュの頭を悩ませていたもの。それは。

「なるほど。セラフィーナ嬢のお誕生日ですね。」

「うん。あのくらいの年頃の女の子は何を喜ぶのかな? 僕はそういうことにあまり詳しくないから。」

「それならば…。」

ペルセニーアは、城下にある1軒の玩具店を紹介した。小さい設えの店だがよいものを扱う素晴らしい店主がいるという、兄のパヴェニーア推薦の…ではなくて、パヴェニーアの奥方である、セシル推薦の店である。

数日後、その店の店主がジョシュの元にお勧めの品物を持って訪ねてきた。もちろん、ジョシュが国王の許可を得て呼び寄せたのである。

そこで、ジョシュが目に留めたのは、触れるとセピア色の毛並みが心地よい、大きなガラスの瞳はグリーンの、小柄な猫のぬいぐるみだった。「しんがぷーら」という種類の猫のぬいぐるみだという。同じぬいぐるみがアルザス家にあるのを知っているペルセニーアは、多少複雑な心境だったが…その事実はとりあえず伏せておいた。

ジョシュは楽しげに、そのぬいぐるみに緑色の綺麗な石のついたリボンをかけている。

きっと、セラフィーナは喜ぶだろう。

セラフィーナの顔が綻ぶのを想像しながら、ジョシュはいつになく浮き立った気持ちを隠しきれなかった。

029．イチャついてなど…

「はあ…はぁ…。も、もう駄目…。」

女は肩で息を吐きながら、傍らの石壁に手を突いた。もう片方の手に持った杖を引き寄せ、掛けている眼鏡の位置を直す。

ここは、オリアーブ王都の北西に位置する遺跡だ。今は崩れ去った古い街の名残が僅かに残っている程度で、街道からも少し外れており、人が来ることも少ない。だが、ここに残る遺跡の石…かつての建物を象っていた石材はとても珍しいもので、女はよくここにそれを採取しに来ていたのだった。そこを魔物に襲われ、女は必死に逃げてきたのだ。

＜エティハシェーク・オ・イアヘーク・プリムベル＞
（プリムベルが纏う兆しを失くして）

吐息交じりに呪文を唱える。気配を消し、注目を外す魔法だ。それでも、姿が見つかってしまえば効果が無い。

「こんなことなら、もっと実戦向きの魔法やっときゃよかったですわ…。」

女は魔法使いだった。だが、普段は魔法陣や呪文の開発ばかり手掛けていて、解析は得意だが実戦はほとんど経験がない。この杖に大量の魔法は積み込まれているが、そういう向きの呪文は開発していない。どれもが、術式や呪文の美しさ、響き、相反するからといって誰もが絶対に2重効果にすることの無い呪文の組み合わせを行った場合の効果とそれに伴う順序に基づいて複数術式における終わり

の無い魔力の循環と形にこだわった…

ギャアアアギャアアアア！！

「きゃーーーー！！」

しまった。考え事をしていて、女はすぐ側まで敵が迫っていることに気付かなかった。気配が気付かれたわけではない。単純に、身を隠していないから見つかったのだ。

バサバサッ…！

羽の音が響き、思わず避けた顔に地面が見える。そこには2匹の羽根を広げた人型の影が映っている。顔を上げると、自分からそれほど離れていないところに、バランスの悪い身体に、蝙蝠羽を羽ばたかせた醜悪な顔のインプが浮かんでいる。震える声で女は呪文を手繰り寄せた。「…オ…、オグウィーブ・ウラーン・ネツァ…」

「伏せろ！」

有無を言わせぬ男の声が響き、小さな何かが目の前を横切った。それは自分と敵の間に陣取ったようで、すぐ側で魔法の気配がする。女は言われるままに伏せた。

＜ウロアマ・アラク・エテビューシュ＞

（全てから守る壁を周囲に）

空気に溶けるような綺麗な女性の声で、シンプルな呪文が響く。同時に周囲に清浄で完璧な防御魔法が張られたのが分かった。

「サティ！」

さらに、それより小さい影が横切った。それに合わせるように、再び呪文が聞こえる。これは古代魔法語を使って構築しているようだ。

＜エボートトゥ・アマ・ユムツォーノ・ピウニーア＞

（ピウニーアの望むままに跳躍する力を）

視界の端に、インプに向かって吹っ飛んでいく何かが見えた。

ギャアアアア！！

バチ！…と、一瞬力強い魔力の気配が膨れ、一匹のインプが目を押さえてバランスを崩し地面に失墜する。それに怯んだ2匹目が途端に挙動不審になり、身を翻そうとした。だが、インプ達の後方からやってきた何者かの剣が一閃し、その身体はなぎ払われた。断末魔の声が響いて、緑色の血と共に2匹目も地面に沈む。

「ピウニー卿！」

「こちらは大丈夫だ。」

低く渋みのある先ほどの男の声に相反して、爽やかな青年の声が聞こえた。低い方の声は、ピウニー卿…と呼ばれているようだ。何者かの影が地面に落ちたインプの身体の側にしゃがみ、検分している。どうやら地面に落ちるときに、頭を強く打ち付けて絶命したようだ。

「ピウニー！」

「サティ、大丈夫か？」

呪文を詠唱していた女性の声に、低く甘く女性名を呼ぶ声が重なる。

「うん、大丈夫、ねえ、ピウニー…。」

「さ、てぃ？」

女は眼鏡を直して、その名前を復唱する。２人の声が聞こえてきた方に視線を向けてみると…人の声だと思っていたのに、その声は思いのほか低いところから聞こえてきて、視線の先にあったのは、ネズミに鼻を寄せる猫の姿だ。何事かを話しながら、ネズミの腹周りをふんふんと調べているようだった。「サティ？　どうした？」その猫にふんふんされているネズミが、きょろきょろと自分の腹周りを見ている。

その様子を観察しながら、女は「サティって？」もう一度名前を反芻した。…今度こそ、女の「さてぃ」の声に猫の耳がピクンと反応して、顔を上げてこちらを見る。グリーンの瞳が大きくて、セピア色の毛並みが艶やかだ。そして、何よりその声と、その、名前。

「サ…」

「大丈夫ですか、お嬢さん！！」

女が再び「サティ」と呼ぼうとした瞬間、何者かが自分の手を取って跪いた。杖を持っていないほうの手を両手でそっと握り締め、その声は爽やかだがなぜかくぐもっている。蜂蜜色の前髪の下にある顔は、マスクをしていてよく見えない。マスク…。なぜマスク。女は我に返った。

「きゃーーーー！」

ゴン…！

「うぐっ」

旅装（マント）に大きなマスクをしている様子は、（女にとって）なんとも不自然で不気味であった。女は涙目で思わず杖を振ったのだ。小気味よい音が響いて、マスクの男は頭頂部を抱えてうずくまる。

「プリムベル！」

咎めるような声が聞こえて、プリムベル…と呼ばれた女は振り返った。ああ、やはり、その懐かしい声は。

「サティ？　サティですの？」

だけど、振り返った先には猫しか居ない。眼鏡の位置を直して、プリムベルの瞳は見る間に潤む。

「サティ？　サティ、どこですの？」

「あの、プリム？」

「私のサティ？　ねえ、サティ、声だけじゃなくて出ていらして、サティーーーー！？」

「プリム、プリム。あのね？」

「サティーーーーーー！？　どこですのーーーー！」

声が怖い。

「あの、プリム落ち着いて。」

「だからマスクするの嫌だったんですよ僕の顔が見えなくなるでしょう！」

「ほほう、それは何か関係があるのか。」

低い声が至って真面目な調子で応じた。

遺跡は夕暮れに赤く染まり、日は沈もうとしている。

＊＊＊＊

「サティ！　なんてことでしょう。猫になってもとても愛らしくて、魔法も使えるなんて！」

「う、うん、ありがと。あの。そろそろ離して…。」

遺跡からもっとも近い街道を2頭の馬と、人間が2人、並んで歩いている。

「駄目です。」

「プリム…。」

サティが多少うんざりと言葉を濁すと、プリムベルは渋々サティをシャドウメアの鞍の上に置く。

ピウニー卿らが助けた魔法使いの女性は、プリムベルという。

「わたくしは、理の賢者の娘にして、弟子、プリムベルと申します。」

眼鏡をきちんと直し、つん…とどこか澄ました顔のその名乗りに、男2人…正確には、ネズミのピウニー卿と、今はマスクを外したヴェルレーンは顔を見合わせた。理の賢者の娘?…あの年齢不詳のお髭の老人にしか見えないあの理の賢者に、こんなうら若い娘さんが居るというのは意外だった。意外だったというか…、奥方が…居るのか?　興味はあったが、なんとなく詮索するのは憚られた。

いずれにしろ、機嫌がいいのはヴェルレーンだ。ヴェルレーン・サテュルニアという男は、叫ばれながら杖でぶたれても決してめげない男であった。むしろ燃える。物理的にも精神的にも打たれ強いのである。

「それにしても、理の賢者殿の娘さんがかように知的で美しい方だったとは。プリムベルさんといいサティさんといい、理の賢者殿はよい弟子に恵まれておいでですね。」

「サティの方が綺麗ですし、魔法も素晴らしいですわ!」

「サティさんもお綺麗ですが、貴女も負けず劣らずお美しいですよ?　プリムベルさん。」

「貴方は、人間のサティを見たことがありますの?」

「もちろんですとも。」

「ならば、お分かりでしょう。」

「ええ、分かります。プリムベルさんは、サティさんとはまた異なる魅力をお持ちです。」

放っておけばさっきからずっとこの調子で、「サティはサティは」と煩いプリムベルに、当の本人は何度目かの溜息をついた。今は、ヴェルレーンがくしゃみをしないように荷の袋の中に頭まで隠れて丸くなっている。その中で、サティは考え事をしていた。

ピウニー卿が先ほど振るった魔法剣。一撃でインプを落としていた。以前は野生の狼やモグラネズミ相手にあまり効いていなかったのに、信じられない威力だ。それほどまでに、マハの剣…竜剣の力が強いということだろうか。

考え事をしているサティの喉元には、いつものようにピウニー卿がいる。ピウニー卿はまんまるの瞳を細め、サティの喉の毛皮を撫でてやった。ピウニー卿の体温が側にあって、喉元や耳後ろを撫でてやると、サティはゴロゴロと喉を鳴らすのだ。

喉が鳴るのをからかうと、サティの機嫌が悪くなるので何も言わない。ピウニー卿の髭が勝手に動くのと同じで、勝手にゴロゴロ鳴ってしまうのだそうだ。嫌だと言っていたが、ピウニー卿にとっては可愛いく心地よい仕草だ。…それにしても、ヴェルレーンとプリムベルの不毛な言い争いなどは、ピウニー卿には全く関係が無いのである。サティが綺麗？　言われなくても分かっている。それをピウニー卿は声に出そうとした。だが、外からプリムベルの声が遮る。

「ちょっと、ピウニーさん、今サティに向かって不埒なことを考えてましたわね！？　そうでしょう！」

ピウニー卿が、うぐ…と言葉を詰まらせる。

「べ、別に不埒なことなど考えておらん。」

「ネズミの姿の癖にイチャつかないでくださいよ！」

「ヴェルレーン！　私はイチャついてなど…。」

「はあ？　イチャつく…今、イチャつくと申しましたの？」

「だあああああもうーーーーー、やかましい！」

サティの不機嫌な一喝が響いたタイミングに合わせたかのように、遠くに明かりが見えてきた。

理の賢者の邸宅に４人が到着したのは、夜の帳がすっかり降りた頃だった。

＊＊＊＊

オリアーブ国王の執務室で、国王ジェレシスは机に向かって書き物をしていた。
それは、書類ではなく書簡のようだ。

書き上がった書簡を２度３度目を通して内容を確認すると、丁寧に折りたたみ封筒へ入れる。
国王は立ち上がって執務室に備え付けている、小さな魔法灯の傍らへと歩み寄った。背の低い棚の上には書簡用の蝋と封蝋の印璽、そして魔法陣があった。手に持てるサイズの魔法灯の蓋を開けると小

さな炎が揺らめく。その炎の熱を使って蝋を手紙の封の上に垂らし、頃合を見て、国王の印璽の為された封蝋で型を押した。

国王よりの書簡。

魔法灯の側に描かれている魔法陣へと、それを置く。

＜エルクーオ・エーテコ・ドート・オ・ナクシュ＞

（手紙を届けよ。宛先は、）

それは国王だけが使うことの許される、魔法語だ。魔法陣に置かれた書簡は小さく光り、

＜アーイェク・オ・イラウォート＞

（理の賢者）

溶ける様に消える。

書簡が消えたのを確認すると、国王は懐からもう１つの書簡を取り出した。中身を確認して、小さくため息をついた。

「…これはまことか。」

取り出した手紙を魔法の炎にかざすと、それは辺りに火の粉を撒き散らすこと無く静かに燃えて消える。

「バジリウス…。」

そして。

「ジョシュ。」

国王は1人息子の名前をそっと呼んだ。その顔には、消化しきれぬ多くの問題を抱えた苦い表情が浮かんでいる。

武に強かった先王から国を引き継ぎ、ジェレシスはよく国を治めていた。武の治世の後に、賢の治世。国民からも騎士達からも慕われる、穏やかな王だ。だが、いまだに先代の…武王のような治世を求める宮廷の輩も多くいる。…が、今回はそういった輩の言動よりも、ジェレシスを堪えさせた。

しばし瞑目した後、青紫色の瞳を上げると、魔法陣の上に書簡が届いていた。
印璽は理の賢者。

国王は、その書簡を手に取った。

029．イチャついてなど…（後書き）

L'apprenti sorcier, scherzo symphonique
Dukas, Paul

交響詩『魔法使いの弟子』作曲：ポール・デュカス

０３０．大丈夫などと言うな

理の賢者の家は、杖と剣の賢者の家よりも見た目は小さかった。荒野に一見ぽつんと建っているように見える。だが、入ってみると驚くほど広くて、どこにどのような部屋があるのか、分かるような分からないような…不思議な家だった。ある部屋には剣ばかりが置いてあり、ある部屋には杖ばかりが置いてある。そうかと思えば別に部屋には、紙に描いた魔法陣が壁に貼り付けられている。

「プリム、師匠は？」

「お父様はお母様のところですわ。」

「ああ…。」

サティは得心したように頷いて、前足で顔を拭いた。師匠が奥方のところに出向くと、３日は帰ってこないと見ていい。呼びかけにも応じないはずだ。呪いや…そして、ずっと気になっていたジョシュの魔力抑制の魔法陣のことなど、解決しておきたいことは山積みなのだが、師匠が帰って来ないことには解析の結果は知れないだろう。ジョシュの魔法陣についてはプリムベルも知らないはずだし、サティは、クルルと喉を鳴らすだけにとどめた。

プリムベルにとってサティは姉であり姉弟子であり家族だ。血がつながっていないことはもちろん知っている。プリムベルがとても小さい頃に、父である理の賢者が連れてきた。サティが連れて来られて来た頃の記憶は、プリムベルには無い。物心ついたときから、プリムベルにとってサティは越えられない人だった。小さい頃から彼女の魔法も魔力も素晴らしく、古代魔法語にも通じていて生み出す

術式もシンプルで綺麗だ。自分には到底出来ない芸当ばかりをやってのける。…もちろん、プリムベルの魔法の腕が低いというわけではない。プリムベルの魔法に対する技術の深さは、理の賢者に言わせればサティと同程度だ。

それでも、理の賢者の娘に真にふさわしいのは自分ではなくサティなのではと卑屈になったこともあった。けれどサティはプリムベルの魔法を、突拍子も無いのにそれを実現させてしまう応用力がすごいと褒め、できると思ったら絶対にその解へ辿りつく解法は才能だと思う…と指摘してくれたのだ。炎と氷の2極属性を同時にかけて熱を感じさせないまま、それを防護の結界にしてみようとか、そんな発想どこから生まれるのよ、…と、まあ、そういうレベルの議論を、寝食忘れて延々続けたのはいつだったか。

こうしていつの間にか2人は、互いの技術的短所と長所を認め合う姉妹以上の弟子になっていったのだ。

だから、1年前に消えたと思っていたサティが元気にしていたと聞いていれば、すぐさま迎えに行ったのに…という。

「師匠は何も言ってなかったの？」

「お父様は何も教えてくれませんでしたわ。まあ、そういう人ですもの。」

3人のためにお茶を淹れながら、サティの問いにプリムベルは苦笑して首を振った。

1年前にサティが巻き込まれた戦いの場に、プリムベルは居た。その場に居たのに助けられなかったこと、見失ったことを激しく後悔したという。

「1年前…どのようなことがあったのですか？」

「それは…。」

お茶の用意を手伝ってくれているヴェルレーンの質問に、プリムベルは答えるのを躊躇った。自分が説明すべきではなく、サティが説明すべきなのではないだろうか。…ちらりと、サティの方を伺う。

「1年前の話？」

「お父様と、第1師団に変質魔法の講義に行った、帰りだったですわね。」

「ヒューリオンに呼び出されてね。」

サティはピウニー卿の側まで来て身体を丸くする。
いつまでも話さない、というわけにはいかないだろう。
サティの声はどことなく切なげだった。

＊＊＊＊

当時サティは、魔法師団から理の賢者宛にやってくる依頼の代理を務めていた。…といっても、それほど件数が多いわけではない。だが、幾度か魔法研究所や魔法師団に出向けば言葉を交わす人間もできる。ヒューリオンという魔法使いもその1人だった。ヒューリオンは心魂魔法に造詣が深く、魔法陣の構築が得意な魔法使いだ。サティへの問いかけも的確で、問答するのは楽しかった。初めて出来たプリムベル以外の魔法使いの友人とも言える存在に、魔法研究所へ出向く依頼が楽しみになり、ヒューリオンのことも信頼するよう

になった、という。

だが、ほんの少しの違和感を感じたことがあった。

ヒューリオンがサティに相談してくる魔法陣や、呪文は、確かに心魂魔法そのものだったが、ひとつ間違えれば死霊魔法に落ちてしまうような危うい魔法語ばかりを使うようになってきたのだ。それを指摘するのは簡単だったが、サティには出来なかった。気のせいだ…と思おうとした。せっかく出来た魔法使いの友人を失うことはしたくなかった。

だから、サティは死霊魔法に気をつけろ…という前に、サティの知り得る限りの、古代魔法語を使ってさりげなく魔法陣の修正をアドバイスしたのだ。古代魔法語にまで造詣の深い魔法使いはあまり居ない。普通に使われている魔法語よりも感覚的で情緒深い、サティの得意とする魔法語だ。死霊魔法に使われるような言葉から引き離すために、美しい、情緒的な古代魔法語をサティはヒューリオンに懸命に教えた。ヒューリオンはサティが思ったとおり、古代魔法語もすぐに吸収してくれた。

あの日。久しぶりに理の賢者とプリムベルの3人で依頼を受けた講義の帰り道。ヒューリオンに呼び出された。ついでだから…と足を止め、師匠と妹弟子に断ってヒューリオンに会ったのだ。ヒューリオンに会うのもまた、久しぶりだった。アドバイスが欲しいと言われて見せられた魔法陣は、植物育成の魔法陣。確かに素晴らしいものだったが、巧みに死霊魔法が組み込まれているのが、サティには分かる。

それは…恐らく、ヒューリオンからの挑戦だったのだろう。サティはたやすくそれを見破ったのだ。しかし、もう、

限界だった。

これ以上、黙ってヒューリオンに死霊魔法の深淵を覗かせてはいけない。

そう決心して、サティは首を振った。

ヒューリオンの魔法陣に魔法語のひとつを付け加えて、それを返しながら言ったのだ。

「ヒューリオン、やめたほうがいい。」

「何を…。」

「死の淵を覗いてはいけない。生と死の狭間を見てはいけない。世の中には操ってはいけないものがあるの。」

「…サティ。」

「＜ニーフュイ・アヌテシア・トゥ・ヒューリオン＞…お願い。」

そのときのヒューリオンの、サティの言葉を聞き、サティが修正した魔法陣を見たときの、傷ついた様な焦ったような表情が忘れられない。いつも自信に満ちていたヒューリオンが露にしたその表情を見ていられなくて、サティはすぐに身を翻して研究室を出ようとした。その背中に。

「…本当に、サティはいつもそうやって私の数十歩先を行くね。私の得意とするものすら奪っていく。サティさえいなければ、心魂魔法は自分のものだと思えるのに…。」

そう言い放って、次の瞬間背中に焼け付くような痛みが走ったのだ。
攻撃魔法を放たれた思ったのは一瞬。なぜ…という疑問をすぐさま頭から切り離し、癒しの呪文を唱えてヒューリオンに向き合う。ヒューリオンは憎しみを込めて、自分を見つめていた。サティはそのとき思ったのだ。

ああ。

自分はこの人にずっと憎まれていたのだ。

楽しい気持ちで話していたのは自分だけだったのだ。

その表情をみたヒューリオンは、静かに笑ってこう言った。

「そう。私はサティが憎かったんだよ。それも知らずに居たなんて、本当に…」

＜アヌ・クィツグ・オ・サティ＞

愚かなサティ。

ヒューリオンの侮蔑に満ちた呪文が、サティの心を鋭く抉る。
その呪文は呪いのように、サティの心から気力を奪っていく。だが。

「サティ！」

自分を呼ぶ声が聞こえて、サティはヒューリオンの呪文に抵抗した。
理の賢者とプリムベルの声は、サティに気力を取り戻させるには十分すぎるほど力強いものだった。サティは研究室と廊下を遮断する防御魔法を張る。それは理の賢者すら解呪するのが困難な結界だ。

防御魔法の中にいるのは、ヒューリオンと、サティだけ。

＜ニーフュイ・アヌテシア・トゥ・ヒューリオン＞

親愛なる友よ。ヒューリオン。

サティの清冽に満ちた呪文が、ヒューリオンの顔をさらに憎しみに歪ませた。

「お前さえ居なければ。」

ヒューリオンが杖を構える。

「ヒューリオン…どうして?」

しかしサティもまた、杖を構えた。

＊＊＊＊

そうして2人の魔法は激突し、後に残ったのはサティの折れた杖と服だけだったのだ。戦いはヒューリオンとサティを消滅させた。少なくとも、プリムベルにはそのように見えた。

「あれほどの事件があったのに騒ぎにならなかったのは、研究所の奥の方で事が起きたというのもありますけれど、サティの結界が強力で、外に一切被害を与えなかったからですわ。」

外から見れば部屋の内部だけが滅茶苦茶になり、魔法使いが2人居なくなっただけ…という状況だったのだ。理の賢者はこの状況を魔

法師団や騎士団、国に対して報告は行わず、以降の依頼を全て断るようになった。魔法師団がヒューリオンという魔法使いが忽然と消えた事実をどのように受け止めたかまでは、分からないままだ。

「第5師団は、宰相も深く関わっている魔法師団だ。バジリウス宰相に聞けば、何か分かるかも知れんな。」

「…知らないわけは、ないでしょうね…。」

ピウニー卿とヴェルレーンの声が下がった。いまはプリムベルがサティに毛羽立ちを防ぐ防御魔法（即席）を掛けていて、ヴェルレーンにくしゃみの症状は出ていない。

「ピウニー卿とサティさんの呪いは、同じ第5師団の魔法使いの仕業なのでしょう。」

「最後に、ヒューリオンが私にかけた呪いの魔法と、マハから聞いた呪文は一致する。だから、多分…。」

「もしそうなると、サティさんと戦う前に魔竜に対して呪いを掛けていた…ということになりますよね。しばらくヒューリオンが魔法師団を留守にしていた…などという記録が残っていれば…。王宮に戻れば、そういった類の資料があります。調べてみましょう。」

そういう調査は得意なのがヴェルレーンという男なのである。

＊＊＊＊

「サティ。寝たか？」

案内されたのはサティがいつも使っている部屋だった。1年前から何一つ変わっていない。まるで、1年というブランクなど無かったかのように、そのままだった。プリムベルは断固として「同じ部屋却下です！」と言い張ったが、サティはいつもの癖でそのままピウニー卿を部屋まで連れてきてしまった。

「ん？　何、ピウニー。」

寝台の上で丸くなって、いつものように2人して眠っていたのだが、ピウニー卿はどうしても眠れずに、ずっとサティの暖かな毛皮が上下するのに身を任せていた。だが、常に無くサティの喉が鳴っていない。起きているのかもしれない。そう思って、ピウニー卿は思わず声を掛けてしまった。

かつての友に裏切られ、殺されかけた話をしたときのサティはとても苦しげで、ピウニー卿の心も痛んだ。

「なに、ピウニー。」

「大丈夫か？」

「何が？」

「…。」

「あー、ヒューリオンのこと？」

「ああ。」

「ピウニー？…心配しなくても大丈…。」

「大丈夫などと言うな。」

「ピウニー、本当に、」

「こういうときに、大丈夫、などと言うなサティ。」

「うん…。ピウ、心配かけてご…」

サティは何かを言いかけて、止めた。そして、

「心配してくれて、ありがとう。」

サティはそれ以上何も言わない。

そしてピウニー卿は、そんなサティを抱きしめたくて仕方がなかった。

人間になれば自分の手は、サティの細い手よりも大きい。一抱えで頭を抱えることができるし、抱きしめれば彼女の頭は自分の鎖骨に触れる位置だ。

それなのに、どうして今、自分はサティを抱き寄せることができないのだろう。

小さなネズミの身体は、サティの毛皮に手を埋めることしかできない。

ピウニー卿がそんな風に思っていると、サティが黙ってピウニー卿に顎を摺り寄せた。喉がゴロゴロと鳴って、その音がネズミの小さな身体に心地よく響く。

猫とネズミでいるときは、なぜこんなにも距離が近いのか。

しかし、その近い距離が、今はひどく切なかった。

０３１．やり遂げた感満載で満足げ

「おはようございます、サティ…？」

「うあー…おはよ…、プリム。」

「おはよう、プリムベル殿。」

翌朝。

起きてから人間に戻った2人は、共に部屋から出てきた。朝が苦手なサティはピウニー卿の横で、あふ…と欠伸をしている。それを見ながら、ぎょっとしたプリムベルは眼鏡の位置を直した。まじまじとピウニー卿とサティを凝視し、もう一度ピウニー卿を見て、さらにサティを見た。2人はその視線に気付いていない。サティはピウニー卿の袖を引いている。

「ピウ、お風呂こっちよ。」

「ああ。すまんが、プリムベル殿、風呂を使わせてもらってもよいだろうか。」

「……だ。」

「だ？」

「誰ですか貴方ーーーーーーー！？」

プリムベルは初めて（人間に戻った）ピウニー卿を見た。

サティの横に居る男は誰ですか。この妙に体格のいい無精髭の男は誰ですか。サティに腕を引かれている男は誰ですか。サティと一緒の部屋から出てきた男は誰で…はっ…今重要なことを…サティと一緒の部屋…ですって…？　朝から、サティと、一緒の、部屋から、出てき…ああ！　しかも！　サティは欠伸をしていましたわ！　眠いのですか、サティは眠いのですか。寝ていないのですか、寝ていないほど朝まで一体何を…、風呂が入る必要があるほど何を…って、何、やり遂げた感満載で満足げに無精髭を手でそりそりしてるんだこの髭男めがーーーー！

なお、ピウニー卿は何もやっていないことをその名誉のために付け加えておく。

しかし、プリムベルはそうは思っていないらしい。

「サ…サティから手を離してくださいましーーーー！！」

「ちょ、プリム…っ！」

プリムベルは再び欠伸をしたサティの腕を抱えるとピウニー卿から引き剥がし、ずささーーーと後ずさりをしながら、廊下の向こうに消えていった。

「あ、おはようございます、サティさん、プリムベルさん。あの、洗面させていただいても…」

消えていく途中、客用の寝室からヴェルレーンが忌々しいほど爽やかな顔で登場した。

＊＊＊＊

「プリムベル殿、驚かせてすまなかった。」

「……。」

サティは今、ジョシュの魔力抑制の魔法陣について再度解析を深めている。こういった解析についてはプリムベルの方が得意だったが、ジョシュの件に関しては他言していないために、理の賢者が帰宅するまでの間、サティが自ら行っていた。あまり邪魔をしたくないピウニー卿は、ヴェルレーンと共に馬の世話と剣の手入れ、剣の手合わせなどを行っていたが、丁度プリムベルが居間に1人で居るところを見計らって、やってきた。

「いえ…わたくしも取り乱しましたわ、…失礼いたしました。」

「いや。」

プリムベルは外していた眼鏡を掛け直すと、ピウニー卿から目を逸らす。こんな…こんな髭の男がサティの…。サティの？

「ピウニー卿！」

「な、なんだろうか。」

「ピウニー卿は…サティとは、その、ど、どのような関係なのです？」

「え。」

突然、力いっぱい迫られて思わずピウニー卿は仰け反った。このプリムベルという女性に、自分はなぜか快く思われていないらしい。好きな女の父親に嫌われてしまったときの気分とは、こういうものなのだろうか。例えば「お前なんかにうちの娘はやれん！」…というような。猫とネズミの姿だったときも、サティがピウニー卿を抱えているだけで咎め、先ほどは、2人で部屋を出てきたところを見られた上に何か誤解をされ、すごい勢いで引き剥がされてしまった。…いや、誤解…というか。なんというか。

「どのような関係」か…と問われると、ピウニー卿は答えに窮する。ピウニー卿自身の答えは簡単だ。だが、2人の関係は…と問われると、それはピウニー卿だけの一方的な気持ちで決められるものではない。サティは姿を変えたときは体温を求めるようにぴったりとくっついてくるのに、人間の姿に戻ったときにピウニー卿が距離を詰めようとすると戸惑ったように離れていく。強引に抱き寄せ、そのまま奪い去りたいという気持ちに駆られたときも少なくない。しかし、1度だけ深く触れた唇に、サティは嫌がらなかった。思わず押し倒し、首筋の舌触りと柔らかな髪の香りを味わったところで時間切れになったことは、今だに忘れられず、サティを見るたびに喉が熱くなる。

ただ、そのとき、サティがどう思っていたか…というのを、ピウニー卿は果たして考えていただろうか。今更ながら、そのことに気付く。ネズミの時にあまりに距離が近いから、すっかり受け入れられていると錯覚しているというのは言い訳だろうか。いや違う。ピウニー卿の心に何かが引っ掛かった。何か、大切なことを自分は忘れている。

「…サティのことをお好きなのですか？」

「え？」

「なぜ、そのような意外そうなお顔をなさるのです。」

「あ、…いや…。」

あまりにも率直なプリムベルの言葉に、ピウニー卿は自分の顎を撫でた。「サティのことを好き。」…か。当たり前だ。それ以外に、何があるだろう。しかし…。

「しまったな…。」

ポツリとピウニー卿はつぶやいた。

自分はそれをサティに伝えていたか？

そうだ。言葉にすれば、それだけなのだ。簡単なことなのに、いい歳をして…いや、いい歳だからこそかもしれないが、そういった素直で率直で素朴な感情を、言葉で表現することを忘れていた気がする。いつも気がつけば柔らかな毛皮がそこにあったから、人に戻ったときの柔らかな身体があったから、自分の気持ちは最初から1つだったから…だから、何も言っていなかった。これは…。

なんという騎士としてあるまじき不覚！

「私は、サティにそのことを伝えていない。」

「は？」

そうだ。伝えなければ…。ピウニー卿はガタンとソファから立った。

だが、それに呼応するようにプリムベルも立ち上がる。ピウニー卿は立ち上がったプリムベルに向き合い、ぎょっとした。…なぜか怒っている。相当。

「ちょっと、ピウニー卿…それは、聞き捨てなりませんことね。」

つ…と光る眼鏡を直す仕草が怖い。

「え。」

「一緒に旅をしてどれほどと申しましたの?」

「あの…。」

「その間変身するたびに? 裸で?」

「プリムベル殿…あの。」

「あんなに切なげにサティのことを見てますのに?」

ピウニー卿の頬が赤くなった。

「貴方は好きでもない女性と、一晩同じ部屋で過ごすのですか!? それでも騎士ですか!」

一晩過ごしたのは不可抗力だし、寝ている間に人の姿に戻ってしまったことはあるが、人間の姿で一晩丸々過ごしたことは無い。誓って、無い。しかも、

「好きでもない女ではない! 私はサティをす…」

「でも、伝えてないのでしょう！」

「…そ、それは…。」

「許せませんわ…。」

プリムベルの声が低くなった。ピウニー卿は後ずさる。

「だったら一番最初に、私ではなくとっととサティに伝えてらっしゃい、玉砕するならその後でも遅くはないですわーーーー！！」

ピウニー卿はプリムベルに居間を叩き出された。いい歳した騎士が一体何をやっているんだかと思われても仕方があるまい。

それにしても。

え、いや

玉砕？

＊＊＊＊

サティは中庭のテーブルセットに座っていた。

眼前の紙にはジョシュの魔力を抑制していた魔法陣が再生されている。見ているだけで魔力を抑制されそうだが、実際には魔法陣に対して魔力を込めては居ないので、効果は無いはずだった。堅実で基本に忠実な、それゆえ美しい構成だ。かなり真面目な人が組んだのだろうということが感じられる。

それにしても、これ程の魔法陣だ。組んだ人間の魔法語が組み込まれていてもいいはずだが、どこにも見当たらない。いや…、見当たらない…と思っているだけなのだろうか。それとも、自分の名前の魔法語も魔法の効果の一部として、組み込んでいるのだろうか。

「エドゥ・ユーク・ウロアナ・アーグ・イアギーヌ・イルスーク・イーラ…。」

全て古代魔法語だ。この整いぶりは師匠である理の賢者が好む形に似ている。「知識と理を抑制する。苦悩も伴う。利益となりし時に…」と続くようだ。

サティは溜息をつき、魔法陣の描かれた紙をしまうと目を閉じる。これ以上考えても仕方が無い。サティは別の懸念事項を…、ピウニー卿のことを思い浮かべた。

プリムベルを助けたときに、ピウニー卿はインプを一撃で倒していた。地面に落ちた時の頭部へのダメージが致命傷だったといえばそれまでだったが、今までに無い魔力が膨らむのをサティは感じている。剣が魔竜のものに変わったから、今までとの比較は難しいが…もしかしたら、ピウニー卿の魔力は強くなってきているのではないだろうか。だとすれば…自分はどうか。サティは自分の首に掛かっている、緑色の石に触れた。そこにはサティの杖が納められていて、魔法によって杖の出力と石の出力を繋げている。杖を構えているときほど自然に…とはいかないが、集中すれば、杖を持っているときと同じような効果が得られる。

自分の魔力は果たして、どうなのだろう。

「サティさん。」

「ヴェルレーン？」

サティは集中を解いた。

自分を呼ぶ声に顔を上げると、そこには蜂蜜色の髪に少し垂れ目気味の甘い瞳がよく似合う、チャラ…じゃない、爽やかな笑顔の騎士が立っていた。今はくしゃみはしていない。

「ピウニーと手合わせをしていたんじゃないの？」

「先ほど終わりましたよ。…全く及びません。さすが、ピウニー卿です。」

確かにピウニー卿は強かった。杖と剣の賢者の館に居たときも、何度かヴェルレーンやラディゲ、剣の賢者とピウニー卿が剣を合わせているところを見た。剣についてはよく分からないサティにも、２人の騎士達が相当強いということは分かったが、ピウニー卿はそれ以上だった。剣の賢者とはほぼ互角。その様子は惚れ惚れするほどで、剣の賢者と手合わせをしている様子を見たときなど、ラディゲは大きく舌打ちし、ヴェルレーンはやたらと楽しげだった。

「くしゃみ出ないのね。」

「プリムさんが、魔法をかけてくださいまして。」

「ああ、プリムはそういうちょっと変わった応用がすごく得意なの。」

ヴェルレーンは楽しげに頷いた。

「今朝は、大層怒っておられましたね。」

「昔から、私に関してはよく分からない事で怒るのよ。プリムベルは。」

「サティさんは…。」

ヴェルレーンはサティの向かいの椅子を引いて、そこに座った。

「ピウニー卿のことをどうお考えなのですか？」

「え？」

なぜそこにピウニー卿の事が出てくるのだ。サティはうろたえて、ヴェルレーンを見た。その表情をヴェルレーンは楽しそうに見返して、小さく肩を竦めてみせる。何気ない仕草なのだろうが、妙に様になっていた。少し首をかしげて彼が微笑むと、その微笑みは、騎士に憧れる女性ならば誰もがうっとりとしてしまうだろう。残念なことに、変わり者の女魔法使い達にその効果はほとんど無かったが。

「なぜ、ヴェルレーンがそんなこと聞くのよ。」

サティは、ちょっとムっとする。だが、そんなサティの視線もどこ吹く風。ヴェルレーンは、微笑んだまま、ふっ…と前髪を払った。

「だって、あのピウニー卿が弱い女性がいるなんて、こんなに面白いことは無いでしょう。」

「面白い？」

「僕らの年代の騎士には、ピウニー卿は憧れの騎士なんですよ。」

駆ける馬は青毛で賢いシャドウメア。呪文無しで魔法剣を操り、剣の腕も国の誰もがピウニー卿には及ばないほどだ。それほどの実力を持ちながら無冠を望み、国王の親衛隊として国中を旅する騎士。若い騎士でピウニー卿に憧れるものは多く、ヴェルレーンもその1人だった。だからこそ、ピウニー卿探索の命を国王から直々に賜ったときの喜びは大きかった。ヴェルレーン自身にもピウニー卿が死んだなどという話は信じがたく、また死んで美談になるなどあって欲しくなかったからだ。

「そのピウニー卿が、1人の女性におろおろさせられている。」

「お、おろおろなんてしてないわよ、あの人。」

「そうなのですか？」

「そうよ。特に人間に戻っているときは。」

はあ…とサティは溜息を付く。

おろおろなんてちっともしていない…とサティは言うが、ネズミの時はいつもおろおろとサティの周りを走り回っているようにヴェルレーンには見えた。ラディゲにサティが抱き上げられたときなど、相当見ものだった。だが、どうやらサティにとってネズミの時は、ピウニー卿のことを男として意識していないようだ。ヴェルレーンは苦笑した。なるほど、自分は猫で相手は小さなネズミ。一日の3分の2はその姿で過ごしているのに、人間に戻って立場がいきなり変わるとそのギャップに戸惑うのだろう。だが、ピウニー卿にとっ

ては心穏やかではあるまい。守りたいと思う女を守れる時間は、人間に戻っているたった8時間だけだ。

「ですが、ピウニー卿は貴女のことをお好きなのでしょう。ならば、サティさんも…」

素直に自分の気持ちに向き合ってみてはいかがですか…と、言おうとして、遮られる。

「待って。」

「はい？」

「それは分からない。」

「ええ？」

「言われたこと無い。」

「えええええ？」

ヴェルレーンはぎょっとした。押し倒して3拍後にネズミに戻ったと思われるあの時も、ピウニー卿は自分の気持ちを伝えていないというのだろうか。あんなに分かりやすいのに？　人間に戻ったときはあんなにうっとりとサティのことを見つめているくせに？　少なくともピウニー卿はサティに自分の気持ちを伝えていて、サティがそれを受け止め切れていないのだと思っていた。…だが、事実はそうではないらしい。何やってるんですか、ピウニー卿！　少なくとも気持ちを確かめていない相手を押し倒すなど…いや！　押し倒したかどうかは見てないので分かりませんけれども！

「だから正直に言うと態度だけで示されても、素直に受け止められない。」

「ああ…なるほど…。…しかし、誰の眼にも明らかでしょう、あんな…」

ふむ…とヴェルレーンは口元に手を添えて、首を傾げる。

サティは俯いた。何度も思ってきた。考えてきた。

ピウニー卿に自分は大切にされていると、サティは思う。だが、どうしても不安なのだ。ピウニー卿とサティは恋人同士ではない。夫婦ではない。ただの旅の仲間だ。それなのに柔らかく、でも逃げられないように、愛し合うもの同士のようにきつく抱きしめられる。抱きしめられる度に心臓は心地よく高鳴るのだ。だけど、そんな自分の感情にもピウニー卿の態度にも納得できなかった。まるで、雰囲気に流されているみたいで。

でも、やめてと言えない。いつだってピウニー卿は、サティが一番欲しい言葉をくれない。でも、聞けない。今の関係に納得しているわけではないのに、今の関係が壊れてしまう可能性が…

とても怖くて。

そんな、いろんな、「でも」や、「だって」が重なって、今まで来てしまったのだ。

サティは俯いたまま、溜息をついた。

「でも流されそうになるのよ。」

「ピウニー卿のことを…お好きなのですね。」

「きっと、そうなんだろうね…。」

俯いた顔を上げて、あーあ…と空を仰ぐ。なぜ、ヴェルレーンにこんなこと言ってるんだろう。

「なら、サティさんから伝えればよいのではないですか？」

「え？」

「言ったもの勝ちですよ。」

「言ったもの、…勝ち？」

「そうです。言わなくても分かるだろうとか、言わなくても分かって欲しいとか、そういうのは幻想です。最初からそれを相手に望んではダメなんです。言わなくても分かるのならば、好きだ…なんて言葉、生まれないでしょう。」

ヴェルレーンは、ふふ…と笑った。垂れ目が穏やかに細まり、口角が笑顔の形に上がった。眩しい笑顔である。

「他の言葉なら伝えることができるのに、『好き』だという言葉を、みなさんなぜ躊躇うんでしょうね。僕はとても不思議です。一番重要な局面で、一番忘れてはいけない言葉なのに。」

サティは少し驚いたような顔をしてヴェルレーンを見返した。女性と見れば「綺麗ですね」「素敵ですね」という言葉が出てくるヴェ

ルレーン。この男が言うと妙に憎めない理由が、ちょっとだけだが分かった気がする。もしかして女性にモテる…というのは、この顔のせいだけじゃないのかもしれない。

言ったもの勝ち…。自分がピウニー卿を好きって言ったら、彼はどんな顔をするだろう。自分達の関係は、どこか変わるだろうか。

少なくとも自分も大して素直になっていないのに、人間に戻ったピウニー卿に気持ちを言って欲しい…などというのは一方的だ。自分だけがあたふたとさせられるのも悔しかったし、言ったもの勝ち…というのならば、勝ってやろうじゃないか。だって、いつだって慌てふためいているのは自分なのだ。

「そっか。…よし。」

サティは立ち上がった。

「サティ！」

同時に中庭の向こうから、ピウニー卿が駆けてくるのが見えた。

０３２．意外とえげつない

好きな女に自分の気持ちを伝えるというのは、いくつになっても心が浮き立ち緊張するものだ。若い頃であれば、勢いに任せていくらでも言葉に出来たかもしれない。だが、年齢を重ねれば、気恥かしさや、理性にも似た妙な自負が邪魔をして、つい忘れがちになってしまう。ピウニー卿は、一緒に過ごした時間と距離に甘えて、自分の気持ちをサティに伝えていないことに気付いた。それに気付けば居ても立っても居られなくなる。プリムベルから勢いよく居間を追い出された後、まっすぐ中庭までサティを探して、やってきたのだ。

「サティ！」

「ピウ？」

「おや、ピウニーきょ…。」

サティと話をしていたヴェルレーンは、自分が標的にされていることを知った。サティの事以外は、いつも温厚で冷静なピウニー卿が、ヴェルレーンを取って喰わんばかりの形相でこっちを見ている（ように見える）。なぜ、自分を…ああ。

「サティ、ヴェルレーンと話の途中か？」

「え、いや？　もう終わったけど、あの、なんか怒ってる？」

「怒ってはいない…。」

怒ってはいないかもしれないが怖い。ヴェルレーンはこれ以上ピウ

ニー卿を刺激しないようにじりじりと後退した。

「あ、の、ピウニー卿、僕は別にサティさんと何も話していませんよ！？」

「ああ。」

「と、とにかく僕は用事思い出しましたので！」

これ以上邪魔をしたら…いや、決して邪魔をするつもりはないのに激しい誤解を受けそうだ。そしてその誤解は命を危うくする。ヴェルレーンは回れ右をして、ピウニー卿がやってきた方向へと駆けていった。

中庭にはサティとピウニー卿の2人になった。

「ピウ？　どうかしたの？」

「サティ…！」

ピウニー卿はサティを思わず抱きしめそうになり…すんでのところで手を止める。ここで抱きしめたら今までと同じだ。それに抱きしめたら顔が見えない。ピウニー卿はこほんと1つ咳払いをして、サティに向き合った。

「サティ…話がある。」

「ええ、ピウニー。私も。」

「サティも？」

「ん。でも、ピウから話していいわ。」

「そうか。…ならば、」

ピウニー卿はサティーの肩をそっと掴んだ。片方の手で思わずその頬に触れる。しっとりと柔らかい。剣を持ち慣れた自分の手では、その柔らかい皮膚に傷を付けてしまいそうだ。急にそんな風に思えて、いつもよりも繊細に撫でた。そんなピウニー卿の手の動きに、サティの心臓がとくんと小さく跳ねる。こげ茶色の瞳を見つめ返すと、その色はとても真剣で、真っ直ぐで、自分の気持ちを伝えたいサティにとって、どんな視線よりも魅力的で吸い込まれそうだった。

「サティ…。」

ピウニー卿の低音の声がサティの名を呼んだ。自分を見上げるサティの大きなグリーンの瞳。猫とネズミの姿で出会ったときから、その色を綺麗だと思う気持ちは変わらない。それに恋慕の情が加わったのはいつからだろう。その瞳を離すつもりの無い自分に、気付いたのはいつからだろう。ピウニー卿は愛しげに、サティの頬に添えた指をそっと滑らせる。

「今まできちんと言葉にせずにすまなかった。…サティ…俺は、お前がす…」

好きだ、愛してる…と言おうとして、なにやらサティ以外の視線を感じたピウニー卿は、つい…と横を振り向いた。つられたようにサティも振り向く。

「こ、こここ、理の賢者殿っ！？」

「し、師匠っ！？」

そこには白い長いお髭を蓄えたご老人、理の賢者が立っていた。２人の動きが固まった。

「ふぉふぉふぉ、気付かれてしもうたのう。かまわんかまわん。ほれ、続きじゃ続き。ほれほれ」

「いや、あの。」

「む。どうした、いいんじゃよ。ワシのことは気にせんでもいいんじゃよ。」

気にするなという方が無理な話だ。しかも、気にしなくてもいいといいつつ理の賢者は続ける。

「ふぉふぉふぉふぉふぉ、それにしてもサティや、ピウニー卿もよう来たのう。」

今日だけは、今回だけは言わせて欲しい。

師匠、邪魔（白目）

…などとは、もちろん口が裂けても言えず、サティは自分がこれから生み出そうとしていた状況の、恥ずかしさだけが込み上げてきたのだった。しかもピウニー卿からの話は一体なんだったのか分からない上に期待だけしてしまったまま、彼はまだサティの肩を抱き頬に手を充てている。サティは誤魔化すように問いかけた。

「あああああの、師匠、先ほどお帰りですか？　奥方はお元気そうでしたか？」

「そうじゃそうじゃ。ああ、元気そうじゃったよ。相変わらずじゃ。ところで、ピウニー卿や、話の続きは？　サティも大丈夫かの。」

「え、あの、はあ、それはまた後で…。」

「そうか？　残念じゃのう…。ならば、ワシから話があるんじゃが、かまわんかの。」

「話？」

「おうおう。このワシになんと王様からお呼びがかかってのう。」

「…国王陛下から？」

驚いた声はピウニー卿だ。ピウニー卿はサティの頬から手を離す。

こんなときなのに、サティはピウニー卿の手が離れたことに名残惜しさを感じていた。それに、国王の話に反応したピウニー卿に何故か胸が痛む。恐らく、ピウニー卿が騎士となって国王の元にはせ参じること…それが不安なのだ。重症すぎるな…と、サティは思う。

結局話は一時中断され、ピウニー卿もサティも理の賢者の話を聞くこととなった。

その様子を見ながら、中庭の向こうから伺っていた2つの影が溜息をつく。

「…あれ、絶対わざとですよね…。」

「お父様はああ見えて、意外とえげつないことをいたしますの。」

プリムベルが眼鏡の位置を直しながら頷いた。

剣の賢者といい理の賢者といい…オリアーブの賢者は、絶対に敵にまわしてはいけない…ヴェルレーンは固く心に誓った。

＊＊＊＊

「バジリウス宰相。」

「ジョシュ殿下。ヴィルレー公爵令嬢も。ご一緒でしたか。」

「ごきげんよう、バジリウス様。」

「ごきげんよう、ヴィルレー公爵令嬢。」

今日はセラフィーナがヴィルレー公爵と共に、ジョシュの元に見舞いに来ていた。ジョシュは自室でセラフィーナと歴史の本を読みながら、サティの思い出話をしていたところだ。そこにバジリウスが訪ねてきたのだった。

バジリウスはよくこうして、ジョシュのところにやってくる。やってきては、現在の国の情勢や国王の仕事の様子などを伝えてくれるから、ジョシュとしてはとてもありがたい。学術指南役のヴィルレー公爵の計らいで、政治学などを教授してくれた時期もあり、時折、ジョシュに対して意見を求めてくることもある。その意見が採用されるわけでもなければ、何かの参考にしているわけでもないのだろうが、ジョシュにはそれが楽しかった。

「ヴィルレー公爵は陛下のところですかな？」

「うん。もうすぐ戻ってくると思うんだけど、少し遅くなっているようだね。ペルセニーアが戻ってきたら、セラフィーナをヴィルレー公爵のところに送って行ってほしいのだけど。」

「ならば、私がお送りいたしましょう。」

「お願いしてもかまわない？」

「ええ。ヴィルレー公爵令嬢、私がエスコートしても？」

「もちろんですわ、バジリウス様。」

セラフィーナは恭しく手を差し出したバジリウスに自分の腕を預けた。セラフィーナは幼いながらも、仕草は立派な淑女だ。そうした小さな淑女の姿は王宮の人達を大層喜ばせている。

こうして、世にも珍しい至極真面目な顔をしたバジリウス宰相とかわいらしいセラフィーナとが、２人並んで王宮を歩くという姿が見られることになった。

「ジョシュ殿下の調子はいかがでしたか？　ヴィルレー公爵令嬢。」

「セラフィーナでかまいませんわ、バジリウス様。ええ、今日はとってもお元気でいらっしゃいました。最近調子がよいようで、とってもよかったですわ。」

「そうですか。それはよかった。」

セラフィーナの7歳とは思えない可愛らしいいい様に、いつもは飄々としているバジリウスの顔も思わず綻ぶ。ふと、足を止めて小さなセラフィーナをバジリウスは見下ろした。

「セラフィーナ様。貴女は、本当にジョシュ殿下を大切に思っていらっしゃいますな。」

「まあ、当たり前ですわ。どうかなさいました?」

「いえ。…セラフィーナ様。1つ、おまじないをお教えてしましょうか。」

「なんでしょうか。」

セラフィーナはバジリウスを見上げ、グレーの瞳を不思議そうに瞬かせた。首をかしげて、にっこりと微笑む。

「エーサワィヒス・オ・イエトゥーナ…と、言います。」

「…エーサワィヒス・オ・イエトゥーナ? なんのおまじないですか?」

不思議で穏やかなその旋律を聴いて、セラフィーナの表情が不思議そうなものに変わった。その表情の移り変わりを眺めながら、バジリウスの口調は相変わらず淡々としていたが、冷たいものではない。

「今は申し上げられませんが、本当に必要なときには、きちんと思い出すことができますよ。」

「本当ですか？　でも、いつ必要になるのでしょう。」

「セラフィーナ？」

ヴィルレー公爵の声が聞こえて、セラフィーナとバジリウスの会話が中断された。２人は声のするほう顔を向ける。

「お父様！」

「フィーナ。…バジリウス宰相、わざわざセラフィーナをこちらへ？」

「いや、ジョシュ殿下のところに赴いたときに、丁度ヴィルレー公爵のところにお送りするところだと聞きましてな。」

「ありがとうございます。…フィーナ、宰相閣下にお礼を。」

「送っていただいてありがとうございます。バジリウス様。」

セラフィーナの淑女の一礼にバジリウスは頷き、ヴィルレー公爵といくつかの世間話をして、執務室に戻っていった。

＊＊＊＊

「バジリウス様…。」

執務室に戻ってきたバジリウスに、部屋の奥から掛けてくる声があった。

「ヒューリオンか。」

「はっ…。」

「何か変わったことでもあったか。」

「変わったことというわけではありませんが、妙な噂が。」

「妙な噂？」

「はい。ピウニーア・アルザス卿が、生きている…などと。」

「ほう。あのピウニー卿が？…よろこばしいことではないか。」

皮肉ではなく、バジリウスは心からそう言っているようであった。

「白翼と黒翼から、騎士が1名ずつ探索に出向いている…とか。1人は王命、1人は独断だそうです。あくまでも、噂ですが…」

「ああ、それで、黒翼からは騎士が1名行方不明…か。」

「行方不明？」

「ああ。ラディゲ・ラファイエット。魔竜の討伐を提言した騎士だったな。ピウニー卿ほどではないが、彼も優秀な騎士だ。」

「魔竜…。」

聞こえてくる声が、僅かに動揺したように低くなる。その声色の変化にバジリウスは気付いたが、特に気に留める風でもなく続けた。

「陛下も最近の動きに気付いたか、理の賢者を召喚したようだ。」

「理の賢者を…？」

「ああ。」

「バジリウス様は、ご存知なかったのですか？」

「陛下の独断のようだ。昨日、知れた。」

「何のために？」

「さあ。陛下の御心までは分からん。だが…」

「理の賢者は、応じるのでしょうか。」

「もう応じたそうだ。すぐにでも王宮に来るだろう。」

「…バジリウス様、それは…。」

「そうだな。チェックメイトだ。」

バジリウスの瞳が懐かしげに細められた。その心内はヒューリオンにも読むことが出来ず、ただバジリウスは窓の外を眺めている。極僅かだが、静謐な魔力が執務室に沈んでいた。

033．愚かなサティ

「師匠、王様のところに行く…というのは…。」

「ふうむ。先日、陛下のところからワシの下に書簡が届いてのう。ジョシュ殿下のことで相談したいとのことじゃ。」

「王子の魔法陣は…。」

「解析か？　概ね終わったのう。」

ピウニー卿とサティは顔を見合わせた。ジョシュ殿下の事…となれば、心当たりは1つしかない。「魔力抑制」の魔法陣。サティが理の賢者に依頼していた解析が終わった…ということは、国王の下に行く用件はやはり、魔法陣のことなのだろうか。サティは質問を変えた。

「ジョシュ殿下の魔法陣は…どういったものだったのですか？」

弟子の質問に理の賢者は長い髭をつるりと撫でる。

「ふぉふぉふぉ…。まあ、大体がサティの見解通りじゃったわ。」

理の賢者は言葉を濁したようだ。解析が終わっているのに、その全貌を語らない。こういうときは、恐らく理の賢者には全てが知れているのだろうが、どれほど食い下がっても教えてくれないはずだ。サティはそれ以上の追撃を諦め、口を閉ざした。だが、ピウニー卿は怪訝そうに問い直す。

「…サティの？　一体あの魔法陣は誰が…。」

「ピウニー。」

サティがピウニー卿の腕を引いて、咎めるように瞳を見上げた。追求しても無駄、という視線を受けて、ピウニー卿は何か言いたげだったが、小さく頷いてそれ以上聞くのをやめた。代わりに別のことを問う。

「賢者殿、王都には私達も行っても？」

「もちろん、そのつもりじゃよ。じゃが、ピウニー卿や。おぬしは、その姿で行けば無事が知れてしまうが、どうしたもんじゃろう。」

「？…でしたら、ネズミと猫に戻ってからにいたしましょう。」

「ほほう？　ふむ…それでよいのかの？　ならば一緒に王都に参ろうか。」

理の賢者は、少し不思議そうに首を傾げたが、やがてゆっくりと頷いた。

＊＊＊＊

理の賢者が国王を訪ねてくる…という話は、瞬く間に王宮に広まった。理の賢者は国王と親密でありながら、滅多にその召喚には応じない。かろうじて魔法師団や魔法研究所の伝手で依頼を受けることがあっても、極僅かであり、それすら本人が出て来ることはほとんど無い。気まぐれといってもいい。まして、国王の命令などで動くことは無い。その理の賢者が、国王の召喚を受けた…という。

その話を聞いてまず驚いたのは、アルザス家の2人とヴィルレー公爵、そして、ジョシュだった。

アルザス家の2人の脳裏に浮かんだのは、ピウニー卿とサティ…そして、ジョシュの魔力抑制の魔法陣についてだった。

ヴィルレー公爵とジョシュの脳裏に浮かんだのは、もちろん、サティのことである。

＊＊＊＊

ピウニー卿とサティは、理の賢者と共に謁見の間に通された。サティには初めての、ピウニー卿にとっては懐かしい空間である。サティは今、理の賢者の肩の上に。ピウニー卿は姿が見えないように、理の賢者のフードの中に隠されている。

玉座には国王らしき人が座っていた。青紫色の瞳に褐色の髪の美丈夫だ。中年ながら引き締まった体躯で、漂う魔力も存在感も国王というだけの威厳が備わっている。ただ、怖そうな人ではない。溢れる威厳を抑えるのは、温厚そうな瞳だった。

そして、その隣にはジョシュが座っている。普段はほとんど表に出てこないが、ここ最近調子がよいからか、是非謁見の間で理の賢者に会いたいと、皆の反対を推して出てきたのである。国王はそれを許した。歩く速度はゆっくりだが、顔色もよく、しっかりとした表情だ。理の賢者の肩に乗っているのがサティだと知れたときは、思わず顔が綻んだようだった。サティはジョシュと瞳が合って、尻尾をぱたんと動かしてみせた。その様子にジョシュが微かに笑ったが、もちろん、声には出さず静かに国王と理の賢者の会話を聞いている。

「久しいのう。ジェレシス陛下。」

「お久しぶりです。理の賢者殿。…こうして召喚に応じていただき、感謝いたします。」

「ふぉふぉふぉ…。一国の王ともあろう方が、このような老人めに頭を下げてはならんのう。…ジョシュ殿下においても、お元気そうじゃの。」

「お久しぶりです。おかげさまで、最近はとても調子がよく、助かっております。」

「ふぉふぉ。『おかげさまで』と言われる覚えは、わしにはないのじゃが、まあなによりじゃわい。ところで…。」

理の賢者は飄々とした態度を崩さず、膝を付くこともなく、国王に向かい合っている。国王の周辺には宰相、黒翼騎士団団長、そして白翼騎士団団長などが控えているにも関わらず、誰一人として理の賢者の態度に口を挟むものも咎めるものはいない。ごく当然のように国王もそれを受け止め、疑問に思うものは誰もいない。

「わざわざ、ジェレシス陛下がこのような謁見の間にわしを呼んだのは、どういった用件かのう。」

理の賢者の言葉に、国王が答える。

「理の賢者殿に…、我がオリアーブ国王太子ジョシュの後見人になっていただきたい。」

バジリウス宰相の眉がぴくりと動き、周囲がざわついた。ジョシュ

も驚いたような顔をして国王の横顔を見ている。ただ1人、驚いたような表情をしていないのは国王のみであった。いや、正確にはバジリウス宰相も無表情ではあったが、この宰相の場合は普段から表情があまり豊かでは無いため分かりにくい。

オリアーブの賢者には正確には国王から何らかの位を与えられているわけではない。言ってみれば無冠の存在だ。ただ、その存在は国王という地位と同様に普遍のものであり、誰もが知っている地位である。その賢者の1人「理の賢者」が王族の後見人になったことは、これまでに無い。その例外を理の賢者が引き受ければ、ジョシュが王太子である…ということは、誰もが認めざるを得ない揺ぎ無いものになるだろう。これから生まれる子供が王子であろうと、ジョシュの身体が弱かろうと、ジョシュは王太子となる。それは宮廷のどの貴族がジョシュの後見人になるよりも貴族達を黙らせるだろうが、剣も魔法も持たないジョシュにとっては逃げ場の無い負担になるはずだ。

話の重さを感じさせぬ風に、理の賢者がふぉふぉ…と笑った。

「ふむ…その話は、別の部屋でしようかの。」

謁見の間でのそれ以上の国王の言及を遮り、理の賢者とサティ、ピウニー卿は別の部屋へと通された。

＊＊＊＊

国王と理の賢者は、2人きりで応接室へ入ってしまった。防魔の結界が張られ、外側から魔力による干渉を受け付けなくしている。控え室のソファにはサティと、そのサティの首元に隠れたピウニー卿の2人だ。

「ピウ、王様に会わなくてもいいの？」

「うむ…。理の賢者が、今回の用件はジョシュ殿下のことだと言われたのだ。仕方があるまい。」

「うん…。」

「それに、陛下には呪いが解けてから謁見すると決めている。今の姿では会えぬし、ヴェルレーンの面目も立てねばならんからな。」

唐突に帰宅した理の賢者は、サティとピウニー卿が猫とネズミに変わる瞬間を見届けると、そのまま王宮に入った。…ちなみに、王都からここまで、理の賢者の転送魔法であっという間に連れてこられたのには参った。サティには到底できる芸当ではない。一体どういう仕組みになっているのかは、全くもって不明だ。そもそも、そんな魔法があるならあんなに大変な旅は…と思ったが、いや、何も言うまい。あれがあったからこそ、今の自分達があるのだから。

「そういえば、ピウ。何か私に話があったんじゃないの？」

「ああ…。」

サティに言われて思い出した。ピウニー卿はサティに自分の思いを言葉にして伝えようと思っていたのだった。だが、今の姿で伝えるのは躊躇われた。どうせならば、人間の姿でサティをこの腕に抱いたまま、伝えたい。

「いや…理の賢者殿の用件が終わってからで構わない。そういえばサティ、サティも何か話があったのではなかったか？」

「あ…。うん…。それも、後でででいいよ。」

図らずも、サティもピウニー卿と同じことを考えていた。こんな（ネズミから見ると）数倍大きい猫の姿で伝えるよりも、人間の姿で伝えたいと思うのは、ささやかな女心というものだ。

「ジョシュ殿下に会えるかな…。」

サティがソファに丸くなったときだった。ピウニー卿の髭がぴんと真っ直ぐになった。ピウニー卿はすっくと立ち上がり、その気配にサティも身体を起こす。耳を前に向け、気配を伺う。何者かに見られているようだ。ピウニー卿が剣の柄に手を掛け、鼻をひくつかせた。気配は向かいのソファからだ。サティはトン…とテーブルの上に移動する。

「サティ…待て！」

ピウニー卿の声に、サティは思わず前に出てしまった前足を止める。

「サティ…？」

サティの名前を呼ぶ声が、聞こえた。
それは、ピウニー卿の声ではなく、ねっとりと柔らかな、女の声。

「ねえ、もしかして、サティなの？」

「ヒュー…リオン…？」

サティの掠れるような震えるような声に、呼応するように笑い声が

聞こえる。サティの足が少し下がった。ピウニー卿が隣に並ぶ気配に気付いて、サティはピウニー卿を隠すように前足を出した。ピウニー卿の身体が、サティの前足に触れると、その身体が極度に緊張しているのが分かる。…ソファの下から気配を現したのは。

「そうだよ、ヒューリオンだよ。…久しぶりだね、＜アヌ・クィツグ・オ・サティ＞（愚かなサティ）」

サティに向かい合った気配は、確かにあの魔法使いの声だった。その声が放った魔法の言葉に、セピア色の毛皮がゾクリと逆立つ。

2人の眼前にいるのは、

濃茶色の毛皮の。

オコジョだった。

０３４．守ると騎士の剣に誓った

ヒューリオン…と名乗ったオコジョと、毛を逆立てている猫のサティが向き合っている。緊迫した空気の中、まず口を開いたのはピウニー卿だった。

「ヒューリオン…オコジョ？」

ヒューリオンというのは、サティと魔竜に呪いを与えた魔法使いだ。サティを裏切ったという、かつてのサティの友。それは女だったのか…という思いが一瞬、騎士であるピウニー卿の脳裏に浮かび、すぐに消えた。たとえ女であったとしても、サティの敵ならば…。ピウニー卿は、再び剣の柄に手を添えて構える。それを見て、ヒューリオンはふん…と瞳を細めた。細長い身体を上へと伸ばし、ピウニー卿を不敵な目元で見下ろす。

「…つまらないネズミなどを従えて、サティ…君らしくないね。ねえ、こんなところで何をしているの。」

「…ヒューリオン、死んだんじゃなかったの…？」

「死んでいてほしかった？」

「どうしてそんな姿で…。」

「貴方も同じでしょ？」

ヒューリオンがオコジョの丸い顔を傾げてみせる。外見が可愛いだけに、邪悪な声と口調が憎らしさを煽るようにピウニー卿には思え

た。

「私も同じ…って、私は貴方の呪いを受けてこうなった。その呪いの直前、貴方の魔力は全て私が奪っていたはず。…それで、それ以上の魔力を貴方は使って…」

「でも、死ななかった。貴方が私の呪いを弾き返したおかげでね。」

あの戦いで、ヒューリオンの魔力は全てサティに封じ込められた。だが、魔法使いというのは魔力を使えなくてもまだ体力を魔力に変換し、魔法を使うことができる。ヒューリオンは自身の体力を削ってもなおサティに攻撃し、それによってサティの杖は折れたのである。サティの杖を折ったものの、ヒューリオンの身体は無事ではすまなかった。急速に奪われていく体力の中で、ヒューリオンは最期の力を振り絞って、…あの呪いを唱える。その一部をサティが弾き返したのだ。そして、ヒューリオンにも同じ呪いが掛かった。

その呪いでサティの魔力は全て押さえられ、全く質の異なる魔力に塗り換わった。そして、それはヒューリオンの魔力も同じだ。ギリギリのところで、全く質の異なる魔力が身体を満たした。それはヒューリオンの体力の減少を食い止め、生き延びる力になったのだ。こうしてヒューリオンもサティと同じく、小さな獣へと姿を変えた。

「…そう。私は…。」

てっきり、自分の力で、ヒューリオンを殺してしまったのかと思っていた。この奇妙な安堵感はなんだろう。愚かで都合のいいことかもしれないが、サティはヒューリオンが生きていることに、ほっとしたのだった。その様子を見て、サティの顔を覗き込むように、ヒューリオンは丸い瞳を細める。

「随分余裕だね、サティ。本当に腹立たしい。…なんでお前が、私の師匠の…」

「あなたの、師匠？」

「ヒューリオン？…誰と話している。」

「バジリウス様。」

カタン…と部屋の扉が開き、別の声が聞こえてきた。近づく足音に、サティは頭を低くする。小声で「乗って」…と。ピウニー卿はサティの頭によじ登るが、それを見ていたヒューリオンがサティの喉下に飛び掛った。サティはそれを間一髪のところで避け、後ろに跳び退る。途中で大きな人間の影にぶつかり、その手が追いかけてきたが、それも避けて部屋の隅まで駆けていき、鏡台の下に飛び込んだ。

「理の賢者殿の所の、猫…か。ヒューリオン、知り合いなのか。」

「あれは…あれが、第5師団で私の呪いを弾き返した…」

「ああ。なるほど…。元は人か…ということは…。」

足音と気配が近づいてくる。

「ヒューリオン、私とお前の関係がたった今、知れてしまったということか。」

「…バジリウス様…。」

「まあよい。隠しているわけでもなく、少し調べれば分かることだ。だが…」

足音が、止まった。

「今は黙っておいて貰わなければなるまいな。」

隠れている箇所からピウニー卿とサティはずるずると後退する。不味い、このままでは2人とも捕まってしまう。正体が知られて不味いのはどっちだろう。どちらかが捕まるとすれば…それは…。

「サティ、」

ピウニー卿の声を最後まで聞かずに、サティはぶんっ…と頭を振って、ピウニー卿を自分から振り落とした。ピウニー卿の小さな身体は簡単にサティの頭から離れ、ころんと後ろに転がる。

＜イアネク・アヘティク・イ・エマト・ウロアマ…＞

（踏み越えられぬ、境界を張り…）

＜ピウニーア＞

（…ピウニーアを守護せよ）

サティがバジリウスには届かないほどの小さな声で呪文を唱えると、首にかけている緑色の石がふわりと光った。そこに封じ込めている杖の効果だろう。最後にそっとピウニー卿の名前を唱えると、2人の間に透明の薄い壁ができる。

「サティ、何を…！」

トン…と、サティが薄い壁を押すと、ピウニー卿ごとそれが後ろに押されて転がる。鏡台の下に男の腕が伸びてきて、サティの身体を掴んだ。

「サティ！…ダメだ！」

それでもサティは何かを訴えながら、捕まるまいと暴れていた。暴れていたが、所詮は猫だ。サティの身体は何者かの手に掴まれたまま連れて行かれた。ピウニー卿はサティを追いかけたが、見えない壁に阻まれる。ドンドンと見えない壁をピウニー卿は叩いたが、全く微動だにしない。サティの声は聞こえないから、ピウニー卿の声も向こう側には聞こえていないのだろう。

「くそっ…なんだこの壁は、サティ！」

男の気配が遠ざかっていく。ピウニー卿は剣を抜いた。抜き様の一閃で壁を斬る。

パチン…！

剣は弾かれ、魔力の壁は破れない。…壁を破れるほどの魔力でなければダメだということか。ピウニー卿は自分の剣に魔力を込める。恐らく、自分の魔力ではサティのそれを上回ることはできないだろう。ならばサティを超える魔力を呼び出すまでだ。躊躇うことなく、呪文を唱える。

＜ウィロー・ナ・ムラン・イアディ＞

（偉大なる魔の竜の）

＜オウィクーブ・オーン・アナクーユ・エーク・オ・ピウニーア＞
（勇敢な炎よ、ピウニーアの剣に宿れ）

ピウニー卿の剣に青い炎が一瞬燃え上がり、刃に吸い込まれていく。それが完全に吸い込まれる前に、ピウニー卿は剣を構えたまま身体ごと壁にぶつかる。ミシ…と僅かにそこに綻びができ、その綻びを手がかりに、剣をさらに横に動かす。そのまま力任せに壁を裂くと、ようやく外界の音が聞こえた。

慌ててピウニー卿が鏡台の下から出て行くと、バタン…と扉が閉まったところだった。

「…サティ…くっ、無茶な真似を…っ」

ピウニー卿は一瞬、理の賢者と国王が入っている応接室の扉を見た。恐らく2人はまだしばらく出てこないだろう。出てくるまで待つことは、とても出来ない。それに扉ごと防魔の結界が張られている。理の賢者の結界はマハの剣でも破れないだろう。だとすれば、選択肢は一つだ。

ピウニー卿はバジリウスが出て行った扉を睨んだ。四肢を思い切り伸ばして、その扉へと駆けていく。自分の体重では恐らく、扉は開くまい。ピウニー卿は剣を抜くと、口に柄を咥えた。人の姿では無理だろうが、ネズミの尖った口元ならば安全に咥えることが可能だ。ピウニー卿は扉と壁の境目を見上げ、そこを思い切り駆け上がった。幸いなことに引っかかりの多い壁は、楽に登ることができる。

ピウニー卿は扉の閉まり金具の少し上まで登ると、扉と壁の隙間に剣を差し入れた。ネズミサイズの剣はその隙間にピタリと入り込む。まだ刃に残っている魔竜の炎の魔力に、ピウニー卿自身の魔力を込

める。剣の柄を握ったまま、トン…と壁から足を離した。

…ガキン…！

剣の刃がピウニー卿を引っ掛けたまま滑り落ち、扉の閉まり金具に引っかかる。だが…。

「頼む…！」

＜オウィクーブ・オーン・アナクーユ！＞

（勇敢なる炎よ！）

ピウニー卿の呪文と魔力に呼応するように、トクンとマハの剣が脈動し、脈動と同時にバキ…！と甲高い音がして金具が外れた。留めるものが無くなった扉はキイ…と開く。

「おい、扉が勝手に開いたぞ？」

「変な音も…ん？」

外に待機していた護衛騎士らしき人間が、扉の側にやってきた。扉を開くと中を覗き込む。

「うわっ、なんだっ…！？」

「おい、どうした？」

「いや…。」

騎士は、自分の身体を何かが這ったような心地がして、慌ててきょ

ろきょろと自分の身体を見下ろす。だが、そこには何も無い。部屋の中にも特に怪しいところは無いようだ。ここは先ほどまで理の賢者が控えていた部屋である。確かバジリウス宰相が、賢者の連れてきていた猫を、許可を得ている…と言って、どこかに連れて行った。扉が壊れてしまったのが腑に落ちないが、ともあれ、2人の騎士は扉を閉めるとそこが開かないように身体を置いた。

2人の騎士は扉と部屋に気を取られ、足元を駆けていく金色のネズミにはとうとう気付かなかった。

＊＊＊＊

ジョシュは自室でそわそわと落ち着かなさげだ。サティに会えるかと思っていたのに、なかなかその機会が与えられず、謁見の間でちらりと見かけただけだった。サティは本当に理の賢者を連れてきてくれた。そう思うだけで、ジョシュは嬉しくなる。国王が召喚したというから、魔力抑制の事とは関係ないかも知れないが、それでもサティが理の賢者と共にいる様子を見ると、幻のようだったあの夜が、急に現実めいたものに思えるのだった。

「…やっぱり僕、会いに行ってみる。」

「ジョシュ殿下！」

立ち上がったジョシュをたしなめるように、入り口に控えていたペルセニーアが近づいてきた。

「ジョシュ殿下、お気持ちは分かりますが、いくら殿下でも陛下の許可無く陛下のお客人に会うことは。」

「…うん、分かっているけれど…。」

ジョシュは困ったような顔で扉まで歩き、そこを開いた。ペルセニーアも後に続く。部屋から出さないというわけではないが、ジョシュがもし無茶をしようとしたらすぐに留めなければならない。部屋の入口でペルセニーアを見上げたジョシュは苦笑する。

「分かってるけど、どうしても会いたいんだ。」

「すぐにお会いできますよ。」

「そうだろうか…。」

ジョシュはしゅん…とした。確かに話は「ジョシュの後見人に」という話だった。それだけでも意外で、荷が重い話だ。だからこそ、サティに会って話をしたかった。ジョシュは、何かを決めたように顔を上げる。

「やっぱり僕…。」

「ペルセニーア！」

何かを言いかけて顔を上げたとき、小さいが朗々とした声が聞こえた。傍らに控えている侍女達が怪訝そうな顔できょろきょろしている。ペルセニーアがハッとした顔で、扉を閉めた。

「ジョシュ殿下、すみませんが人払いを…。」

常に無く低く切羽詰った声色を聞いたジョシュは、すぐに侍女達に下がるように命じる。侍女達が全員外に出て行ったところで、ペル

セニーアがジョシュの部屋の扉を閉め、あたりをきょろきょろと見渡した。

「…兄上？」

「…あに、うえ？」

「ペルセニーア…！」

声が聞こえてきたのは、ジョシュの足元だった。見下ろすと、そこには金色の毛皮のふっくらとしたネズミが一匹。腰に小さな剣を吊るした姿で立っていた。ペルセニーアもジョシュも、その側に膝を付く。

「兄上…どうしたのですか、サティ殿と一緒に居たのでは…。」

ピウニー卿はペルセニーアの身体を駆け上がると、ジョシュに聞こえぬようそっと耳打ちした。

「…ペルセ、私をバジリウスのところに連れて行ってくれ。連れて行ってくれるだけで構わない、後は私がやる。」

その内容にペルセニーアは眉を潜め、「申し訳ありませんが、殿下…少し、御前を失礼いたします。」…そう言って、王子の前を退出しようとする。だがジョシュはそれを許さなかった。

「待って、ペルセニーア、そのネズミは誰？　僕にも話を聞かせて。」

「…殿下、しかし…。」

「お願いだ。ペルセ…！」

ペルセニーアは僅かに瞳を苦々しげに歪ませると、やがて観念したように肩にいる兄の名を呼んだ。

「兄上。」

「ああ…、取り乱してすまない…。」

呼ばれて、ジョシュの前に金色の毛皮のネズミが現れる。ペルセニーアは、ピウニー卿をサイドテーブルの上に乗せた。その傍らに膝を付いて、話の続きを促す。

「宰相閣下のところへというのは…？」

「私の足では執務室までは遠い。何か用事にかこつけて、執務室に入るだけでかまわない。」

「どういうことですか？」

「サティがつかまってしまった。」

ピウニー卿は苦しげに言った。

ペルセニーアは冷静だったが、ジョシュはその人物の名前に驚きを隠せなかった。思わずテーブルに両手を付いて、ピウニー卿に食い下がる。

「サティが、バジリウス宰相に…？」

ピウニー卿のこげ茶色の瞳が鋭くジョシュを見上げ、強く頷いた。
ジョシュはピウニー卿をすくいあげると立ち上がる。

「…ペルセニーア、僕が行く。」

先に立ち上がったジョシュを見上げていたペルセニーアは、静かに溜息をついて、自分も立ち上がった。首を振って、ピウニー卿をすくいあげたジョシュの手を両手で包み込む。ピウニー卿はジョシュの手からペルセニーアの手に移ると、素早くその肩に乗った。

「仰ると思っておりましたが、…なりません。」

「でも…っ」

「ジョシュ殿下。」

ペルセニーアの肩から、低い声が響いた。ジョシュが見上げると、そこには騎士然としたネズミが後ろ足で立っている。ネズミは小さいながらも騎士の礼を取った。

「私は、オリアーブ国国王親衛隊の1人、ピウニーア・アルザスと申します。」

「…竜殺しの、ピウニー卿?」

「取り乱していたとはいえ、兄妹ともども殿下の御前をお騒がして申し訳ありません。」

ジョシュは首を傾げる。口元がぴくぴくとせわしなく動き、髭がピン…と緊張していた。そのネズミの姿が、跪くような形を取る。

「サティのことを心配していただき、感謝いたします。…が、サティは私が助けます。殿下はここで、お待ち下さい。」

「ピウニー卿…。」

力の無い自分が悔しくて、拳を握って俯く。そんなジョシュを見て、ピウニー卿は立ち上がって髭を撫でた。

「ジョシュ殿下。…私が、サティのところに行かなければならないのです。」

力が無くても、ネズミでも…自分が、助けに行かなければならない。

「え？」

「剣にかけて守ると誓ったのです。」

そんなことを言われてしまうと、流石に我を通すことは出来ない。ジョシュは口を閉ざした。

「…ジョシュ殿下？　ペルセニーア？…どうした？」

そのとき、パヴェニーアとヴィルレー公爵が揃って現れた。２人ともやはり気がかりは、サティとジョシュのことだった。それで、ひとまずジョシュの様子を見に来たのだ。パヴェニーアはペルセニーアの肩に乗っているピウニー卿に目を留めて、眉を潜める。

「…ペルセニーア、これは…。」

「兄上、アンヘル様、…ジョシュ殿下をお願いします。」

ペルセニーアは説明を省き、静かに一礼して2人と入れ違いに扉へ向かう。

「ペルセ！」

呼んだのは、ヴィルレー公爵アンヘルの声だ。

ペルセニーアはその声に振り向くと、1つ頷いてジョシュの部屋を後にした。

０３５．一番大切なことは

後に残されたヴィルレー公爵とパヴェニーアは、呆気に取られてペルセニーアが出て行った扉を見つめていた。一番最初に我に返ったのはパヴェニーアだ。

「…ジョシュ殿下、今のは一体どういうことなのですか？」

「サティが。」

「サティ殿が？」

覚えのある名前にパヴェニーアは怪訝そうな顔をする。

「バジリウス宰相につかまってしまった…って…。」

「つかまった…と言ったのですか？」

問いを重ねたのはヴィルレー公爵だ。ジョシュは頷く。

「どういうことだ、…なぜ、宰相閣下が？　理の賢者は知っておられるのですか？」

「それは分からない。」

ジョシュは首を振る。バジリウスが理の賢者の許可無くサティをかどかわすなどあり得ない。…だが、そうでなければピウニー卿があれほど必死で助けたりはしないだろう。そうだ、ピウニー卿…。

「パヴェニーア団長、…団長は、ピウニー卿のことを知っているの？」

「ピウニー卿？」

ジョシュの問いかけにパヴェニーアが難しい顔になった。説明を求めるように、ヴィルレー公爵もパヴェニーアの顔を見つめる。パヴェニーアは息を吐いて、頷いた。

「…お会いになりましたか。」

「うん。」

「パヴェニーア団長、どういうことだ。ピウニー卿は生きておられるのか。」

「ええ。先ほどペルセニーアの肩にネズミが乗っていたのを見られませんでしたか？…あれが、兄のピウニーアです。」

「…まさか！」

「ヴィルレー公爵も猫のサティをご存知ですね。…兄は…ピウニーアは、サティ殿と共に理の賢者の元へ旅をしていたのです。人の姿に、戻る為に。」

「それで、理の賢者と共に王都へ…？」

ヴィルレー公爵もジョシュも、もちろんピウニー卿の名は知っている。1年と少し前に、竜を倒して死んでしまったという竜殺しのピウニー卿。塵となって消えてしまい、死体が出なかったというのは

有名な話だ。死体が出なかった…つまり小さなネズミの姿になってしまったからなのだろうか。

「サティ、も？　サティも、元々は人間なの？」

パヴェニーアは頷く。

「兄も、サティ殿も、きっかけは違いますが同じ境遇です。」

「まだ、人の姿に戻れてはいない、ということですか。」

しん…と、部屋に沈黙が落ちた。

＊＊＊＊

「バジリウスの名前が出てきたときに、ペルセニーアは驚いていなかった。…ペルセは何かを知っていたのかもしれない。」

ジョシュの声が低く沈む。もしそうだとしたら、ペルセニーアは、バジリウスの何を知っているのだろうか。ジョシュの言葉にパヴェニーアが一度振り向き、拳を握り締めた。…何か知っていたとして、なぜ兄の自分に言わないのか。くそっ…！と騎士としてはあるまじき悪態を付くと、室内の2人に向き合う。

「…やはり、私も行きます。ヴィルレー公爵、ここを…。」

「僕も行く！」

「殿下！」

「お願い、パヴェニーア団長。僕も連れて行って。サティは、…僕を助けてくれるって約束してくれたんだ。身体が楽になるような呪文も教えてくれた。だから…」

「…助ける、というのはどういうことですか？　身体が楽になる…というのは…。サティは、殿下のお身体について、何か知っていることがあるのですか？」

ヴィルレー公爵の訝しげな声に、ジョシュの表情がしまった…というものになる。聡いといってもまだ12歳だ。咄嗟の表情の変化は防げない。ヴィルレー公爵は、ジョシュとパヴェニーアの顔を交互に見つめ、眉を潜める。「殿下…。」ヴィルレー公爵の声が、ジョシュを追った。あきらめて、ジョシュは俯く。

「僕の身体がおかしいのは、魔力抑制の魔法陣のせいだって…サティが。だから、理の賢者に相談してくれるって。」

「魔力抑制の…魔法陣？」

頷いて、ジョシュは説明する。寝台の下にある魔法陣のこと。独学で魔法陣のことを調べ、どういった効果があるかは幼い頃から知っていたこと。あの夜サティにそれがバレたこと。…そして、その目的は、恐らく誰かが自分を死なせないように魔力抑制を行っているのだということ。

その話を聞いたヴィルレー公爵は少なからず、驚く。だが、そこはさすがに若くして公爵位を治めているだけの男だ。少しの間考え込むと、パヴェニーアを見た。

「アルザス伯爵。」

よく通る美しい声でヴィルレー公爵は呼ばわった。「パヴェニーア団長」…ではなく、アルザス伯爵を。

「貴方は、このことをご存知で？」

公爵の視線を受け、パヴェニーアは頑なな眼差しでヴィルレー公爵を見返した。一瞬、息の詰まるような緊張感が2人の間に下りた。いつも気安い雰囲気で内政とは程遠い2人であっても、やはり彼らは国王に仕える貴族なのだ。見ているジョシュも、緊張する。パヴェニーアは厳粛な様子で目礼して、返答する。

「サティ殿より他言無用…と。」

「それで？」

「理の賢者に相談する以上のことはしないと、サティ殿と約束しております。このことを知っているアルザス家の者は、我ら3人の兄弟のみ。」

ヴィルレー公爵は苦しげに瞑目して、安堵したように息を吐き出した。

「…ああ。そうだろうな。すまない。」

「いいえ。ごもっともなことかと。」

王太子の身体に異常の無いこと…強いて言えば、強大な魔力を持っていること自体が通常の事態ではないこと。魔力の抑制を6歳のころから継続させている何者かが宮廷に存在すること。…それはジョ

シュの身の上だけの話では済まされない。解呪する方法を見つければ、それを餌に国王自身に揺さぶりをかけられるかもしれない。王太子を生かすことも、殺すこともできる。特に、ペルセニーアのようにジョシュの側近くに仕えるものであれば簡単だ。もちろん、自分が信頼しているペルセニーアがそんなことをするはずが無い。パヴェニーアに関しても同じだ。ピウニー卿も、そういった人柄では無いだろう。そんなことは、分かっている。それでも、ヴィルレー公爵として、アルザス伯爵に確認しなければならなかった。互いが協力しあって、宮廷に存在し得るかどうかを。

2人の間の緊張が解け、ジョシュもほっとした表情に戻る。だが、喉の詰まるような感覚を覚えて、くらりとよろめきそうになった。

＜ニシャーナ・ア・ナヌーウ＞
（柔らかなる、安らぎを）

サティから教えてもらった呪文を小さく唱えると、やはり心も身体も落ち着く心地がする。とても綺麗な言葉だ…と、ジョシュは本当にそう思った。この呪文のおかげで、ずいぶんと身体が楽になっているのだ。やっぱり、このまま放っておくわけにはいかない。「パヴェニーア団長…。」ジョシュは、パヴェニーアの腕を掴んだ。

「お願い。団長…！　大丈夫、バジリウスがいきなり手荒な真似をするとは思えない。…交渉事があるなら、僕が出る。だから。」

「殿下…。」

パヴェニーアは自分の腕を掴み、迫ってくるジョシュを見下ろした。細い腕、細い身体。剣を持ったことのない手は柔らかく、何かの役に立つとは思えなかった。それでも、ジョシュの言葉は騎士である

パヴェニーアの心を打った。パヴェニーアは「失礼します。」…と言って、ジョシュの身体を片腕に乗せて持ち上げる。

「ちょっとパヴェニーア団長！」

「走りますから、掴まっていてください。…ヴィルレー公爵！」

「…陛下の元には私が。」

ヴィルレー公爵も観念したのだろう。2人に頷き、さらにパヴェニーアに真剣な眼差しを向ける。

「パヴェニーア団長、必ず後で、詳しい説明を。」

「はっ…。」

「ジョシュ殿下も。」

「分かった。手間をかけさせてすまない、ヴィルレー公爵。」

パヴェニーアはジョシュを片腕に抱えたまま部屋を出ると、猛然と廊下を走り始めた。

＊＊＊＊

「…ヒューリオンの師匠が、バジリウスだと…？」

「ヒューリオンという名を知っておられるのですね。」

「ああ。サティが連れて行かれる直前に、会って話した。その後、

バジリウスがやってきて…『私とヒューリオンの関係が知られてしまったのか』…と。」

「そうだったのですか。やはり知られたくない、何かがあるのでしょうか。」

「それはそうだろう。…恐らく、サティとの戦闘をもみ消したのだろうな。」

「…あれからサティ殿の関わったらしい事件を調べてみました。」

ペルセニーアはバジリウスの執務室へと真っ直ぐ向かっていく。幸いなことに人の少ないその道中で、自分が調べたことをピウニー卿に語っていた。サティが一番最後に関わった魔法研究所の依頼、その依頼の直後に呼び出されたという第５師団。この１年間で消えた第５師団の魔法使い…その名前がヒューリオンだったこと。そして、ヒューリオンの師匠の名が、バジリウスの魔法語の呼び名だったことを。

「…ヒューリオンというのはサティが倒した魔法使いの名だ。」

「はい。」

「知っているか。魔竜を倒すための計画書が最初に流れてきたのは、第５師団だ。」

「もちろん知っています。ラディゲ・ラファイエット卿を通して、第５師団から…と。…兄上、それは…。」

「魔竜は善良なる竜だった。」

「…な…。」

「実際に会って確認した。この剣は、魔竜の一部を譲り受けて作ったものだ。」

ペルセニーアの足が止まる。肩のピウニー卿に向かって、僅かに顔を傾ける。

「何者かに呪いをかけられ、理性が狂い暴れていたそうだ。」

「…その呪いが、第5師団の手によるもの…と?」

「正確には、ヒューリオンの手によるのではないかと考えている。今、丁度ヴェルレーンという白翼の騎士が、そのあたりの情報を調べているところだ。だが、調べるまでもないかもしれんな…。」

「…すべての裏に居るのがバジリウス宰相だとして、なぜ、あのような人が?」

俄かに信じられるものではない。バジリウス宰相はそれほどに、人格者として知られていた。もし、国を荒れさせるとか乗っ取るとかそういう目的があるならば、もっと別の方法があるはずだ。このような回りくどい方法などは必要ない。彼は、国のもっとも中枢にいるのだから。彼が表向き行ってきたことで、国の不利益になったことはただの1度も無かったはずだ。裏で秘密裏に何かを企んでいたということであれば…その目的はなんだろう。

「それが分からないから本人に聞くのだ。…それに、一番大切なことは…。」

サティがさらわれてしまったことだ。

『黙っておいて貰わなければなるまいな。』

バジリウスはそう言った。…その言葉の意味がどれほどのものなのか、ピウニー卿には分からない。思い浮かぶのは悪い予感ばかりだ。だが、何もさせない。手出しなどさせない。なぜならば。

まだ、己の気持ちを、伝えてもいないのだから。

036．いよいよ、投了だ

「バジリウス様。…あの時サティと一緒に居たネズミはいかがしましょう。探しますか？」

「放っておけ。どのみちあの部屋からは出られまい。」

言いながら、バジリウスは執務室の机の上に視線を落とした。

「ちょっと！出しなさいよ！」

「言っておくが、その中では呪文も使えない。」

「うるさいな、分かってるわよ！」

「分かっている…か。流石だな。」

執務机の上に置かれている鳥かごのような檻に、サティは閉じ込められていた。檻の外には、サティを見張るように濃茶色の毛皮のオコジョが身体を伸ばして立っている。鼻をひくひくさせながら、周囲を注意深く伺っていた。その様子を横目でちらりと見て、サティは声を低くした。バジリウスへと視線を移す。

「…どうするつもり。」

「あまり手荒な真似はしたくないのだがね。」

「充分手荒な真似されてますけど？」

「まあ、そう言うな。」

「バジリウス宰相…。」

「なんだ。」

「なぜこのような危うい真似を？」

「何のことかね？」

「…慌てて私をさらわなくても、魔法研究所で起こった事件程度。…わざわざ理の賢者の猫に手を出さなくても、もみ消したままにしておくことなどたやすいでしょうに。」

理の賢者の猫を勝手にさらったなどの騒ぎになれば、今度こそもみ消すことは出来ないだろう。幾らオリアーブ国の宰相であっても理の賢者に手を出すことは許されない。そういう意図があっての質問だったが、サティの言葉にバジリウスは、ふ…と瞳を細めた。笑ったようだったが、その問いとはまったく別のことを口にする。

「元は人の子か。…サティと言ったか。」

「何よ。」

「弟子が世話になったそうだな。」

「弟子…？」

バジリウスの言葉にヒューリオンがきょろ…と、丸い瞳をバジリウスに向ける。サティは不機嫌そうに瞳を逸らした。

「…私も魔法使いの端くれでね。名をバジリウス・イルスーク・イラ・エドゥ・ユーク…という。」

ピク…とサティの耳が警戒するように後ろに向いた。もちろんその名前には聞き覚えがある。

「ヒューリオンの…。」

「そう。ヒューリオンは私の弟子だ。」

「エドゥ・ユーク…。イルスーク・イーラ…。」

思わずサティは反芻した。どこかで聞いたことがある単語は、確かにヒューリオンの魔法語の名の一部だ。なぜ気付かなかったのだろう。この単語は並びを変えただけだったが、ジョシュの魔法陣を構成している呪文の一部に間違いない。黙り込んだサティに、ちらりとバジリウスが瞳を向けると、グリーンの瞳がバジリウスを見返していた。2人の間に沈黙が流れる。だからだろうか。外の騒がしい音が、耳に付いた。足音と、人の声が響き、やがてノックの音が聞こえてきた。

バジリウスが訝しげに扉に目を向けると、外に控えている護衛の制止の声を丁重に、だが有無を言わさずに振り切ってペルセニーアが入ってくる。バジリウスは表情を変えることなく、サティとヒューリオンと、ペルセニーアとの間を遮るように前に出た。

「…これはペルセニーア殿。貴方はジョシュ殿下の下にいらっしゃったのでは?」

「宰相閣下、こちらに理の賢者殿の猫が迷い込まれているかと思いますが。」

「ああ、確かに保護しているね。少し話が聞きたくてね。」

「話？　お戯れを。私は猫といいましたが。」

「理の賢者のところの猫だ。…話せるとしてもおかしくはないと思わないか？」

「賢者殿の許可は？」

「同じ質問を貴方に返そうか。一体何の権限で、私の元に猫のことを質問に来たのかね？」

「早々に理の賢者の元にお返ししたいのですが。」

「それならば心配は無いよ。私から言っておこう。」

宰相に相対する態度としてはギリギリの非礼さでペルセニーアは話していたが、それに応対するバジリウスも顔色1つ変えない。ペルセニーアは硬い眼差しのまま、執務室へ踏み込み、執務机の近くまで距離を詰めて来た。

「…どうしても引き渡してはいただけませんか？」

「どうしてもという理由が無いと思うが？」

引き下がらないペルセニーアに、バジリウスは小さく苦笑した。

「…何を心配しているのかは分からんが、大丈夫だ、ペルセニーア殿。理の賢者殿は、私のかつての師匠なのだよ。師匠のことはよく知っている。きちんと説明をする。安心したまえ。」

「理の賢者殿が？」

ぴく…とペルセニーアの端整な眉が歪む。バジリウスが理の賢者の弟子だった…というのは初耳だ。ペルセニーアは逡巡したが、やがてちらりとサティを見る。だが、一言もサティに言葉はかけず、諦めたように騎士の一礼をして一歩下がった。

「分かりました。…失礼をして申し訳ありません。」

「かまわない。ジョシュ殿下のところに戻りたまえ。」

その言葉には答えず、再度一礼して踵を返す。扉を開けて、静かに退室した。その立ち去った扉を眺めて、ヒューリオンはくすくすと笑う。

「うわ、薄情な女だね。サティ？　お前のことは助けてくれないみたい。」

「手荒な真似はしないんじゃなかったの？あなたの師匠は嘘をつくのかしら。」

「生意気な…！　今にも殺してやろうか！」

ヒューリオンはサティの檻に前足をかけて胴体を伸ばすと、くわ…と口を開けた。ふん…と鼻を鳴らしてサティはそっぽを向く。２人の様子を見て、窘めるようにバジリウスがヒューリオンを下がらせ

る。

「下がれ、ヒューリオン。」

「しかしっ」

バジリウスはサティを見下ろして、微かに笑った。

「さて…。なぜペルセニーア殿がお前を迎えに来たのだろう?」

サティはじっと檻の床を見つめていた。ぐるりと記述されている魔法陣は、恐らくバジリウスが描いたものだろう。堅物で…そして極僅かな魔力で最上の結果を得られるように効率よく構成している。シンプルな美しさでイメージに頼るサティとは違う。そして、生死の境目に魅了された危ういヒューリオンの魔法陣とも。サティは、バジリウスの問いかけを聞いていないようにじっとその床を…いや、磨かれた執務机を見つめながら言った。

「師匠って…。」

「理の賢者殿のことかな? 知らなかったのは無理も無い。もう20年以上昔のことだ。だが、今でも私の師匠は理の賢者殿、1人きりだ。」

…ということは、自分の兄弟子、ということになる。<イルスーク・イラ・エドゥ・ユーク>…バジリウスの名を示し、一部がジョシュの魔法陣にも使われていた。師匠の好む形によく似ていた…。

「…なぜ、あの時気付かなかったんだろう。」

「何のことかな？」

「…分かっているんでしょう！」

サティは顔を上げて檻の柱を前足で払った。爪を出していたからだろう。檻の柱がガシャンと音を立てる。グリーンの大きな瞳が怒りの色を帯びて、強くバジリウスを見つめ返す。

「……。」

黙っているバジリウスに苛立った様に、再びガシャンと大きな音を立てて睨みつける。

「なぜジョシュ殿下に魔力抑制を施したの！」

「…サティ、お前…！」

「うるさいわね、ヒューリオン、黙ってなさいよ！」

いつに無くサティが声を荒げて、ヒューリオンに視線を向ける。今度はヒューリオンががしゃんと檻を叩き、再び威嚇をした。だが、サティはそんなヒューリオンの挑発に、ふん…と鼻で笑って、バジリウスの方を視線を戻す。当のバジリウスは一瞬の瞑目の後、口を開いた。

「ヒューリオン、やめなさい。」

「しかし！」

「やはり、あの時のジョシュ殿下の下で保護された猫というのは、

お前なのだな。」

「どうしてあんなことを。…魔力を抑制されるのがどれだけ怖くて、どれだけつらいか、貴方は知らないの？」

「私は死ぬほど魔力は強くは無い。…お前は知っているのか。」

「…。」

「知っているのならば、術を施した理由も分かるだろう。あれでジョシュ殿下は…。」

「だから、どうして！」

「世継ぎを失うわけには行かぬ。」

「…そんな。ならば魔法使いを付ければよかった。徐々に緩めていくとか訓練するとか方法はあるじゃない！」

「ジョシュ殿下が初めて倒れたときに、傍に居たのは私だ。それで、あの術をかけることを決めた。意味が分かるか？」

ジョシュに一番最初に魔力の兆候が出たとき、バジリウスは居合わせた。高熱と呼吸困難、内臓への負担。医師を呼んだが、病などではないことに、魔法使いであったバジリウスはすぐ気付く。咄嗟に安定の魔法をかけた。その時は事無きを得たが、一時的なものだ。再び同じ事が起きないとは限らない。

「魔力を抑制する以外、命の保証はできない。お前ならば、分かるだろう。」

「それなら、…それなら、師匠に相談することだって…」

バジリウスが逸らしていた瞳を、サティに再び留めた。

「ジョシュ殿下は恐らく、次代の理の賢者にもなれるやもしれぬほどの逸材だ。理の賢者殿がそれを知って、放っておくとはとても思えぬ。」

「…え？」

世継ぎを失うわけにはいかなかった。当時、ジョシュ以外に有力な王族は居らず、もし王太子が居なくなれば、宮廷は騒ぎ立てるだろう。側室を入れるもよし、遠い縁の者を連れて来て養子にさせるもよし。事実、そのような動きはあった。

だか、国王は頑なに側室を娶らず、妃も懐妊しやすい身体とは言えなかった。仲睦まじいにも関わらず、6年もの間次の子は生まれて居ないのだ。たった今、1人の王太子を失うわけにはいかなかった。だからこそ、魔力を抑制して確実に王太子を生かしたのだ。

師匠である理の賢者に打ち明けることも考えたが、そうすれば、あれほどの魔力の持ち主だ。賢者に奪われてしまうかもしれない。だからバジリウスは王子を宮に閉じ込め、抑制を解いてもいいだろうという時期…すなわち、別の王太子候補が現れるまで待とうとした。その王太子候補が、現王の次男となるか、ジョシュ自身の子になるか、それだけの話だ。だが、その前にサティ達が辿りついた。

「王様は、このことを知っているの？」

「知るはずが無い。陛下は賢王だが穏やかで優しすぎる。このような計画をお知らせして、私が宰相などをやっておれるわけがない。」

バジリウスの手がサティの檻に伸びた。指で撫でるように檻の枠に触れる。その胡乱な動きにサティが一歩下がった。

「さて。お喋りは終わりだ。お前をこのままにしておくわけにはいかない。」

「…私が知っているのなら、師匠も知っているって思わない？」

「いずれにせよ、理の賢者が出てきたのであれば、すぐに露見することだよ、サティ。」

「なら、私に手を出すなんて無駄なことだわ。」

「それはどうだろう。」

「脅迫？　言っておくけど、師匠にはそういう次元の手は通じないわよ。」

「知っている。先ほども言っただろう。師匠が…理の賢者が出てきた時点で、詰んだも同然だ。」

もちろん、追い詰められたのはバジリウスの方。チェックメイトは理の賢者。

いよいよ、投了だ。バジリウスは苦笑した。

実際、理の賢者が出てきたのは予想外だった。自分が知っている理の賢者という人は、世俗にほとんど関わってこなかったし、そもそ

も世俗に関わりたがるような人ではなかったはずだ。だからこそ、ジョシュの件は自分だけで隠密に事を運ぶことができると思っていた。他の貴族にも、国王にも知られること無く、穏便に。そうして、やっと王妃が懐妊した。これで男でも生まれれば、ジョシュの魔力抑制の魔法陣を外すことができるだろう。

だが、その前にとうとう理の賢者が来た。すぐに自分の企みは見破られるはずだ。バジリウスは間に合わなかったのだ。

取る道はひとつあった。理の賢者が来るその前に、魔力の抑制を外せば何も無かったことになる。王太子の身は危険だが、バジリウスが手がけた痕跡は消え、自分のやったことは誰にも知られない。

だが、バジリウスには外せなかった。
理の賢者が来ると分かっていたのに、自分は魔法陣を外さなかった。そのときに気付いたのだ。…もし第2王子が生まれたとしても、外せるかどうか…。

その迷いに気付いた瞬間、バジリウスの敗北が決まった。

ただ、敗北を宣言し己が失脚する前に、やっておかなければならないことがある。

バジリウスは執務室の横に立てかけている、細く短い杖を手に取った。

「だが、まだ知れていないこともあるのだよ。…サティ、お前が覚えていることをすべて消せば。」

「私が覚えていること?」

「安心しろ。死なせはしない。…少しばかり、忘れるだけだ。人の言葉と、これまでの記憶を。」

「…どうして…。」

「オリアーブの魔法研究所で死霊魔法が研究されていた…などと、民に知られるわけにはいかないのでね。」

「ヒューリオン、のこと…？」

「…弟子の不肖は師の不肖だ。悪いが、忘れてもらう。」

「頭おかしくなったの!?　師匠が、みんなが黙ってるわけ…」

「言っただろう。私の敗北だ、と。私が失脚した上で、なお死霊魔法があったと騒ぎ立てる者がいると思うか？　だが、サティ。お前と私だけはヒューリオンが何をしていたのか知っている。」

…その言葉を聞いて、ヒューリオンがピクリと震えた。バジリウスはヒューリオンには目を留めずに続ける。

「通常のお前相手ならば出来ないだろう。だが、魔力を封じ込められている籠の中のお前ならばどうだろうか。人であることを全て忘れるか、完全に抵抗するか。どちらかだ。」

だが、魔力が封じ込められていれば、抵抗することは難しい。バジリウスが呪文を唱え始める。

＜オイェルーサゥ・エテビュシュ・オ…＞

（積層した記憶を…）

忘れる？
言葉と、記憶を…？

サティが檻の端まで後ずさる。
そんなのは嫌だ。他のどんなことも我慢できる。
でもそれだけは嫌だ。

「嫌よ。」

なぜなら。

自分は。

＜エオーボ・アテナサク＞
（全て忘却せよ）

サティの閉じ込められている檻に、バジリウスの手がそっと置かれる。

「サティ、伏せろ。」

同時に、サティの好きなあの、低い声が聞こえた。

037．私が聞きたい

「サティ、伏せろ！」

「バジリウス様！」

「…っ！」

カシャーーーーン！！

バジリウスの呪文は完成することは無かった。
最後の一節。サティの名前を付与する前に、何かが飛んできた。ヒューリオンの一声でバジリウスは咄嗟に身をよじって部屋の中央へと身をかわしたが、手の甲を切り裂かれ、杖が飛んでしまった。次いで、サティの檻が、ポーンと何者かによって投げられたように執務机から落ちる。

魔法灯を吊り下げていた鎖が1本、振り子の勢いで飛んできたのだ。

「サティ…！」

「ピウニー…！」

振り子の先端にくっついている金色の固まりが、檻に向かって飛んでくる。それはバジリウスの手から遠ざけるように檻を押した。転がる檻の中で反転するサティの頭の上に、懐かしい声が響いて思わず名前を呼ぶ。

落ちてきたのは、小さなネズミのピウニー卿だった。

＊＊＊＊

ピウニー卿はペルセニーアの足元に隠れたまま執務室に入り、執務机の側に来たところで机の影に降り立ったのだ。バジリウスが会話をしている隙に本棚を利用して天井近くまで上った。むき出しの梁を伝って天井を渡り、途中で出ている小さな明かりに飛び移る。明かりを支える鎖は細く心もとなく、何度かカシャンと音がした。…だが。

ピウニー卿のその姿は磨かれた執務机に微かに映っていたのである。サティはそれに気が付いた。

だから、サティはピウニー卿の動きに合わせて、声を張り上げ檻を揺らしたのだ。その様子に気を取られて、バジリウスもヒューリオンもピウニー卿の気配にも立てる音にも気が付かなかった。ピウニー卿は一番大きな魔法の灯に飛び移った。ピウニー卿はそれを吊り下げて支えている数本の鎖の中で、最も長いものの先端を魔法灯から外して掴む。長いその鎖は、天井から執務机くらいならば届くだろう。

そうして聞こえてきたのは、「記憶を消す」という不穏な言葉。僅かに怯えたサティの声。ピウニー卿は躊躇うことなく、鎖を掴んだまま魔法灯から飛び降りた。鎖が振り子を描いて目指すのは、サティに魔法をかけようとしているバジリウスの手。ピウニー卿はその手に剣を一閃すると、さらにサティの檻へと飛び移る。飛び移った衝撃と力に任せて、檻の枠を叩き斬った。

「何者だ…！」

これには流石のバジリウスも声を荒げた。切り裂かれて流血している手の甲を押さえ、自分目掛けて飛んできたヒューリオンと共に、落ちた檻の方を見ている。

「宰相閣下！？」「先ほどの音は…。」…などという声と、「通せ！」「通して！」「しかし、ジョシュ殿下！」…などという声が混じり、騒然としている扉が開かれた。

最初に部屋に飛び込んできたのはパヴェニーアとジョシュだった。部屋の中央にぶらーんと下がっている一本の鎖。手の甲を押さえているバジリウス。バジリウスの腕に乗っているオコジョ。転がっている檻。執務机の上には、セピア色の毛皮の猫と猫の足元に金色の毛皮のネズミ。

「…これは一体どういう状況ですか…。」

「私が聞きたい。」

パヴェニーアの問いに、額を押さえ頭を振ったバジリウスが吐き捨てるように答えた。珍しく、感情を露にした声だった。

＊＊＊＊

「サティ…！」

「ジョシュ殿下、なりません。」

「やはり、サティとお知り合いでしたか、ジョシュ殿下。」

サティの下に駆け寄ろうとしたジョシュをパヴェニーアが抱えるよ

うに止める。その様子を見て、ふ…とバジリウスが笑った。ヒューリオンを肩に乗せて、忌々しげに執務机の猫とネズミに目を向ける。ネズミはいつのまにか、猫の頭の上に乗っていた。

「…それに、ピウニー卿…か。ネズミが1匹居たとヒューリオンが言っていたが、貴公のことだったのだな。」

「予想外か?」

「いいや。」

「私がこのような姿で居る…と、知っていたのか。」

「さてな。」

「いかような呪いか、知っている…ということか。」

「何を言っているのか分からないな。」

「ならば、魔竜の理性を狂わせた呪い…とでも言えば分かるか。」

「魔竜の?」

バジリウスは、ふ…と笑った。

「今度は魔竜か?…あれは、人を襲った。どれほどの村が焼き払われたと思っているのか。」

「…どれほどの村も焼き払われてはいない。知っているはずだ。」

「知らぬな。貴公が討伐したのだろう。…何を証拠にそんなことを。」

「証拠ならば、ある。本人に聞くがよい。」

「本人…？」

バジリウスの瞳がなんのことだ…と、物騒な形に細められる。

「サティ…。一度炎を召喚している。恐らく呼応するはずだ。」

サティは頭の上のピウニー卿に小さく頷いて、返事をした。

サティの、歌うような、空気に染み渡るような、澄んだ声が響いた。ヒューリオンがそれに気付いてバジリウスの肩を蹴って、サティに飛び掛かる。さらにバジリウスが追い詰めるように、執務机を回り込む。

＜ウィロー・ナ・ムラン・イアディ　＝　フロット・フォン・ド・ラーゲ・ベネカ・イェズ・マーレ・マハ・マハジューレ＞

（大いなる翼。艶めく黒い鱗。偉大なる魔の竜。マハ・マハジューレ）

サティは、ヒューリオンを避けるように素早く飛び去ると、身を翻して執務机の後ろの窓辺に身体を置いた。バジリウスがやってきて、サティとピウニー卿が追い詰められる。ジョシュがバジリウスを止めようと身を翻したが、パヴェニーアがそれを押さえつけた。

「兄上、何を…！」

「サティ！」

＜イノトゥーモ・ピウニーア・サティ！＞

（ピウニーアとサティの下に召喚する！）

魔竜を呼ぶとは思えないほどの、シンプルな…極普通の、召喚の言葉だった。

『ピウニーア、サティ、飛べ！』

「え、飛ぶの！？」

吐息交じりの、何者かの声が聞こえた。ピウニー卿が剣で窓ガラスを突くと、たちまちそれが粉砕されて欠片が落ちる。一瞬躊躇したサティの頭の毛皮にピウニー卿は前足を埋めて、顔を押し付けた。

「サティ…！　大丈夫だ、私が付いている…！」

その声がサティの心を一瞬で決めた。

ピウニー卿は気付いているだろうか。いつだって、彼の声がサティの心を決めるのだ。

バジリウスの手がサティに伸びて、その手を避けるようにサティとピウニー卿の２人は窓の外に飛び出す。

「…なっ！」

「サティ！」

「兄上！！」

バジリウスの手は空を切り、ジョシュは驚いたパヴェニーアの腕を振り切ってバジリウスと共に窓に手を掛けた。だが、窓の外に満ちるのは恐ろしいほどの魔力と、その魔力を含む渦巻くような風だ。慌ててパヴェニーアはジョシュの元に駆け寄り、その身体をさらって窓から離れる。

「ヒューリオン、窓から離れろ！」

「ジョシュ殿下、こちらへ！」

ヒューリオンがバジリウスの腕の中に飛び込み、全員が執務机の後ろに下がったと同時。

グオオオオオオオオオン！！

力に満ちた咆哮と黒い影が窓を覆い、次の瞬間、外に面した全ての窓を崩して何者かがバジリウスの執務室へと乗り込んできた。

いや、乗り込んできた…というか、衝突して破壊しなだれ込んできた…と言ったほうが正しいだろう。床は綺麗に残っていたが、窓の周辺は無くなったといってもいい。あまりの大惨事に、部屋の全員が言葉を失う。

『我はグラネク山の魔の竜、ウィロー・ナ・ムラン・イアディ＝マハ・マハジューレ！…ピウニーアとサティの召喚に応じてここに来た！』

「魔…魔竜…？」

『さあ！　ピウニーアとサティの望むままに、我の炎と魔力を行使しようぞ！　敵はいずこか！』

グオオオオ！…と、再び咆哮を上げるのは、馬ほどの大きさの…竜だった。

＊＊＊＊

「…マハ…2人に何をさせるんだ…危ない真似をするな！　俺が受け止めなかったら死んでただろう。落ちてたぞ！？　分かってるのか？」

『ラディゲ、ピウニーアとサティは追い詰められておったのじゃ。外に飛び出さねば間に合わなんだ。それに、そなたが受け止めなくとも我が口で受け止めたわ。見くびるな。』

「それにマハ。俺は外に滞空しろと言わなかったか？」

『なだれ込んだほうが手っ取り早い。』

「ラディゲ？　なぜ、貴公が一緒に召喚された。しかも、なぜ今回に限って、こんな大きさでやってくるんだ！」

おかげで、現場の壁は見るも無残な状態だ。

「説明は後だ、ピウニーア。状況を…」

『我はピウニーアではなくてサティに話したい。』

「えっと？」

「だからそれは後だと言っているだろう。マハ、頼む！　説明は後にしろ！」

魔竜の背から、ピウニー卿とサティを抱えた黒い髪黒い瞳の騎士が降り立った。

＊＊＊＊

ラディゲは腕にいるピウニー卿とサティを執務室の机の上にそっと置くと、バジリウスを一瞥して魔竜の横へと下がった。ピウニー卿が素早く駆けて、壁を背に倒れこんだバジリウスの肩の上に乗る。

剣を抜き、喉元に突きつけた。

「バジリウス様！」

ヒューリオンが駆けようとするが、その身体は、抱えられているバジリウスの手に押さえられた。

「動くな。」

バジリウスの喉元に剣を突きつけたまま、ピウニー卿が一喝する。

…バジリウスが観念したように、喉で笑う。

「ネズミ風情がいかようにする。ピウニー卿。」

「小さな剣ではあるが、このまま喉を一突きにすれば無事ではいられない。この剣はマハの炎を帯びている。どういう意味か分かるだ

ろう。」

「それで、私に何をしろと？」

「すべての説明をしてもらおう。…魔竜の身に何が起きたかを。」

ピウニー卿のその言葉に、バジリウスは視線を魔竜へと動かした。金色の瞳が怒りに燃えて、バジリウスを見つめている。

「生きていた…ということか、魔竜…。」

『ヌシが…我を狂わせた魔法使いか…？』

「だとすれば？」

その言葉に…魔竜が一歩近づいた。さすがのバジリウスも気圧されるように眉を潜める。魔竜は憎しみを込めて、グオオオ…！と息を吐いた。

『ピウニー卿、そこを退け。』

「マハ、炎はダメだ。」

『ならぬ。そなたごと焼きたくは無い。退け。』

「止めて！」

魔竜の口の端から青い炎が覗き、一気に熱量が上がる。その熱量を受け止めるように魔竜とバジリウスの間に立ちはだかったのは、小さなオコジョのヒューリオンだった。

「止めぬか、ヒューリオン。」

呆れたようなバジリウスの声を無視して、ヒューリオンは一気に言い放った。

「魔竜マハ・マハジューレ。貴方を狂わせた呪文を作ったのは私。構築したのは私。忘れたの？　貴方に魔法をかけたのは私よ！」

じろりと魔竜の金色の瞳が小さなヒューリオンを睨みつけた。

「殺すなら私を殺しなさいよ。覚えているでしょう。この声を！貴方と、貴方たちの眷属を狂わせた、この呪いを…！」

ヒューリオンの声が憎しみを煽るように、歪められた。

「アラヌ・イアルト・アラニーサナク・アラニースルク…（生きることの悲嘆、永らえることの苦慮、目覚めることの辛苦…）」

「やめなさい、ヒューリオン！」

グルルル…と、魔竜の苦しみのオーラが息詰るほど高まる。「おい、待て、マハ！」ラディゲが魔竜の正面に回り込み、宥めるように首を抱える。その隙にサティがヒューリオンに飛び掛り、四肢を押さえつけた。

「離せサティ！　離して！！」

「もう止めろ！」

荒々しくバジリウスの声が響き渡った。ヒューリオンとサティに一瞬気を取られたピウニー卿の身体を、バジリウスが掴む。

「くっ…」

バジリウスの手に突き立てんと、ピウニー卿が剣を逆手に持ち変えた。だが、ピウニー卿の予想に反してバジリウスはピウニー卿ごと、その剣を自分の喉下に突きつけた。

「魔竜マハよ。お前の呪いは、私がヒューリオンに命じてやらせたものだ。」

「…なんのために。」

ピウニー卿は微動だにしないまま、バジリウスに問いかけた。少しでも動けば、バジリウスの喉元は完全に斬れるだろう。それほど絶妙な位置に、ピウニー卿は宛がわれている。

「魔物は魔力により凶暴化する前に倒すべきなのだ。」

「…なんだと?」

「魔に属するものは放っておけばいずれ魔力のバランスを崩して凶暴化する。それならば大人しいうちに倒しておいたほうがよい。」

「そんなことのために兵を裂くのか!」

「ピウニー卿よ。…そのために兵が裂けぬなら、裂けるように世論を動かせばよいのだ。」

室内の全員が沈黙した。

「魔竜が暴れてくれたおかげで、魔物に対する警戒は一層強められ、黒翼と魔法師団の結束はより強いものになったのを知っているだろう。それに…竜殺しの騎士ピウニー卿という英雄は、大いに役に立ったよ。一騎当千の戦力が減ってしまったのは惜しかったが、死んでくれたおかげで魔物に対する憎しみは煽られ、士気は上がった。ここ最近の魔法師団と黒翼に対する資金は潤滑に動いていたはずだ。あと数歩で、沈静化している魔物に対する討伐も許可できるだろう。さらに5年もすれば数基、国境に砦を建設できる。グラネク山にもな。」

『グラネク山に、砦だと…？』

「なぜそのような…。」

「…貴様…そんなことのために…。」

魔竜の憎々しげな声と、ピウニー卿とラディゲの戸惑ったような言葉を、バジリウスは一笑に付す。

「そんなこと？　…オリアーブ国は強くあらねばならぬのだよ。いずれ必ず来るであろう外の脅威から身を守るためにも、内の魔物にばかり気を取られていてはならんのだ。他の国よりいち早く魔物の平定を行い、外界に向けて国力を整えなければ…。」

現国王に代替わりしてしばらく騒がしかった宮廷も、やっと静かになった。大陸は暴れる魔物に奔走している。国内から魔物を一掃し、国力を蓄えるならば今の内だ。そう思った矢先にジョシュが倒れてしまった。再び高まる、世継ぎへの後見争いと派閥の駆け引き。そ

れらの目を逸らして国の意識を一点に集中させ、騎士団と魔法師団ひいては民の士気を上げ、そして魔物も平定できる方法がある。狂った魔竜とそれを討伐する英雄たちの存在だ。

オリアーブは強くあらねばならぬ。
王家は無事存続し、外の敵にも内の敵にも滅ぼされてはならないのだ。

それはバジリウスが先王に約束した、オリアーブ国に対する忠義心だった。

038．愛しているんだ

元々バジリウスはさほど有力ではない貴族の次男だ。魔法使いを夢見たが、身の内の魔力は、通常の魔法使いに求められるよりもかなり少なかった。だが、魔法語に魅せられ独学で魔法の研究を行ってきたのだ。自身の低い魔力でも効果的に魔法が構築できるように、魔法陣や呪文を作成するのが好きだった。魔力が低いため魔法師団にも魔法研究所にも所属はできなかったが、魔法に対するこだわりが理の賢者に気に入られたのか、彼は理の賢者の弟子となり、ますます研究に没頭していった。

理の賢者の弟子となってしばらく経った頃、父親と兄が宮廷にて失脚した。先代の王の下、魔物の凶暴化が顕著になってきた矢先の出来事だ。自身が治める領内で魔物の凶暴化の騒ぎがあった。もとより大人しくか弱い魔物として有名で、防御と備えが甘かったのが大きい。凶暴化しているという報があったときも、対処が極端に遅れた。

集団化したそれは領地内に甚大な被害を及ぼし、初動の遅れと備えの悪さが指摘されたのである。領内の荒れは簡単には復興できなかったため、これ以上の爵の維持は無理だということで爵位を返上した父と兄は、田舎の片隅で枯れるように晩年を過ごした。すでに兄とも父とも縁を切っていたバジリウスではあったが、若い彼にこの衝撃は大きかったのだ。

宮廷の有力者から攻撃されたわけでもなく陥れられたわけでもなく、しぼむように失脚した彼らを見て、今まで世俗から離れていたバジリウスに奇妙な野心が沸く。

バジリウスは魔法使いにはなれぬほどの魔力しかなかった。だが、己の力の使い方を見出し、魔法使いとなることができた。そう思って国を見れば、当時は魔法師団も魔法研究所もそれほど魔物の鎮圧に貢献しているわけではなかったし、騎士団の力押しばかりが奮い、相互の連携も全く無かった。力の使い方をもっと研究して効率のよいものに高めることが出来れば、オリアーブはもっと強くなるだろうに。

バジリウスの研究へのベクトルは、魔法の効率から国の力へとシフトしていったのだ。

国王の下で己の考えを試してみたいと言ったバジリウスを、理の賢者は止めなかった。ただ己に「バジリウス・イルスーク・イラ・エドゥ・ユーク」という魔法語の名前を与えて、送り出した。「知によって苦悩も善行と為せ」という古代魔法語の意味を、これから己の力を試す自分に対する祝辞と受け取り、バジリウスは理の賢者の弟子を辞して、先代国王の下に馳せ参じたのである。

先代国王は穏やかな性格の現国王と異なり、武を好む強い性格の持ち主だった。その先王の下で、好き勝手が多い魔法研究所をうまくまとめ、魔法師団と騎士団を結びつけ、その力を持ち上げたバジリウスは、高く評価された。バジリウスは、己を認める先代国王に心酔した。先代国王が懸念する、内外の敵を払い国を守る。必ずオリアーブ国を強く強大な、魔法と剣の国にしようと心に決めたのだ。

ただ、バジリウスは冷徹無比な血も涙も無い男というわけではなかった。何かを愛したり、信頼に応えたり、自分を慕う言葉に報いる喜びもまた知っている、そういう…弱い男だった。

長年にわたり国に仕え、培ってきた親愛。国に対する愛情。

尊敬する理の賢者、敬愛する先王、友とも言うべき時間を過ごした現王、自らが教える政治学を容易く吸収するジョシュ。

…そして、小さくか弱い姿になっても、なお、自分を慕う一途な弟子。

それらは全て、捨て切れぬ感情という名前の荷物になった。それを持て余しながらここまで来た。己の心の弱さすらも利用して、バジリウスは上手くやってきた、はずだった。だが、どこで間違い、何が悪かったのか。

＊＊＊＊

『ピウニーが我を討たなければ、如何様にするつもりだったのか。』

魔竜の言葉に、バジリウスが微かに笑う。

「暴れる竜を放逐するわけにはいくまい。あの呪いで、お前の魔力の流れは閉ざされたはずだ。どうなるかは、分かるだろう。」

『我が「魔の竜」であるからか。』

「そうだ。マハ・マハジューレよ。お前に呪いによる死は効かぬ。しかし魔力そのもののお前は、自身の魔力を操ることが出来なくなればまず理性を失う。そして『魔』の『竜』という己を形成できなくなり、いずれ滅びる。人が生命力の流れを止めると死を迎えるように…。そのときはそのときで、ピウニー卿なり、ラディゲ卿なりに手柄を渡せば英雄を生むのはたやすい。」

だが事態はバジリウスやヒューリオンの予測を超えた。魔竜の断末

魔の力はすさまじく、己の呪いを苦しみと同時に吐き出した。自分の力で呪いを解いたのだ。そして皮肉なことに、ピウニー卿の剣が魔竜の命を救った。自分自身の血と魔力を礎に、魔竜は一度死に、復活する。ただ、魔竜の理性を狂わせた呪いは、人間に対しては姿形を変化させる効果を表したのだ。人間が持つべき魔力の流れが途絶え、人の意識から離れた別種の魔力へと変わる。その魔力に人の姿は耐えられない。だから、姿形が変わるのではないか…というのがバジリウスの予測だ。

「だから、サティと私はこの姿に…？　あの、あの魔法は、バジリウス様が直してくださったのでは…。だから魔竜も時間差で死ぬのだ…と…。」

ヒューリオンが呆然と呟いた。その声を聞いて、押さえつけているサティがヒューリオンを見下ろす。

「バジリウスが、…直した？」

サティの声が低くなった。何も答えないバジリウスを見て、サティはやっと分かった。「ああ…」と瞳を閉じる。

「私にかけた呪い…生命の流れと、魔力の流れ。…古の魔法語はとてもよく似た言葉だわ。思い出した。最後の言葉は…＜ウーク・オ・リリィアマヌス＞（魔力のかたち）だったでしょう。」

サティはバジリウスを、キッ…と睨みつけた。

「生命力を示すのは…＜ウーク・オ・リリィエミエース＞（生命力）よ。バジリウス。ヒューリオンに死霊魔法を使わせたくなかったの？　だったらなぜ、止めなかったのよ！　死霊魔法を使わなかった

からと言って、許されると思ってるの？　マハにしたことは絶対に許さない！」

その言葉に、バジリウスが笑う。

「サティ、お前の言うとおりだ。マハ・マハジューレに為したことを許されようなどと微塵も思わぬ。それだけではない。私がこれまでしてきたことを、許されようなどとはな。いちいちそんなことを望んで、宰相などやっておられるわけがなかろう。」

「そんなこと聞いて無い！　大体、ヒューリオンはどうするのよ…。」

サティの下で、ヒューリオンの身体が強張った。バジリウスは瞑目する。

「ヒューリオンがこだわったのは、お前と私だけだ、サティ。」

バジリウスが死に、サティが魔法使いでなくなれば、ヒューリオンが死霊魔法に拘る理由は無くなる。オリアーブから死霊魔法の研究の痕跡は無くなるはずだった。

ヒューリオンは無言だった、そもそも自分が死霊魔法に魅了されたのは、師匠であるバジリウスの役に立ちたかったからだ。そしてサティにこだわったのは、彼女が理の賢者の弟子だったから。

理の賢者の弟子であるバジリウスと、言ってみればその妹弟子であるサティ。ヒューリオンは、一番最初にサティを見たときから、いつも彼女を意識していた。サティにどうしても勝ちたかった。でも勝てない。だから自分でも勝つことのできる、魔法の言葉を捜した

のだ。

…それが死霊魔法の言葉だった。誰も使わない死の言葉に、ヒューリオンはたちまち魅了された。

バジリウスとてそれに気付いた。数度、死霊魔法に手を出してはいけないという教えを説いたが、それでも、止めさせることはできなかった。破門にすれば止められただろうか。追放すればよかったのだろうか。バジリウスはどちらの手も下さなかった。ただ、ヒューリオンが開発していた、「死の呪い」を、書き換えた。それにより、「死の呪い」は死霊魔法ではなくなったが、ヒューリオンは気付かなかった。それどころか、慕う師匠が修正して完成に導いてくれた魔法を喜んだのだ。

そしてまた、バジリウスもその魔法を見て、ひとつの手を思いつく。魔力の流れを止める呪い…これを使えば魔竜を「安全」に、狂わせることが出来るだろう。弟子を死霊魔法から離したいと願う一方で、国を強化する策を思いつき…、バジリウスは選択した。「それを魔竜に施すことができれば」…と。ヒューリオンがやらない訳が、なかったのだ。

「しかし、もう終わりだ。…さあ、ピウニー卿。今、国に巣食う病魔はこの私だ。もとよりそのつもりだったのだろう？　無慈悲にもなれず、かといって慈悲深くもなれなかった、この無様な宰相を討ち取るがいい。」

「…バジリウス、なぜ歪んだ。なんのために。」

ピウニー卿の声が、苦々しげに低く響いた。

「さて。人など、些細な出来事で歪んでしまうものだ。どうした、ピウニー卿。貴公が出来ぬならば自分でやるまでだ。」

あるいは、自分が無慈悲であればすべての企みは成功したのだろうか。だが自分は敗北したのだ。ならば、後の憂いは絶たなければならない。この国のためにも。

「な…待て、止めろ！」

バジリウスは掴んでいるピウニー卿に、力を込める。

だが。

ピウニー卿の刃がバジリウスの喉下に届く前に、今まで大人しくしていたヒューリオンが暴れ始めた。

「やめて、やめて、バジリウス様を殺さないで！」

バジリウスは死なせない。

彼が無慈悲になれなかったがゆえに自分を殺してしまうのならば、自分が無慈悲になって彼を害するものを殺そう。

そのためになら死霊魔法にだって堕ちよう。

だって、呪文は、完成しているのだから。

そうでしょう、師匠。私の…。

サティの下で、ヒューリオンの急いたような声が聞こえる。

＜アラヌ・イアルト・アラニーサナク・アラニースルク＞
（生きることの悲嘆、永らえることの苦慮、目覚めることの辛苦）

＜エアミス・エテモット・オ・エーラガヌ・オ…＞
（憂いを断ち切りたければ、流れを止めよ。）

「ヒューリオン…やめて、やめなさい！」

ヒューリオンは四肢を伸ばして暴れ、一瞬力が緩んだサティの腕から逃れた。まっすぐに狙いを定めて跳躍する先は、

ピウニー卿だ。

＜ウーク・オ・リリィエミエース＞
（”生命（いのち）”という、流れを）

ヒューリオンの呪文は完成し、室内の魔力が一気に膨張する。
事態の展開に全員が呪縛にかかったように、動けない。

一瞬の後に魔力が収まると、２匹の獣が倒れていた。

＊＊＊＊

「そこまでじゃ。」

獣が2匹床に落ちたが、それを認識する前に老練した理の賢者の声が響いた。
だが、その理の賢者の言葉が耳に入らないものが室内に2人いる。

1人はバジリウスだった。
バジリウスは自分の膝の上に落ちた、小さなオコジョの身体をすくって呆然としていた。

そしてもう1人。

理の賢者は歩を進めてそっとしゃがみこむと、倒れた獣の身体を優しく撫で、悲しみに満ちた声でこう言った。

「遅かったか。…かわいそうに。」

いたわしげにセピア色の毛皮を撫でている賢者の手を、ピウニー卿は信じられない思いで見つめていた。
ヒューリオンの魔法が狙ったのは確かに自分だったはずだ。
それなのになぜ、自分の目の前にセピア色の猫が倒れているのだ。

遅かった。

理の賢者は確かにそう、言った。

「遅かったか、サティ。」

…と。

＊＊＊＊

グルル…と、魔竜が苦しげに息を吐いた。いつもなら、怒りの咆哮を上げる魔竜だが、あまりのピウニー卿の傷ましさに、声が出なかったのだ。

『おお…サティ…なんということよ…。』

「ピウニーア…。」

室内の全員が、理の賢者の言葉で何が起こっているのかを悟った。掛ける言葉も見つからないまま、ラディゲも魔竜も動けなかった。

事が起こった瞬間もっとも近い場所に居たのは、ラディゲ達だ。ラディゲ達は見た。バジリウスに掴まれていたピウニー卿に魔法を打ち込みながら体当たりするオコジョのヒューリオン、だがその身体がネズミに届く前に、…呪文が完成する瞬間にセピア色の猫が飛び出して、ネズミとオコジョの間に割って入った。もちろん、呪文の直撃は免れなかった。サティはピウニー卿の目の前で、糸が切れたようにくたりと床に落ちて、動かなくなった。

最後の言葉すら、そこには無かった。

「サ、ティ？」

ピウニー卿が、悲痛な声でサティの名を呼ぶ。小さな金色のネズミが、セピア色の猫の喉元にそっと手を埋めて揺さぶっているのを、室内の全員が黙って見守っていた。

「うそ、…嘘だよね、サティ。サティ！」

「待て、ジョシュ！」

「離してください父上！　嫌だ！　サティ！」

一拍遅れて響いたのはジョシュの声だ。それを止めるのは、理の賢者と共に来たのであろう、国王その人だった。ちらりとラディゲが視線を向けると、暴れるジョシュを後ろから抱えるようにサティに駆け寄るのを防いでいる。サティに駆け寄りたいのは全員が一緒だ。だが、今それが許されるのはピウニー卿だけだった。

「…サティ、兄上…そんな。」

「ペルセ…。」

涙声が混じる。国王と共にやってきたペルセニーアがくらりとバランスを崩し、その身体をヴィルレー公爵が支えていた。パヴェニーアは「兄上、サティ殿…」とつぶやいただけで、後に続く言葉を一言も発することが出来ず、それは…ラディゲも同じだった。

「何、これは何ですの…？　サティ？　何をやって…っ！」

「プリムベルさん！」

ラディゲには聞き覚えの無い女の声と、それに重なったのはヴェル

レーンの声だ。見れば眼鏡の女がやはり室内に駆け込もうとしているのを、ヴェルレーンが押さえている。

「いや…！　離して。お父様！　ピウニー卿！　一体これはどういうことですの!?　なぜ、サティが…」

理の賢者が立ち上がり、プリムベルを振り向いた。

「プリムベルや…。死の呪いの呪文じゃよ。…完成させておったとは。」

「獣の姿で、どうやって…。」

バジリウスの声が掠れたように震えている。

「おぬしも魔法使いなら分かるじゃろう。心から唱えた呪文は魔力が無くとも体力がそれを補い、媒体が無くとも己の身が杖となる。」

「それで、ヒューリオンは…。」

「人の生命力の流れを止めてしまうほどの呪文じゃ。杖の無い不安定な状態で放って、無事でおられるわけが無かろう。ましてそのような小さな身で。」

「…サティ、は…。」

じっとサティの喉元を抱き寄せたまま動かないピウニー卿の言葉に、理の賢者は瞳を向けた。

「サティとて、同じじゃ。」

「俺を庇って…。」

「ああ…。サティや。もう少しわしが来るのが早ければ…。」

理の賢者が「遅かった」と言えば、それは望みが絶たれたも同然のような心地がした。

「サティ…サティ。」

ピウニー卿は叫ぶでもなく、声を荒げるでもなかった。それが逆に痛々しい。

ただ、聞いている者が胸を掻きむしりたくなるほどの、悲しみに満ちた声でサティの名前を呼んでいた。

ピウニー卿は動かなくなったサティの喉元を何度も撫でる。

自分はまだ言っていない。伝えていない。それなのに、何故。

「サティ、俺はお前を…。」

何故早く言っておかなかったのか。

何故聞かせられなかったのか。

自分の気持ちを、自分の声で。

何故、サティに届けることが、出来ていなかったのか。

「愛してる。…愛しているんだ…。サティ、どうか…。」

お願いだ。
自分の下から離れて行かないでくれ…。

039．もう一度俺の名前を呼んでくれ

室内に重苦しい空気が降りている。
誰も一言も声を発することが出来なかった。

「サティ…いつも俺は、お前に庇われてばかりで…どうしてこんなことに…。」

ピウニー卿はサティにぴったりと身を寄せた。こうして毛皮に手を埋めればまだ温かい。だが、いつもゴロゴロと心地よく鳴っている喉は今は動いていなかった。

尻尾はぐったりとうなだれ、いつも膨れて感情を表す毛皮は静まったままだ。ピウニー卿が語りかければぴくぴくと動く耳は、力なく寝そべっている。そして何よりも、ピウニー卿の心を騒がせて止まない綺麗な、宝石のような大きなグリーンの瞳は閉ざされている。
それをもう一度見ることが出来ないなど、信じられなかった。

そうだ、信じられない。

サティの声を、もう二度と聞くことが出来ないなんて。

「サティ…サティ…愛してる。」

ピウニー卿はサティの口元にそっと顔を寄せた。

「愛しているんだ、…だから、もう一度。」

サティの口元をぺろりと舐めた。

「もう一度俺の名前を呼んでくれ。サティ。」

ピウニー卿は、動かないサティの口元をぎゅう…と抱きしめた。

それでも、サティは目覚めなかった。

ピウニー卿の声にも答えなかった。

口元は動かない。耳も、毛皮も…。どうして…。

「サティ…。」

セピア色の毛皮に前足を埋めて、ピウニー卿はいつまでもいつまでも寄り添っていた。離れることなどできるはずが無かったのだ。

やがてそのこげ茶色の瞳から、ぽろりと涙が一滴落ちて、サティの口元とセピア色の毛皮に浸み込んでいく。

そして。

「ん…ピウニー…。ひーげ…。ひげくすぐったい。」

ピウニー卿の髭の動きがピタリと止まった。セピア色の尻尾がぱたりと動き、三角の耳が前後にふるん…と震える。むずがるように瞳

を一度ぎゅ…と瞑って、瞬きをするとそこが開いた。ピウニー卿は少し離れて、しげしげとそのグリーンを見つめる。その様子を訝しげに見ながら、サティは身体を起こそうと少し首を持ち上げた。

しょっぱ。

なにこれ口の中しょっぱい。

もぞもぞと、サティが前足で口元を拭いている。

「サ」

「サ？」

サティが身体を起こそうと、前足の動きを止めた。

ああ…、サティが、動いている！

「サティ！」

「ふごっ…！？」

サティの口元が抱きついてきたピウニー卿の身体で塞がれた。

＊＊＊＊

「サティ！　生きていたのか！…よかった…本当によかった。」

「ひょ……！？」

ピウニー卿が口に張り付いていて、サティは上手く話す事が出来な

い。起き上がろうとしたところにそんな状態だったものだから、サティは手足をばたつかせながら転がった。そこにラディゲの手が伸びてきて、ピウニー卿を剥がす。魔竜がその様子を見ながら、むふう…と安堵したように息を吐いた。

「おいこら、ラディゲ、離せ。離せ、…ああ、サティ！よかった、こっちを向いてくれ。サティ…！」

「分かった、分かったから、ちょっと落ち着けピウニーア。」

「落ち着いていられるかこれが！…ああ、サティ…！」

サティがふるふると身体を揺らして起き上がったのを見計らって、ラディゲがピウニー卿を下ろしてやった。駆け寄ってくるピウニーに応えるようにサティは頭を低くし、セピア色の毛皮を擦り付ける。ああ、確かにサティの毛皮だ。動いている。尻尾がぱたりぱたりと揺れ、耳が時折ぴくんと裏返ったり、こちらを向いたりしていた。

「こら、ジョシュ…！」

「サティ…！よかった。」

国王の腕を振り切ってジョシュが駆け寄り、サティの背を撫でる。抱き上げなかったのはピウニー卿に遠慮したからだろう。

「サティのバカ！！…ヴェルさんと後から来てみたら、こんな…こんな…ピウニー卿！　…貴方がついていながら、どういうことですのこれは！　説明していただかないと気がすみませんわ！」

「…あの、プリムベルさん、とりあえず無事だったんですしよかっ

たということで…。」

「なにがよかったんですの…！　ああ、でも本当に、よかった！」

魔竜ではないのに炎でも吐きそうな勢いで、プリムベルがやってきて、彼女は遠慮なくサティを抱き上げてぎゅうっと抱きしめた。ヴェルレーンの手を払いのけて、きっ…とピウニー卿を眼鏡の下の眼力で怯ませたが、やさしい理の賢者の手が下りてきて、プリムベルからサティをそっと放して、ピウニー卿に返してやった。

サティは1人訳が分からないまま、頭を振っている。確か、自分はヒューリオンの呪いを受けたはずだ。ピウニー卿が狙われていることを知って、咄嗟に身体を伸ばした。何が起こるか…などという計算は、一切出来なかった。ただ、魔法を受けるのは自分だ、そう思って飛び出したのだ。自分の身体が急に重くなって、息が詰まって、周りから音が消えた。…と思った次の瞬間、ピウニー卿の声が聞こえたのだ。そうだ、ピウニー卿の声が聞こえた。なんと言っていただろうか。ええと…確か…。

「サティ」

これだ。

「サティ」…と言いながら、口を塞いでいたのだ。間違いない。

それにしても、一体何が起こったのか。

「…ふぉふぉふぉふぉ、愛、じゃのう愛！　ここでも例外処理が働いたのう…！」

「…例外処理？」

サティとピウニー卿以外は聞いたことの無い言葉に、全員が理の賢者の発言に注視する。
途端に、ボフッ！…とサティの毛皮が膨れた。ピウニー卿がそんなサティを心配そうに見上げて、前足をすりすりと撫でる。「サティ？　どうかしたのか、毛皮がものすごく膨れているぞ！」…ってピウニー、そこ指摘しなくていいから！

そんなことよりも、師匠。たった今…愛って言った。主要人物全員が執務室にいるこの空気で言い切った。事態がさっぱり飲み込めないサティは、恐る恐る理の賢者に問う。

「ちょ…と、師匠、事態が把握できてないのですが、あのどういう意味で…」

「ふぉふぉふぉ…サティや。ピウニー卿が、お前さんの死の呪いを解いてくれたのじゃよ。」

「…え？」

サティが、ちらりとピウニー卿を見おろした。こげ茶色の瞳が自分を見上げていて、うっとりと細まっている。

「ああ、…俺のおかげかどうかは分からないが、だがお前が無事で本当によかった…。」

「ピウニー…。」

ピウニーが？　死の呪いを…？　サティは、胸が熱くなって思わず、頭を下げてピウニー卿の頭にセピア色の毛皮をくっつけた。だけど、

「ですが、どうやって…？」

サティの問いに、理の賢者がふんぞり返ってどこかで聞いたような台詞をのたまった。

「古来より、恋人のことを切に想って流した愛と真心のこもった涙は、ありとあらゆる呪いを解く妙薬になるのじゃろうて。」

全員が、呆気に取られて理の賢者を見ている。バジリウスですら、例外ではない。そんな中、プリムベルがキラリと光る眼鏡の位置を直しながら、厳しい瞳で賢者の言葉を反芻した。

「恋人のことを切に想って流した涙…？」

「…なんと…。」

サティを撫でていたピウニー卿がふるふる…と頭を振り、ふー…と、感慨深げに溜息を零した。つまり、ピウニーが自分のために、涙を零した…ということ？　それが呪いを解いた、ということだろうか。サティは何かを言おうとしたが、ピウニー卿がその前にこほんと咳払いをした。再びセピア色の前足を撫で始め、悪気無く首を傾げて問う。

「しかしその例外処理は、１回きりという約束ではありませんでしたか？」

「１回、きり…？」

室内のプリムベルの声がピウニー卿の言葉をうさんくさそうに繰り

返した。嫌な予感がして、再び、ボフッ！…とサティが膨らむ。理の賢者がふぉふぉふぉ…と髭を撫でた。

「例外処理が1回きりなのではないぞ。チッスによる呪い解除のお約束が1回、涙も1回じゃ。」

「はい？」

これはプリムベルの声だ。

「チッスが1回じゃ。」

「なんと言いまして？」

「愛と真心のこもった恋人同士のチッスが1回じゃ。」

聞こえなかったかの？…と満足げに、理の賢者が頷いた。

「それってもう既に1回ヤりやがった…ってことですか？」

プリムベル、声が、声が大きい！

「そりゃあ、そうじゃよ。ピウニー卿とサティの、獣の姿の呪いが解けた話は、聞き及んでおるじゃろう。あれじゃ、あれ。のう、サティや？」

サティは完全に沈黙した。サティの毛皮は膨れっぱなし。瞳孔がまん丸でグリーンの瞳はほとんど黒だ。今までそこ、頑張ってぼやかして説明してきたんですけど…。あまりの状況にいたたまれないサティだったが、理の賢者はにんまりと笑う。

「昔から、涙というのは不思議な力を持っていると言われておってのう。それも、恋人のことを想った愛の詰まった涙は、どんな呪いも解くといわれておる。恋人の顔に涙が落ちると、それが救いの力になる…とな。まさに、世界の願望と夢と希望で出来た例外処理の1つなのじゃ！」

今日ばかりは言わせて欲しいとサティは思った。

師匠。

そのほくほく顔やめて！

「もっとも、その例外を短い期間のうちに2回も見たのは、ワシも初めてじゃったのう…。何せ、大抵が愛する男からのチッスか乙女の涙か、どちらかじゃ。それも最後の最後、美味しいところにもってくるもんじゃ。…じゃが2人はしょっぱなに、サティからピウニー卿に…じゃったじゃろ？　積極的すぎて、ワシも心配じゃったのじゃが…。」

「はぁん、しょっぱな？　しかも、サティからピウニー卿に？」

「じゃが、2回目はピウニー卿の涙がサティを救うとはのう。」

師匠何度も言わなくてよろしい。それにプリムベルの声が怖いし、全員の生ぬるい雰囲気が痛い。ピウニー卿がこれまた平然とサティの前足を撫でているのが腹立たしい。

しかも、なぜか憤慨したピウニー卿が一歩前に出る。

「涙は…まあ。その…。しかし、最初のキスの時は、私だけではなくサティの呪いも解けたので、一概にサティからだけとはいえません。男として私からの分も含まれて…」

「いやーーーーー！！　それ以上言わないで、ピウのバカーーーーー！！」

サティはずささささーーーと魔竜の背に登り、その羽の付け根に頭をぐいぐいと押し付けた。隠れようとしているらしい。魔竜はきょろきょろと自分の背のサティを振り向く。

『サティ、我も知っておる。あの時のサティの口付けは、本当に心がこもっていて我も…』

「やめて！　マハ、それ以上言うの止めて！　プライベート、プライベートだから！」

「……。」

実のところ、魔竜から愛の例外処理とやらのくだりを散々聞かされていたラディゲには、腹一杯の話だった。

「ラディゲ黙って！」

「俺は別に何も言っていない。どうでもいいが、なんなんだこの夫婦漫才は。」

「もう黙ってーーーーーー！」

離れてしまったサティをピウニー卿が追いかけて魔竜の背に登って

いく。「ああ、サティ…！　逃げないでくれ。」と悲痛そうなピウニー卿の声に、「逃げてないぃぃ」…と言いながら、なお魔竜の羽に隠れようとしているサティ。そんな2人を見ながら、脱力したヴェルレーンは、座り込んだプリムベルをエスコートして立ち上がらせながらため息をついた。

「理の賢者殿、あれ絶対最初から知ってましたよね…？」

「そうですわね…。」

「遅かったかとか、かわいそうに、とか言ってませんでしたか？」

「心からの涙でなければ、呪いは解けませんわ。だからこそ、お父様は…。」

「わざとピウニー卿を誘導した？」

「いえ。我が父ながら、そうだったらいいなと思っただけです。」

「ああ、そうですか…。」

プリムベルが眼鏡を直しながら、ヴェルレーンの呟きに応えた。その会話が耳に入ったアルザス家の2人とヴィルレー公爵は、理の賢者を敵にまわしてはいけない…などと思った。

＊＊＊＊

仲間たちに囲まれて、ひとしきり祝福されているサティとピウニー卿達から理の賢者が離れ、国王と共にバジリウスの前に立った。

「バジリウス…。」

「陛下。」

「ジョシュの話は聞いた。…ヴェルレーン卿から、魔竜の呪いと第5師団での死霊魔法研究についても聞いている。何か申し開きはあるか。」

「いいえ。全て私のしたことにございます。陛下の御心をお騒がせしましたことを、深くお詫び申し上げ、いかような処分も受けましょう。」

バジリウスはヒューリオンの身体を片手でそっと抱き寄せたまま、跪いて頭を深く下げた。

ジョシュがけほ…と咳き込みながら、国王の隣に並んだ。国王がその様子を見咎め、背中をさする。ジョシュの後ろには理の賢者が並び、慈しみに溢れた手でその頭を撫でた。

「ジョシュ。…お前はいかようにしたい。」

国王が、王太子へと…バジリウスの処分について、意見を求めた。その質問に、ジョシュは国王を見上げ…バジリウスに視線を戻す。バジリウスが跪いたまま、視線を上げた。それは許しを請う瞳でもなく、労しげな瞳でもなく、ただ、臣下の瞳だった。ジョシュはその視線を静かに受け止め、首を傾げる。

「バジリウス宰相。…国のために、そのために僕の魔力を抑制したの？」

「殿下を無為に、死なせぬためです。」

「6歳の頃から?」

バジリウスは苦笑する。

「知っておられましたか。」

「勉強、したから。」

ジョシュの言葉に、嬉しそうにバジリウスは瞑目した。

「ご立派な王になられましょう。」

「…そのための何もかもを、僕は知らない。」

「これからお知りになればよろしい。殿下の周辺には、どのような人材もおりますゆえ。」

「そうだね。」

「お恨みになりますか?」

ジョシュは静かに首を振った。

「もう少し時間をもらって、魔法のことをきちんと学んだら、魔力を持って生まれた僕の、それは仕方のないことだと受け止められる。だけど1つ聞かせてほしい。…もし、母上に弟が生まれたら、僕を死なせてもよかったと思っている?」

「陛下の御前で、残酷なことをお聞きになる。」

バジリウスは、ふ…と笑った。
そこまで非道になれればどれほどに楽だっただろうか。

「…師匠。」

「なんじゃ、バジリウスよ。」

「師匠は、いつからご存知でしたか。」

理の賢者の下を辞したはずであったが、バジリウスは理の賢者を「師匠」と呼び、理の賢者もまたそれを否と言わない。魔法使いの弟子の絆は、そういうものなのだ。弟子の質問に、理の賢者は「ふうむ」と唸って、髭を撫でた。

「サティがジョシュ殿下の魔法陣を発見したタイミングは知っておるじゃろう？」

「猫が迷い込んだ…と。」

「その話を、サティがワシに話さんわけがあるまい？」

そして、バジリウスが組んだ魔法陣を、理の賢者が一目見て分からないはずがないのだ。

「陛下には？」

「理の賢者より書簡をもらった。」

その質問に答えたのは国王だった。国王の声には苦々しさなどは無

く、むしろ悲痛な表情をしていた。バジリウスはため息を付く。魔竜によって国を乱し、息子にあのような魔法を施した男を、何故「哀れむ」のか。だから、この国王は甘いのだ。しかしその甘さは国王の威厳が程よく中和し、寛容となって多くの臣下と国民から慕われているのを、バジリウスは一番よく知っている。

「なるほど。…私の敗北は、その時点で決まっていたというわけですな。」

「敗北ではないよ。バジリウスや。ワシが来ると分かっておったのじゃろう？　それだのに、ワシが来るまで術を解かなんだ理由はなんじゃ。」

ふぉふぉふぉ…と、理の賢者の口調は驚くべきことに苦笑だった。理の賢者が来ると分かった時点で早々に術を解き痕跡を消してしまえば、その後何が起ころうともバジリウスの罪は問われなかっただろう。それをしなかったのは、理の賢者が世界で最も安全に、ジョシュの解呪を行うことができるからだ。理の賢者に王太子を奪われたとしても、それでジョシュが生きるならば。…バジリウスは、魔力抑制が自分の責だと重々承知しながら、ジョシュの命を師匠に預けたのだ。

「師匠、ジョシュ殿下をいかようになさりますか。」

その言い様に、理の賢者が首を傾げる。

「どういう意味かの。」

「…殿下の魔力は…」

貴方の次代に匹敵するでしょう…と言いかけたバジリウスを、理の賢者が遮る。

「バジリウスよ。賢者の道というものはの、選択の余地が無いものではないのじゃ。魔力に左右されるものではなく、ただ、意志の力にのみ、左右される。道の極みを求めるものに与えられ、道を歩く意志を持ったものに示される。その意志が無ければ、到底こなせぬ役割なのじゃよ。ジョシュ殿下の覚悟は既に別にあろう。それはワシすら干渉できんものじゃ。」

理の賢者の声はいつもの飄々としたものではなく、その場を圧倒する威厳のあるものだった。名前を呼ばれたジョシュは、何の話かよく分からずに首を傾げていたが、その声に思わず聞き入っている。サティは魔竜の背の上で、真摯に師匠の話に耳を傾けた。

「残念なことにのう？」

だが、その威厳のある声色はすぐに静まり、理の賢者は茶目っ気を含ませた声でジョシュに向かって片目をつぶった。

「…なるほど、全て杞憂でしたか。もう何も言いますまい。師匠にお任せいたしましょう。」

「うむ。弟子の不肖は師の不肖じゃ。しかしバジリウスよ、魔竜の件は、なんの咎めもなし…というわけには参らぬぞ。」

理の賢者の言葉に、グルル…と魔竜が唸る。

「分かっております。」

バジリウスが沈黙すると、国王がジョシュの背中を押した。ジョシュがバジリウスの前に出てきて、バジリウスは再び臣下の礼を取る。

「バジリウス宰相は、以前、オリアーブから海を越えた東の大陸と、交易の可能性を示唆する話を聞かせてくれたことがあるね。異なる文化や魔法体系があるけれど、それと積極的に交易している国は、いまだオリアーブ周辺には無い、と。」

「よく覚えておいでで。」

ジョシュは頷いて、別のことを口にした。

「…僕は、バジリウス宰相のことを恨みには思っていない。だけど、何の処断も下さないというわけにはいかない。魔竜の意見も取り入れる。」

「生かせば国を害するかもしれませんよ、殿下。」

皮肉げに、小さく笑ったバジリウスにジョシュは首を振る。

「それならば、もっと早くにやっていたはずだよ。バジリウス宰相。これほどの人たちが、集まってしまう前に。」

ジョシュが、父である国王を見上げた。その視線を受けて、国王は頷く。

「よかろう。ジョシュ、お前の意見は分かった。…バジリウス。」

バジリウスが瞑目して、国王の前に頭を下げた。

「沙汰は追って申し渡す。」

微かに息のある小さなオコジョの身体を撫でて、バジリウスは再び深く一礼した。

０４０．世界の例外処理理論

それから王宮は俄かに忙しくなった。バジリウスの執務室に竜が飛び込んできたのは誰の目にも明らかだったし隠し通せるものではない。バジリウスはひとまず自宅謹慎となり、処分を待った。途中、理の賢者やヴィルレー公爵が面会をしていたようだ。後始末のためだろう。

ピウニー卿は人間に戻っている間に、ラディゲと共に国王と内々に謁見した。国王はピウニー卿の帰還を喜び、魔竜との和解の架け橋になったラディゲの功績を称えたが、国内に公表するのはまずピウニー卿の呪いが完全に解けてから…ということになった。２人は謹んでそれを受けた。国王と王太子は魔竜に呪いをかけたことを詫び、魔竜は今後同じことを繰り返さぬことを条件に不問に付した。

ただ、許したわけではない。今回の件で起きた全ての出来事、ピウニー卿とサティの出会い、２人との出会い。それらに免じて不問に付す…というだけのことだ。魔竜としては、ラディゲ、ピウニー卿、サティ、ヴェルレーン、３人の賢者という限られた人間に限り、力を貸してかまわないと約束したが、オリアーブの王族と直接交流するかについては、今後の動向次第ということにした。ちなみにラディゲはひとまず黒翼騎士団所属のまま、魔竜と王族との渉外役を務めることになっている。

理の賢者は、国王の要請通りジョシュの後見人となった。それには、ジョシュが使う魔法の手ほどきも含めている。理の賢者は、魔力抑制の魔法陣を確認した際にジョシュに問うた。

「…ワシならば、魔力を抑制した状態のまま、殿下の身体を健康な

ものにできますが、どうされますかな？」

その言葉にジョシュはきっぱりと首を振る。

「もしこの力が国のためになるのならば、僕は王太子としてそれを使いこなす必要があります。魔力抑制を外してください。」

「決意はご立派じゃが、過剰な力は精神的にも毒になり得りますぞ。殿下は力に溺れず、使いこなす自信がおありかの。」

その場に居たサティは思わず、師匠の横顔を伺った。師がこのようなことを言う、ということは、サティなど軽く超えるほどの、よほど大きな魔力を持っているのかもしれない。ジョシュは、今は人の姿のサティをちらりと見ると、強く頷いた。

「使いこなす自信は、正直言ってまだありません。ですが、溺れない自信はあります。」

「よろしい。では、魔力の抑制を外しますかの。」

理の賢者は、ジョシュの言葉に嬉しげに頷くと髭を撫でた。

＊＊＊＊

「ジョシュ殿下、お加減はいかがですか？」

「サティ！　よく来てくれたね。ピウニー卿も。」

人の姿に戻っているサティが、ピウニー卿と共にジョシュの元にやってきた。サティの人の姿は、セピア色の髪とグリーンの瞳の女性

だ。ジョシュはどちらの姿のサティにも会ったが、猫のときは気安く話すことが出来るのに、こうして人の姿で来られるとどうもそわそわしてしまう。

あれからすぐに、バジリウスと理の賢者によって魔力抑制の魔法陣は外された。ジョシュに大きな魔力の暴走が無かったのは、魔力抑制をジョシュの身体に対して直接行い、それを少しずつ外していく手法を取ったからだ。サティが幼い時に取った手法だが、ジョシュの場合はすでに年齢が高かったこともあって、サティが半年掛けたところを2週間で強行した。ジョシュの身体には大きな負担だっただろうが、彼はそれを乗り越えた。そして、もうひとつ、ジョシュを安定させる要因があった。

「今日も、さっきまでセラフィーナが来ていたから、今はとても楽なんだ。」

「セラフィーナ嬢が？」

「うん。やっぱりフィーナのおまじないはよく効くんだよ。僕やプリムベルが唱えても、全然ダメで。…でも、誰が教えてくれたのか、教えてくれない。フィーナも魔法使いの素質があるんだろうか。」

セラフィーナのおまじない。サティももちろん、聞き及んでいる。

＜エーサワィヒス・オ・イエトゥーナ＞

それは「安寧と歓喜が鍵である。」という意味で、人の感情を利用した呪文の典型だ。ジョシュの安定を心から願う人が唱えて、初めて効果が発生する類の、まさに「おまじない」。恐らく、バジリウスが組んだものだ。彼は理の賢者が王宮に来る…と知ったときに、

自らの敗北を知ったときに、この呪文を作ったのだろう。誰かの手によってジョシュの魔力抑制が外れたときに、セラフィーナがジョシュの感情を安定させる鍵になるように、と。

サティの隣に静かに寄り添っているピウニー卿に、ジョシュは首を傾げる。

「父上のところに用があったの？　ピウニー卿。」

「いいえ。今日はジョシュ殿下にお会いしようと。」

ピウニー卿の凛々しい瞳が優しげに細まる。1日の内、元に戻ることの出来る時間は8時間ほどなのだという。貴重な時間だから、てっきり国王に会うために人の姿を取って、そのついでにこちらに立ち寄ったのかと思ったが、自分のために2人揃ってきてくれるのはうれしかった。特にピウニー卿は、まだ生きている…ということを王宮の人たちには知られていない。ピウニー卿は、事後処理もあって、理の賢者やサティと共に王宮の一部の区画に滞在しているが、一度人の姿に戻ってしまうと、顔を晒して王宮を歩くことが出来ない（別段ネズミのときも出歩けないので、あまり変わりは無い）そのような不自由も推して、こうして訪ねてきてくれることに、ジョシュは感謝を覚える。

サティの死の呪いをピウニー卿が解いた様子は、ジョシュの記憶にも新しい。誰も何も言わなかったが、2人の絆は誰の目にも明らかで余人の口の挟む余地は無かった。一体どんな冒険をして、2人はこんな風な2人になったのだろう。ジョシュは2人が仲良く並んでいる姿を見ると、とても心が和んだ。

ノックの音が響いた。現れたのは理の賢者だ。理の賢者はプリムベ

ルとヴェルレーンを伴っている。プリムベルは賢者の娘であり弟子だから一緒に居るのは当然として、なぜヴェルレーンが一緒に居るのだろう。理の賢者は、このヴェルレーンという男を妙に気に入っていてよく使っていた。

「おや、ピウニー卿にサティも一緒じゃったか。」

「師匠。」

サティが椅子から立ち上がると、ピウニー卿も共に立ち上がった。ピウニー卿が一礼をして、理の賢者のために身を引いた。サティもピウニー卿の隣に立つのを見て、理の賢者がふぉふぉ…と笑う。その意味深？な笑みを受けて、ピウニー卿が口を開く。

「理の賢者殿、サティをお借りしております。」

「かまわんかまわん。こっちこそ、サティをピウニー卿のところになかなかやれんかって、申し訳ないのう。」

「え、いえ。」

「ちょ、師匠。」

気まずげに目を逸らすピウニー卿を見て、むっふっふ…と理の賢者は笑う。ジョシュの身体を魔力に慣らす2週間、魔力抑制の輪を徐々に弱めるために、次々と新しい魔法陣や呪文を開発せねばならず、サティとプリムベルは理の賢者に散々こき使われた。そのため、サティとピウニー卿は人の姿に戻るときと、獣の姿で休むときくらいしか顔を合わせることができていなかったのだ。ピウニー卿自身も、国王を始め、ヴィルレー公爵やアルザス家の兄妹達への報告が多く

忙しかった。そもそも人で居られる時間は8時間しかない。今日は久しぶりにゆっくりと、顔を合わせたところだった。

顔を合わせたら合わせたでここは王宮だ。何か気まずい。…が、ピウニー卿としては、そろそろ我慢の限界だった。

「ピウニー卿や、もうアルザス家の方には顔を出したのかの？」

「いえ、今日辺り一度帰ろうかと思っています。ネズミの姿に戻ってパヴェニーアと共に抜け出そうかと。」

「ほほう。」

「そのとき、サティも連れて行ってもかまわないでしょうか。」

「えっ」…と初耳のサティが、ピウニー卿を見上げる。ピウニー卿はサティの視線には目を合わさずに、理の賢者の方を向いたままだ。

「ふぉっふぉっふぉ、かまわんよ。もうあとはプリムベルだけで間に合うじゃろうて。」

「お父様…。」

控えていたプリムベルはため息をついた。プリムベルはサティとピウニー卿の仲についてとやかく言うのは止めたようだ。とにかく、ピウニー卿がサティの呪いを解いたあの出来事は、衝撃的で有無を言わさないものだった。

「賢者殿がいらしたのであれば、私達はこれで下がって姿が戻るのを待ちましょう。…サティ、それまで部屋に戻っておこう。」

「え、ええ、ああ。うん。」

何、ピウニー卿とアルザス家に行くのは決定事項なのか。サティは妙におろおろしている。

「ピウニー卿。」

ジョシュはソファから立ち上がると、ピウニー卿の傍らまで来た。ピウニー卿が膝を付いて、ジョシュを見上げる。

「あ、膝を付かなくてもいい。立ったままで。」

ピウニー卿が立ち上がったのを確認して、ジョシュは視線を傾けた。

「まだ元には戻っていないの？」

「ええ。これからサティが身の内の魔力を解析しようかというところです。」

「元には戻れそう？」

「…呪いの種類は分かったので、後は呪文を構築するだけですね。」

その問いに答えたのはサティだ。そうか…とジョシュは頷いて、再びピウニー卿をじっと見つめる。

ジョシュは落ち着いてピウニー卿に会うようになって日が浅い。もちろん、魔竜討伐に行く前にも、見たことが無いわけではない。今までは遠くから幾度か見かけただけで、挨拶したことは無かった。

だが、若い騎士達が憧れを抱くように、ジョシュもピウニー卿に憧れていたのだ。部屋を出られない自分と違って、国中を旅する騎士。…ネズミのときはとても可愛いのに、人のときの彼の姿は大人の男の落ち着きと、騎士の雄々しさを兼ね備え、その姿は改めて眩しく見えた。

「元に戻って落ち着いたら、今度僕に剣を教えて欲しい。」

「ジョシュ殿下。」

ピウニー卿が再び膝を付いた。畏まるわけではなく、ジョシュに視線を合わせるためだ。すぐにそれが知れて、ジョシュは今度はピウニー卿を咎めなかった。

「ダメかな。」

「いいえ。恐れ多くも、喜んで。」

「ありがとう。」

ジョシュが嬉しそうに微笑んだ。魔法使いの理の賢者と、サティ。騎士のピウニー卿。こんなに心強い人たちが増えるなんて、自分はとても恵まれている。

「ところで、サティや。」

「なんですか、師匠。」

ジョシュとピウニー卿が穏やかに歓談している横で、理の賢者がサティをそっと呼ばわった。

「ずうっと気になっておったんじゃがのう。…サティよ、まだ呪いは解けておらんのか？」

「…え？」

「ワシ、てっきり解けとると思うとったのじゃがの。」

「はい？」

素っ頓狂な声を上げたのはピウニー卿だ。ジョシュと共に、理の賢者に注視している。この場合、解けた呪いというのはサティの死の呪い…では当然無くて、獣の姿になってしまう、あの呪い、だろうか。サティが理の賢者の言葉にふるふると頭を振る。

「え、いえ、でも師匠。まだ魔力や呪いの解析を始めたばっかりで…。」

「いやいや、だって、この間、死の呪いが解けたじゃろ。ということは、2人の関係はアレじゃろ？」

何、アレって。

「いやあの、チャンスは一度きりだと…。」

「じゃから、チャンスは一度というのは分かっておる。おぬしらはそれに成功したじゃろう？」

「……え？…でも、中途半端に解けて2度は無い…って」

「最初に愛は育むものじゃと言うたではないか。最初のチャンスでちゃんと解けておったじゃろう。あの時、愛の力は呪いの魔力に絡まった。中途半端に解けたのがよい証拠じゃ。魔力は感情の動きにも関係すると、何度も教えたじゃろうがサティや。世界の例外処理も、基本の構造は一緒じゃよ。」

理の賢者はやたら楽しそうだった。サティは師匠にいろいろ言いたいことはあったが、それらを全て堪えて必死で思い出す。あの時、師匠は何と言っていた。いつもヒントの少ない師匠は、弟子が自らの力で解にたどり着くまで由としない。

『それに愛は育むもので、チャンスは1回と相場が決められておるのじゃ！』

その言葉をサティが思い出した瞬間、理の賢者が髭を撫でた。

「チッスがきっかけで、愛や真心といった感情が呪いの魔力を覆い、解(ほど)くのじゃ。ということは、愛が育まれるほど呪いは解け、いつか完全に無くなる…という仕組みじゃと思わんか？　のう？」

何が「…のう?」…だ。師匠…！！

サティは、自分の辿りついた解に眩暈がした。そんな、まさか…。

「…な…な…。いつから、いつから解けて…。」

「さあての…。じゃがまあ、姿形の変化は人の魔力が人の意識から離れた魔力に変わることから生まれたものじゃから、魔力の3分の1しか戻っておらん、とか、1日の3分の1しか戻れないとか、チッスで元に戻る…とか、そういう風に思い込んでおると、そのように表に出てくるものなのかもしれんのう。もっとも、その理論を証

明したものはいまだかつておらんかったがの！…いやはや、魔力とはまことに不思議なものじゃよ。ふぉっふぉっふぉっふぉっふぉ！」

「…し、ししょう。」

「なんじゃ？　図で説明したほうがよいかの、しようのない弟子じゃのう…。」

「だーーーーー！！　いいです、図はいいです！」

理の賢者が杖を引き寄せて、ほいほいと空中に何かを書き始めると、その軌跡が線になって空中に残る。剣を持ったネズミが木にぶつかった図、ぐったりと倒れたネズミを前に、猫がしくしく泣いている図、ネズミと猫が顔を寄せ合って口元ペロ…やめてーーー！師匠やめてーーー！！
サティがわっさわっさと空中の絵をかき消している間、ピウニー卿は顎に手をあてて、何かを考えている様子だ。

「…ということは、理の賢者殿。…私達は、もう元に戻ったと考えてもよろしいのでしょうか。愛の力で完全に呪いを解いているのだから、それを意識していれば魔力もそれに伴う…と。」

「その通りじゃ、ピウニー卿。サティよりも物分りがよいのう。ワシの弟子にしたいくらいじゃな！　それに少なくとも、ピウニー卿からサティのベクトルに関して、愛の力は証明されておるしのう。」

今、はっきり言いましたね。「愛の力」と。ピウニー卿と理の賢者と、１回ずつ。
しかも、もしかしたら知らないうちに呪い解けてましたとか、解けてたくせに刷り込み理論で猫とネズミになっていましたとか、そん

なの…。

いやいやいやいや。

「ちょ、ちょっと待って！　完全に解けてるなら、どう考えてもその時点で猫になるのはおかしいでしょ？　人を形成できない魔力…っていうか、猫を形成してしまう魔力が残ってるから、猫になるのであって…。」

「サティ、元に戻りたくないのか？」

ピウニー卿がサティの肩をがしっ…と掴み、気圧されたサティは慌てて首を振った。

「違うわよ！　戻りたいけど、でも、理論的にそれは…。」

「ふぉふぉふぉ…それについては、もう少し調べてみる余地はあるじゃろうのう。…だが、サティよ、気付いておらんか？　自分たちの魔力が元に戻っているのを。」

「それは…。」

「それに、理論より大切なことがあるじゃろう？」

死の呪いからサティを救ったのはピウニー卿（の愛）だったらしい。事件の時、羞恥心は限界だったため、サティはピウニー卿にあの時のことをはっきりとは問い質していない。こうして改めて言われると…。サティはピウニー卿をちらりと伺ってみた。ピウニー卿はじっとサティを見つめている。あまりに強い眼差しを受けて、サティの顔は熱くなった。思わず目を逸らして自分の頬に手を当てる。

何これ…眩しい。煌びやか過ぎる。男前すぎる。精悍すぎて、真面目で、頑なで、自分の好きな…人で。じゃなくて、肩に手が。手を離して！　みんないるんだから手を離してーーー！！

サティは、ピウニー卿の手を掴むと、ぐぐぐぐ…と肩から外させた。

あと、そこまで期待満面で見られると逆に困る。そう思ってもう一度目をあわせる。ピウニー卿がサティの頬に手を伸ばしてそっと触れ、瞳を細めてゆっくりと笑った。…あああ、今、ジョシュとかプリムベルとかヴェルレーンとかの目の前なんだから、そんな顔をするなこの騎士めがーーー！！

「ピウ…あの、」

「ともかく、話は分かりました。…実家で試しに様子を見てみましょう。サティ、帰るぞ！」

「えっ？　今から？」

「今からだ。ジョシュ殿下、御前失礼いたします。」

「うん。元に戻ったら、約束だよ、ピウニー卿。」

「ええ、是非とも。理の賢者殿も…サティをお借りいたします。」

「ふぉふぉふぉ。サティはしばし、アルザス家に滞在する…ということでよろしいのかの。」

「はい。それでは。サティ、行くぞ。」

ピウニー卿はジョシュと理の賢者に一礼すると、サティの手を掴んで扉へと歩いていく。

「ちょ、ま、何強引に…ピウ、ピウニーーーー!!顔!顔バレするから!」

「隠せば問題ない!おい、ヴェルレーン、悪いが俺達を外まで連れ出してくれ。」

顔を兜やローブで隠した人物がいかに怪しくても、ヴェルレーンなどが連れていれば外に出ることができる。

「ちょっと待ちなさいってーーー!!」

にこにこしているジョシュと理の賢者、そしてやれやれと溜息をつくプリムベルを残して、ピウニー卿は半ば引きずるようにサティを連れて出て行った。渋々後を追おうとしたヴェルレーンだったが、側にいたプリムベルにそっと耳打ちする。

「…理の賢者、家に最初に戻ってきた時点で、絶対知ってましたよねアレ…。」

「お父様のことですから、もっと早い段階で気付いてたと思いますわ…。」

「え…、それで黙ってたんですか。」

「世界の例外処理理論の実際を間近で見られることなんて、なかなか無いからかと…。」

「ヴェルレーン！」

「分かりましたってば、ピウニー卿！…もう、人のことをこき使って…。はいはい、今参りますよ、ちょっと待ってください！」

自分を呼ばわるピウニー卿の声に、ああもう…と返事をしながら、ヴェルレーンは思う。今回の件…さて、一体、どこからどこまで理の賢者の手のひらの上で踊らされていたのだろうか…と。

０４１．お腹のふかふか

「ピウ…ひげ、くすぐったい…」

「…サティ？」

アルザス家の離れの客用寝室で、ピウニー卿は目が覚めた。いつも聞いているサティの声に、瞼が開いたのだ。頬に触れるのはセピア色の髪の毛。腕の中には柔らかな身体。少し顔を離してみると、目の前には眠っているサティの顔があった。今は目を閉ざしているが、開けば綺麗なグリーンであることを、ピウニー卿は知っている。可愛らしいサティの寝言に、ピウニー卿は抱き寄せる腕に力を少し入れた。サティの全てを堪能した昨夜のことを思い出すと、幸福なため息ばかり零れる。甘い肌触りと耳朶をくすぐる切なげな声が愛しくて、つい調子に乗った。止まらなかったというか、止められなかったというか…。

ピウニー卿はサティを起こさないようにそっと、髪の毛を撫でた。

「…ん。」小さな吐息が零れて、サティが猫のように自分の胸に擦り寄ってくる。ピウニー卿はサティの背中に手を滑らせて腰を引き寄せ、身体全体を使って抱きしめた。

＊＊＊＊

ジョシュの下を訪ね、理の賢者から「呪いは解かれたのではないか」という話を聞いて居ても立ってもいられなくなったピウニー卿は、すぐさま王宮を辞して実家に戻った。もちろん、パヴェニーアの妻セシルとアルザス家の執事、侍女頭は心得たもので、素早く離れを準備すると2人を通してくれたのだ。

本当にネズミと猫に戻らないのだろうか…と、ピウニー卿は気が気ではなかった。ああは言ったものの、愛の力を信じれば魔力は揺らがず元には戻らない…などということが、本当にありえるのだろうか。だが、用意された夕食を取り、僅かに酒盃を傾けても2人は人の姿のままだった。ピウニー卿はその間も、ずっとサティに触れてみたくて仕方が無かったが、当のサティは心ここにあらず…といった様子だ。時折、「いや、でもあの呪いの形式からいって魔力は…。」などと、理の賢者が解説した理論について、難しい顔をして考え込んでいる。目があっても、つい…と逸らされてしまい、まるで今までの2人に戻ったようだ。

「本当に、このまま人の姿のままなのだろうか。」

過去の様々な出来事が思い出され、ぽつりとピウニー卿は言う。手に持った酒盃を傾け、舐めるようにそれを喉に流した。しかし、少し寂しい気もする。…のは気のせいだろうか。待て、こういう気持ちがよくないのだ。ピウニー卿は頭を振った。

「うーん…。」

サティは少し首を傾げると、隣に座っているピウニー卿との距離を詰める。急に側近くに来たサティの頬に、ピウニー卿は思わず触れる。だが色めいた雰囲気にはならず、サティはなにやら真剣に、ピウニー卿の額に手を当てた。

「サティ?」

その手のひらの温かさにピウニー卿がサティを見下ろすと、グリーンの瞳が自分の瞳を覗き込んでいた。

「…多分だけど、ピウの魔力は元に戻ってる…と思う。元々の魔力量を知っているわけじゃないから、なんとも言えないけど…少なくとも、ピウに最初に会ったときから比べると、格段に増えてるから…。」

サティはピウニー卿の額から手を離すと、溜息を付いた。

「やっぱりプリムベルを助けたときに、もっとちゃんと真剣に調べておけばよかった。…それなら早く気付けたかもしれないのに。」

はっきり知れたのは、プリムベルを助けたときだ。あの時、インプを一撃で落としたあの威力。マハの剣の威力に気を取られて、きちんと調べなかったのが悪かった。というよりも、むしろ自分の魔力だ。違和感はまだあるが、量は戻っている。それこそ、いつからだろう…いつ、戻ったのだろう。愛の力で元に戻ったというのならば、いつから、自分は。

そこまで考えが至って、サティは急にピウニー卿への思いで胸が詰まった。何かの病気かと思うほど、心臓が鼓動を打ち始め、ピウニー卿に聞こえてしまいそうだ。苦しくて、思わず、は…と息を吐く。その吐息に誘われたように、ピウニー卿はサティに手を延ばした。

「もういいサティ。」

額から離れた手が名残惜しい。そんなに熱い息を吐くな。ピウニー卿はサティの身体に手を回して引き寄せた。強引な動きではないが、2人の距離が近づき、近づくに任せて互いの唇が触れ合う。

「戻らないな？」

ピウニー卿は少しだけ唇を離して、小さく笑った。まだ触れそうな距離にあるピウニー卿の顔に、サティは頬を染め、羞恥を誤魔化すように身を離した。

「ピウニー、あ、あの」

「なんだ？」

「…あの、話があるって…。」

「ああ…。」

サティに思いを伝えようと思っていたときの、あの話のことか。そういえば、きちんと話していなかった。忘れていたわけではない。ただ、ピウニー卿の中には、急いた気持ちと揺ぎ無い確信がせめぎあっていて、どちらもサティを求めている。話せば想いが溢れそうで、自分を抑えきれる自信が無かった。だからこそ、何度も好きなだけ、サティに気持ちを伝えられる時間を作りたいと思っていたのだ。それでこの2週間は、サティに手を出さなかった。

ピウニー卿は離れたサティを追い詰めると、その頬に小さく口付けをして囁く。

「もう話してあるんだが、…では、後でもう一度話そう。」

「え？」

「…で、サティの話とはなんだ。」

「えっと…。」

話しやすいように、ピウニー卿は少しサティから離れてやった。サティの瞳がうろうろとしていたが、やがて意を決したようにピウニー卿を見つめる。「ピウニー、あのね。」

「…私、ピウニーの事が好きよ？」

ピウニー卿の顔がきょとんとした。精悍で渋みのあるこの顔が自分に対してこんな表情を向けると、ひどく距離が近づいた気がする。サティは嬉しくなって、微笑んだ。もっと緊張するかと思っていたのに、言ってみると胸に素直に落ちる。

「だから…ピウが、私のこと関係ないって言っても、元通り王様の命令で国中を旅することになっても、…しつこく着いていくから…だから…」

サティの視界が塞がった。きつく抱きしめられ、深く口付けられたのだ。ストップストップ！　声出ないし何か入ってきたし待って！話の、途中です、ピウニー！

「…んんーーー…ちょ、待、ってって、ちょっと、ピウ！」

「途中で止めないでくれ、サティ。」

「途中で遮ったのはピウニーでしょう。」

「いやそうではなくて」

「話し終わってないのよ最後まで聞いて！」

「す、すまん。」

あーーーもーーーー、と言いながら、サティは腕を突っ張りピウニー卿との距離を離す。はあ…と一息ついて、サティはピウニー卿に向き直り、両手で頬を挟んでこげ茶色の瞳を覗き込んだ。手にざらりと無精髭が触れ、それをなぞるようにそっと指を動かす。

「ねえ、愛してるわピウニー。大好きよ。」

ピウニー卿の瞳が驚いたように見開かれ、吸い込まれるようにサティに近づく。再びサティの視界が塞がる…、その前に、サティは頬に当てていた手をピウニー卿の逞しい首に巻きつけて、抱きついた。上手くかわされたピウニー卿は、非難がましくサティの名を呼ぶ。

「サティ…！」

「よし、勝った。」

「…勝った？」

抱きついてきたサティの背中に、思わず腕を回したピウニー卿は、自分に掛かってきた体重を心地よく感じながら首を傾げた。

「そうよ。先に言ったほうが勝ち。」

それを聞いたピウニー卿が、無精髭の口元を笑みの形に象った。サティの頭を撫で、腕に力を込める。ずっとこうして触れたかった、サティの柔らかい髪。一番最初に触れたあの時から、ずっと変わら

ない。セピア色の長い髪は絹のような手触りで、猫の時のサティの毛並みを思い出す。徐々に腕を下ろしていき、細い腰のくびれに手を回した。

「それなら、俺の勝ちだ。残念だったなサティ。」

「え？」

「あの時お前の呪いを解いたのは誰だと思っている。」

「ええ？」

「なんなら、ジョシュ殿下やラディゲやヴェルレーンに聞いてみるか？」

「えええ？」

「あの時は生きた心地がしなかったからな。必死でお前に訴えた。」

「な、ななんて…。」

「もう一度聞きたいか？サティ」

いつの時のことか、はっきりと知れてサティは嬉しいやら恥かしいやらで顔が熱くなる。だって記憶に無いし、ノーカンじゃないの！？　っていうか、みんなの前で言ってたの、何を言ってたの？　でも…。

「私は聞いてない。」

「ああ、そうだったな。」

拗ねたサティの声に、ピウニー卿は子供をあやすようにサティの頭を撫でた。一度顔を離して、グリーンの瞳を見つめる。

「愛してる、サティ。」

「……泣くほど？」

ピウニー卿はサティを見つめた。サティは頬を染めて、少しだけ、悔しそうな顔をしている。その表情に、ピウニー卿が優しく笑う。

「ああ。俺を泣かせるのはお前だけだサティ。」

このままだと悔しくて、ピウニー卿に負けたくなくて、言ってみたのに、それなのに。

「愛しているんだ。だから、いつまでも俺と一緒に居てくれ。」

やっぱり人の姿のピウニー卿には敵わないではないか。だけどこの人に負けるのだったら、まあいいか。いいよね。サティはピウニー卿に身を摺り寄せた。

思いが伝わったらそれが終わりではない。やっとここから始まるのだ。

ピウニー卿はその身体を逃さないようにしっかりと抱きしめる。顔を寄せて、唇を重ねた。咥えるように口付けて、しっとりとした低い声で、もう一度言う。

「愛してる、サティ。」

…と。

＊＊＊＊

目が覚めたら、目の前にピウニー卿の鎖骨があった。頬に当たるのは滑らかなのに弾力がある、筋肉質の胸。疲労感で寝ぼけたサティには、一瞬状況が認識できない。

「ん…ピウ…？」

サティの声に呼応するように、身体に巻きつけられた太い腕に力が込もったのが分かる。

把握。

そうだった。身体がものすごくだるくて足の付け根が軋むように痛い理由も、１つの寝台でネズミを抱き寄せているのではなく、無精髭のピウニー卿に抱き寄せられている事情も全部思い出した。抱き寄せ…抱き…うわあ…なんだこの状況。身体に触れているのは腕だけではなかった。サティは抱き枕か何かのようにピウニー卿に絡みつかれていて、足も腰もがっしり固定されている。しかも、…日が高い。今何時だ。そして、起き抜け。起き抜けだから仕方がない、とかなんとか、以前ピウニー卿が言っていたが…。…サティは、正直よくこれで眠れたな…と思う。

ピウニー卿は一晩中甘い言葉を囁いていたが、言ってることとヤッてることが全然違っているし。

そもそも、あれほど身体的柔軟性の高さが要求されるとは、師匠の

揃えている恋愛小説にも掲載されていなかったし、あんなアクロバティックな動きを強いられるとは予想もつかなかった。しかも途中で一緒にお風呂に入るとか、どういうことだ。

別にサティが激しくどうこうした…というわけではない。主にピウニー卿が頑張っていたのだが…。もちろん、痛かったのは痛かった。親指と人差し指の間の水かきが…などと比喩される通りだ。でも、それも一瞬で、あとはそんなには…むしろ…幸福感がそれを上塗りしてなんというか…。

ふおおおおお。ダメだ、これ以上考えると激しく恥ずかしい。

「サティ…。」

なんて甘い声を出すんだろう。昨晩散々聞かされた後なのに、こうして耳元で囁かれるとまた心臓が跳ね上がる。ピウニー卿の唇がサティの髪に触れ、顔の輪郭をなぞるように降りてきた。

「サティ…。大丈夫か？」

「何が…？」

「すまない。一晩中、お前を離せなかった。」

恥かしくなるからそういうことを言わないでほしい。そう思っていると、顔をなぞっていた唇が、耳元を音を立てて口付けた。その感触にピク…と震えたサティが思わず顔を上げる。その視線を受け止めるピウニー卿は、心配そうな、だがとても愛おしいものを見つめるような表情だ。真面目で、頑ななピウニー卿の、その頑なさが、今は一心にサティへの思いへ傾けられていて、それがサティにはう

れしくてくすぐったい。そして、同じだけのものを返したくてたまらない。サティは、きゅ…とピウニー卿の肩にすがりついた。

「別に…無理してない。それにピウニーとだから平気。」

幸せな気分は本当だ。

「そんな風に言うから、止まらなくなるんだろう。サティ。」

ピウニー卿が熱い息を吐いて、その手が、…いや手だけではなく身体全体が、再び不謹慎な動きを始めた。サティがグリーンの瞳でピウニー卿を見つめると、一瞬こげ茶の瞳と目があって、その瞳が嬉しそうに細められて唇が触れ合う。どちらからともなく深く絡まりあい、想いが交換されて…重なって、そして…

ふかふかして。

…ふかふか？

「…んん…？」

「さ、ささ、サティ…！」

急に自分を包み込む腕が無くなり、口元にふかふかの感触が触れる。なんだかぴちぴちしたものが、自分の口元を這い回っていてやがてそれがころころと転がっていった。枕を転がり落ちシーツの中に入り込み、サティの鎖骨から胸元にかけて、いろんな意味でギリギリの部分に、そのふかふかが止まる。まさか。

「あ、や、ちょ…待って、暴れないで！」

胸元をちくちくしたものが這い回り、思わずサティはそれを手で押さえ込む。「ふがっ」という悲鳴が響いて、サティはそのふかふかを摘み上げた。

「…ピウニー…？」

「サティ…！」

自分の手の中でじたばたしているのは、金色の毛皮のネズミだ。サティはシーツを身体に巻きつけて起き上がった。

「…どういうこと？」

「…くっ、俺がっ！…俺が聞きたい…っ！」

人のサティとネズミのピウニー卿。
いつにない逆転劇に思わずサティはにんまり笑った。

「ちょっと太ったんじゃないピウ？」

「…なっ、ネズミの姿だからそう見えるだけだ！」

ピウニー卿の腹筋はそれは見事なものだった。だが、ふっくら柔らかなネズミの太ましいお腹もまた可愛らしいではないか。サティはそっと枕にピウニー卿を下ろすと、お腹のふかふかを指でこちょこちょくすぐった。昨晩のお返しだ。これくらいは許されるだろう。

「ちょ、うはっ、やめっ、サティ、こらっ…！」

ピウニー卿の抗議の声を聞きつつ、思案する。さて、これはまた、どうしたものか。

［最終話］　竜剣の騎士ピウニー卿

オリアーブ国の辺境にある小さな村の小さな酒場。

ここは、かつて竜殺しの騎士ピウニー卿と呼ばれ、今は竜剣の騎士ピウニー卿と呼ばれている、オリアーブで最も有名な騎士が行きつけにしていた酒場だ。

ピウニー卿が入れていた酒が何者かに開けられる…という事件が起こり、死んだピウニー卿が幽霊となって出てきた…という噂が広がったのが2年と少し前。そのピウニー卿が実は生きていて、魔竜と和解して帰還した…という知らせが届いたのは1年前だ。

ピウニー卿が生きていたのなら、ボトルを開けたのは一体誰なのか、と、噂はミステリアスな方向へと伝わり、いろんな意味でもこの酒場は有名になった。実は主人が名を売るためにそういう噂を流したのではないか、などとあらぬ疑いをかけられたこともあったが、今ではそういった噂も収まり、小さいながらも、ピウニー卿に憧れる若い旅人や駐留兵士などがよく訪ね、ほどよい活気に溢れた酒場になっていた。

現在王都では、ピウニー卿と和解した魔竜との協力によって、魔物の沈静化に力を入れている。魔竜の復活に一時騒然となったオリアーブだったが、一連の出来事を、国王は包み隠さず公表した。王都に降り立ち、国王と王太子、3人の賢者、そしてピウニー卿らと共に並び立った黒鱗の魔竜の姿に、人々は、魔竜という存在と敵対するのではなく和解することを、戸惑いながらも受け入れた。

なんでも、現在は親衛隊に所属する黒髪の騎士が魔竜との渉外を行

っているそうで、グラネク山にはその騎士が駐留するための詰め所が置かれているらしい。いまだ王家との正式な和解は為されていないがその関係は順調で、魔竜に子が生まれ、オリアーブ国王が祝辞を送ったのは記憶に新しい出来事だ。

宮廷においては、先王の代より国の政治の中枢にいたバジリウスが、魔竜の件によって失脚し、ヴィルレー公爵アンヘルが後任に就いた。バジリウスの退任と、第二王子誕生によって当時大きく揺れた宮廷だったが、ヴィルレー公爵の穏やかながらも隙の無い振る舞いによって、それらが収まるのもすぐだったという。新しい宰相は、若い王太子を指導しながら、共に国王の新たな力となっている。

第二王子の誕生によって地位が危ぶまれるかと思ったその王太子ジョシュだったが、理の賢者が後見人となり、この1年で魔法使いとして大きな能力を開花させている。まだまだ習うべきことは多いが、剣を持って減衰してもなお豊富な魔力は、理の賢者以来の魔力かもしれない…との噂だ。その王子のために、杖と剣の賢者が、双方の理論を持って、現在剣を作成しているところである。

病床から復帰した王太子ジョシュが13歳ながら一部を任されているのが、海を越えた東の大陸との交易だ。オリアーブ国が位置する大陸にあって、いち早く東の大陸へと国の要人を送り込んだジョシュは、貿易の品だけではなく、東の大陸の魔法や技を取り入れようと画策しているらしい。その力の要になっているのが、実は失脚した元宰相バジリウスだ。彼は東の大陸に左遷された。彼の地を調査し、オリアーブから派遣される重鎮らの橋渡し役を務めている。そのバジリウスの隣には、常に濃茶色の髪の女性が付き従っているという。余談ではあるが、バジリウスは生涯オリアーブの地を踏むことは無かった。

酒場の扉が開いた。

「いらっしゃい。すまんが、まだ開店前なんだ。もう少し遅くなってから来てくれないか。」

「部屋を取りたいんだが。」

今は中途半端な時間で、開店には少し早い。主は怪訝そうに振り向いた。

そこには、旅装の騎士が1人立っている。肩には小柄な猫が乗っていた。騎士は硬質な足音を立てて酒場を横切り、カウンターの前で足を止める。

薄い色合いの金髪に無精髭。精悍な顔にこげ茶色の瞳が凛々しい男だ。

酒場の主には微かに見覚えがある。

なぜなら。

「…も、もしかして…あんた…。」

「久しいな。」

「ピウニー卿ですかい！」

「覚えてくれていたか。…店主、よければ何か、一杯もらえないか？」

「はっ、はい、もちろんで！」

カウンターに騎士が座ると、セピア色の猫がその膝に乗り、クルクルと喉を鳴らしながら男の胸元に頭を摺り寄せた。騎士はその毛皮を愛しげにくすぐりながら、出された酒盃に口を付ける。

「あの…本当にピウニー卿ですか?」

「随分来ていなかったから、忘れるのも無理は無い。」

「違いますっ、忘れたんではなくて…その、ピウニー卿ほどの人がこんな酒場覚えているわけがないと…。」

「ここを拠点にしていた頃は、私も若かったがな。…酒も入れていた。忘れるはずが無かろう。」

騎士は小さく笑う。しばらく猫の背を撫でながら懐かしそうに酒場の中を見渡していたが、酒盃を煽ってそれを置いた。

「ここは確か宿もあるだろう。一部屋借りても?」

「は、はいっ、あの、でも、この村にはもう少しいい宿がありますが…。」

「連れがここの料理を食べたいと言っていてな。」

「は、はあ…そりゃ光栄なことです。うちは料理も自慢なんで、って…連れ?」

「2人分、前金はここに置いておくぞ。鍵を貰っても?」

「ふ、ふたりぶん? 多すぎですよ、猫の分は…。」

「1人分しか払わなかったら怒られるんでな。夕食は2人分用意しておいてくれ。」

ふ…と笑って、騎士は代金と引き換えに、店主から部屋の鍵を貰うと立ち上がった。片手で猫の身体を抱き上げている。呆気に取られた店主を背に、勝手知ったる様子で、トントン…と部屋のある2階へと登っていった。

その背を見送りながら、あの猫…2年とちょっと前に、少しの間うちに置いていた猫に似てるな…と、店主が思っていると、階段を上りきる前に騎士が振り向いた。

「昔入れていた酒はあるか?」

「あ、ピウニー卿が入れていたものは残念ながら質が落ちていて飾りになっていますが、同じ種類のものなら。」

騎士は、はっは…と笑って、頷いた。

「ならば夕食には、その果実酒とアオカビのチーズを肴に付けてくれないか?」

「は、はい! 時間になったらお呼びします!」

「頼む。」

今度こそ、騎士は2階へと消えた。

＊＊＊＊

旅装を解いて楽な格好になると、ピウニー卿は寝台の上にごろりと転がった。猫のサティの両脇を抱えるように持ち上げ、自分の胸板の上に乗せるとその背を撫でる。柔らかな毛皮が手のひらに心地よい。

「懐かしいな。」

「懐かしいね。」

すり…と、サティはピウニー卿の顎に自分の頭を摺り寄せた。

1年前のあの日、やっと呪いが解けたか…と思った2人の身体だったが、思わぬことが起きた。ピウニー卿も、サティも、不意に獣の姿に戻ってしまったのだ。しかも、2人とも全く異なるタイミングで。すぐに人間の姿に戻ったからよかったものの、これは不味い…と、理の賢者に相談した。

よくよく調べてみると、姿形を変えてしまう原因になった魔力の一部が、自分たち自身の魔力に定着してしまっていた。どうやっても、その一部の魔力は消えなかったのだ。理の賢者によれば、もはや自分の魔力になってしまっている…という。長い間獣の姿で、お互い心地よく過ごしていたのが原因だったようで、理の賢者は、ネズミや猫の姿もまんざらではないんじゃろ?…とだけ言った。

最初のうちは、2人ともその魔力の一部を上手く使いこなすことができなかった。獣から人間に戻るときは強く自分の魔力を意識すればいいのだが、獣になってしまうときは唐突だ。大体が、2人っきりで気分が盛り上がった後、気が緩むとくるりと姿が入れ替わってしまう。

慣れない頃は、2人ともバタバタしていた。

「おい待て尻尾が触れ…尻尾…そこは…うぐ…」「変な声出さないでよ、ちょっと、あ…、尻尾触らないで…」とか、「ちくちくするくすぐったいやめて降りて動かないで！」「降りるか止まるかどっちだ。おっと。」などなど。バタバタしすぎて、扉の外を通りかかったパヴェニーアが赤面するほどだった。本人たちから見ると、赤面している場合などではないのだが。

サティはさすが魔法使い…と言ったところか。それともよほど危機感があったのか。すぐさま、自分の中の2種類の魔力を操り、猫やネズミになったり元に戻ったりするための呪文を開発した。3日3晩部屋に篭って真剣に研究した。そのおかげで、今では2人とも安定して、自在にネズミや猫に変身することが出来るようになっている。一連の事件の、思わぬ副産物だった。

ちなみにサティは、人間のピウニー卿の膝の上でゴロゴロするのが大好きだ。ピウニー卿も、サティが猫になれば片手で持ち上げたり肩に乗せたりできるため、いい気分らしい。「猫にならないのか？」と聞くほどだ。実のところ、サティが猫になっていれば、人が居ても堂々と抱き寄せたり、頭を撫でたり出来るから…という騎士らしからぬ不埒な理由もあるが、それは己の心に仕舞っている。

だが、ピウニー卿は狭い所に入るとか、サティの腕の中に隠れるとか、サティが猫になっているとか、そういう状況でない限りはなかなかネズミになってくれない。サティにはそれが若干、不満だ。

そして、今。

2人は、お互いが一番最初に出会った酒場に来ていた。

ピウニー卿はオリアーブ国王の前に帰還を果たした後、再び国王の命により、魔竜の協力の下、魔物の調査のために国中を旅していた。もちろん今度は、愛する魔法使いのサティと共に。

多くの遺跡や洞窟、廃墟などをめぐり、そこに巣食う魔物と魔力の流れ、凶暴化しやすい魔物、沈静化が有効な魔物、もとより凶暴な魔物…などを調査し、沈静が必要な箇所はそれを行い、時には町や村の依頼によって魔物の討伐を行っているのである。

「…サティ。」

「なあに?」

「そろそろ、王都に落ち着いてもよいだろう、と陛下が仰っている。」

「王様が?」

「ジョシュ殿下との約束も果たさねばならん。」

「そうね。」

ピウニー卿とサティは時折王都に帰ってはいたが、基本的に2人きりの旅を楽しんでいた。だが、ジョシュの王太子としての指導も本格的に始まった頃だ。国王からの要請であれば致し方なし。しばらくは、王都に戻ってゆっくりしてもいいかもしれない。

「それにサティ。」

「ん？」

「そろそろお前と、新婚生活とやらを楽しみたいものだ。」

実は、前回王都に戻ったときに、ピウニー卿の両親がアルザス家に戻っていて、未婚のお嬢さんを引っ張りまわすんじゃない！…と、（ピウニー卿が）こっぴどく怒られたのだ。…で、あれよあれよという間に、結婚の儀式っぽいものをさせられ、名実共に、ピウニー卿とサティは夫婦になっていた。

サティはピウニー卿の胸板から降りると、肩と首の間に頭を摺り寄せた。ピウニー卿の首筋をざらりと舐めて身体を丸める。尻尾がふたふと揺れていた。

「そうね。私もゆっくり、ジョシュ殿下に会いたいかな。」

「なんだそれは。」

む…とピウニー卿が起き上がり、丸くなっている猫のサティの背中に口付けるように顔を埋めた。ピウニー卿の大きな手がサティの耳の裏をくすぐると、ごろごろと心地よさげに喉が鳴り、その様子にピウニー卿は楽しげに瞳を細める。

ピウニー卿は再び横になり肘を付くと、片方の腕でサティの小さな身体に寝台の掛け布を掛けた。その布に包んだまま引き寄せる。

「…サティ、人間に戻らないのか？」

「どうしようかな。」

「サティ。」

抗議の声を上げるピウニー卿に、サティは身体を摺り寄せた。

「ねえ、ピウ？…王都に戻ってしばらくしたら、また旅に出たくなるんじゃないの？」

「ん？」

次の瞬間にはもう、ピウニー卿の手の平に布越しの柔らかな女の曲線が触れる。

腕の中で自分を見上げているのは、セピア色の髪に綺麗なグリーンの瞳のサティ。

「それでも俺と一緒に来るんだろう、サティ？」

低くよく響く声で囁くのは、薄金色の髪に凛々しいこげ茶色の瞳のピウニー卿。

「当たり前じゃない。」

サティは笑って、自分が包まっている掛け布の中にピウニー卿を引き寄せた。それに導かれるように、ピウニー卿もサティの身体を直接腕の中に収め、２人の唇が重なり合う。

＊＊＊＊

魔法と剣の国、オリアーブ。

この国は多くの立派な騎士と、賢い魔法使いで支えられた平和で豊かな国だ。

この国には、国王の命を受けて国中を旅するピウニー卿という騎士が居る。
そして、その隣には、グリーンの瞳の女魔法使いがいるという。

ただ、時折、その女魔法使いが見当たらないことがある。そんなときは、ピウニー卿の腕で小さなセピア色の毛皮の猫が、喉を鳴らしている。

また、時折、その女魔法使いが1人でいることがある。そんなときは、金色の毛皮のネズミが女魔法使いの肩の上で、髭をぴくぴく揺らしているのだ。

これはオリアーブ王国の竜剣の騎士ピウニー卿の物語。

この物語を読んだすべての旅人よ。

＜エルクオ・オ・イェーシェ・アニェサワイス・ニャーラ！＞
（波乱に満ちた幸福な人生を送らんことを！）

［最終話］　竜剣の騎士ピウニー卿　（後書き）

ここまで読んでいただいた皆様。本当にありがとうございます！
「ピウニー卿の冒険！」は、ひとまず最終話を迎えました。

あと数話、登場人物紹介＆あとがき、おまけの小話などを追加する予定です。
（ただし、更新は毎日２０時…というわけにはまいりませぬが…）
もしよろしければ、お付き合いいただければ幸いです。

［設定編］　登場人物など（ネタバレあり）（前書き）

例によって、登場人物の紹介と作者の勝手メモを置いておきます。
完全にネタバレしておりますので、［最終話］まで読んだ方のみご覧ください。
読みにくいかもしれませんが、本編ではない、あくまでも付録…ということでご容赦を。

［設定編］　登場人物など（ネタバレあり）

［登場人物］

登場順に記載（多分）

［最終話］まで到達した方のみご覧くださいませ。

年齢を本編ではあまり出していませんでしたが、設定はありましたので、記載してみます。

イメージに注意。

※は、設定メモに残されていた謎の言葉や作者の感想、そしてボツネタなどを記載しております。

■ピウニー卿　（ピウニーア・アルザス）（３２歳）

魔法剣が得意な竜殺しの騎士。ただし外見はキンクマハムスター。

薄金色の髪（毛並み）に、黒に近いこげ茶色の瞳。

最初の登場が全裸だったのは不可抗力であって、別に変態ではない。

所属は親衛隊で、王命によって各地を旅していた。

無精髭。騎士だから体格がいい。

※最初は真面目な朴念仁というイメージだったんですけど、割と人目を憚らず（ネズミの時は）イチャイチャしてるような気が…。最初のころは、年齢が上っぽい話し方をしていたのですが、だんだんと若い感じになってきてしまい、すこし反省。

名前は、語感だけで決めました。そもそも「ピウニー卿」（卿までが呼び名）って呼びたかった。

■サティ（サティ・イェーシェ・アニャケトゥス）（２２、３歳くらい）

古代魔法をも操る魔法使い。ただし外見は猫のシンガプーラ。
セピア色の髪（毛並み）に、グリーンの瞳。
親兄弟はおらず、田舎の小さな教会で育てられた。５歳くらいのときに理の賢者の弟子になる。
「イェーシェ・アニャケトゥス」という名前は理の賢者が付けてくれたもの。意味は、古代魔法語で「善い人生を送れるように」
※もっと偉大な女魔法使い…！というイメージだったんですけど、なんだかものすごく可愛いげのあるヒロインに。猫になっていても言葉は人間なので、「にゃー」というのは、あくまで人間が猫の真似をしている…という体です。つまり、サティが「にゃーん」って…。
名前の由来は、「エリック・アルフレッド・レスリ・サティ」の「サティ」から。

※２人について
２人の変化の魔力は遺伝するのか…という疑問が、意外と多くてびっくりしました。考えて…無いよ！（本当に）
自分の魔力になってしまってはいますが、他からの移植みたいなものなので、恐らく遺伝はしないはずです。
今回、この登場人物紹介を書くにあたり、すべての設定メモを読んでみたのですが、２人の変化の魔力について「自在に変化できる＝自在に全裸になれる」…という謎の言葉が書かれてありました。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＜ボツネタ＞※剣の賢者にピウニー卿の若い頃の話を聞く…というくだりがありましたがボツになりました。（「０１９．別の存在」にて）

＜ピウニー卿って今何歳？＞

「１５年前っていうと…、ピウ、今、何歳？」

「…もういいだろう。」

そういえば、ピウニー卿の年齢をはっきり訊いた事のなかったサティは素朴な疑問を口にした。なんとなく誤魔化すピウニー卿と、きょとんとしているサティを見比べて、剣の賢者は、ニッ…と笑う。

「３２歳とか、それくらいじゃないか？」

「えっ。」

「何が、えっ、だ、何が。」

サティの予測よりは、意外と若かった。いつ見ても無精髭だし、っていうか髭だし。旅装があまりに似合いすぎて、騎士っていうよりこなれた旅の戦士って感じだし。その癖、妙に達観しているというか落ち着きがあるというか、声渋いし。４０代近いのかと思っていた。…だが、４０代近いにしてはやっぱり落ち着きが無さすぎるか。サティはピウニー卿を改めて観察する。そうか。大体ネズミの姿だったから、年齢不詳だったんだな。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

■理の賢者（年齢不詳）

サティの師匠。サティより魔法が使えるけど、世の中にあまり関わ

っていない。
長いお髭のおじいさん。
世の中のいろんなことを知っている。
秘蔵の恋愛小説コレクションがある。
※どこからどこまで黒幕なのかはっきりしない。恋愛小説コレクションには、あんな小説やこんな小説も…！　ちなみにサティやプリムベルの恋愛のお作法は、師匠の恋愛小説コレクションから学んだもの。

■セラフィーナ・ヴィルレー（7歳）
ヴィルレー公爵令嬢。薄い赤金色の髪に、グレーの瞳。
王子様と、今はまだよきお友達。
拾ったサティをこっそりつれて王子様のお見舞いに行く。

■アンヘル・ヴィルレー（35歳）
セラフィーナの父。
公爵という地位にあり、人格者ではあるが野心が無い。
現在は、王子の学術指南役というひっそりとした地位に着いている。
後に、バジリウスの推挙と王に請われたことにより、宰相の地位へ。
※宮廷の争いを逃れて王太子の学術指南役…と言ったんですが、次代の王の教育を任されていたり、セラフィーナを王太子に会わせたり、よくよく考えたら全然宮廷争い逃れていないし、権力真っ只中だよな…と思っていたのは秘密です。アンヘルとペルセニーアの恋模様については…2人ともいい年齢で、アンヘルは子持ちなので、じわじわゆっくり穏やかに進んでいくかと思います。

■パヴェニーア・アルザス（30歳）

ピウニー卿の弟で、現アルザス伯爵家当主。
茶色が交じった濃い金髪、こげ茶色の瞳。オリアーブ国白翼騎士団団長。
アルザス家は代々続く騎士の家系。
クマみたいな厳つい顔だが、ピウニー卿には頭が上がらない。
周囲がドン引きするほどの愛妻家。アルザス家は代々愛妻家が多いことでも有名。
夫婦そろってかわいいものが大好きなので、変化したピウニー卿とサティにメロメロ。それ以上に嫁にメロメロ。
※メモを見たら、「甘党」というどうでもいい設定が残っていました。当初はもっとしっかりした人でしたが、どんどんテンション高いモフモフ好きの変態になってしまい、特にカッコイイ見せ場を作れず…。ピウニー卿事件のすぐ後、子供が出来ました。よかったね！
完全にボツになった流れの中に、
「こ…こんなに可愛いのに、兄上のはずがないではないか、…兄上の声をたばかるお前は何者だ！…か、可愛い姿をしおって！」
…などという台詞もありました。

■ペルセニーア・アルザス（27歳）
ピウニー卿の妹。
光の加減によっては金髪に見える、つやのある薄い茶色の髪。琥珀色の瞳。
オリアーブ黒翼騎士団の団員で、ジョシュの護衛騎士。
上品な立ち居振る舞いと強さが人気の女性だが、真面目すぎて男っ気がないのが悩みの種。
王子付きの護衛。公爵令嬢が来たときの世話係。公爵令嬢の憧れの人。
ピウニー卿の件の後、ヴィルレー公爵と恋仲に。
※これもボツになった流れですが、人間に戻った直後に裸でサティ

の上に乗っているピウニー卿を見たペルセニーアが、「これが落ち着いていられるかーーーー!!」…と叫んで、ピウニー卿の顔に拳を入れる、というシーンがあったりしました。

■セシル・アルザス（27歳）
パヴェニーアの奥さん。
厳ついクマのようなパヴェニーアと並ぶとまさに美女と野獣という言葉が似合う。
緩やかにウェーブした綺麗な栗色の髪をした、細身の可愛らしい人。
パヴェニーアに負けないくらいのかわいいものが好き。
※例の高級ぬいぐるみ屋さんが、2人の出会いの場だった…という、裏設定があります。

■ジョシュ・オリアーブ（12歳）
オリアーブ王国の王太子。
青紫色の瞳、黒褐色の髪
宰相に魔力抑制の呪いを掛けられていた。若いけれどとても才気溢れる男の子。
人間のサティを見たらそわそわする。
理の賢者に匹敵する、もしくは超える魔力を持つ。
※小話の中では、ジョシュ殿下のが一番好きだったりします。

■ヴェルレーン・サテュルニア（25歳）
白翼騎士団に所属。女の人が大好きで、ストレートに「綺麗」を連呼し、それが決して嫌味にならずむしろ人懐こい印象を与えてしまう生粋のチャラ男。チャラいのは外見と言動で、意外と有能で打たれ強い。

振られてもめげないし、もげないという特性がある。
実はピウニー卿のその後を調査するという王命を受けた騎士。
猫アレルギーのため、サティに近づくとくしゃみが出る。
蜂蜜色の髪に、薄い茶色の瞳。垂れ目。
※いい子なんですよ、本当は。ただ、綺麗な女の人を見ると爽やかな笑顔で優しく「綺麗ですね」って言っちゃうだけで。相当何回も頭部を打ち付けていたので、頭が大丈夫かとちょっと心配。あと、本当にモテ男でチャラ男なのかという疑惑が。

■ジェレシス・オリアーブ（４０歳）
オリアーブ王国の国王。青紫色の瞳。
オリアーブ国で一番偉い人だが、息子に対してはちょっぴり弱気な一面も。
先代が武の王と呼ばれるのに対し、賢の王、と呼ばれる。
※一番不思議なのは、ヴェルレーンをピウニー卿探索に登用した王様の懐の深さ。さすが王様というべきか、国内には有能な人ばかりが集まっているので、恐らく人望は一番篤いはず。

■シャドウメア
ピウニー卿の愛馬。青毛。賢く優しい馬で、ピウニー卿とサティ以外には懐かない。だけど目付きが悪くて怖い。猫とネズミになった２人が馬に乗るときは、わざわざ鼻面を地面にまで下げてくれるほど物事の道理を把握しており、２人が変身するタイミングもきちんと心得ている。
※シャドウメア、というのは、実は私の好きなゲームに出てくる不死身の馬の名前です。

■杖の賢者
とても偉大な杖を作る人。杖魔法の研究をしている。細目。背が高くて体格のいい、寡黙な男、というかしゃべらない。剣の賢者と夫婦。
※杖の賢者は、ラグビー選手みたいなイメージ。外見年齢は、杖・剣の２人とも３８歳～４２歳くらい。

■剣の賢者
とても強い魔法剣士。魔法剣の研究をしている。男装の麗人。杖の賢者と夫婦。背が高くて大柄。剣の賢者として最初に作った剣が、ピウニー卿の剣。
※最初に登場したときの剣の賢者のキックは、いわゆるヤ…じゃない、ケンカキック！

■魔竜　マハ・マハジューレ
本名は、ウィロー・ナ・ムラン・イアディ　＝　フロット・フォン・ド・ラーゲ・ベネカ・イェズ・マーレ・マハ・マハジューレ。
かつてピウニー卿と戦って破れた竜。実は善良な竜で雌。
呪いを掛けられ、その苦しみのあまり周辺の村に炎を吐いていた。
死の際に断末魔の咆哮をあげて、自力で呪いを解呪。その時に飛散した呪いによって、ピウニー卿がネズミの姿になる。
死の瞬間ピウニー卿の剣に宿り、剣が吸った血と残留した魔力によって復活する。
後にグラネク山に登ってきたラディゲと夫婦になる。人型になった場合は黒い髪に金色の瞳。
※魔竜とラディゲのカップルは、最初から決めていました。人外の男攻めっていうのはよく見かけますが、人外の女攻めっていうのは、なかなか女性ものでは見かけないからたまにはいいかな…と。

■ラディゲ・ラファイエット（３２歳）
黒翼騎士団に所属。黒い髪に黒い瞳。
かつてピウニー卿と共に竜を倒した同僚。
ピウニー卿に対してライバル心をかなり燃やしていた。
竜を倒したあと、ピウニー卿のみが美談になったことに苛立ちを覚える。
その後、思い出の地グラネク山にて魔竜と夫婦になった。
ピウニー卿の件の後、魔竜と共に魔物を不安定化させてしまう魔力の研究に協力。
※こう見えても、騎士道と正義を貫く男前。女子供には優しく、がモットー。その割に魔竜に誘惑されてる辺りがなんとも。もうちょっと本編でアレコレさせてあげればよかったかなあと反省。

■ヒューリオン　（２６歳くらい）
かつてサティと戦って破れた魔法使い。
オリアーブ国宰相バジリウスの弟子。
サティに呪いの一部を弾き返され、オコジョの姿になっている。
※超初期のメモに、ヒューリオン（オコジョ）がピウニー卿　（ネズミ）を誘惑するという訳の分からないものが…。

■バジリウス・ユーク（バジリウス・イルスーク・イラ・エドゥ・ユーク）（４５歳くらい）
宰相。かつての理の賢者の弟子。その力を国のために役立てたいと、賢者の元を去る。
去るときに与えられた魔法名が＜イルスーク・イラ・エドゥ・ユーク＞

ジョシュを死なせないために魔力抑制の魔法をかけ、国力強化のために魔竜の理性を狂わせた。
※バジリウスは、もし理の賢者の元を去らなかったら、普通にサティのいい兄弟子だったんだろうなーと思う程度には、興味深い人物です。ヒューリオンとその後どうなったか…というのはご想像にお任せします。

■プリムベル（２０歳くらい）
理の賢者の娘さん。かわいい眼鏡の女の子。
魔法オタク。サティのことが大好きで、ピウニー卿はライバル。
実戦向きの魔法は得意ではない。青褐色の不思議な髪の色。
※ピウニー卿がサティに不埒な考えを抱くと、プリムレーダーが働くに違いない。理の賢者の奥方が気になる？　私も気になります！

［設定編］　登場人物など（ネタバレあり）（後書き）

［あとがき］

ピウニー卿の冒険！　最後まで読んでいただきありがとうございます。

この話は、元々、ネズミの騎士が、酒場で猫と戦った後「お前やるな」「お前もな」的なものが最初にありました（当時はハツカネズミ）。

その後、なろうで小説を書かせていただくようになってから、ネズミが猫の頭の上に乗っかって、剣で指揮を取っている図。口元ペロリで人間に戻ってしまう図。人間に戻ったら当然2人は男と女で全裸乙、という絵が浮かび、長編用プロットとして溜めてたものです。短編として序章を掲載→長編として連載開始…という流れを経て、こうして完結までこぎつけることができました。

今回お話を書くにあたって題材にしたのが、剣と魔法の冒険ファンタジー。旅の騎士と魔法使い。そして恋愛。猫とネズミのカップルです。

この2人、最初からカップル確定の安定感でしたが、なかなかくっつきませんでしたね。じれじれしっぱなし。すみません。タグに「じれじれ」って付けておけばよかったかなと思ったのですが、書いているほうから見ると全然じれてないんですよ、むしろイチャついているようにしか見えません。それに、話の流れ的なところからいくと、2人がくっついてしまうには呪いの解除が必要で、早々に呪いを解いてしまうと、猫とネズミである意味が無い…というわけで、2人にはいつまでもじれじれしてもらっていました。だって、ピウ

ニー卿だもの（どういう意味）

あともう1つ。悪役を出さない、という隠れたテーマを設定していました。悪役を出したほうが、話の流れ的にはスッキリと分かりやすくなったのですが、こういう平和な話があってもいいかな…と。実際には書いてみれば全然平和ではなく、黒幕バジリウスの語りが長くなった上にそれだけで一本できるだろうみたいな人物設定になってしまいました（作者的に）…が、本来、悪役…というか、敵役とはそういうものなのかもしれません。彼の結末には賛否両論あるとは思いますが。

最後に。密かに楽しかったのが魔法語作成です。すごい深い意味があるのか!?　…と思わせて、あまりありません。誰にも突っ込まれなかったのでネタばれすると、何語でもなく、実は日本語を元に作っています。言葉の意味のつじつまは合ってる…はず。それっぽく見えていたでしょうか。無駄に頑張りました。

何はともあれ、無事完結まで投稿できてよかったです。
皆様、ここまで読んでいただき、本当にありがとうございました！
毎日２０時、皆様とご一緒していた冒険はここで終わりですが、また、何かの機会にお会いできればうれしいです。

このお話を読んでいただいたすべての皆様が、素敵な冒険の旅に出られますように！

［拍手小話？］　がんばれ！ピウニー卿！（前書き）

拍手用の小話に置いていたものですが、リクエストがありましたので再掲載いたします。
みなさま、いつもパチパチありがとうございます！

…ところで、拍手小話は3部作とも結構、ほんと。ほんっとにアレなのでイメージにご注意ください。

いきなり結構…ええ。

ほんとごめんなさいっ！（と言いつつ掲載）

「ね、え…ピウニー、やっぱり…すごく…太くて…。」

「くっ…おい、サティ…咥えるのはやめろっ…。」

「…ぅん…。」

「…待てっ…」

「どうしてこんなに…？　ほら、私の口には入らないよ…。」

「それは…お、お前が…。」

「私が、何…？…ねえ、私、前までちゃんと咥えられてたよね…？」

「そうだな…。」

「…ね、どうしてこんなに、…咥えられないくらいになったの？ピウニー…。」

「そんな顔をするな…その、お前があまりにも…可愛くて…。」

それは、サティが可愛くおねだりしすぎて、毎日ご飯が大漁だから。ついついたくさん食べてしまうピウニー卿は、最近お腹周りがちょっぴりふとましい。

咄嗟のときに咥えて運ぶことができなくなったサティは、大層困っていた。

「ほらー、やっぱりお腹太くなってるじゃない。」

「ネズミだからだ。人間に戻ったときは変わってないではないか！」

「ふうん？」

「そんな顔するな。」

「別に。」

サティは意地悪い半眼で、ピウニー卿の腹周りをぱくりと咥えるポーズをしてみせた。

「ほら全然口に入らなーい。」

「なにっ、…もう一度やってみろ。」

「いいわよ。…ん…。」

サティはピウニー卿を咥えてみる。だが、あまり上手に咥えることはできず。すぐにぽとりと落とした。

「へ。変なところにさわっ…うぐっ」

ぽとりと落とした衝撃で、ピウニー卿が呻く。

「ほら。変なところには触ってないわよ、失礼ね。…ピウニーが太くて口に入らないのが悪いんだもん。」

ふふーんとサティはシッポを揺らした。

「サティ、今の台詞をもう1回…」

「何の話よ」

「い、いや…」

さあ、みんなも声を合わせて！

がんばれ！ピウニー卿！！

［拍手小話？］　がんばれ！ピウニー卿！（後書き）

「サティはピウニー卿を咥えて…」という文章を見たときに思いついてしまったネタですが、文字数が短く１話に投稿するのもどうかなと思って、拍手小話に設置していたものです。
Ｒ１５！Ｒ１５なんだってば！

［拍手小話？］　がんばれ！ピウニー卿！リベンジ（前書き）

しつこくリベンジした結果です（主に私が）

多分パヴェニーアが肉球肉球言ってたのが、くやしかったのでしょう。

本当にすみません。

しつこいようですが、イメージに注意してください…！

［拍手小話？］　がんばれ！ピウニー卿！リベンジ

「ちょっと、や…ピウニーどこに触ってるのよ。」

「ダメ…か？」

「…ダメじゃない、けど。」

「…ならば、サティ、今、いいか…？」

「…もう眠いから、…ちょっとだけだよ…。」

「…ああ…触るだけだ。」

「…しょうがないな、もう…。」

「…分かっている、…とても、柔らかいな…。」

「ちょっと、ピウ、変な風に、触んないで」

「ああ、ずっと…触れたかった。こうして…」

「…ピウ…。」

「それに、綺麗な色をしている…。」

「あんまり見ないで…。」

「…普段は見えないだろう？…だから、今だけでもこうして見てい

たい。」

「…ピウニー…。」

「なんで、そんなに肉球好きなの。」

「サティだって私の腹に触りたいと言ってるではないか。」

「いやまあそうだけども。」

ピウニー卿はどうしても、どうしてもサティの肉球に触ってみたいらしく、隙あらば前足を捲ろうとしてくる。
寝ているときに急に前足裏を触られるとくすぐったくて仕方が無い。
だからせめて事前許可制にして…と頼んだら、「今触りたい」「今いいか」「今日いいか」「今晩いいか」

…と、しょっちゅう聞いてくるのだ。

別にかまわないんだが、どうしてこう、肉球触るの好きなんだろう。
サティは自分のに触ったことが無いから、まったく理解が出来ない。
ピウニー卿のお腹に触ってみたいのと同じだと言うが、なんだかちょっと腑に落ちない。

前足を見ながら、何がいいんだろう…と、サティは考え込む。

「そんなに、柔らかい？」

「ああ、とても。」

ピウニー卿はふにふにとサティの肉球を撫でている。
野菜を両前足で掴んで食べているときと同じ位、瞳を細めてうっとりしている。

サティは自分の前足をしげしげと眺めた。

毛皮に斑が無いからなのか、肉球には何の柄も浮かばず薄いピンク色だ。
今は浄化の魔法でつやぴか。子猫みたいだった。

「ピウ、優しく触ってよ。」

ピウニー卿がハッと顔を上げた。

「サティ、今の台詞をもう1回…」

「だから何の話よ」

「い、いや…」

がんばれ！ピウニー卿！リベンジだ！！
ちょっと変態度が上がってきているぞ！

［拍手小話？］　がんばれ！ピウニー卿！リベンジ（後書き）

「今いいか」「今日いいか」「今晩いいか」って、ＹｅｓＮｏ枕か、っていう話ですよ。
だからあくまでもＲ１５ですってば！

なんでこんなの思いついたんだろうっていう…。

［拍手小話？］　がんばれ！ピウニー卿！おかわり（前書き）

すみませんすみません。本当にすみません拍手小話用のアレなネタはこれで終わりですほんとすみません。
いや、このときは調子に乗っていたとしか言いようがないんです。

最後に…イメージに注意してください。

［拍手小話？］　がんばれ！ピウニー卿！おかわり

「…く…、あまり、締めつけるな…サティ。」

「ん…。ピウ…だって…。」

「…サティ、こら…っ」

「だって、ピウ…あったかくて、気持ちいい…。」

「…そ、それは…っ…」

「もっと入って…」

「…む…う、サティ…これ以上は…」

「…や…もっとこっち、来て…」

「…サティ、待て、もうっ…」

「……まだダメ…。」

「しかしっ…」

「もう少し、奥…に…」

「ああ…サティ、もうこれ以上…限界だ。」

「サティ、暑い！　それに苦しいと言っておる！」

「んんー…？」

サティは寝ぼけた顔を前足で洗いながら身動ぎした。
首元の毛皮の奥から小さな金色のネズミが、よいしょよいしょ…と顔を出す。

「…まったく、幾ら寝ぼけているからといって、こんなに締め上げられては身体がもたない。」

「…うん…ピウ…どこー。」

しかし、可愛らしい寝言を…。

ピウニー卿とサティは、獣の姿で眠るときは、こうして2人毛皮を寄せ合って眠っている。
だが、サティはピウニー卿のふかふかの毛皮を堪能できないことが

不満らしく、時折寝ぼけてピウニー卿の小さな身体を前足で囲んで、自分の首元から胸元にかけての毛皮にぎゅうぎゅうと仕舞い込むのだ。

温かくて心地よいが、度が過ぎると暑くて苦しい。
それでも、サティと離れて眠るのは心許なく、どうしても身を寄せ合ってしまう。

「ピウ、…もっと…。」

ピウニー卿がハッと顔を上げた。

「サティ、今の台詞を…」

そのとき、サティがもぞもぞと動きピウニー卿の身体を捜す。
自分の首元まで這い上がってきていたピウニー卿を抱えなおすと、寝ぼけてその口元をペロリと舐めた。

「サティ…○×▽□※☆!!」

「…ぅぅん、ピウニー…もっと…。」

ピウニー卿の手にしっとりと滑らかな肌が触れ、鍛えた胸に柔らかな膨らみが当たり、上半身にさらさらとセピア色の髪が流れる。
寝ぼけてもぞもぞと動くサティを抱え、ピウニー卿は（いろいろ）硬直した。

朝まで（いろいろ）がんばれ…ピウニー卿…。

［拍手小話？］　がんばれ！ピウニー卿！おかわり（後書き）

というわけで、拍手小話用のネタ３つでした。
本編とはイメージが違うかもしれませんが、こういうのもたまには…。

小話は他にも、番外編的なものをちょっぴり投稿する予定です。
準備ができるまで、もうしばらく、お待ちくださいませ。

［ふたりの場合］　何か、問題が？（前書き）

最終話よりすこし前のお話。

［ふたりの場合］　何か、問題が？

王都の調えられた街路を、青毛の馬を引いた騎士と杖を持った女性が並んで歩いている。

「あ、ピウニー卿とサティだ！　おかえりなさい！」

「ねえねえ。今度はどこに行ってきたの？」

「遺跡？　洞窟？　何か面白いものあった？」

その騎士と女の周りに、街路の傍らで遊んでいた子供たちが駆け寄り纏わりついてきた。ピウニー卿、と呼ばれた騎士は自分を見上げる男の子の１人の頭を撫で、穏やかに笑う。

「ああ、ただいま。今回は、遺跡に行ってきた。古い古いお墓があってな、そこを荒らしているものがいる…と聞いて…」

「きゃーーー！　お墓！　お化け？　お化けでたの！？」

「はっはっは、さて、どうだろうな。また今度話してやろう。」

「サティ！　ねえねえ、怖かった？」

サティ、と呼ばれた女はピウニー卿と子供たちの様子を楽しげに笑って見ていたが、小さな女の子にマントの裾を引っ張られて視線を傾ける。

「んー…、そうねえ…。」

小さな女の子に答えようとしたサティを、別の子供の声が遮った。

「サティは怖くないよねー。」

「ねー。」

「だって、ピウニー卿がいるもんねー。」

「ねー！」

「ちょっと、あんたたちねえ…。」

「きゃーーー！」

囃し立てる女の子らの声に、わざと声を低くしたサティが追い討ちをかけると、歓声を上げながら小さく逃げて見せる。

ピウニー卿とサティが王都に帰還し、アルザス家までの道を歩いていると大体がこのように子供たちに囲まれてはからかわれる。いつもの光景に、大人たちも「ああ、あのピウニー卿が戻ってきたのだ」…と分かる、というわけだ。

子供たちの輪の中から年長の少年が出てきて、はしゃぐ子供たちをなだめながらピウニー卿に向き合った。

「ピウニー卿。アルザス家にお客様が来られているようですね。」

「客？」

「ええ。5日ほど前から、立派な馬車が泊まっているようです。」

「やはり来ておったか…。」

ピウニー卿はサティと顔を見合わせた。

ピウニー卿らは、今回の旅で、アルザス家の所有する伯爵領に立ち寄った。現在、アルザス伯爵は騎士団長として王都に勤めているため、代わって領政を行っているのは、いまだ武勇は健在の、他ならぬアルザス家の前伯爵フォルディアス。…つまり、ピウニー卿の父だ。ピウニー卿はサティを連れて、久しく会っていない両親に挨拶をしようと立ち寄ったのだが、生憎と両親は不在だった。家人に聞くと、王都に出た…という。丁度、帰還する用があった2人は後を追いかけるように王都に入ったのだ。

ピウニー卿は不穏な顔をする。

「やはり夜、ひっそりと入ったほうがよかったか…。」

「何が不味いの?」

サティの問いには答えず、ピウニー卿は自らの顎を撫でる。

「帰って早々、何も言われなければいいのだが…。」

「何か言われるの?」

ピウニー卿のご両親ってどんな人なのかな…などと、ちょっぴり怖いような楽しみなような気持ちがするサティには、気が重そうにため息をつくピウニー卿の表情には気付かなかった。

＊＊＊＊

「…で、どういうことか、私達が納得できるように説明していただけるのかしら。ピウニーア。」

「説明は書簡と、パヴェニーア、ペルセニーアから受けているはずです、母上。」

「ほう、お前は他人の口から自分のことを説明させるというのか、ピウニーア。」

「2度、領地に出向きましたが、お2人とも不在でした。ゆえに書簡にした…と何度も言っておりますが。父上。」

「それで、このような重要なことを、今まで放置していた…と？ピウニーア。」

「放置していた事柄に、心当たりはありませんが。母上。」

「見上げた態度だな。結果どうあれ、放置は放置だとは思わぬか、ピウニーア。」

「放置していた事柄に、心当たりはありません…と、申しております。父上。」

アルザス家の広く趣味のいい居間は、先ほどからずっとこの調子で、重苦しい雰囲気に苛まれていた。

ピウニー卿が帰ってきてすぐに、サティは両親であるフォルディア

ス・アルザスと、ラフィニーア・アルザス夫人に出迎えられた。フォルディアスは威厳と経験値を年齢と共に重ねた厳つい、武人にしか見えない人だ。どちらかというとパヴェニーアに似ている。ただし、パヴェニーアも大概厳しい外見をしているが、フォルディアスの風貌には足元も及ばない。濃い金茶色の髪と、丁寧に整えられた口髭が威厳を全く緩和していない。それどころか、威嚇している。そして奥方のラフィニーア夫人は美しく年齢を重ねた人特有の豊かな表情が目を惹く、白金色の髪の人だった。少し鋭いきつめの表情が、いかにも武家の夫人…という風だ。３０過ぎの息子が居るなんて、とても想像が出来ない。にっこり微笑まれたときなど、サティはあまりの緊張に仰け反ったほどだ。

だが、２人はとても穏やかにサティを迎えてくれた。武家風の装いも雰囲気も、心地よい緊張感でサティは嫌いではない。ほっと安堵の一息をついたのだが、挨拶もそこそこに居間に通されピウニー卿と共に座らされた。そして、現在のこの状況である。

父フォルディアスは憮然と、母ラフィニーアは微笑を湛えて、ピウニー卿を何かしら責めているようだが、サティには何の話だかさっぱり分からなかった。分かるのは両親のすごい迫力と、その迫力に対しても眉一つ動かさない泰然としたピウニー卿の態度だった。

「放置は放置だと言っている。ピウニーア。」

…さっきから何を放置している…と言っているのだろうか。

「父上、ですから…。」

「ピウニーア。わたくしは、」

ラフィニーアの声が低くなった。毅然とした態度で、ぴしゃり…と言い放つ。

「未婚のお嬢さんを旅に引っ張りまわして、どういうつもりかと聞いているのです！」

え？

私？

重苦しい緊張感に息切れしそうになったときに思わぬ矛先を向けられて、サティは顔を上げた。未婚…いや、まあ未婚は未婚だが、じ

「事実婚という言い訳は許しませんよ、ピウニーア。」

何、今聞こえたの。私の心の声が聞こえたの!?　サティは、怪しくなっていく雲行きに鼓動が速くなってくる。うわあ…と思っていると、サティの手をピウニー卿がそっと握った。思わずピウニー卿を見上げると、微かに頷く。それだけで安心してしまうから、どんな魔法を使っているのかとサティはいつも思う。

「母上、ですから…。」

実は王都に戻ってきた理由の一つに、まさにその事項があったのだ。

ピウニー卿とて、王国の騎士である。親衛隊という身分で王命で動く男だ。いつまでもサティとの関係を宙に浮かせておいてはいけない。宙に浮かせているつもりは全く無いし、離すつもりも全く無いが、それならば結婚する方がよいに決まっている。王都に戻ってきた際、書類を提出してサティと公に夫婦になる手続きをしようと考えていたのだ。そうなるとこのまま旅の合間の帰還の度にアルザス

家に世話になるわけにもいかないから、帰る家も準備して、正式に一緒になるつもりだった。

ピウニー卿は粛々とその説明を行った。だが、

「…で？」

「え？」

「それでも、今までの間放置していた事実に変わりはないでしょう。」

ピウニー卿が一度離れていた手を今度は掴んで膝の上に引き寄せた。サティとしては放置されているなどと思ったことは無いし、自分たちの関係に疑問を持ったことも無い。それをどうしても伝えたくて、サティは隣に居る恋人と2人の親の顔を交互に見る。そんなサティの様子に、ピウニー卿は少し顔を寄せると、「分かっている。」…とだけ、言った。

「今まで2人の婚姻の届けを出していなかったことが不備だというのならば認めますが、それは放置していたわけではありません。」

「放置ではなくて、なんだと？」

「父上、母上…。」

はあ…と、ピウニー卿は溜息をついた。心配そうなサティの手を、ぽんぽんと優しく叩いてその手を外す。半ば呆れ気味に両親に問いかけた。

「…何を企んでいるのですか。」

「あらあら、企んでいる…などと。」

「人聞きの悪いことよ、ピウニーア。」

その言葉に、ほほ…とラフィニーアは笑み、フォルディアスはにんまりと笑った。

「花嫁姿が見たいのよ。」

「花嫁姿が見たいのだ。」

「え？　花嫁？」

…って誰だっけ？

「サティさんの花嫁姿…さぞ、可愛らしいことでしょう。ねえ、フォルディアス？」

「まったくだ。ペルセニーアに、セシルに、サティ。可愛い娘が３人も出来て、私達は幸せだな、ラフィニーア。」

「む、…娘？」

サティは再び仰け反った。

そんなサティの反応を知っているのか知らないのか、ラフィニーアはフォルディアスの腕に自分の腕を絡め、肩に頭を預ける。そのままにっこりとピウニー卿に笑って、言い放った。

「式は1週間後。証人はヴィルレー公にお願いしましたわ。快く引き受けてくださいました。そして、ピウニーア。既に陛下からもお祝いの言葉を頂いております。」

「は？　今なんと…」

「大丈夫だ。見知った者のみを呼んで、内々のみで執り行なう。招待客のリストはこれだ、足りないところは無いか？　ピウニーア。」

バン！…と、何が書き込まれた紙がピウニー卿とサティの目の前に置かれる。

「何が大丈夫で、」

「招待状は既に出した。何か、問題が？」

「いや、問題だら」

「まあ、何が問題なの？」

「何が問題なのだ、ピウニーア。」

「…。」

初めてピウニー卿が、圧された。

実のところ、サティはこういった事象に伴う様々なことに、ピウニー卿よりもずっと疎い。フォルディアスやラフィニーアという両親と共にアルザス家で育ったピウニー卿と違って、サティは呪いで猫になってしまう前は、ずっと理の賢者の元で魔法使いの修行をして

いたのだ。憧れもあるが、現実味が無い。小さい頃からあの理の賢者に育てられたのだから、普通の家族とか、ましてや結婚…というものは、サティにとっては第三者的な機会しかない、よく分からないものだ。

だから、ピウニー卿に話を持ち出されたときも、なるほど、こういうタイミングでこのような事象が自分の身に降りかかるのか…と、嬉しいやらくすぐったいやらで、顔が真っ赤になり取り乱した。その状態で「了解」したら、ピウニー卿は大いに喜び、その後宿に泊まった時に、大変だったが。

しかし、このように自分達以外の人から指摘されると、妙に現実味が沸くというものだ。「娘」などと呼ばれてしまったし…。サティが意味もなくドキドキとしていると、ラフィニーアが執事を呼んだ。

「そうそう、それに合わせてサティさんに、届いているものがあるのよ。」

「え、私にですか？」

ラフィニーアの言葉にサティが首をかしげる。アルザス家にサティ宛の届け物…というと、事情を知っているものでしかありえない。ピウニー卿が怪訝そうな顔を浮かべた。

「サティに、アルザス家へ…ですか？　一体誰から」

「理の賢者殿だ。」

「し、師匠から？」

フォルディアスが頷くと、執事がなにやら大きな箱と小さな箱を持ってきた。サティとピウニー卿の前に置き、「開けてもよろしいでしょうか？」…と執事が問う。サティは頷いて、開いた大きな箱の中身を覗き込んだ。

「…こ、これ…。」

「これは…。」

「うふふ。…1週間ではドレスを用意するのが難しいかしら…って思っていたら、理の賢者殿が、…ねえ、フォルディアス。」

「うむ。ここまでされては、きちんとした機会を持たねばならぬだろう、ピウニーア。」

「サイズは心配いりません…とのことでしたわ。」

…師匠ああ師匠。

なぜ弟子のサイズを知っているのですか。むしろ弟子のサイズだから知っているのですか。久々に口から泡が出そうだったが、ピウニー卿の様子は若干違っていた。

「サティのドレス…か。」

何故か顎を撫でつつ、ふうむ…と、ため息を付いた。その様子を見て、フォルディアスはニヤリと笑う。

「どうせお前のことだ。書類だけ提出して終わらせようと思っていたのだろうが。」

「や、それは…。」

図星だ。

「理の賢者殿にここまでしてもらったら、アルザス家としても歓迎しないわけにもいくまい。」

「うぬ…。」

こうして、1週間後。アルザス家長子ピウニーアと理の賢者の弟子サティとの結婚の誓いの儀が、半ば強引に行われる事となった、のである。

＊＊＊＊

「そうそう。あと、理の賢者殿の奥方からも小さな箱が届いておりますのよ。」

「を…、おおおををおを奥方から!?」

サティがぎょっとした。ピウニー卿の両親の前だというのに変な声が出てしまう。ピウニー卿もいささか驚いているようだ。実のところピウニー卿自身、理の賢者の奥方には会ったことがない。何度か話題に出ることもあるが、サティはいつも曖昧に交わすし、理の賢者に言い出す雰囲気ではない。なんとなく不可侵のような気がしてあまり触れていないのだ。一体どんな人物なのかは、謎のままだ。

サティを窺うと、受け取った小さな箱をしげしげと眺め少しばかり緊張しているようだ。「あの奥方から…何が…どんな天変地異が…」

と、恐ろしいことをぶつぶつとつぶやいている。

「…開けてみないのか？」

「開けて、みたほうがいいよね…。」

などと問うたところで、どんな判断を下せばいいのかさっぱり分からないが、ピウニー卿はとりあえず神妙に頷いておいた。そんな2人の様子にフォルディアスとラフィニーアが首をかしげる。

「どうかなさって？」

「いいいいい、いえ。あ、あけ、開けます。」

意を決したように、サティが開けた。サティの緊張感がピウニー卿にも移って、恐る恐る…2人顔を寄せて小さな箱の中身を覗き込む。サティが箱の中身をちょいちょい…と触れ、何事も無いのを確認した。

「……。」

「あぁぁぁぁ…。」

ピウニー卿が沈黙し、サティの魂が抜けた。2人を見たフォルディアスが、少しばかりうきうきと問いかける。

「…で、なんだったのだ、中身は。」

「なんだったの？」

ピウニー卿が止める前に、フォルディアスとラフィニーアが身を乗り出して箱の中身をのぞき込んだ。

「まあ…。」

「む……。」

箱の中身は、小さな（恐らく）猫用のウェディングドレスとヴェール。小さな（恐らく）ネズミ用の騎士の正装だった。ネズミの騎士服など、小さすぎて余程目を凝らさなければ見えないほどだが、それこそ、目を凝らせば如何に精巧に作ってあるかが分かる。騎士服そのものを小さくしたわけではなく、四肢の大きさなどもきちんとネズミなのが憎らしい。というか、3頭身のネズミの騎士服…どうやって作ったのか。

「これを…どうしろと。」

ピウニー卿が真顔でつぶやいた。

「着ろってことかと…。」

サティががっくりとうなだれた。

［ふたりの場合］　緩まった顔はしておりません

「まあ、本当に綺麗ね。ぴったりだわ。ねえ、セシル。」

「ええ、本当に。サティさん、とてもお似合いですわ。」

「あ、ありがとうございます。」

理の賢者から贈られた白い衣装にサティは身を包んでいた。俗に言う、衣装合わせ…というやつを行っているのだ。切り替えは無いが、布地を身体に沿わせ、滑らかな曲線を強調した流行にとらわれない美しい形のドレスだった。背中が少し開いていて、セピア色の髪がそこに落ちて彩る計算らしい。

ラフィニーアとセシル、そして数名のお針子達が裾の長さや腰周り、胸周りを測っているが、ほとんど手を入れなくても大丈夫のようだ。まるで自分ではないようで落ち着かないが、着てみた感触はぴったりだった。ラフィニーアが満足げに頷く。

「まったく心配が無いわね。理の賢者殿はお胸のサイズだけが心配…って仰られていたようだけど、ぴったり。サティさん、お疲れ様。ピウニーアも綺麗な貴女を見て喜ぶでしょう。」

ピウニー卿が喜ぶ？　サティの頬が染まり、その様子を見てラフィニーアの表情が柔らかくなった。

「喜ぶでしょうか。」

「喜ばないわけがありません。サティさんに花嫁衣裳を合わせるっ

ていったら、どうしても見たいと言っていたわ。フォルディアスと一緒になってとても煩かったから、剣でも合わせてこいって追い出したのよ。」

「殿方にお見せするわけには参りませんものね。」

「本当に。フォルディアスまで見たいって。そういえば、パヴェニーアもセシルのときに同じことを言っていたわね。」

「ふふ。同じようにお義母様に追い出されてましたわ。」

セシルとラフィニーアは楽しげに話している。それを見ながらサティはなんとなく後ろめたい。

セシルやペルセニーアには、帰還する度に会って話をしている気安さもあるが、ラフィニーアには正直どのように接すればいいのかが分からない。そもそも、呼ぶときに困る。「ラフィニーアさん」と呼ぶのもおかしい気がするし、「アルザス夫人」はもっと変だ。しかも、ここまでしてもらっているのにも関わらず、サティは何も出来ていない。サティがやったことといったら、ピウニー卿と共に王宮に行って王様に旅の報告を行い、その時に、結婚の報告を述べて、ジョシュ殿下におめでとうと言われて、それくらいだった。

ぼんやりしていたサティを見て、ラフィニーアが小さく首をかしげた。

「どうしました?」

「いえ、…その、ありがとうございます。ここまでしていただいて…でも、」

サティが何ともいえない表情で、言葉を選んでいる。

「私、何もしていないのですけどいいんでしょうか。何もかも、アルザス家の人たちに任せきりですし。私も何かお役に立ちたいんですが、こういう時に何をすればいいのか、分からなくて。」

ラフィニーアが驚いたような表情を浮かべた。サラ…と白金の髪を肩に流しながら笑う。その零れ落ちるような笑みを見て、サティの顔は再び赤くなった。

「ごめんなさいね。」

「え？」

「急にいろんなことを進めてしまって、ごめんなさい。」

「いいえ、違うんです。慣れないって、そういう意味ではなくて…。」

「ええ。分かっていますのよ。」

ラフィニーアはセシルの方を振り返った。

「セシル。あとは私がやりますわ。手伝ってくれてありがとう。」

2人っきりにして欲しいという、ラフィニーアの意図にセシルは快く頷いて席を立ち、お針子達と共に部屋を出た。そんなセシルの後姿を見送りながら、サティはため息を付く。セシルもアルザス家のパヴェニーアの妻だ。武家の伯爵夫人…という地位にありながら、

人好きのするおっとりとした性格で、そのくせ執事や侍女たちへの振る舞いは慣れたもの。ラフィニーアはきびきびと、セシルはゆるりと伯爵家の私事を動かしているのが、こうした機微に疎いサティでもはっきりと見て取れた。自分にはとても真似できそうにない。

「サティさん」

「はい。」

ラフィニーアはサティの着ている衣装を解き始める。サティも一緒に幾つかの留め具を外そうとしたが、「形が崩れるから」…と止められた。ラフィニーアは作業をしながら、ぽつぽつと言葉を紡ぐ。

「貴方はアルザス家のお嫁に来るのではないわ。ピウニーアの妻になるのです。」

「え。」

「だから、これはわたくし達が勝手にやっていること。サティさんは気にしなくてもよろしいのよ。」

「でも…。」

「でも、気になるわよね。」

くすくすとラフィニーアが笑う。笑うときつそうな雰囲気が一変して柔らかなものになる様子は、ペルセニーアによく似ていた。そういえば、夫のフォルディアスと一緒に居るときも、ラフィニーアは柔和な雰囲気だ。

「アルザス家は代々続く騎士の家系…というのはご存知でしょう。フォルディアスも、パヴェニーアも、そしてペルセニーアも、わたくしが言うと自慢に聞こえますが、立派な騎士であり武官で、アルザス家の誇りです。」

「ピウニーは…。」

「もちろん、ピウニーアもよ。」

確信を込めて、ラフィニーアは頷く。

「でもピウニーアは、宮廷にあって多くの騎士達と共に堅実な守護の勤めを果たすよりも、最前線にあってまだ見ぬ未知の脅威を知って国へと報告する…という任務に忠義を捧げてしまったわ。オリアーブは平和に見えますが、その裏に、大人しいはずの魔物が暴れる…という脅威があります。その危険をいち早く察知して、調査する…という、危険な仕事ね。」

悪戯っぽく片方の瞳を閉じて、にっこりと笑う。

「…などといえば親バカか何かのように、聞こえはいいですが、要するに真面目なくせに奔放な性格をしているのですわね。」

ラフィニーアはサティに着替えを手渡し、脱がせた花嫁衣裳を調える。サティは渡された服に袖を通した。

「ピウニーアが若いときには、親の目には無謀で考え無しに見えたこともあったのよ。」

そんなピウニー卿は、任務の果てに魔竜との戦いに赴き、一時その

戦いによって死んだものとされた。

「国の騎士として任務の途中で死ぬのは致し方の無いこと。その覚悟もアルザス家の者としては当然のことです。ですが、親としては…覚悟などするよりも、生きて戻ってくることを願わずには居られません。」

着替え終わり、サティは大人しくラフィニーアの話を聞いていた。ピウニー卿が伯爵家の家督を譲り、覚悟を決めた話は知っている。ただ、魔竜との戦いは話しに聞くだけでどのようなものだったかサティは詳しくは分からない。

「だけど、今はサティさんが居てくれるでしょう？」

「私が？」

「ええ。ピウニーアのようなクソ真面目な割りに旅鳥な、危険を危険とも思わないような騎士を、好きになって、ついて来てくれて、本当にありがとう。」

サティの顔が赤くなり、ぶんぶんと頭を振った。いや、それよりもこの人、自分の息子にさらっとさりげなく「クソ」って言った気が。

「わたくし達は、サティさんにピウニーアを押し付けるの。大切な人が出来れば、ピウニーアもそれを守るわ。守ることを知る。それこそがアルザス家の騎士の大切な教えです。あのバカ息子もやっとそれが分かったのね。」

今度はさりげなく「バカ」って言った気が。いやさりげなくない。はっきり言った。しかもその部分だけ力籠もってた。

「だから、今回の式のことを貴女が気に止む必要はないわ。むしろ、わたくしが貴女達にしてあげたいの。…余計なお世話かもしれないし、貴女には慣れないことばかりで迷惑かもしれないけれど。」

サティも手伝いつつ、ラフィニーアも脱がせた花嫁衣裳を調え終わった。「さあ、お茶にしましょう」…と言って、ラフィニーアが立ち上がる。

「ラフィニーアさ、ん。」

…と、しまった思わず名前で呼んでしまった。呼んでしまってから失礼にあたると気付いたが、仕方がない。ただ、ラフィニーアは気に留めたふうではなく、言葉の続きを待っている。何も言われなかったことにほっとして、サティは言葉を続けた。

「ありがとうございます。…正直に言うと、ピウニー…ピウニー卿の側に居られるなら、結婚の事も特に考えたこともありませんでした。旅ばっかりだったし。今回帰ってきたのも、彼が言ったからなんです。私はその…、両親が居なくて、あまりこういうことに現実味が沸かなくて…。憧れが無いわけではないのですが、どうすればいいのかも分からない。でも、」

「でも?」

「今は少し違います。自分達だけじゃなくて…周りの人に認めてもらうためにも、そういうことも必要なんだと思ったんです。さっき、ラフィニーアさんにありがとうって言われて、とても嬉しかった。だから…。」

「サティさん！」

「ふぎょうっ！？」

サティはぎゅう…と、ラフィニーアに抱きしめられた。思わず喉から変な声が出る。

「サティさん…なんて可愛いの。ピウニーアにはもったいないわ！本当に、こんな娘が出来るなんて、わたくしとっても嬉しい！」

ぎゅうぎゅう…と抱きつく腕がきつくなる。

「でも出来れば、ラフィニーアさん…ではなくて、その…『お義母さん』って呼んでくれれば嬉しいのだけど…贅沢かしら。」

ぎりぎりと抱きつかれながら遠のく意識の中、サティはピウニー卿の言葉を思い出した。

ピウニー卿の母ラフィニーアは剣は苦手だが、体術の達人であるのだ…と言っていた気がする。ラフィニーアいわく、女の嗜み…なのだそうだ。

だが死ぬ。このまま呼ばないと死ぬ。多分死ぬ。

「お、おか…おかあさん…は、はなして…」

「はっ！…サティさん、大丈夫かしら…って、今、お義母さんって言った！？　言ったわね！？」

腕が緩んだ。助かった…昇天しかけた。ぜぇはぁと息を吐くサティに、「まあ！」…と言って両頬に手をあて、今度はそっとサティの頭を撫でた。

「わたくしとしたことが…。取り乱しましたわ。サティさん、ありがとう。『お義母さん』って呼んでくれて。…サティさんに認められたみたいで、とても嬉しかった。」

「へ？」

ラフィニーアはにっこりと笑った。

「さあ、お茶にしましょう。自慢しなきゃ。」

「あ、は、はい…。」

侍女達と入れ替わりに部屋を出て行くラフィニーアの後姿を追いかけながら考える。サティは、ピウニー卿と自分の関係を、アルザス家の人たちを始め、みんなに認めてもらうことがとても嬉しかった。そう気付いた。ラフィニーアに「ありがとう」と言われて、それがとても嬉しかったのだ。

だが、もしかしたらラフィニーアも同じ思いを抱いていたのかもしれないと思うと、急に親近感が沸く。

ところで、自慢ってなんだろ。

＊＊＊＊

「サティ！」

地下の鍛錬場で父のフォルディアスと剣を合わせていたピウニー卿は、ラフィニーアと共に降りてきたサティに気付き微笑んだ。確か、

母と共に花嫁衣裳を合わせていたはずだ。胸周りのサイズが心配だ…と言っていたが、大丈夫だったのだろうか。どうしてもドレス姿のサティを見たかったのだが、男が見るなとラフィニーアにもセシルにも、ピウニー卿とフォルディアスは男2人して叱られてしまった。「2人で剣の稽古でもしてらっしゃい」と、ラフィニーアに追い出されたのだ。

しかしサティの花嫁姿か…。

想像するだけで、ピウニー卿は頬が緩む。

「おい、ピウニーア！　直立不動！」

「はっ！」

「緩まった顔をするな！」

父の声に従い姿勢を正したピウニー卿は、思わず舌打ちした。怒号に対する反応は、アルザス家の騎士に刷り込まれた条件反射のようなものだ。ピウニー卿は父の顔を見て嘆息して、姿勢を解く。

「父上ほど緩まった顔はしておりません。」

「ほほう。言うようになったなピウニーア。」

言いながらフォルディアスは、にへら…と、サティに向かって微笑んだ。その笑顔を向けられて、思わずサティも、えへへ…と笑みを返す。途端に「おおおお！！」…とフォルディアスが拳を握った。

「私は緩まった顔などしておらんぞ！　…なあ、サティや！」

ピウニー卿をスルーして、ずんずんとフォルディアスはサティに近づくと、うんうん頷いて、義娘の肩に手を置いた。

「どうだ、衣装合わせは上手くいったか？」

「はい、おかげさまで。ラフィニ…お、義母さ、ん、に、よくしていただいて。」

「おっ…！？」

サティの返答を聞いて、フォルディアスの顔が驚愕した。その顔を見てラフィニーアがにんまりと笑う。２人の表情に挟まれたサティは、何か悪いことを言っただろうかと、変な表情で固まっている。全く、他の人であればこんなことは無いのに、フォルディアスとラフィニーアに挟まれると、サティはどうも調子が出ない。

「うふふ。」

「…く…っ」

そんなサティを挟んで、フォルディアスが悔しそうに、ラフィニーアが自慢げにお互い向き合っていた。ピウニー卿がその隙にそっとサティの隣に並んで、肩を抱く。その顔を見上げてサティが何かを言う前に、ピウニー卿が人差し指を唇にあてた。「出るぞ。」「えっ」…ピウニー卿はサティの肩を引いて、静かに親２人と距離を取る。

「わたくし、サティさんに『おかあさん』って呼んで貰いましたわ。これで５勝ですわね、５勝！」

「しかしっ、3人の時は私はずっと王宮勤めであったし、セシルもサティも、お前のほうがずっと一緒に居る時間が長いではないか！　分が悪いっ、分が！」

「あら、わたくし3人にはちゃーんと『ちちうえ』って教えましたし、セシルやサティと顔を合わせたときは2人とも揃っていたではありませんか。」

ラフィニーアがふふん…と澄ました顔で横を向いた。フォルディアスが悔しげに唸る。

「…しかし、次はっ、次は負けん！」

「あら、わたくしだって負けませんわよ、『じいじ』」

わざと「じいじ」のところを強調して、ラフィニーアは、ほほ…と笑った。

「むう…、今回はラフィニーアに譲るが、サティや、とりあえず『お義父さん』…って、サティ？　おい、ピウニーア！」

サティはピウニー卿に引っ張られて鍛錬場を出た後だった。フォルディアスの顔が、がっくりとうなだれる。うなだれたフォルディアスをよしよし…と撫でながら、ラフィニーアは楽しげに笑う。

「仲がよいのは一番ではありませんか、フォルディアス。」

「ううむ…それはそうだが…。」

フォルディアスは先ほどまでの悔しげな顔はどこへやら。ラフィニーアの腰を引き寄せて、ふう…とため息を付く。

「しかしあのピウニーアが、嫁を見つけてくるとはなあ。」

「まったくですわね。」

王都を留守にしがちだから…と、これまで付き合った女性とも深い仲になったことの無かったアルザス家の長子。恋をしたとて、その女性を王都に残しておかなければならず、特に若い時分は相手に寂しい思いをさせてしまうから…と、故意に遠ざけていたところもある。そもそも、ただ「待つ女」は、彼の性格には合わなかったのだろう。それが今は、文字通り、共に歩む女性を手に入れたのだ。

息子の性格から言って、自分たちで派手なお披露目を用意するなどということはしないだろうと思っていた。かといって、旅ばかりのピウニー卿を任せる女性に何もしないというわけにはいかない。既に自分たちの手を離れた息子たちだ。どうにでも好きなように過ごすだろうが、せめて、2人に記念の日を持たせてやりたいと思ったのは親心。もっとも、「サティの花嫁姿を見たい」と言ったのは自分たちの希望でもあったのだ。

「早く『じいじ』って呼んでもらえたらいいわね、フォルディアス？」

「む。…とりあえずは、セシルとパヴェニーアの子だ。次は負けん！」

「うふふ。ようやく私達も、孫に囲まれてのんびりできるかしら？」

「孫に囲まれたとて、私はまだまだ現役だぞ。」

「あらあら。」

くすくすと笑うラフィニーアを引き寄せて髪に口付けると、フォルディアスは鍛錬場を後にした。まだまだやることはたくさんあるのだ。そういえば、2人は猫とネズミになるというが、その姿もまだ見せてもらってはいない。
見せてくれる、のだろうか？

2人は理の賢者の奥方の、贈り物を思い出した。

［ふたりの場合］　答えは1つに決まっている

その日の夜、父と息子は2人で酒を傾けていた。

「いよいよ明日か。準備はどうだ。」

「…ほとんど、セシル殿と母上が動いていて、私などの出る幕はありませんよ。」

「ああ。こういった行事は大抵女が主役で男はおまけだ。ラフィニーアに任せておくといい。」

「父上。」

「なんだ?」

「此度の準備、ありがとうございます。」

「ほう?　礼など言われぬと思っておったわ。」

頭を下げる息子に、はっはっは…と、フォルディアスは豪快に笑った。酒盃を置いて、ピウニー卿をしげしげと眺める。

「サティを大事にしろよピウニーア。アルザスの人間も変わり者だが、それをを請う者もまた変わり者よ。セシルやアンヘル殿を見ておれば分かろう。」

セシルは、夫パヴェニーアの変わった趣味と共に生きる女性だったし、アンヘルは、ヴィルレー公爵であり宰相…文官としての最高の

地位にありながら、女の身で武官を務めるペルセニーアとただならぬ仲であるらしい。それに、母ラフィニーアも体術を極めた女性だ。若い頃、暴漢に襲われそうになったところをフォルディアスに助けられ、最終的にはなぜかフォルディアスと並んで暴漢を成敗した…という逸話を持っている。

そして、サティは自分と同じように獣に変わる身で、自分と旅をすることを厭わない。

「分かっております。」

ピウニー卿は、ぐ…と酒盃を煽って空になったそれを置く。

「言われなくても分っております。」

神妙な顔になった。

今は人の姿で旅をしていて、サティは常に目の届くところにいるし、引き寄せれば抱きしめることができる。

共に旅をしていても自分が前線に立ち、大概の魔物は彼の敵ではない。サティは防御魔法を中心に、ピウニー卿が魔法剣で前に出て、数や個体の強さに応じて戦い方を少しずつ変えている。各々、魔法の打つタイミングや立ち位置なども把握し、ピウニー卿が指示すればサティはすぐに飲み込み、前に出すぎることなく援護に徹する。恋人、というだけでなく、サティは頼りになる魔法使いだった。

だが、こうした状況になるまで、ピウニー卿はネズミの姿で守られてばかりいた。サティからすれば、そんなことはない…と主張するが、男としては切ないことこの上無い。そして極めつけは、忘れも

しない、目の前でサティが死の呪いにかかったあの、瞬間。

近頃では少なくなったが、思いを遂げてから日が浅いうちは、幾度も思い出し、夜中に目が覚めることはしょっちゅうだった。自分でも女々しいことよ…と思うが、目が覚めては、腕の中に抱いている存在を確認してしまうのだ。

しばし落ちた沈黙を破ったのは父の声だった。

「姿形が変わって、お前も変わったか。」

「小さい身だからと恥じていたこともありました。愛する女が自分よりも大きな猫だと引け目を感じていたことも。…そのせいで、危うく大切なことを伝えられぬところでした。それがあんなに苦しいとは思いも寄らなかった。もうあんな思いは2度としませんし、させません。」

「それならば、かまうまい。お前の変化の力も、無駄にはならなかったということよ。いかなる状況にあっても学ぶことは多い。それを忘れるなよ。」

ノックの音が聞こえた。

ラフィニーアがサティを伴ってやってきたのだ。そろそろお開きの時間だ。

「おお、ラフィニーア。もうこんな時間か。」

「ええ。放っておくと貴方は一晩中息子達とお酒を飲むでしょう。ですから迎えに来ましたの。」

「む…。いいではないか。たまにしか会わないのだから、少しくらい。」

「今日はダメです。ほらほら、愚痴を言わずに行きますよ、フォルディアス。」

側に来たラフィニーアに腕を取られ、フォルディアスは渋々立ち上がる。2人で結構な酒量を飲んだが、それほど酔ってはいない。ピウニー卿が立ち上がり、サティを手招きした。並んだ2人の様子をフォルディアスは微笑ましく見遣り、頷く。

「おやすみ、サティや。」

「おやすみなさい、お義父さん」

その声を聞いて、フォルディアスの顔がぱあぁぁぁ…と輝いた。ラフィニーアの肩をがしっと抱いて、よっし…と!拳を握る。

「聞いたか!?　聞いたか今のを、ラフィニーア!　勝負には負けたが私もちゃんと呼んでもらえたろう。」

その様子にラフィニーアは苦笑しながら、フォルディアスを引っ張った。

「はいはい、聞いてました聞いてました。…さあ、呼んでもらえたことだし行きますよ。これ以上2人の邪魔をすると、ピウニーアに怒られそうだわ。」

「母上…!」

サティの肩を抱き寄せかけていたピウニー卿が、頬を染めて母に抗議の声を上げた。フォルディアスとラフィニーアの様子を見て、サティが落ち着かなさげな表情を浮かべる。

「あの、私何か変なことを…？」

「いえいえいえいえ、いいのよ、サティさんは気にしなくて。おやすみなさいね、2人とも。」

「ああ、サティや、もう一度『おとうさん』…と」

「フォルディアス！　さあもう行きますよ。」

嬉しくてテンションの上がっている様子のフォルディアスをずるずると引きずりながら、ラフィニーアは離れの居間を後にした。扉を出るとき、にっこり笑ってピウニー卿とサティに手を振るのも、忘れずに。

……。

変なテンションの2人を見送ったピウニー卿は、ふう…と息を吐いて、再びソファに腰を下ろした。不思議そうに2人を見送ったまま立っているサティの手を引いて、隣に座らせる。

「疲れていないか、サティ。」

ピウニー卿に手を引かれるまま隣に座ったサティは、ふる…と首を振って笑った。

「疲れていない。お義父さんもお義母さんも、…仲がよくて、素敵な人ね。」

「…まあそうだな、昔から仲はよかった。」

父の稽古も母のしつけも厳しかったが、あの2人の仲のよさが、兄妹たちの恋愛観に大きく影響を与えたのだろう。それは、アルザス家特有の頑固さも伴って、納得のできぬ相手とは決して相容れない…という妙な信義も生み、3人とも普通の貴族よりもぐっと婚期が遅れている。アルザス家自身がそれを別段気にも留めないからなおさらだ。

それでも、納得のいく相手を見つけることができるのは、なんという幸福なことだろうか。

ピウニー卿はしばらくサティの手を握ったままそれを撫でていたが、不意にふわりと抱き寄せた。「ピウニー?」…と、腕の中でサティが身動ぎをする。サティの頭の上で、ピウニー卿の吐息交じりに低い声が聞こえた。

「サティ。」

「どうしたの?」

「俺の妻になってくれるか。」

「はい。」

腕の中のサティが、一切躊躇うことなく答えた。また戸惑われるかと思っていたピウニー卿は、少しだけ驚いて、腕を緩めてサティを

見下ろす。見上げるグリーンの瞳は真剣だったが、瞬きの間に悪戯げな表情に変わった。

「ピウニーに初めて『好き』って言った日みたいだわ。」

あの時もこうして、ここに座ってピウニー卿は少しだけお酒を飲んでいて、サティを抱き寄せていた。その日の事を思い出して、ピウニー卿も微笑む。2人はあの日と同じように唇を重ねた。あの日と違うのは、ピウニー卿が急いた様子ではなく…だが、とても大胆にサティの肌に触れていることだ。しばらくそうして、互いを堪能していたが、少し離れて、ピウニー卿が囁く。

「ああ…本当に、愛してる。」

その声を聞いて、サティの頬が染まった。

だが、もう照れて身を離したり、慌てたりすることは無かった。サティはピウニー卿に体重を掛けて、ぎゅ…と背中に手を回す。ピウニー卿の耳元に唇を寄せて同じ言葉を告げると、それを聞いたピウニー卿は再びサティの身体に手を這わせ始める。

触れる唇が深くなり、抱き合う身体がきつくなった。

＊＊＊＊

騎士の礼装に身を包んだ壮年の男が、部屋の扉をノックした。いつもは少し伸びがちの無精髭も今は綺麗に剃って整えられている。薄い色合いの金髪とこげ茶色の意志の強そうな瞳が特徴のその男は、少しだけ緊張の面持ちで扉が開くのを待っていた。やがて、3人の女性が扉を開けて、男と入れ違いに出て行く。

男が部屋を横切り、窓辺に座る女性の側にやってきた。

白いドレスに身を包んだその女性は、セピア色の長い髪に白い小さな花をいくつも挿している。わざと残した葉の緑色が瑞々しい。男が傍らに跪いてその手を取ると、幸せそうに笑んだ後、すこしだけはにかんで俯いた。

男が女性を立ち上がらせた。

女性は薄いが化粧も施していた。目元がすこし潤んだように煌いていて、唇は濡れたように艶めいている。うっとりと男は女性を見下ろし、下ろした髪に遠慮がちに指を絡ませた。やがてその指は耳元を滑り、頬を撫で…そしてもう一度、髪に触れる。何も言わない男に、女性が少しだけ不安そうに瞳を揺らして唇を動かした。

「こういうのは着慣れなくて…変じゃない？」

「変なものか…。見惚れてしまった。とても綺麗で、よく似合う…サティ。」

「そうかな、ピウもよく似合ってる。そういう格好、初めて見たわ。」

「お前と並んで見劣りしないようにしなければな。」

2人は顔を見合わせて笑った。部屋の扉が急かす様にノックされる。

「やれやれ。もう少しゆっくりサティを見ていたいのだが…。」

「うん。」

「サティ。」

ピウニー卿がサティの名前を呼ぶと、それに呼応するようにサティが顔を上げる。自分を見つめるその顔に、ピウニー卿は小さく口付けた。サティが慌ててピウニー卿の唇をハンカチで拭う。少しだけ口紅が移ってしまった。

「ちょっと、まだ早いわ。」

「後でも先でも一緒ではないか。」

…仕方がない。行くか…とピウニー卿はサティから手を離し、扉の前に立った。
サティへ向かって、手を伸ばす。

「俺と一緒に来てくれるか、サティ。」

「当たり前じゃない。ピウニー。」

答えは1つに決まっている。
サティはピウニー卿の手を取った。

扉が開き、祝福の声が2人の下に聞こえ始める。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9584w/

ピウニー卿の冒険！

2011年11月21日01時18分発行